
不死身刑事 -Young And Useless-

39 たらう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不死身刑事 - Young And Useless -

【Nコード】

N5851N

【作者名】

39たろう

【あらすじ】

自身を不死身と信じて疑わないヘヴィメタルを愛するポンコツ刑事と若くして出世街道に乗ったガンダム・オタクの刑事が新設された警視庁捜査一課13係で織り成す80年代のバディ映画を彷彿とさせる刑事物語。

B e f o r e T h e D a w n (前書)

> i 1 7 7 5 3
— 1 7 4 7
<

Before The Dawn

不夜城と呼ばれるこの街も、さながらこの一時だけは静けさが漂う。夜明けを待てない輸送トラックが時折、行過ぎるばかり。

やがて東の空が明るみを増し、高層ビル群の合間から陽炎のごとく薄ぼんやりと光が差し始めると、幾何かの冷気と静けさがゆつくりと薄らいでゆく。

それを待ちわびていたかのように列車の警笛が微かに響き、静けさを切り裂いた。漁港に帰る夜漁の船や輸送トラックの数が増えるにつれ、レールの継ぎ目を通過する音も重なり合うようになった。

まるでそれは仮死状態にあつた心臓に血液が送られ、みるみる息を吹き返すかのよう。息を吹き返した心臓は益々その動きを強め活性化してゆく。人々もそれに呼応するかのごとく動き始める頃には、光は東方だけのものに留まらず既に空一面を覆いつくしていた。

光の勢いが増すにつれ、動き出す物も増えてゆく。空には旅客機が、海には材木輸送船が、陸路には一般車両もが行き交うようになった。

もはやレールの継ぎ目を通過する音が途絶えることなく、人々の吐息や足音と相まって緩やかに喧騒へと化してゆく。

自動改札を何食わぬ顔で通り抜ける人々。プラットホームで何食わぬ顔で立ち並ぶ人々。満員車両で何食わぬ顔で揺れ動く人々。停車と同時に何食わぬ顔で押し出される人々。長い階段を何食わぬ顔で上り下りする人々。スクランブル交差点で何食わぬ顔で歩み行く

人々。渋滞する街道で何食わぬ顔で待ち続ける人々。

その誰もが知らず知らずのうちに不夜城と呼ばれるこの街の活性化の一因となっている。この街を巨大生物に例えるなら、人はまさにヘモグロビンそのものだ。そんな人々の息吹に支えられ、この街は不夜城と呼ばれているのかもしれない。

時にモンスターとも形容される世界有数の不夜城の中央に位置する皇居の南側を守護する楯のごとく、桜田門の向かいに立ち尽くす警視庁本部庁舎もこの街の息吹のひとつであった。

Welcome To The Jungle (1)

地下鉄の駅というものには季節感が足りない。汗ばむような初夏の暑い日の筈なのに駅構内には涼気が漂っている。

新木場方面側の階段を足早に上がると改札口が見えてくる。ユニットICケースをかざし改札機を通り抜けるとスタンド型AEDが自然と目の片隅に止まった。

都会人は往々にして運動不足だと言われがちだが、あまりそうは思わない。駅の乗り継ぎや構内の複雑な構造を鑑みると、兎に角よく歩かされるし階段の上り下りがやたらと多い。座席に座ろうなんでもつての外だ。どこまでの事実確認が成されているのか定かではないが、往々にして日本人はアメリカ人に比べ足腰が強いとされるのも少しは納得のいく話である。

4番出口の看板を目で追い、若干歩を早めると案の定また階段があった。構造上仕方ないのかも知れないが、随分曲がりくねった所にあるものだ。歩を緩めることなく4番出口の階段を上りきると真っ先に目につく壮観な建物がそこに広がっていた。

流石に今日は暑い。外気に触れた途端、一気に季節感が舞い戻ってきた。息を整えるように歩を緩め、多少緊張した面持ちで今日からの職場になるその建物の玄関先へと向かう。

同業者の匂いを十分に感じていながらも制服が目合わせてきた。手帳を片手で開いて見せるとすかさず敬礼をする制服。見学ツアーとでも言ってみればどうなったのだろうと自嘲気味に思いながら玄関をくぐった。

大きなマスコットぬいぐるみの横に受付の机がぼつんとある想像以上に狭いフロアを一瞥しエレベーターの場所を確認した後、再び歩を進める。ボタンを押すまでもなく扉が開き、数人の男が慌しげ

に押し出て来た。その様を見送り、入れ替わるようにエレベーターに滑り込むと数字の「6」と書かれたボタンを親指で押し込んだ。

Welcome To The Jungle (2)

到着を知らせるベル音と共にエレベーター・ドアが開き、一歩足を踏み入れると一階ロビーからは想像もつかない光景を目の当たりにした。書類を手にした制服や私服が右往左往入り乱れ足早に行き交う廊下。新参者のその男に目を向ける者など誰一人いやしない。目的地は自分で探すしかないだろう。ダークスーツの男は眼鏡のブリッジを中指で一度押し上げた後、部屋のプレートをひとつひとつ確認して回った。

ダークスーツの男は「第四強行犯捜査」と書かれたプレートの部屋の前でもう一度眼鏡のブリッジを押し上げ一呼吸おく。流石に緊張した面持ちで扉を開け、踏み込んだ途端張りのある声で「失礼します！」と挨拶し一礼をした。

顔を上げ一瞥すると大部屋には三分の一くらいの人数しかおらず、張り上げた声が虚しく響く閑散とした状態であった。しかし呑気という形容は全く当てはまらず机に噛り付く者、書類を持って闊歩する者、電話の応対をする者、各々の作業に没頭し誰一人ダークスーツの男に興味を示しはしなかった。

しばらくすると窓際のワークデスクからいかにも私服警官らしいグレーのツーピースに身を包んだがっしりとした体型のオールバックの男が立ち上がり手招きをする。背筋を今一度伸ばし、諭されるように歩を向けると雷門史彦管理官であることがすぐに判別できた。しっかりとした足取りで雷門管理官の傍まで行くと再度背筋を伸ばし、またも声を張り上げる。

「本日付けで捜査一課に配属になりました真壁伸一まかべしんいち 巡查部長です。ご一緒できて光栄です。以後、よろしくご指導ください」

「所轄以来ですね。久しぶりです、真壁巡查部長」

冷静な息づかい、鋭い眼光、短く整えられた髪と髭、浅黒く日焼

けた風貌。そこからは想像もつかない穏やかな口調で雷門は言った。

警視庁捜査一課はスカウト制である。試験等に合格して配属されるものではない。所轄勤務だった真壁を警視庁捜査一課に勧誘したのが、この雷門管理官である。

一呼吸おいて辺りを見渡すと数人の在庁刑事が「真壁」と名乗る若いダークスーツの男をノートパソコン越しに物珍しげに伺っているのが分かった。

そんな気配と一瞬の静けさを察知したのか雷門は先ほどとは異なり、大部屋全体に行渡る大きな声で新入り刑事の紹介をした。

「今日から13係に配属になった真壁君だ。まだ若いが、皆ビシビシ頼むぞ！」

「はいっ！」

雷門の一声に一瞬の沈黙が掻き消された。

「…で、真壁君。君の席なんだが…」

雷門に歩を連ねる真壁に在庁刑事のかすかな呟き声が耳に入る。

「へえ、彼が13係とはなあ…」

「建前にそついう部署だから、適材なのかもね」

「しかし…真面目そつなだけに、奴とはどうかだなあ」

真壁は気にするまいとは思ったもの一抹の不安が過ぎつたのも確かであった。

雷門に連れて来られた先は大部屋の一番奥、日当たりもままならない更に閑散とした島机だった。

「係長、こちら新任の真壁君です」

雷門が声をかけるとパソコンの画面から声のする二人の方へ、うだつの上がらなそつな中年男がずれ落ち気味の老眼鏡を向けた。

「あ…ああ、真壁君ね。係長の馬場です。雷門さんからは、とても優秀な若者だと聞いています。よろしく頼みますよ」

立ち上がりながら禿げ上がった頭を掻き揚げ笑みを浮かべる馬場

という中年太りの男、一見すれば刑事には不向きなくらい人が良さ
そう、雷門管理官とは真逆のタイプの人間である。しかし捜査一
課の係長を任されているのだから、何かしらの能力に長けた人物に
違いないと真壁なりの推測を胸に一礼をした。

「真壁と申します。こちらこそよろしくお願い致します」

「じゃあ、係長あと頼みます」

そう言い残り雷門は自席に戻っていった。

「…13係はね。まだできて間もなく、人手も少ないんだよ。真
壁君と私に、もうひとり…」

そう、もうひとり。13係の島机に来てからというもの、両手を
ポケットに突っ込み壁際のビジネススチエアーに踏ん返り返って足を
投げ出す、終始真壁の顔をニヤついた微笑で睨みつけ悪態をつく男
が気になって仕方がなかった。

「…こちらが妙典君。捜査一課は長いから何でも彼に聞いて」

洗いざらしのジーンズに不気味なドクロの絵柄の黒Tシャツのそ
の男。まるで一昔前の刑事ドラマのような出で立ちである。いくら
私服が認められているとはいえ、その格好はあり得ないだろうと真
壁は思った。あの雷門管理官がよく許しているものだど溜息混じり
に眺めていると…。

「妙典だ。まさかお前さんみたいな眼鏡小僧が来るとは聞いてなか
ったけどなあ」

いきなりの嫌味である。先程、在庁刑事が呟いていた不安要素と
はこの人物のことを指しているのだろうと即座に解釈できた。

「真壁です。今日からお世話になります」

「おうおう。女と金以外なら何でもお世話してやるさ」

「おい！ 妙典。階級は巡査部長だ。…お前さんよりお偉方だよ」
張り詰めた場を和ませようと馬場が諫めに入った。

「ええー、係長。こいつ部下じゃなくて上司なんスかあ！？ それ
を先に言ってくんないと！」

妙典はスクッと立ち上がり、手短に身なりを整え「みょうでんひろみち妙典博道巡査

長です。刑事やってます」と終始真壁に顔を合わせることもなく凜々しいきおつけの姿勢で形式的な挨拶をした後、落下するかのように入席と席に着いた。

「まあ座れや。真壁巡査部長殿」

妙典は向かいの机を指差し、元の横柄な口調に戻った。

確かにこの係の島机は大窓に対して平行に置かれていた係長の机に妙典の机ともうひとつの机が向かい合わせで縦並びになっており、真壁の座席はここではないであろうことは刑事でなくとも察しがつく。

「今朝届いてた真壁君の荷物、机の横に置いてありますからね」

目を脇に向けると係長の言うとおり、真壁が先週所轄でまとめた段ボール箱が自席机の横にきちんと積み重ねられていた。まずはこの荷物を整理することが先だろうと段ボール箱と机を交互に眺めていたところ呼び止める妙典の声がした。

「まあ、落ち着きなつて。新米さん」

新米という言葉に真壁は一瞬ムっとし、妙典を睨んだものものどうしでもドクロの黒Tシャツに目が行ってしまった。

「ん！？ どうした？ 何か付いてつか？」

両手を広げ、おどけて見せる妙典に真壁が言い返す。

「いえ。…そのTシャツです」

「おう、コイツか。今日新入りさんが来るって聞いてたもんで一杯歓迎してやるうと思つてな。お洒落してきたんよ」

妙典は左手の親指で右胸を指し示し、プリントされている字の上を左になぞった。

“ Welcome To The Jungle ”

不気味なドクロに重なるように大きくプリントされていた。

「捜査一課へ、ようこそ！ ……つてこつた」

得意げに話す妙典に真壁は釘を刺す。

「ジャングル？ 捜一がですか？」

「ああ、思いつきりジャングルだ。眼鏡くんにも直に分かるさ」

妙典は後頭部で手を組みＴシャツを一層強調するかのよう椅子に踏ん返り返った。

真壁はこのわずか数分の間で妙典という奇妙な男とは馬が合いそうもないことを十分に理解し、半ば諦めの境地で自席に座ろうとした、その時であった。雷門管理官の卓上電話が鳴り響く。

「はい。捜査一課、雷門です」

所轄で初めて会った時同様、落ち着いた力強い声が真壁の背中に伝わった。

「はい、…はい。そうですね。本庁から直ちに向かわせます」

雷門は受話器を静かに置き、先程までの静かな口調から一転して声を張り上げた。

「江東区南砂町の集合住宅で刺殺体発見。第七方面本部にて捜査本部設置。9係は木場警察署、方面本部と連携をとり直ちに現場へ急行。鑑識課にも応援要請！」

真壁が振り向くと、この島机に辿り着くまでに妙典のことと思しきことを呟いていた在庁刑事たちが緊張感みなぎる表情で一斉に動き始めた。

「白井と小熊、藤は方面本部に急行。柴田は所轄、三原は方面本部と連絡。あとは在庁待機！ 手配怠るな！」

「はいっ！」

てきぱきとした9係の係長と冷静な雷門管理官の姿を誇らしげに眺めていた真壁の背後から場にそぐわない悠長な声がある。

「なあ？ ジャングルだろお？」

ジャングルという形容に違和感を覚える真壁は妙典の香気な態度にいささか嫌気がさし、鼻から大きく息を抜いた。

「まだ俺らには何にも出てねえーんだから、のんびりやろうや」

そう言うや膝を押さえ、ゆっくりと立ち上がった妙典は出入口の扉に向かって顎をしゃくる。

「ほんじゃ係長。ちよつくら新人さんをご案内してきますわ！」

真壁はいまだ自席に着くことも許されず、自分のペースを狂わせられ続けている事に少々苛立ってはいたが、妙典に導かれるがまま歩を進めた。パソコンモニターの後ろから、またかと言わんばかりの馬場の目が相反する奇妙な二人組みに注がれていることも真壁は十分に意識していた。

「どうです？ あの二人」

殺伐とした雰囲気が漂う奇妙な二人組みが大部屋から出て行くのを確認し終えた雷門は馬場に歩み寄り問いかけた。

「…いいコンビになりますよ。…きつと」

馬場は老眼鏡を外し、引き出しから取り出した速乾性ウェットタオルのメガネクリーナーで拭い始めた。

「馬場さんの神懸った刑事の勘ですか…」

「まあ、何の根拠もありませんけどね」

Welcome To The Jungle (3)

「これでベンダーと便所の場所は大丈夫だよなあ？」

「… 大部屋に着くまでに目にしていました」

フォルダのついた紙カップ式のコーヒーを携えた奇妙な二人組みが、行き交う職員を掻き分けつつぎこちない言葉を交わしていた。

「ほう、流石は優秀な巡査部長さんでいらっしやる」

「それくらい誰だって。… ところで、その“巡査部長”という呼び方やめて頂けないでしょうか？」

どこか人を小馬鹿にしたかのような妙典の口調に真壁は釘を刺した。

「じゃあ、何と呼べやいい？ … 巡査部長殿」

「… 普通に“真壁”で結構です」

それを聞いた妙典は、ふと何か物思いに耽り口を尖らせ言った。

「真壁伸一…。イニシャルは… S M。… お前、変態だろ？」

真壁はコーヒーを口にしていなくてよかったとこれ程思ったことはない。もし口に含んでいたならば間違いなくダークスーツと白いワイシャツを迷彩色に変えていたことだろう。しかしいくら先輩刑事とは言え、この妙典という男のデリカシーのない言動には不愉快以外に何も感じなかった。徐々に肥大化する苛立ちを抑えつつ真壁は問い返す。

「… で、自分の方からは何とお呼びすればよろしいのでしょうか？」

「はあん？ 何でも構わねえーよ」

紙カップのコーヒーを一口含んだ妙典はぶっきらぼうに答えた。

「… では、“妙典さん”… で、よろしいでしょうか？」

「オーケー、オーケー。大概の奴はそう呼ぶしなあ」

Tシャツには何がしかの拘りがあるようだが、それ以外の事柄には無頓着なこの男に益々興味を失いつつあった真壁は自分を律する為、ドクロTシャツの刑事にさらに問いかけることにした。

「…で、妙典さん。次はどちらを案内してくださるのでしょうか？」
こつちこつち…と右の親指を立てヒツチハイカーの様に前後に動かす妙典の先には「喫煙ルーム」と書かれたガラスパーテーションがあった。

非喫煙者の真壁からすれば苦痛極まりない場所である。正直、入室するのは気が進まなかったが、新入りの身として諦めにも似た境地で横開きのドアをくぐることにした。

副流煙で霞みがかっているせいか、予想以上に広く感じられる明るく綺麗な部屋である。右手を軽く上下に揺さ振って青いビニールの包み紙から煙草を咥え出す妙典の仕草を横目に眺め、部屋の奥へと進んでいった。早々とジッポライターに火を点し、煙を深く一吐きする妙典はエアリウムカウンターに片肘をつき、紙カップを持って硬直する真壁に問いかける。

「ひよつとしてお前、吸わない派？」

「無駄な税金は払いたくない主義なんで…」

「その税金が回り回って、俺らの給料になってんだけどなあ」

「それ以前に発癌性物質の塊を吸うこと事態、大きな問題かと…」

ふーん！ と鼻から煙を抜き、つまらなさそうな顔をした妙典は真壁に小声で凄んだ。

「確かにここはなあ、健康にとつちや最悪の場所かもしれんが、情報収集には最適の場所だったりするんだぜえ…」

言っている事が理解できず、きよとんとする真壁に妙典は続ける。
「ほら、あそこ。捜査二課の奴らがかたまってるし、あちらさんはさつき飛び回りだしたり9係の係長。鑑識も共助課も生活安全部の連中も皆ここに来る。そば耳たててりゃ、よその部課の話なんぞ自然と入ってくるそこよお」

副流煙被害者の真壁にしてみれば非喫煙者に対する喫煙者の言い訳にも聞こえなくもなかったが、確かに一理ある話ではあると思っただ。普段自部署と現場を往復するだけで他部署の捜査情報の多くは

過去形でしか伝わってこない。しかし、ここでは現在進行形の話聞くことが可能である。まさか軽薄なドクロTシャツの刑事に目を覚まされる破目になるとは思いもしなかった。

「…それに、広報やミニパトのねえちゃん達も来るぜい！」
「……………」

真壁の中で構築されようとしていた畏敬の念がもろくも一瞬で碎け散った。

「それにしても、お前いい所に来たよなあ。第四強行犯捜査13係おまけに六階だぜ、ここは。これ以上不吉な数字が並んだ部署なんて他にねえわな」

妙なことを力説する妙典に冷ややかな口調で真壁は問う。

「不吉な数字に何か拘りでも？」

「大有りよ！ 悪魔の数字、ザ・ナンバー・オブ・ザ・ビースト。

魔力の刻印ですぜ。6のゾロ目だと言う事なしなんだけどなあ」

「何なんですか？ それ」

「アイアン・メイデンの名盤じゃねえか！ …ま、お前さんみたいな眼鏡小僧が知らんのも無理はねえかもな」

生まれてから今日に至るまで一度も耳にしたことのない言葉を並べたてられ、返答に困る真壁は紙カップに口をそえ、音を立ててコーヒーを啜った。

「お前のイニシャルは変態のSMかもしれないが…」

真壁は既に変態認定されている事実你敢えて突っ込みを入れることはしなかった。

「…俺様のイニシャルは、HM！ まさにヘヴィメタルの申し子っ！ …いい名前付けてくれたと、そこに関しては親に感謝してる」

「ヘビメタ？ 不潔で喧しくて猥雑で残忍なサタニズムな音楽が趣味なんですか？」

「悪いイカ？ 変態眼鏡小僧。言っとくが“ヘビメタ”じゃなくて“ヘヴィメタル”だからな！」

「まあ…個人の趣味趣向なので咎める権利はありませんが、自分の

趣味の範疇でないことだけは、はっきりと申し上げておきます」

興味のない話を押し聞かされるほどの苦痛はない。まさに今の真壁がその状態であったが、それもまた刑事の仕事のひとつである事も事実である。

「なあ、真壁よお。お前の変態も趣味趣向だから俺様は何も言わんが、ここの搜一って何気にロック度高いから、氣いつけとけよ。雷門さんがブリティッシュ・ハードロック語りでしたら熱すぎて地球温暖化に貢献しちゃうし、馬場さんもああ見えて酔っ払うとビートルズの“ヘルター・スケルター”をカラオケで熱唱する熱いロック親父だ」

「ええっ!? あの係長が…ですか?」

「お前、馬場さんのこと演歌親父だと思ってたろ?」

「ええ、まあ。…それもそうですが、ビートルズってポップスじゃなくてロックになるのですか? ……だいたい音楽の教科書にも載っていたくらいですし…」

「おいおい、そんなこと馬場さんの前で言ってみるお。“サージエント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド”と“ホワイト・アルバム”百万回聴かされる破目になるからな!」

「わ…わかりました。以後、気をつけます」

聞き慣れない言葉を並べられ、既成概念の崩壊も否定できなくなった真壁は逃げ込むかのように紙カップのコーヒーを再度啜った。

「おおっと! 腹のパトランプが回りでした! ……すまん! ちょっくら駆け込み寺に行くてくるわ!」

妙典は紙カップのコーヒーを一気に飲み干し、いい加減にもみ消した煙草の煙を残して喫煙ルームからそそくさと去っていった。

妙典の危機迫る後姿を眺め、ボーっと紙カップを携える真壁に呼びかける声がした。

「真壁…真壁君だったよね?」

ハッと我に返った真壁が顔を向けると9係の係長が傍らに立って

いた。

「…本日より着任しました、真壁です。今後ともお願いします」

「まあまあ、9係の大場だ。ちよつと驚かせたかな？」

反射的に紙カップをカウンターに置き一礼する真壁を制するよう
に大場が言った。真壁は一呼吸おいて社交的な言葉で切り出した。

「今は事件でお忙しいんじゃないですか？」

「いや、部下が走り回ってるうちはそうでもないよ、管理職って…。
だから吸い溜めとかなきゃな、今のうちに」

指に挟んだ燻ぶる煙草を見せ、茶目つ気ある笑顔で語る今の大場
に大部屋で部下に指示を飛ばしていた面影は見受けられなかった。

「なかなか大変な奴だろ？ ……妙典って」

「い…いや、まだ着任したばかりで正直判断しかねますが、良い先
輩の下に就いたと思っています」

警官という職業に着いていながら、見え透いた嘘を吐いてしまっ
たと真壁は自身を恥じた。

「自分も刑事だから、そんな社交じみたこと言っても意味ないの分
かるよな？」

まったくもってその通りである。気まずく思った真壁は口を噤む
しかなかった。

「一緒に居て、とにかく疲れる奴だよ。妙典は…でもなあ、あい
つは凄い奴だ」

「……………」

真壁は黙って大場の言葉に耳を傾けた。

「あいつは自分の事を不死身だと心底信じているし、実際不死身な
のかも知れない。…昔、マル暴にガサ入れた時も至近距離で数発撃
たれた筈なのにかすりもしなかった。逃走犯確保時にスタンガン当
てられても何ともなかった。そんな伝説まがいな光景をこの目で幾
つも見てきた。…だからあいつは余計に無茶しやがる」

大場の真剣な表情に真壁は思わず息を呑む。

「だから、大目に見てやってくれ。最初は鬱陶しく感じるかもしれ

ないが、最後には頼りになる男だ」

真壁は雷門管理官が妙典の服装や言動、そして存在そのものを容認している理由を少しだけ知り得た気がした。

「ほれ！ そろそろ行つてやれ。ああ見えて寂しがり屋だからな。自分はまだ吸い溜めなきやならんし……」

煙を吸い込み指の間で濃い赤に変色した煙草で大場は喫煙ルームの出入口を示した。

「ご指導ありがとうございました」

真壁は大場に一言礼を言つて出入口に向かったが、二・三歩進んだ所で飲みかけの紙カップ・コーヒーに気付きエアリウムカウンタ―に踵を返す。大場も何かを思い出したかのように真壁に顔を向けた。

「…あと、係長の馬場さん。あの人の勘は神懸つてる。自分も捜一の連中も馬場さんの刑事の勘に一度は助けられてる。馬場さんの勘、妙典の強運的体力、そして真壁…お前さんの頭脳がそろえば13係はとてつもない力を発揮する。…雷門さんもそれを期待して13係に呼んだんだ」

正直、真壁は照れくさかった。配属早々、先輩刑事に激励され嬉しくない筈はなかったが、照れくささには勝てず俯き加減で答えた。「ありがとうございます。精一杯頑張ります」

そして真壁の脳裏に聞きいておくべき事柄が浮かんだのはその時だった。

「ところで、大場係長。係長には好きなミュージシャンつていらつしゃいますか？」

「…ん？ ミュージシャン？」

突拍子もないことを聞く真壁に少々驚かされた様子の大場であったが、眉間に皺を寄せつつもニヤリと口元を緩め言った。

「ピンク・フロイド。無人島に持つて行くなら“ザ・ウォール”以外は考えられん」

Welcome To The Jungle (4)

真壁は妙典の言うところの駆け込み寺の向かいの壁で物思いに耽り立っていた。

確かに捜査一課は妙典の言う通りロック度の高い部署なのは間違いないさそうだ。自分の趣味と異なりはするが、慣れていくしかない。しかし問題なのは自身を不死身と信じて疑わない妙典という刑事の存在だ。大場係長が嘘をついているとは思えないし、真壁をからかっているとも思えない。本人の目撃証言もある。ただ至近距離で数発撃たれたにも関わらず、かすり傷ひとつ負わないなんていうことが実際あり得るのだろうか？ …素人ならいざ知らず相手はマル暴だ。とても現実味のある話とは思えなかった。今のところ残された裏づけ手段は自分が目撃する以外にない。真壁は気が進まないどころか、そのような現場に立ち会わないことを祈るのみであった。

「ああー、すつきりしたなああー！」

乾ききらない手のしずくを振るい落としながら澆刺とした妙典が男子トイレから出てきた。行き交う職員越しに向かいの壁を背に立つ真壁を見つけると手を振るうのをやめ、ゆっくりと歩み寄ってきた。

「お前、こんな所に突っ立ってるって…やっぱ変態だろ？」

苦笑いするしかない真壁が言い返す。

「お茶くみ三年…。刑事の世界では当たり前じゃないですか？」

「ふーん、キャバクラのねえちゃんでもなさそうだなあ…」

「先輩刑事の嗜好や心理状態をつかむこともできず、犯罪者の心理を見抜くことなど不可能。…そんな意味でしたよね？」

「ほう！ 気の利く新人さんが来てくれて、涙が出るぜ」

「では、早速お茶くみますから戻りましょうか」

珍しくシニカルな台詞を吐いた真壁は第四強行犯捜査の大部屋に

歩を向けた。

「何だよ、真壁え。お前ちつとも心理状態つかめてねえし！」

愕然と振り向く真壁に妙典は反対方向を指差し「今すぐ始めるぞ。実地訓練その1イイー！」とおどけてみせた。

妙典の心理状態をつかむには、とても三年では足りないと思っただろう。

口笛を吹いて指先でキーをくるくる回し闊歩する妙典と萎縮気味の真壁は黒光りする車両がずらりと並ぶ薄暗い地下駐車を横並びで歩いていた。

「本庁つて何でも黒塗りのクラウンが多いんですかね？」

「確かにこれじゃ、黒塗りのクラウン・イコール・本庁の覆パトつて言ってる様なもんだわな」

初めて意見の合った二人が更に歩を進め行くと黒光りするクラウンの中にあつて一際目立つ派手な車両がいやが応にも目に飛び込んできた。

「これ、なかなかイカすだろ？」

周囲の空気を全く読めていない派手な車両の前で足を止めた妙典は得意気に話し、真壁も思わず驚きの声をあげた。

「青のR35GT-Rですか…。よくこんなの本庁にありましたね？」

「二年前、神奈川県警に対抗して購入したはいいが誰も恥ずかしがつて乗りもしねえ。よつて俺様専用車両つて訳よ」

まさしく周りの空気を読もうとしない妙典にとつて打って付けの専用車両だと真壁は思った。

「おい！ 真壁。お前転がせや！」

そう言うつや妙典はキーを投げ渡し、真壁は何とか両手で受けとめはしたものの予想しない言葉に驚きの表情を隠せなかった。

「えっ？ 自分がですか？」

「実地訓練その1。変態眼鏡小僧の車両運転技術を見てやる」

「わ…わかりました」

どこか納得しきれない真壁ではあったが、実地訓練という名のものと仕方なく青いGT-Rのドアを開けた。座席にゆっくり滑り込みシートベルトを締め、青く光るボンネット越しに黒塗りのクラウン群を眺めると、この青い車両の特殊さに身をもって気が付いた。

「…何だかランバ・ラルと同じ心境です」

真壁がポツリと言った。

「はあ？ ランバ・ラルだあ？」

どこか聞き覚えのある固有名詞ではあったが妙典は思い出せなかった。そんな妙典を横目に真壁はおどけて言ってみせる。

「ザクとは違うのだよ、ザクとは！」

その一言でようやく気付いた妙典は悪戯っぽく真壁に言った。

「ははあん。お前、ガンオタだったか…。ただの気取った出世組かと思っただが、とんだ本性を現しやがった！」

「妙典さんこそガンダム世代じゃないんですか？」

「まあ…そうなんだが、最初の以降は小難しく…なんか趣味じゃねえ」

「確かにファースト以外は認めない頑ななガンダム信者は少なくなのですが、妙典さんの場合はまたそれとは異なりますねえ」

「頭悪いだけと言いたいんだろ？ …鑑識にもひとり居るぜ。お前みたいな変態オタクが…」

「へえ、そうなんですか。一度お会いしてみたいものです」

「どうも奴だけは苦手なあ。いづれ嫌でも顔合わすから、そんな時は任せるわ」

妙典にも苦手な人物がいると知り、真壁はささやかな安堵感に浸った。

「…しかし、青のGT-Rというだけでグフと断定するのは早計かもしれない。ケンプファーという線もありますし…」

「何、ごちゃごちゃ訳わかんねえこと言ってるやがる！ いいから早く転がせや！」

イラつく妙典を制止するかのように真壁は言った。

「妙典さん、シートベルト着用義務を怠っていらつしやいますよ」

「おおっと！ いけねえ。いつもと座る位置が違うから、ついつい忘れちまったじゃねえかよお！」

妙典は見え透いた嘘を隠すかのように、慌ててストラップを引き出したもののバックルに納まる気配は全くもって見受けられなかった。

ようやくバックルに納まったシートベルトを見て真壁は妙典の言葉をしぼし待つ。

「とりあえず外堀に向かえや！ 変態オタク眼鏡小僧」

真壁は自分の称号がまたひとつ増えたことに今更とやかく言うつもりはなかったが、事実確認しておく必要はあった。

「：妙典さん。妙典さんて、不死身なんですか？」

「ああ、そうだよ。：ひよつとして、大場さんに聞いた？」

飄々とあつさり事実を認めた妙典。この男は本気で自分の事を不死身と知っている証言が得られた。だが不死身と思っ込んでいたけなのか？ 勘違いしているだけなのか？ ；それとも本当に不死身なのか？ ；正直気は進まないが、今後同伴していれば判明することだと真壁は自分に言い聞かせた。妙典の返答に小さく頷き、眼鏡のブリッジを中指で押し上げ言い放つ。

「では、妙典さん。実地訓練の程、よろしく願います」

そう言い終わるや否や真壁はV6ツインターボを搭載した青いGT-Rのアクセルを踏み込んだ。

Welcome To The Jungle (5)

渋滞。東京という大都会において恐らく上位に連想されるであろう、その言葉の真つ只中に妙典と真壁はいた。

「ちつとも進まねえなあ」

「首都高環状線で事故があつたそうです」

「…つたく。どうしようもねえなあ。パトランプ、回すか？」

「非常時外での使用は認められていません」

先程まで青く光り輝いていたボンネットからは陽炎が立ち込め、もはやV6ツインターボは無用の長物と化していた。しびれを切らした妙典はイラついた口調で真壁に毒づく。

「おい！ 変態オタク眼鏡小僧。この状況、お得意のガンダム・ネタで表現してみるよお」

「それも実地訓練のひとつでしょうか？」

「イラつく妙典に対し、冷静な口調で真壁も毒づいた。

「ん…まあ、そんなとこだ」

なぞかけのお題をあたえられた落語家のようにしばし考え込む真壁。ステアリングにぶら下げた両手を強く握り締め、堰を切ったように声を張り上げた。

「この風、この肌触りこそ渋滞よ！」

真壁は多少なりとも手応えを感じていたが、付き合いきれないといつた妙典の呆れ顔が真横にあつた。

「まあいいや。…そこ、右に曲がれ」

「えっ？ ここ、入るんですか？ 西新橋ですよ」

「いいから曲がれって！」

「は…はい」

この辺りの土地勘に疎い真壁は妙典に言われるがまま抜け道に向かいハンドルを右に切った。

焼きトウモロコシから抜け落ちた粒の様に渋滞する車列から逃げ

出す青いGT-Rは外堀通りを右折したものの反対車線で停滞する車に阻まれ、思うように進むことは出来なかった。

「さあ！ 腕の見せどころですけど、真壁君」

意味もなくプレッシャーをかけられた真壁はハンドルを小刻みに切り返し、クラクションを浴びせられつつも停滞車を縫うように西新橋方面に青いGT-Rを進ませた。

一方通行の多い西新橋の抜け道を快走し始めたGT-R。先程までの外堀通りがまるで嘘であったかのようである。V6ツインターボの有用性がようやく証明されようとしていた矢先、妙典が口を開いた。

「その公園越えたところ…左に寄せて止まれや！」

思いがけない妙典の言葉に一瞬たじろいだ真壁は確認を求める。

「えっ？ 停車するんですか？」

「ああ、停車と言ったら、停車だ！」

またも言われるままに青いGT-Rを路肩に止める真壁。やはり妙典の心理状態を読みきるのは並大抵のことではないらしい。

「ほら、行くぞっ！」

そそくさと車外に出て歩き出す妙典がフロントガラス越しに見える。真壁も慌ててシートベルトを外し、ドアを開けようとする。すると妙典は真壁に突然振り向き指差し叫ぶのだった。

「真壁え！ パトランプ、見えるここに置いとけよ。駐禁貼られち

まうからなあ！」

二人が向かった先は清潔感溢れる小綺麗な喫茶店だった。「喫茶ヴァンデンバーグ」と書かれたガラス扉を開けるや否やベルが店内に鳴り響き、カウンターの前に立つ若い女が足早にやって来た。ロング・ヘアーが印象的な見た目に女子大生といった感じのその女に向かって右手を軽く挙げた妙典は慣れた口調で言った。

「ちーすっ！ …由香ちゃん。今日もかわいいねえ」

「いらつしゃい、妙典さん。今日もサボリですか？」

「どうやら妙典はこの店の常連らしい。それもほぼ毎日通っているようだ。…と言うことは、抜け道でも何でもなく、当初からここに来ることが目的だったということか？ …確かに妙典は一言も「抜け道」とは言っていない。真壁はまんまとはめられたと思った。それにしてもヘビーマタル好きで、むさ苦しい印象の妙典が何故この様な落ち着いた雰囲気の小綺麗な店に通っているのだろうか？ …頭の中で疑問符が舞う真壁に由香が気付いた。

「あら？ そちらの無造作ヘアの方は？」

「ああ、コイツ？ 新入りの…」

「真壁と申します」

妙典の言葉を遮るように軽く一礼をする真壁。

「じゃあ、妙典さんに部下ができたんだあ」

はしゃぐ由香に反して苦虫を噛み潰した様な顔をする妙典はボソッと由香に耳打ちをした。

「階級は俺様より上…。準キャリアさんだ」

「…でも後輩ができたんだからいいんじゃない？」

由香はそう言って窓際の席を案内し、席に着いた二人におしぼりを手渡し笑顔で言った。

「ご注文は？」

「俺様はいつものアイスコーヒー」

本庁の喫煙所でコーヒーを飲んだばかりだというのに、ドクロTシャツのこの男はまたもコーヒーを注文した。カフェイン依存症なのかとも思ったが、ハリウッド映画に出てくる刑事はコーヒーばかり飲んでいいる。ある意味正しい刑事像なのかもしれない。しかし本来の目的は由香という嫌疑はかなり濃厚ではある。

そう推測する真壁の耳に由香の明るい声が差し込んできた。

「真壁さん、ご注文は？」

「…あ、アイスティーを下さい。ストレートで…」

「かしこまりました。マスターにも声かけときますね。同志が本日

もらつしゃいましたよって…」

深く一礼をして由香はカウンターの奥に消えていった。

妙典は煙草に火を点し、籐椅子にふんぞり返って煙を吐きつつ真壁に言った。

「由香ちゃん、かわいいだろお？」

「ええ、まあ…。一見、女子大生のようですが…」

妙典にあらぬ疑いをかけられまいと、真壁は努めて冷静な口調を装った。

「ひよつとしてお前も惚れたくち？ …まあ、あんだだけ可愛けりや無理もねえわな」

何気ない努力が徒勞に終わったことを悟った真壁はやや前のめりの姿勢で黙って耳を傾けることにした。

「でもお前、ハズレ。由香ちゃんは学生じゃねえよ。…短大卒業して就職したはいいが、入社直前に内定取消通知が来たそつだ」

真壁は大きく息を吸い、鼻を鳴らし溜め息をついた。

「昨今話題の新卒切りというやつですか…」

「ああそついうことだ。で、今はここでバイトしてる」

前途洋々な若者がその一步を踏み出すことができないとは本当に酷い時代だと真壁は思った。未来を奪われた者のうち何パーセントかが引きこもり状態になり、いずれニートと呼ばれるようになる。

増え続けるニート人口が日本経済の悪化を助長する一因であるかのように報道する一部マスコミにも反吐が出る思いであった。何だか重くなった気分を一蹴すべく真壁は明るい口調で話題を切り替える。「それにしても妙典さん、よくこんな洒落たお店知ってましたよね？」

「由香ちゃんもさつき言ってたろ？ …このマスターと俺様は同志だつてな」

真壁の頭の中で、ある関連性のある言葉が浮かび上がった。「へビーメタル」。騒がしくて猥雑で悪魔崇拜的なたましい音楽。なのに、清潔感溢れるこの店の雰囲気は何なのだろう？ …それに

マスターとはどのような人物なのだろう？ ……疑問符ばかりが飛び交うとんだ一日だと真壁は呪った。

「妙ちゃん、お待たせ。今日も暇そうだねえ」

そこに立っていたのは黒いベストに黒いスラックス、口ひげをたくわえた白髪まじりの長髪を後ろで結わえた感じのよい、歳にして五十前後といった男だった。手際よくコースターとストローを並べ注文した品を置き始めた。

「佐藤さんとも相変わらず暇そうじゃん」

「それ言われると辛いなあ。でもこここのところ、お昼時とか夕方前後はお陰さまで混み合う様にはなってきたけどね」

「そりゃ良かった。俺様の隠れ家が無くなっちまうのだけは御免だからなあ。…で、紹介するよ。…上司の真壁君」

「いえ、後輩の真壁です」

辛辣な妙典の紹介を振り切るかのように真壁は佐藤の目を見て名乗った。

「これからも、是非ご贖員に。…でも妙ちゃんとは正反対のタイプだね」

「まあ、俺様が変態オタク眼鏡小僧と呼んでるぐらいだし…」

どこに行っても態度の大きい妙典を視野の隅に留め、真壁は佐藤に問いかけた。

「あのう…何故、佐藤さんと妙典さんは同志なんでしょうか？」

「…真壁え、お前え甘いな。店の名前見てピンと来なかったのかよお？」

「妙ちゃん、そりゃ無理もないよ。若い人は知らないって！」

宥める佐藤を振り切るかのごとく妙典は切り込んで言った。

「あのなあ、昔エイドリアン・ヴァンデンバーグというギタリストがいてだなあ。そいつが結成したのが“ヴァンデンバーグ”というハードロック・バンドだったわけ」

妙典は明らかな上から目線で講釈をたれた。

「それを店の名前に？ ……じゃあ、佐藤さんも？」

「そう、筋金入りのハードロック親父！」

真壁の驚く声に妙典が言い放ち、得意げに会釈する佐藤も続けて講釈をたれた。

「でもあんまり売れなくて、結局ホワイトスネイクに加入するんだけど…。ちなみに今、流れてるのがホワイトスネイク」

佐藤は天井を指さし嬉しげにBGMの紹介をした。

「ええ！？ これハードロックなんですか？」

「サーペンス・アルバス」。やっぱ名盤だよねえ。でもギター弾いてるのはエイドリアンじゃなくてジョン・サイクスなんだけどね」
真壁にとつてハードロックと言えば昭和的表現のギンギンという印象しか持っていなかった。しかしギターは喧しいながらも洗練されたポップで哀愁に満ちたメロディにまたも既成概念が大きく覆された。

そんな真壁に妙典が追い討ちをかける。

「メタルとかハードロックにも色々あんだよ。よく憶えとけや、変態オタク眼鏡小僧」

趣味の範疇でないことを押し聞かされるのはやはりいい気がしない。だがいい曲に出会えたことには感謝せねばならないと真壁は思った。

「で、妙ちゃん、いつもの置いとくよ」

「ここも忙しくなるといいなあ、マスター」

「まあね。“デイス・イズ・ウオー”ってのは御免だけど。…じゃ、ごゆっくり」

佐藤は場違いなスポーツ新聞をテーブルの片隅に置き、カウンターの奥に消えて行った。

妙典は新聞を手に取り、貪る様に読み耽った。しばらくすると折った新聞をテーブルに投げ捨て嘆くように呟いた。

「メンチ戦力外かよお！ 高い金払って獲ったつちゆうのに…。ダメ虎復活確定だな、こりゃ」

真壁は投げ捨てられた新聞に目を向けた。新聞名はデイリースポ

「ッだった。」

「… 妙典さんて、阪神ファンなんですか？」

「ああ、そうだよ。関東出身者が阪神ファンで悪いか？」

「ふて腐れる妙典をなだめるかの様に真壁は言った。」

「いえ、そんなことありません。本人の趣味趣向ですから…」

しばらく黙り込んだ妙典は煙草を揉み消しながら真壁に呟く様に言った。

「… 俺様の実家、お寺さんでな。つまり親父は住職ってわけ。京都の寺で修行してた関係で妙典家は阪神ファンの家系になっちゃった。何でもバース、掛布、岡田のバックスクリーン三連発を見て仏の道を悟ったそうさ。その後、継手のない寺を引き取って今は千葉の山奥に籠もってる」

それを聞いた真壁はヘビーマタルと仏道という、まったく相反する思想の中で生活している妙典にある種の滑稽さを覚えた。

「で、真壁え。お前はどこのファンだあ？」

「ぶっきらぼうに妙典は言った。」

「え？ 野球ですか？」

「ああ、そうだけど。他にあるか？」

真壁は眉間に皺を寄せ困った口調で答えた。

「正直、野球はよく知りません。… サッカーなら、応援しているチームはありますが…」

「野球人気も地に堕ちたもんだなあ。… ちなみにどこよ？ 応援し

てるチームって？」

「FC東京です！」

きっぱり答える真壁。

「ほおー。… ま、浦和のサポじゃなくてよかったよ」

妙典は胸を撫で下ろし、啜え出した煙草を上下に揺らしながら言った。

「えっ？ それはどういう意味です？」

「浦和のサポーターとは馬が合いそうだからなあ」

Welcome To The Jungle (6)

喫茶ヴァンデンバーグを後にした妙典と真壁は青いGT-Rに乗り込み、シートベルトを締めた。真壁は妙典に顔を向け行き先の指示を待つ。

「日比谷通りから昭和通りに向かうとするか…」

「もう渋滞も解消しているでしょうしね」

真壁はブレーキペダルを踏み、シート脇の赤いエンジンスタートボタンを押した。

「おっ！ そうだ。ミュージック、ミュージック」

何かを思い出した妙典はグローブボックスを漁り、一枚のCDを取り出した。

「やっぱ今日はコイツじゃねえと、申しわけたんだろ！」

妙典は半身になってダツシュボードに押し込み、吸い込まれたCDの回転音に真壁は一抹の不安を覚えた。この数時間で妙典の音楽的趣向はおおよそ把握している。恐らく騒がしくけたたましい猥雑な「ヘビーメタル」とかいう下品な音楽であることは間違いない。

せめてヴァンデンバーグで耳にしたホワイトスネイクの様なメロディアスで清涼感のあるハードロックならよいのだが、妙典にそんなことを期待するのは無理であることは十分に理解していた。

そんな真壁の憶測に反して、つま弾くような控え気味のエレキギターのフレーズが鳴り始めた。真壁が意外に思ったのも束の間ドーンとギターとベース、ドラム音が一齐に鳴り響き、悲鳴にも似た長らく続く咆哮が真壁の両耳を劈いた。やがて短いフレーズを刻むギターとドラム音が重なり、ザクザクとしたいかにもといったギターのフレーズに変わった途端、真壁は思わず声をあげた。

「な…何ですか？ この曲…」

「これだよ、コレ…」

妙典は得意げに自分の胸を指し示した。

「Welcome To The Jungle」。バイツ…
ガインズ・アーン・ローゼズっ！」
ガインズ・アーン・ローゼズ。名前だけなら聞いたことがある。何かの映画のサウンドトラックに使われていた筈だが、真壁は思い出せずにいた。

「あぁっ…これガインズだったんですね？」

思わず“ガインズ”という略称を真壁は口にしてしまった。思い出せないその映画が流行していた当時、至る所で耳にしていたフレーズが条件反射的に出てしまったのだ。

「これは、これは。“ガインズ”とは知った風な口をききやがる。どうせ、ターミネーター2の…とか言い出すんだろ？」

思い出せずにいた映画のタイトルを耳にしたのと同時に凶星を突かれた真壁は黙ってブレーキペダルからアクセルペダルに踏み変えるのだった。

渋滞はすっかり解消されていた。新橋交差点をスムーズに右折し、昭和通りに流れる青いGT-R。“ガインズ”のアルバムも丁度“It's So Easy”という曲が流れており、何らかの関連性があるかのようにさえ思えた。

「ところで真壁え…お前のロック、教えるよ」

「えっ？ 自分のロックですか？」

さほど音楽に傾倒していなかった過去を持つ真壁にとって困った質問である。特にこの手の話題に人一倍うるさそうな妙典に質問されたとあっては嫌な予感しか存在しなかった。

「まさか、変態オタク眼鏡小僧だったから、何も聴いてねえってこたあねえだろ？」

今更何をどう取り繕って答えたところで「お前のロックは甘えっ！」と妙典に一喝されるのは目に見えている。真壁は包み隠さず、ありのままを告白するあたかも被疑者かのような心境で答えた。

「…まあ、学生時代はスピッツとかミスチルを聴いていました」

「はあ！？ ミスチルだあ？」

真壁の予想通りすぎる反応が妙典から返ってきた。

「…ミスチルって、Mr・チルドレンのことかあ？」

「ええ、そうです」

「…ミスター・チルドレンって、トイズファクトリーだよなあ？」

意図的にゆっくり区切った口調で話す妙典に真壁は威圧感を感じた。

「そ…そうですが…」

意外にもレコードレーベル名をあげてきた妙典に驚いた真壁ではあったが、怒鳴られることを覚悟し待機態勢に入った。

「…いやあ、ミスチル様には常日頃感謝しておりますぜえ」

予想しなかった言葉が妙典の口から発せられた。少々拍子抜けした真壁は意図せぬ間を空け聞き返した。

「…妙典さん、妙に詳しいじゃないですか。で、ミスチルに何を感謝しているのです？」

「あのなあ…トイズファクトリーの洋楽部門ってな、超マイナーなスカンジナビアン・デス・メタルとかメロディック・デス・メタルのCDをいっぱい出してきてるのよ」

「そ…そうなんですか!？」

音楽に疎い真壁にとってトイズファクトリーと言えばミスチルもさることながらジューン・スカイ・ウォーカーズやマイ・リトル・ラバーといった爽やかでどこか切ないイメージしか持っていなかった。そもそも洋楽部門があることさえ知らなかったし、そのイメージと全く相反するデス・メタルを運営していることなどもっての外だった。またも既成概念のひとつが破壊された真壁に妙典は講釈を続ける。

「…カーカスだろ、イン・フレイムスにアーク・エネミー、ダーク・トランキュリティー、ナパーム・デス、ブルータル・トウース、キヤシードラル。…特にセリオンとかエンペラーなんか俺様らからすれば神みたいなバンドなんだよなあ」

「冗舌で機嫌のよい妙典に、自己の既成概念の崩壊を止められない真壁はもはや返す言葉がなかった。

「それもこれも、みーんなミスチル様が稼いでくれたお陰！ ……デス・メタルやグラインドコア系のファンの奴らはミスチルに感謝しているぞお！」

「は…はあ…」

トイズファクトリーというレーベルの暗黒面を初めて知らされた真壁は呆然とハンドルを握っていた。そんな真壁の耳にやけに遠く感じる妙典の声が割り込んできた。

「おい！ 晴海304号線、湾岸に向かって入れよ」

着任早々、妙典という黒いドクロTシャツの刑事に振り回されっ放しで気の休まる暇さえなかった真壁だったが、初夏の晴海通りを順調に快走する青いGT-Rのシートで徐々に落ち着きを取り戻しつつあった。

当の妙典はパッセンジャーシートで“ガングズ”の奏でるリズムに合わせ、時折頭を振りつつ鼻歌混じりでご機嫌な様子であった。実地訓練と称した立派なサボリ行為にいささかの不安を覚える真壁は呟いた。

「怒られませんかね？ ……こんな事していて」

心ここにあらずといった雰囲気の妙典は何を今更と言わんばかりの顔で真壁に言った。

「何かあつたら携帯ぐらい鳴るだろお。…何も無い証拠だ！」

「それもそうですが。書類仕事、係長に任せつきりでいいのですか？」

「いいんだよお。係長、最近パソコンに凝っててな。すっかり事務仕事に板についてきた。何でも娘さんがパソコン・インストラクターやってて、ハマっちゃったらしい」

どこか納得しきれない真壁ではあったが、甘んじて受け入れることにした。それにしてもこの青いGT-Rはどこに向かっているの

だろうと、ふと疑問に思った。これまで妙典の口から一切行き先を告げられていない。実地訓練その1と言ったのも気にかかる。ただの出任せならいいのだが、その2があるような気がしてならなかった。

そうこうするうちに、かえつ学園西交差点を過ぎた。

「湾岸道路、千葉方面に入れよなあ！」

真壁はぶつきらばうに指示する妙典にも多少慣れてきた。首都高湾岸線の高架下を走る湾岸道路に左折進入し、真壁は青いGT-Rのアクセルを強めに踏み込んだ。ここから浦安にかけてほぼ直線が続く、V6ツインターボの真価が発揮される絶好の道であることは間違いない。更にアクセルを踏み直し車線を変更しようとした瞬間、真壁はある事実気がついた。

湾岸道路を千葉方面に向かって進行しているということは新木場に向かっているということである。そして新木場には警視庁第七方面本部があるではないか。そう、南砂町で発生した刺殺事件の捜査本部が設置され捜査一課9係が向かった先である。まさか黒いドクロTシャツの妙典というこの刑事、のらりくらりとGT-Rをここまで流させて来たが、最初から第七方面本部を目指していたのではないのか？ ……それにしても担当刑事でない妙典は何を目的に行くのだろうか？ ……またしても真壁の頭の中で余計な疑問符が渦巻いた。妙典と出会ってまだ数時間ではあるが、ある程度の行動予測はできる。最悪のケースは第七方面本部に乗り込み、担当刑事でもないのに「捜査に協力させる！」というものだ。この黒いドクロTシャツの男ならやりかねないと真壁は不安に思った。

「…ところで妙典さん、結局どこへ向かっているんです？」
意図的にとぼけた口調で真壁は尋ねた。

「デイズニールランドより楽しい所さ」

薄笑い気味に答える妙典の後ろで“ガンズ”の“Anything Goes”（何でもあり）が流れていた事に何か因縁めいたものを感じる真壁であった。

Welcome To The Jungle (7)

ステアリングを握る真壁の掌は汗ばんでいた。V6ツインターボを搭載した青いGT-Rが、その真価を余すことなく発揮してくれているというのに、晴れ晴れとした気分になるところか、高まる緊張を抑えるのに精一杯であった。

辰巳ジャンクションを越え、夢の島交差点に差し掛かるのを見計らうかのよう妙典は、ぶっきらぼうに言った。

「車線、右に寄せとけよ。新木場で曲がるからなあ」

真壁の予想通りの言葉である。緊張こそしてはいたが、追い越し車線から右折車線にすんなりと進入することができた。この先の三叉路に同じく右折しようとする輸送トラックに減速して連なる。「東京へりポート・若洲」と書かれた青い道路標識を横目にちらりと見やった。三叉路を右に折れ、輸送トラックに引き留められるかのように首都高湾岸線の高架下で停車し、信号が変わるのを待つ。

やはり妙典は第七方面本部に向かっている。そう確信した真壁にとって、これ程長く感じる信号待ちは未だ経験したことのないものであった。妙典の心理状態をつかむのは一筋縄でいかないことは十分に承知している。第七方面本部でどういった行動に出るつもりなのか、いくつかのケースは想定できるものの、どれも断定するまでには至らなかった。ともすれば真壁自身、どう対処し、どう立ち振る舞えばよいのかさえ判断できないでいた。

やがて信号が変わり答えが出ぬまま湾岸道路・国道357号線に別れを告げ、若洲海浜公園に向け青いGT-Rを進ませた。もちろん海浜公園が目的地でないことは真壁も分かっている。恐る恐るアクセルを踏む真壁に妙典の張り上げる声が突然発せられた。

「おい！ ここに入れや！」

「ええっ！ ここですか!？」

予想しない妙典の一言に、慌てて減速しハンドルを左に切った。

少々荒っぽく歩道に乗り上げ歩行者の確認を行った後、指示された建物にGT-Rをねじ込む。

「ほれ、着いたぞ」

そそくさとシートベルトを外しにかかる妙典を横目に青いGT-Rを駐車線の間で停車させた。一息つく間もなく妙典が荒々しくドアを閉める音が耳に入り、真壁も慌てて後を追う。飛び出し半開き状態のドアの上に真壁は左手を載せ、まじまじと周囲の建物を見回した。

「……ここつて、警視庁術科センターじゃないですか？」

事態を把握できない真壁は妙典の顔をぼかんと見やり呟いた。まるでその顔を待っていましたと言わんばかりに妙典は告げる。

「実地訓練その2。…実弾射撃訓練！」

呆気にとられた真壁ではあったが、取り越し苦労に終わった自身の予想に安堵の表情を浮かべ、静かにドアを閉めた。まったくもつて妙典という男の心理状態をつかむことはできなかった。少なからず妙典は刑事魂を振りかざし、闇雲に行動するオールドタイプの間ではないということが分かっただけでも収穫なのかもしれない。かといってニュータイプという訳でもなさそうだ。

真壁は眼鏡のブリッジを中指で押さえ、安堵感と脱力感が同居する自嘲的な笑みを浮かべ、一杯くわされた張本人に歩を向けた。

「真壁え、お前：何ニヤついてんだあ？ まったく気色わりイ変態オタク眼鏡小僧だよなあ」

「妙典さん、参りました。あなたは凄い人です。…自分の予想の遙か斜め上の行動をとる人です。今までこんな人に出会ったことはありません」

「何言つてんだ？ おめえ。…それって褒められてんのか？ …まあ、どつちでも構わんが、とりあえず一本だけ吸わせてくれや。…中は全面禁煙なんでな」

ジーنزのポケットから、よれよれの煙草包みとスチール製の丸い携帯灰皿を取り出した妙典に真壁は了解とばかりに相槌をうった。

ドラマや映画で警察官が頻繁に実弾射撃訓練を行っている様子が描かれているが、あれは全くもつての作り話である。そもそも警視庁本部庁舎にさえ射場施設はない。あるとすれば新築されたお台場署や北参道署の地下ぐらいのものだ。特殊部隊SATの訓練施設でもある警視庁術科センターを借りる形で、年間発射実弾数五十発という非常に厳しい制限の下、警察官も実弾射撃訓練を行っている。

吸音材が凸凹に貼り付けられた異様に高い天井の下、防弾チョッキに身を包んだ二人組みが歩いていった。体育館のアリーナ三分はあろうかと思われる長く誰一人居ない防弾ガラスに守られた観覧席の前をゆつくりと行き過ぎる。

「…妙典さん、いつの間に予約を入れていたのですか？」

「ああん？ 変態オタク眼鏡小僧が13係に来るって係長に聞いた日に入れといた」

「じゃあ…当然、経歴書と顔写真は目にしていた訳ですよね？ …ひよっとして“眼鏡小僧”というフレーズはその時から用意していたんじゃないやありません？」

「…まあ、そういうこともなあ…」

気まずい表情を見せる妙典はヘッドフォン型のイヤーマフを装着し、これ以上聞こえないといったアピールをした。眼鏡を外した真壁もイヤーマフとシューティンググラスを装着し、全長19.8cmのニューナンブM60を携え、装弾数五発のリボルバーに弾薬をひとつひとつ右回しで装填していった。

「真壁え、お前眼鏡外すと…何気に今どきのいい男だなあ…」

「そ…そうですか？」

場に全くそぐわない言葉を口にした妙典に真壁はいささか驚かされた。学生時代に見栄えすると言われた事はあるが、外見的にいい男だと思っただけだ。だいたい鏡の前に立つ時は概ね眼鏡を外しているのだから、自分の顔をまじまじと眺める習慣などなかった。ただ最低限の清潔感には気を使っている。そこが妙典と一線を画す

るところだと真壁は思った。

「…嘘に決まってるんだろ」

お先にどうぞ、と身振りで示した妙典は茶化すように言った。

「妙典さん、ちょっとした賭けをしてみませんか？」

妙典に対して、真壁は初めて挑発的な台詞を吐いた。

「ああ？ 賭けて何よ？」

「実弾射撃で成績の良かった方が、G T - Rの命名権を獲得するというのはどうでしょう？」

「はあ？ 命名権だあ？ …何考えてんだ、お前。…早く結婚して子供つくった方がいいんじゃないかね？」

「…せっかくの愛車なものですから、愛称ぐらいあっても構わないですよな？」

まったく付き合いきれないと言わんばかりの妙典の顔から25m先の紙に真壁は顔を向けた。右手でグリップを柔らかく握り締め、左手を添えるように固定する。トリガーガードに触れた人差し指をゆっくりと引き戻し、引き金に指をかけた。

パン！ パン！ と爆竹にも似た乾いた音が二度響き、銃を下ろす。真壁は引き金の後ろに安全ゴムを詰め込んだ後、射撃台の手元のレバーで的紙を引き寄せた。的紙の左胸に一発、頭部に一発、弾が貫通した痕が残っていた。その焼け焦げた痕を目にした妙典は感嘆の声をあげる。

「ほう、やるなあ…お前。ダブルアクションときたか。…こいつあ、二度死んでるなあ」

真壁はシューティンググラス越しに妙典の表情を窺った。驚いている様子こそあれ、焦燥感は見受けられなかった。射撃の腕前には自信があるのだろうか？

「なあ、真壁。ニューナンブってなあ、シングルアクションの方が命中精度高いって知ってたか？」

確かに妙典の言っていることは正しい。元々小型軽量化しすぎてお世辞にも命中精度が高いとはいえないニューナンブはダブルアク

シヨンよりもシングルアクションの方が比較的命中精度は良好とされている。そんな統計データを踏まえたうえで敢えてダブルアクションで挑んだ真壁は妙典と顔をあわせて以来、初めての優越感にありついていた。

「んじゃ、俺様もいつちよカマしてやつか…。シングルアクションこそ、男の生き様つてのを見せてやんよ！」

妙典はこめかみを挟み込む様に片手でシューティンググラスをかけ、射撃台に歩を進めた。入れ替わるように観覧席の防弾ガラスに真壁は寄りかかった。

静かに撃鉄を引き、ニューナンプM60を構える妙典の背中は今にも蒸気を吐き出さんばかりの鬨気に満ちていた。暫くの静寂の後、一発の乾いた銃声がインドア射撃場に響き渡る。真壁は25m先の紙を眺めてはいたが、揺れ動く気配が一切感じられなかった。目の錯覚かとも思ったが、確かに揺れ動いていない。不思議に思った真壁の耳にパン！　パン！　…と更に二発の銃声が響いた。それでも的紙は一向になびこうとしない。妙典はシングルアクションの美学をかなぐり捨て、尚も二度、引き金を引いた。しかし銃声は虚しく響くだけである。的紙を引き寄せ確認するまでもない。装弾数五発全てが着弾していないのは確かであった。的紙に一発も当たらず、かすりもしなかったのである。

思いもよらぬ気まずい空気がインドア射撃場に流れ、イヤーマフとニューナンプを射撃台にゆっくりと置いた妙典は天井を見上げ呟いた。

「…やつば、的が本物じゃなきゃ、当たらねえなあ…」

もはや負け惜しみにしか聞こえない妙典の一言に真壁は苦笑いするしかなかった。不死身と言われる男の致命的な弱点を目の当たりにした真壁はどこか蔑む気持ちこそありはしたが、妙典に対し初めて人間味を感じたのも事実であった。

「妙典さん、実際に人を撃つたことはあるのですか？」

「…んん？　そんなもん、あるわけねえだろ！」

Welcome To The Jungle (8)

外国映画には時として、原題とはまったく意味の異なる邦題がつけられる事がある。中にはネーミング・センスを疑いたくなるような酷いものもある反面、原題以上に作品内容を見事に表現した素晴らしい邦題があるのも事実だ。その最たる例のひとつが「愛と青春の旅立ち」であろうと真壁は以前から思っていた。何せ、原題は“An Officer and a Gentleman”である。訳せば「将校と紳士」になり、何だかしっくりこない。

警視庁本部庁舎に向け、永代通りを走る青いGT-Rの車内は凄まじい轟音が鳴り響いていた。先程まで流れていた“ガンズ”も十分にうるさいと感じていた真壁だったが、今度のやつは更にうるさい。もはや音楽とは呼べない凄まじき轟音としか表現のできない代物であった。

パッセンジャーシートをやや後ろに寝かせ、両腕で枕を作る妙典は、初夏の雲ひとつない空をフロントガラス越しに眺めていた。少し落ち込んでいる様にも思える。流石の妙典も警視庁術科センターでの射撃訓練の酷い有り様にしよげ返っているのだろうか？…術科センターの職員食堂で昼食のカレーを食べて以来、いまだ一言も口を開こうとしない。

そんな妙典のシート脇に凄まじい轟音の源であるCDのケースが無造作に置かれていた。ジャケットには“Strapping Young Lad”、“Heavy As A Really Heavy Thing”との文字が躍っている。どちらがバンド名で、どちらがアルバム名なのか定かではないが、真壁が察するに“ストラッピング・ヤング・ラッド”がバンド名であろうと思った。そのCDジャケットの端っこに折り込まれた帯が挟まっている。帯にはこのアルバムの邦題が太い文字で表記されていた。

“超怒級怒濤重低爆音”

まさにこの轟音を表現するに相応しい邦題だと真壁は感心した。

「なあ、真壁え……」

轟音の鳴り響く中、妙典は初めて口を開いた。

「……不思議に思わねえか？」

「え、何がです？」

先程から空を眺めていたのは、しよげ返っていたからではなく考え事をしていただけなのか？ ……という疑問符を含んだ真壁の問いかけだった。

「捜査本部だよ。何で木場署じゃなく、第七方面本部なんだろうな？」

妙典の問い返しに真壁も少し考え込み、答えた。

「木場署も部屋が空いてなかったとかではありませんか？」

「木場署管轄って、今たいしてデカいやマ抱えてねえんだよなあ」

「……と、申しますと？」

「たかが刺殺事件の割には、捜査本部がデカいんだよなあ……」

「妙典さんはただの刺殺事件ではないと思ってらっしゃるのですか？」

「本庁の喫煙ルームも閑散としていたし、そんな気しねえか？ ……変態オタク眼鏡小僧」

言われてみれば確かにそうである。集合住宅で起きた刺殺事件となれば身内の怨恨か押し込みの線が有力である。命の重さに差などないが、集合住宅で有力者が殺されると考えるのも不自然だ。そのどれでもないとなると、どの様な可能性が残っているのだろうか？

……V6 ツインターボの回転に合わせ、真壁の頭も回転を始めた。

それにしても妙典の心理状態をつかむのは困難極まりない。ただのサボリ行為と思われた本庁の喫煙ルームもしつかりと観察している。街中をふらついているだけかと思わせておいて、目的地は当初からはつきりとしている。しよげ返っているかと思えば担当外にも関わらず、事件を冷静に分析している。射撃の腕前を見て、不死身なのは妙典でなく狙われた相手の方なのかもしれないとの疑念こそ

まだ残つてはいるが、大場係長の言うように最後には頼りになる男なのかもしれないと真壁は思い始めていた。

「ところで妙典さん。賭けの件、OKですか？」

「はあ！？ 賭けだあ？ …… 端から、俺様はのってねえからな。… だいたい車に名前をつけるなんざあ、まったくオタクの考えそんなことだぜ。まあ、お前さんがでつかい勲章ぶら下げてくるか、イレズミでも入れてくるなら考えてやってもいいがな」

イレズミとは警察の隠語で実弾に当たり火薬が飛散した跡のことを指す。洗つても落ちないからイレズミと言う。つまり「弾に当たつてみやがれ！」と妙典は言っているのだ。相変わらず皮肉めいたことを言うものだと、真壁は鼻を鳴らした。しかし数時間前とは異なり、たいして腹もたたなくなっており多少なりとも慣れてきている自分を恐ろしく感じた。

「ああん！？ 何だあ、ありや？」

青いGT-Rが永代橋に差し掛かるうとした時、空を見上げる妙典は驚きの声をあげた。妙典の視線を追うと欄干の天辺に立ち尽くすひとりの男がいた。

真壁は慌ててハザードランプを点滅させ、青いGT-Rを止める。同時に鳴り響く“超怒級怒濤重低爆音”も消え去った。

妙典は起き上がりダッシュボードのパトランプをルーフに置き赤色灯を回す。すぐさま無線を片手に連絡を取った。

「警視302から至急報。永代橋にて自殺志望者と思しき男ひとり。年は二十代から三十代。現認では欄干に登り、かなり危険な模様。緊配手配求む」

「警視庁、了解」との応答を受け、無線を置いた妙典は携帯を開いた。

「…おう！ 俺様だ。妙典だ。… 緊急事態なんで頼み聞いてくれるか？」

妙典の携帯から漏れる話声に真壁は耳を傾けた。どうやら通話の相手は警察関係者ではなさそうである。

「…でさあ、永代橋で自殺しようって奴がいるもんで、段ボール箱ありったけ持って来てくんねえか？ …ひとり、そっちへ向かわせる。…頼んだぞ」

携帯を折りたたむ妙典は真壁に顔を向けることなく叫んだ。

「実地訓練その3！ …永代二丁目に石井酒店つてのがある。俺様のダチ公がいるから、今すぐ段ボール箱取りに行つて来いや！」

「は…はい！」

青いGT-Rを飛び出した真壁は実地訓練の名の下、停滞する車を縫うように今来た永代通りを全力で逆走した。

真壁は道行く通行人を掻き分けて走りに走った。やたらと走るシートの多い刑事ドラマがかつてありはしたが、今の真壁がまさにそうであった。しかし走りながらも頭はフル回転させている。何せ情報は「永代二丁目」と「石井酒店」の二点しかない。携帯を開いて調べようかとも思ったが、今はその時間さえ惜しかった。地元のこととは地元民に聞くのが一番だ。地元民を探すしかない。少なからず、スーツ姿のサラリーマン風の男は除外だ。仕事でここにいるだけで普段の行動範囲は限られる。作業着姿の男も同様だ。コンビニやランチの店を探すのなら話は別だが、地元の酒店である。そこまで詳しいとは思えない。ただ、町工場などの経営者なら地元のことには詳しい筈だが、この時間に経営者に当たる可能性は決して高くはない。ベビーカーを押す主婦ならば地元民である可能性は限りなく高いが、流石に夕方近くの車通りの多くなつたこの時間にもなると見かけはしない。子供連れの親子でもいればよいのだが、あいにく見つかりはしなかった。

そうこうするうちに「永代通り江東区永代二丁目」と表記された歩道橋のたもとまでやってきた。立ち止まり息を切らし辺りを見回すが、そのような酒店は見当たらない。すぐ傍のクリーニング屋に目が止まったものの客が多過ぎて店員には当分たどり着けそうもなかった。しかし、この時間にクリーニング物を受け取りに来るので

あれば地元民の可能性は極めて高い。繁盛するクリーニング屋に入りきれず外で待ち続ける、歳にして七十といったところの男性の姿が目に入る。ここは亀の甲より年の功、賭けてみる価値はありそうだ。

「すみません。…この辺りに…石井酒店で…ご存知ありませんか？」
「はあん？」

真壁は息も絶え絶えに年配の男に聞いてみた。少々耳が遠いのか、真壁の発声が悪かったのか、聞き取れない様子である。一呼吸空けた真壁はもう一度大きな声でゆっくりと質問を繰り返した。

「あおう、石井酒店で、この辺りに、ありませんか？」

「おう！ 兄ちゃん。昼間から酒か？」

ようやく通じたようだった。

「いえ、そういう訳ではないのですが、事情があつて石井酒店を探しているんです」

「それなら、この通り行つたところの左手にあるぞ。今は二代目が継いでてな…」

失礼だとは思つたが、ご年配の長くなりそうな話を途中で遮つて真壁は礼を言った。

「ご協力ありがとうございます」

一方通行の狭い路地の歩道を駆け行く真壁の背中に向かって年配の男は声を張り上げた。

「兄ちゃん！ 昼間から、酒はほどほどにしときなよ！」

妙典は腕組みをして重要文化財にも指定されているアーチ型の橋を眺めていた。夕方から夜十時にかけて青白くライトアップされるその橋は有数のデートスポットでもあり、数々のドラマや映画にも登場してきた。欄干の天辺は荒い網目の交差した柵状になっており、飛び降りるにしてもなかなか至難なことだと思つた。欄干の天辺に立ち尽くす男ははまだ動こうとしない。しかし凝視すると小刻みに震えている。危険な状況に違いはなかった。

一瞬首を傾げ、舌打ちした妙典はゆつくりと永代橋に歩を向けた。アーチ型の欄干のそばまで来ると歩道から水色のスチール製の橋床に飛び乗り、欄干を上り始めた。体力にだけは自信のある妙典にとつて、永代橋の欄干をよじ登ることなど造作もない。だいたい見るからにひ弱そうな男が欄干に立ち尽くしているのだから、妙典に出来ない筈はなかった。

欄干をよじ登って迫り来る妙典に気付いたひ弱そうな男は今にも飛び降りんばかりの奇声を発した。

「な、何だよお！ …お前えっ！！」

妙典は欄干から手を離し、右手を挙げる格好で一步前に出た。

「よっ！ …元気が！？」

思いもよらぬ一言にひ弱そうな男は一瞬たじろいだものの、じりじりと歩み寄る妙典を見て叫んだ。

「げ…元気だったら、こんなとこにいる訳ないだろお！」

「…んなことあねえよ。ここまで上がってくるのは結構骨が折れる。…元気がある証拠だ」

周りの景色を見回し、妙典は答えた。

「何わけ分かんねえこと言ってたんだあ？ …お前、何様？」

「一応こういうもんだ」

ジーンズの後ろポケットから取り出した警察手帳を広げて見せた。

「け…警察？ …刑事かよ」

妙典は黙って頷き、後ろポケットに手帳をしまった。

「警察が何の用だよ？ …止めようたって無理だからな」

「止める気なんて更々ねえよ」

「じゃ…じゃあ、何しに来たんだ、お前？」

「ちよつとした思い出作りさ」

「思い出作りい？」

悪戯っぽく話す妙典にひ弱そうな男は驚きを隠せなかった。

「ちよつといいか？ …一本吸いてえーんだが」

よれよれの煙草の包みと丸い携帯灰皿を取り出した妙典はしゃが

み込み、啜え出した煙草に火を点けた。つられてひ弱そうな男もしやがみ込んだ。

「…お前も吸うか？」

妙典はよれよれの煙草の包みを差し出したが、あいにく最後の一本だった。一瞬躊躇したひ弱そうな男は包みごと奪うように煙草を手を取った。

「火貸してくれよ。煙草なんてここ何年も吸ってねえ」

ジッポライターを投げ渡す妙典。胸元で捕らえるひ弱そうな男。二人の喫煙者のちょうど真ん中には丸い携帯灰皿が置かれていた。

「名前は何て言うんだ？」

おどおどと煙草に火を点けて、煙を吐き出しむせ返る。しばらく間をおいてひ弱そうな男は答えた。

「飛田。…飛田圭介とびたけいすけ」

「ふーん、飛田か…。よく飛びそうな名前だなあ」

「からかってんのか？ 刑事さん」

つい先程まで激情していた飛田は落ち着きを取り戻しつつあった。「で、何があつたんだよお？ …ここから飛び降りるつもりなんだろうお」

妙典の吐き出す煙が、うつむき口を嚙む飛田の顔をかすめた。

「…派遣切りだよ」

ポツリと飛田は呟いた。それを妙典は煙草を啜え黙って聴いていた。

伝説のマラドーナの五人抜きかの勢いで一方通行の狭い路地の歩道を真壁は走り抜けていた。すると今にも剥がれ落ちそうな薄汚い「石井酒店」と書かれた看板を交差点の対面にみつけた。先程のこの年配は左手と言っていたが、残念ながら右手だった。思い違いは誰にだつてある。そう納得した真壁は石井酒店に飛び込んだ。

「すいません！ 石井酒店さんですか！？」

看板で店名を確認しておきながら言っていることがおかしいとは

思ったが、構わず真壁は叫んだ。すると店の奥からモヒカン頭の同年代と思しき男が暖簾から顔を出し叫び返した。

「あんた、妙典さんのとこの人!?」

「はい。妙典に言われて来ました警視庁の真壁です」

「刻は一刻を争うんだ! 開いてるから、裏へ回ってくれえ!」

少々おかしな日本語だとは思ったが、真壁は迷わず店の裏手に駆け回った。倉庫の手前にリヤカーがあつた。既に折り畳まれた段ボール箱が半分ほど積み込まれている。

「兄ちゃん! 倉庫にある段ボール、載せれるだけ、載せてくれ!」
「あ、はい」

真壁は埃っぽい倉庫に駆け込み、空いた段ボール箱を折りたたみ重ねた。重ねた段ボール箱を抱え、リヤカーのもとに駆け戻るとモヒカン頭の男はリヤカーの持ち手部分とカブの荷台を荒縄で結わえていた。

「兄ちゃん! それで全部かい? …まだ載るだろ」

真壁はまたも埃っぽい倉庫に駆け込んだ。再びリヤカーのもとに戻るとホンダ・スーパーカブとリヤカーは見事に一体化していた。

男の永遠の浪漫のひとつ、合体というやつである。

「よし! 兄ちゃん、それ載せ終えたら、落ちないように支えてくれ!」

「えっ? リヤカーに乗って抑えるんですか?」

「当つたり前だろ! 何だつたら兄ちゃんが運転するか? …永代通りは激混みだろ? …ここは地元民に任せとけて。裏道ならいくらでも知ってる。回れば急げだ! …十分以内で着いてやるから、振り落とされんなよ!」

「…分かりました。お任せします」

やはりどこか日本語がおかしいとは思ったが、納得せざるを得ない真壁は荷台に乗り込み、リヤカーの両端を両手で握り締め、折り畳まれた大量の段ボール箱を身体全体で覆いかぶせるかのように押さえつけた。モヒカン頭の男は半キャップヘルメットを被り大声で

真壁に言った。

「行くぞお、兄ちゃん！ ……早起きは三文の得だ！」

「…それよりも、道交法的にどうなのでしょう？ ……自分が荷台でこうしてるって」

緊張と興奮が少々入り乱れていた真壁は警官として聞くに値しないことを問いかけた。

「完全にアウトだな。 ……現行犯逮捕するかい？ ……兄ちゃん」

「…やめときます」

リヤカーと合体したスーパーカブは勢いよく路地に飛び出した。

永代橋の欄干の上でしゃがみ込む二人の男は相変わらず話し込んでいた。話し込むというよりも、ひ弱そうな男が一方的に話しているといった方が正確かもしれない。

「…一流とはいえないけど大学院まで出たさ。 ……そしたら就職氷河期でさあ。就職口がないんだ。 ……面接で大学院まで出ましたと言ったら、あからさまに嫌な顔されたよ。年齢的には入社二、三年目。なのに新卒。おまけに大学院出だと初任給も高い。正直煙たがられたよ」

遠くの景色を眺める飛田はひとつひとつ思い出すかの様に語り、妙典はそれを黙って聞いていた。

「それで仕方なく人材派遣会社に登録した。手取りは安かったけど寮があつたから、何とかなつた。 ……それこそ、この十年間必死に働いたさ。 ……いろんな所にも行つた。 ……けど、派遣法が変わつて、出向先から一方的に切られた。 ……他の仕事先も探してもらつたけど、年齢的に難しいって言われて……派遣登録も切られた。 ……派遣登録を切られたら寮も追い出された。 ……いきなりホームレスだよ」

妙典はふーんと鼻を鳴らし、短くなつた煙草を片手で揉み消し携帯灰皿が一瞬熱を帯びた。

「刑事さん、ハート・ワークって知ってる？ ……政府が派遣切り対策で始めた職業訓練所。 ……そこで習得した技能で仕事を斡旋してくれ

るって所。そこにも行つたさ。でもなあ、住所も連絡先もない人は登録さえできないって断られた。…国は何にも分かつてねえよ」

妙典は酷い話があるものだ感慨深げに空を見上げた。

「刑事さんはいいよね。公務員だからクビにならない」

「そうでもねえよ。クビにはならんが、自動車教習所の教官に回されちまう事だつてある」

「でも仕事があるだけマシだよ」

行き場のない怒りに共感した妙典は努めて明るく飛田に言った。

「しかしお前、スゲーなあ。こつから飛び降りて死のうと思つたんだろ？ …人間、死ぬほど勇気のいることはねえ」

「そうかなあ？」

そう言つて永代橋を見下ろした二人はいつの間にか集まっていた野次馬に初めて気がついた。

「何か、いつの間にか、お客さん増えてんなあ。…どうする？ このまま大人しく降りるか？」

妙典は飛田の顔を覗き込むように言った。

「どうすればいいんだろ、刑事さん」

永代橋を見下ろす二人の目に野次馬を蹴散らすかのような勢いで突進してくるリヤカーを引いたカブが飛び込んできた。しゃがみ込む二人がたたずむ欄干の手前で急停車し、半キャップメットを被った男とよれよれになったダークスーツの男が走り寄り二人を見上げた。すぐさま妙典の携帯が鳴り、静かに開いた。

携帯を切つた石井は半キャップメットを脱ぎ捨てた。

「妙典さんは何と云つてますか？」

リヤカーに揺られてよれよれの真壁はモヒカン頭の石井に問いかけた。

「持ってきた段ボール広げて、横長で四段積みにしてくれってさ」

真壁には妙典の考えが分かった。欄干から積み上げた段ボール箱に飛び降りるつもりだ。

「おい！ 刻は一刻もねえ！ さつさと仕事に取り掛かるぞ」
そう言った石井はリヤカーの折り畳んだ段ボール箱を抱え出した。真壁も慌てて段ボール箱を抱え、ひとつひとつ箱を組み立てていった。その時初めて石井の黒Tシャツの文字が目に入る。

“ Suicidal Tendencies ”

訳せば「自殺的傾向」：恐らくバンド名だと思われるが、この状況下で極めて不謹慎な言葉である。しかし石井の言葉を借りるならば「刻は一刻を争う」時なので手を休めるわけにはいかない。ひたすら段ボール箱を組み立て、石井が積み上げていく。見かねた野次馬の中にも手を貸し始める者が現れ、暗黙のうちに連帯感が構築されていった。それに比例して四段積み of 段ボール箱も着々と出来上がりつつあった。

「妙典さん！ できましたぜー！」

石井は両腕を大きく振って妙典に合図を送った。その姿を見守る真壁の背後から連なるサイレン音が聞こえた。真壁は音のする方へ全力で走り、両手を大きく広げて連なるパトカーを制止した。停車したパトカーから制服警官が飛び出し、敬礼と同時に真壁に言った。「ご苦労様です。御成門署の岸下です。現場はどうです？」

「ご覧の通りです」

真壁はたった今完成した四段積み of 段ボール箱を指し示し、岸下の反応を待った。

「かなり緊迫した現場のようです。あの段ボール箱で大丈夫でしょうか？」

「今は見守るしかありません。念のため救急の手配も願えますか？」
「了解しました。直ちに手配します」

岸下は救急の手配を部下に要請し、残りの者には野次馬たちの安全確保をする様指示を出した。

それを見届けた真壁は四段積み of 段ボール箱の傍らに駆け戻り、

頭の上で大きく丸との合図を妙典に送った。

「あいつ、何やってんだ？」

頭上で大きな丸を作る真壁ではあったが、両足も大きな丸を描いていた。真壁の必死さは伝わるが、まったく気付いていないであろうその珍妙な格好に妙典は滑稽さを覚えた。

「あの刑事さん、面白いね。リアル・エイトマンだよ」

自殺志望者の飛田も真壁の風変わりな格好に耐えられなかったよ
うである。それを見据えた妙典は立ち上がり飛田に言った。

「なあ飛田、ここでいつちよ、人生大きく変えてみねえか？」

「はあ？ ……といった表情の飛田は妙典に顔を向けた。

「お前、飛び降り自殺しようとしてここにいるんだよな？ ……だつたら飛び降りてみねえか？」

「何言つてんの？ ……刑事さん」

「見てみな。俺様のダチ公に段ボール箱を積ませた。この高さなら多少の擦り傷で済む筈だ」

「刑事さん、本気で言ってるの！？」

「ああ、俺様はいつだって本気だ。まあ、いきなりやれとは言わん。先に俺様が手本を見せてやる」

「そ……そんなの普通の警察がやることじゃないよ。俺、刑事さんと話してここから大人しく降りようと思つてたところなんだよ！」

妙典は両手を腰に当て夕焼けが迫った空を暫し見上げた後、飛田の目を見て力強く言った。

「それじゃあ、何にも変わんねえんだよっ！ ……一度は飛び降りて死のうと思つたんだろ！？ ……じゃあ、やってみろよ！ ……一度死んでみるよ！ ……そして生き延びてみる！ ……そしたら、お前は生まれ変わる！」

妙典の気迫に押された飛田は妙典の顔を見つめるしかなかった。

「…俺様なあ、不死身なんだ。ガキの時分にトラックに轢かれてもかすり傷程度だった。ヤクザに撃たれても傷ひとつ負わなかった。

だから捜査一課の連中も俺様のことを不死身と呼びやがる。…どうだ？　ひとつ賭けてみねえか？　…お前さんの人生」

正直、躊躇する気持ちもありはしたが、突拍子もない事を何の臆面もなく堂々と云つてのけるこの刑事に賭けてみようと思つた。

「でも、どうやって？　俺、運動神経悪いし…」

「心配すんなあ、簡単だよ。…大きく踏み出したら、空を見る。そうしたら次は大の字だ。大の字になったらへソを見る。…たったそれだけだ」

「それだけで大丈夫なの？　刑事さん」

「ああ、大丈夫だ。俺様が言うんだから間違いねえ。じゃ、よく見とけよ。手本は一回しかねえからな…」

そう言い放つた妙典は右足を前に大きく伸ばし、一步踏み出そうとした。

「ちょ…ちょっと待ってよ、刑事さん。刑事さんはやったことあんの？」

「そんなの、あるわけねえだろ。俺様だつて初めてだ。言つたる？　俺様は不死身だつて」

四段積みの段ボール箱の傍らで真壁と石井は欄干の二人を見上げていた。御成門署の警官のお陰で野次馬たちも安全な場所へ移動し終えている。どうやら妙典が先に飛び降りるようだ。緊張した面持ちでよれよれの刑事とモヒカン頭の酒屋は妙典の姿を凝視していた。「まあ、妙典さんなら平気だ…」

緊張を揉み解すかのようにモヒカン頭の男は自分に言い聞かせた。その矢先、片足を前に大きく突き出した妙典の身体が欄干から離れた。

「せ…先輩っ！」

真壁は思わず声を上げていた。それも今まで妙典に対して一度も使つたことのない言葉で叫んでいた。

妙典は天を仰ぐ大の字の体勢で四段積みの段ボール箱の真ん中に落ちた。

「先輩！」

「妙典さん！」

真壁と石井は四段積みの段ボール箱に駆け寄った。すると段ボール箱を蹴散らすかのうな妙典が姿を現した。

「先輩っ！ 大丈夫ですか！？」

詰め寄る真壁に目もくれず、肩に引つ掛かる段ボール箱を払いのけ、何事もなかったかのように妙典は言った。

「俺様が死ぬわけねえだろお！」

その言葉を聞いた真壁は安堵し、よれよれの具合が更に増した。

「おい！ 安心するのは、まだはえー。今からがメイン・アクトだ！」

妙典は欄干の上でしゃがみ込む飛田の姿を見上げた。

「いいから早く積み直せや！ …潰れてる箱はもう一度組み立てろっ！」

妙典に一喝されて真壁と石井は我に返った。真壁は踵を返し、飛び散った段ボール箱を拾い上げはじめた。気付けば御成門署の警官も遠くに飛散した段ボール箱を拾い上げている。野次馬たちも段ボール箱を組み立てている。それを石井が受け取り積み直している。誰がその役割を指示したわけではない。ただ、今ここに居る者たちが出来る事を無心でこなしているだけであつた。

四段積みの段ボール箱が再び積みあがり、あとは欄干の上でしゃがみ込む男を待つのみであつた。

「おーし！ 飛田あー！！ あとはお前の番だあー！」

妙典は夕焼けが迫った永代橋の欄干に向かって大きく叫んだ。

飛田は相変わらずしゃがみ込んでいた。一度は飛び降りる決心をしたものどうしても踏み切れないでいた。下の方から不死身と言つてのけた刑事の叫び声が聞こえる。見下ろすと扇形になつた警官

と野次馬が取り囲むように段ボール箱が積み上げられていた。段ボール箱の傍で不死身と名乗る刑事とエイトマン、モヒカン頭の三人が見上げている。

おずおずとその光景を眺めていた飛田は意を決して立ち上がり、夕焼けが迫った東京の空を眺めた。

大きく踏み出し空を見る。大の字になったらへソを見る。飛田は頭の中で何度も復唱し、恐怖を払いのけようとした。それでも恐怖は付きまとい思わず目を閉じた。暗闇の中でも復唱し、いまだかつてない恐怖と戦っていた。

大きく踏み出し空を見る。大の字になったらへソを見る。大きく踏み出し…と復唱したところで右足が大きく前へ動いた。すると自然に身体が欄干から離れる。またも恐怖心に苛まれ飛田は大きく目を見開いた。夕焼けが迫った空が見える。薄汚れた東京の空の筈なのにとても美しかった。その美しさに身を任せるかのように身体のが力が抜け、大の字で寝そべっていた子供の頃を思い出した。思い出に浸る中で誰かの呼び起こす声が聞こえた。ハッと顔を上げるが誰もいない。その時、夢から覚めるような衝撃が体中を駆け巡った。

四段積みの段ボール箱に飛田は落下した。妙典ほどではないが段ボール箱が飛び散った。妙典、真壁、石井、そして御成門署の警官と野次馬は固唾を飲んで静まり返っていた。静寂が永代橋をつつみ、誰一人として口を開こうとはしなかった。長く続く沈黙の中、四段積みの段ボール箱の陰からひよつこりと顔を出す男がいた。飛田だった。

飛田は四段積みの段ボール箱から転げ落ちるかのように這い出て、ゆっくりと立ち上がった。我に返った飛田は力強く両腕を掲げ腹の底から叫んだ。

「生きてるぞおおー！」

その雄叫びを耳にした永代橋に居合わせた人々からパラパラと手を叩く音が聞こえ始める。やがて大きな拍手に変わり、飛田は妙典

に飛びついた。

「刑事さん、俺生きてるよ。まだ生きてるよ」

「だから言つたら、俺様は不死身だつて」

まったくかみ合わない会話ではあつたが、欄干の上で起こつたこと、そして今の状況を手に取るように真壁は理解した。堰を切つたように石井も興奮気味に自殺志望者だつた男に声をかけた。

「兄ちゃん、すげえなあ。こんなダイブ、リキッドルームで背面ダイブした奴を見て以来だぜ！」

興奮する石井に反して真壁は脱力感に苛まれた。

「先輩：いや、妙典さん。妙典さんと一緒だととても疲れます。大場さんが言つていた通りです」

「真壁え。お前、今頃わかつたのかあ？ …もうちょい優秀な奴だと思つてたんだがなあ」

妙典の相変わらずな皮肉を聞いて真壁は安堵感に包まれた。確かに最後には頼りになる男なのかもしれない。今は本気でそう思っている。

御成門署の岸下が駆け寄り妙典に声をかけた。

「お怪我がなくなつてなによりです。失礼ですが、本庁の妙典刑事でいらつしゃいますか？」

「ああ、そうだけど…」

「やはりそうでしたか、噂はかねがね聞いております。噂に違わぬ凄い刑事でいらつしゃる」

「ひよつとして俺様の知り合い？」

「いえ、知り合いというわけでは…。本庁に不死身と信じて疑わぬ凄い刑事がいると聞いております」

「ほお、そんな噂が飛び交つてるのか。言つとくが、俺様マジで不死身だかなあ」

「まあ、相当無茶をなさる方だとも伺つております」

苦笑する岸下は飛田の腕を軽く掴み妙典と真壁に言った。

「ご苦労様です。身柄確保及び補導手続きは本署の方でやらせて頂

きます」

「明日には出れるんだろ？ こいつ」

「まあ、軽く事情を聞くだけですから」

了解とばかりに頷いた妙典だったが、何かに気付き自殺志望者だった男に詰め寄った。

「おいっ！ 飛田！ ……灰皿どうした？」

面食らった飛田は叫んだ。

「ああ、いつけねえ！ ……欄干の上に置きっぱなしだあ！」

「おめえ、何やってんだよ！ 馬鹿野郎っ！！」

「それどころじゃなかったんだよ、刑事さん」

「…まあ、いいや。あれは俺様とお前だけの記念品でことにしてやるよ…」

呆れ果てた妙典はさっさと行けと合図をした。飛田は岸下に連行され、振り向き叫んだ。

「刑事さん、ありがとう。今度こそしっかりと生き抜いてみせるよ」

「兄ちゃん、仕事に困ったらウチに来な。最近親父も足腰弱っちゃまって配送大変なんだ。待ち人来たるだからな！」

石井が妙な日本語を投げかけた。ありがとございます、と飛田は一礼しパトカーに乗り込んだ。その様を見届けた妙典は傍らに立つ御成門署の制服に一言告げる。

「すまねえが、お宅らもうちよい待機してもらっていいか？ ……段ボール片付けなきゃならねえ」

Welcome To The Jungle (9)

丹念に磨き込まれたマホガニー製の机は大部屋のワークデスクより、一回り以上も大きいものであった。異様なほどに机の上は整頓されつくされており、目立つものと言えば脇に追いやられたデスクスタンド・ライトとこれ見ようがしに「鬼塚和正^{おにつかかずまさ} 警視庁刑事部長」と表記されたネームプレートぐらいのものである。

マホガニー製の机の前で、背丈はさほど変わらぬものの体型と服装の異なる二人が気をつけの姿勢で立っていた。ひとりには眼鏡をかけダークスーツに身を包んだ着痩せして見える今風の男。もうひとりには洗いざらしのジーンズに黒い不気味なドクロのTシャツを着たやや肉付きのよい時代錯誤な男。

思えば警察官とは不思議な職業だ。警察学校を卒業し配属されてしばらくは制服を着用するが、少し偉くなると私服になり、もっと偉くなると再び制服を着用するようになる。真壁はそのような風習のある職業は他にないかと頭を張り巡らしてはみたが、警察官以外に思い当たらなかつた。

マホガニー製の机の上で仰々しく手を組み、革張りの立派な椅子に腰掛ける銀色のフレームの眼鏡をかけた強面の男も制服を着用していた。その右隣にも制服を着用した男が立っている。立派な椅子に腰掛けた強面の制服に体を向け腰元で手を組み、やや前のめつた姿勢で禿げ上がった前頭を惜し気もなく披露しているかの印象であった。一方、左側にはグレーのツーピースに身を包む浅く日焼けしたオールバックの男が強面の制服たちより数歩下がった位置で軽く背筋を伸ばし、部屋全体を見渡す様に立っている。

警視庁刑事部部長室には張り詰めた空気が漂い、長い沈黙が続いていた。その沈黙を破るかのように強面の男が声を張り上げた。

「いったい何を考えとるのだ!？」

張り上げる声と同時にマホガニー製の机を叩き、左隅で鎮座する

ネームプレートが一瞬浮き上がり僅かに向きを変えた。

「…許可もなく一般道を封鎖し、自殺志望者の安全確保を怠るところか挙げ句には飛び降りを教唆するとは何事だ！？ ……いつたい！」
口を噤んではいるが涼しい眼をする妙典は鬼塚刑事部部長の背後の窓ガラスを眺めていた。

「えっ！？ いったいどうなんだ？ 妙典！」

窓の外を眺めていた妙典は目玉だけを鬼塚の皺深い顔に向け、口を開いた。

「緊迫した現場につき最善を尽くしたまでです」

「あれが最善の策だったと言うのかね？ ……井岡、お前はどっと思っ？」

鬼塚の傍らにいる前かがみの制服は「ごもつとも」と言わんばかりに相槌をうち、落ち着かめ口調で言葉を発した。

「け…警察が自殺志望者に飛び降りを教唆したとマスコミに知られては一大事です。ましてや、きよ…強要ということにでもなれば…」
井岡刑事部参事官に向けた顔を戻し、剃り跡の髭が若干目立つ鬼塚は語尾を強めて言った。

「そういうことだ、妙典。…ちょっとは責任をわきまえろ！ お前一人の軽はずみな行動で警視庁全体が迷惑する！」

妙典はその言葉を聞き流すかの様に相も変わらぬ涼しい眼差しで窓ガラスを眺め続けた。真壁も口を噤み無表情を装ってはいたが、とてつもない不快感に陥っていた。

「…で、真壁巡查部長。君は上司に命令されて行動しただけなのだな？」

マホガニー製の机の向こうから誘導するかのように鬼塚は真壁に問いかけた。真壁はしばらく間をとり、返答をする。

「…いえ、違います」

鬼塚と井岡は一瞬のけ反り、まるで台詞を間違えた役者を見るかの表情で真壁を見やった。

「確かに命令はされましたが、あくまで自分の判断でとった行動で

す

真壁は鬼塚の上目蓋が垂れた目を見つめ、きっぱり言い放った。

「な…何を言つとるんだ？ …別に君が飛び降りる教唆した訳ではなからう？」

まるで別の答えを引き出そうとする鬼塚の意図を感じた真壁はその意に反し、挑戦的ではあるが努めて冷静な口調を装った。

「自らの意思で最善と思われる臨機な行動をとりました」

「真壁巡査部長！ 君は何も分かつたらん。君にはこの先の将来があるのだぞ。キャリアに傷がついてもいいのか！？」

憤怒する鬼塚を宥めるように浅く日焼けした雷門が速やかに割つて入り頭を垂れた。

「部長、自分自身の監督不行届きは心より陳謝致します。しかし結果的にはありますが、誰一人被害は出ておりません。…それに市民から賛辞の電話が相次いだのも事実であります。ここは警視庁の好感度に貢献したと解釈して頂くのが自分の所存であります」

「そ…そんな問題じゃありませんよお！ …お…お陰で110番受理台の業務に支障をきたしたのですよ！」

鬼塚の顔色を伺った井岡が落ち着きのない口調でまくし立てた。

雷門と井岡の言葉に挟まれ、いささかの疲労を感じた鬼塚は革張りの背もたれに身を投じた。銀色のテンプルに手をかけ眼鏡を外し、マホガニー製の机に緩やかに投げ置いた。

「もついい。今回は不問ということだ。…行つてよし！」

真壁は疲れきった表情の鬼塚越しに雷門に向けて一礼をして部屋を出ようと踵を返し、妙典は礼をすることもなく窓ガラスから扉に回れ右をした。そんな妙典の背中に鬼塚のしわがれた声が響く。

「妙典…次こそ教習所送りだからな」

妙典と真壁の二人は歩を緩めることなく刑事部部长室を後にした。扉が閉まる音がするや否や井岡は鬼塚の耳元に詰め寄り、落ち着かない口調で問いかけた。

「け…刑事部長！ …教習所送致の件、さ…早急に手配した方がよ

るしいでしょうか？」

一瞬井岡に顔を向け、苦虫を噛み潰した顔を隠すかのように目頭を押さえる鬼塚は鬱陶しげに答えた。

「…出来るものなら、とつくにやっとなる！」

妙典と真壁は紙カップ・コーヒーを携え、横開きのガラス扉をくぐった。今日ここに来るのは二回目で揃って紙カップのコーヒーを飲むのも二回目であった。二人は朝と同じエアリウムカウンターで向かい合わせに立ち、無言のまま紙カップのコーヒーを一口啜る。

真壁は永代橋で妙典のことを「先輩」と無意識に呼んでしまった。その言葉に未だ抵抗感が残る真壁は何と切り出してよいか分からず、黙りこくっていた。

妙典は未開封の青い煙草の包みをカウンターに投げ出し、真壁に言った。

「お前え、怒られ慣れてねえだろ？」

虚を衝かれた真壁は当惑したものの、はにかんで答えた。

「まるでブライトさんみたいなこと言いますね。…確かに親父にもぶたれたことありませんからね」

妙典も気を利かして昔テレビで聞いた台詞を思い出そうとしたが、結局思い出せずに終わった。それを見計らった真壁は芝居じみて答えを述べた。

「それが甘ったれなんだ！ 殴られもせずに一人前になった奴がどこにいるものか！」…ですよ。妙典さん」

相変わらずガンダム話になると生き生きとする真壁に呆れ果て首を傾げた妙典は自慢げに話した。

「俺様は校長室に何度も呼び出されたぜ。親父にも無茶苦茶殴られた」

「…妙典さん、正直羨ましいです。自分の父親は商社マンで、ほとんど家に帰ってきませんでした。今までまともに話したこともないです」

どこか吹っ切れた感のある真壁は「妙典さん」と自然に呼んでいた。

「しかし、真壁よお。お前下手つくそだなあ。出世組なんだから、もうちよつと上手くやれや！ …ああいう場合は黙って怒鳴り疲れるのを待つてりやいいんだよおっ！」

「妙典さんと違って校長室に呼び出されたことなどありませんからね」

「あんなカス部長とコバンザメなんか、ほつときゃいいさ」

上司批判を堂々と行う妙典に多少なりとも慄いた真壁は誰かに聞かれやしまいかと辺りを見回したが、そんな気遣いも必要ないとばかりに妙典は続ける。

「…けど知ってつか？ 13係を作るって言い出したのカス部長なんだぜ！ …何でもキャリア用の腰掛け部署を設けたかつたらしい」「え？ それはどういうことなのでしょう？」

徒労に終わった気遣いを止めた真壁は妙典に問いかけた。

「流石にキャリアさんの中にも“捜査一課”つちゆう箔が欲しいって奴がいるそうだ。…で最初に選ばれたのが、真壁伸一様って訳よ」「ええっ！？ 自分にそんなつもりはありません！ 別に箔が欲しいとか断じて思っていないませんよ！」

妙典は未開封の煙草の包みを取りビニール紐を解きながら言った。

「まあ、最後まで話聞けや。…前々からお前さんに目エつけてた雷門さんは優秀な準キャリアさんをダシに上司の思わぬところで13係という実質的な別働部隊をまんまと作っちゃったというわけさ」

「…ということば…」

銀紙を剥がし中指でトントンと煙草を叩き出す妙典は真壁の興味を感じつつも勿体ぶって話した。

「…あのカス部長とコバンザメは雷門さんの手のひらで踊らされるつちゆう事だわな」

片手で煙草を啜え出し妙典は言った。

真壁は正直ホツとした気分になった。雷門さんも馬場さんも、そして「妙典さん」も自分のことをただの腰掛とは受け止めてはおらず、戦力と見なしてくれている事を知り嬉しくない筈はなかった。

「…なもんで、ま、すっかりやれや！ 変態オタク眼鏡小僧」

既に聞き慣れた称号を耳にし、安堵した真壁は妙典の異変に気がついた。ポケットをまさぐり何かを探しているようだが見つからないらしい。何かを思い出した妙典は啜えた煙草を上下させ突然叫んだ。

「あ…あいつ、飛田の野郎お！ 俺様のライター持ってつたまんまじゃねえか。おい、今すぐあいつを窃盗容疑で挙げに行くぞ！」

啜えた煙草を今にも吐き出さんばかりの妙典の叫びを余所に真壁は上着の内ポケットから、すつと紙マッチを差し出した。それを一目見た妙典は驚きの声をあげた。

「おいっ！ これって、ヴァンデンバーグの紙マッチじゃねえのか？ …お前、いつの間に？」

「お茶くみ三年…。刑事の世界では当たり前じゃないですか？ …というのは嘘です。単に洒落たお店なので、また来ようかなあと思つて持っていただけです」

茶目っ気に答える真壁に対し、うつむき加減で睨む妙典は恨めしげに呟いた。

「…この変態オタク眼鏡小僧お。…お前え、意外とやるなあ。…ぜつてえ、由香ちゃん目当てだろ？」

Welcome To The Jungle (10)

自分は今、ある嫌疑をかけられている。ヴァンデンバーグという洒落た喫茶店の紙マツチを持っていたことから端を発する嫌疑だ。店を紹介したのは自分の上司、今その上司から嫌疑をかけられている。紙マツチを持っていた理由は店の雰囲気良かったからであり他意はない。店の雰囲気は何も店構えだけにとどまらない。品はもとより店員の立ち振る舞いや言葉遣い、容姿も含まれる。それらが全て相まって店の雰囲気形成されるのだ。ヴァンデンバーグにはある女性店員がいる。上司が「由香ちゃん」と呼称していた諸事情があつてバイトという業体で勤めているロング・ヘアーが印象的な女性店員だ。その女性店員に気があるのではないかとの嫌疑を上司からかけられている。確かに上司に「かわいいだろお？」と質問され「ええ、まあ……」と答えたのは事実だ。しかしあの時、寧ろ上司の方にこそ気があるのではないかとの嫌疑を自分は持っていた。それを悟られまいとしたのか、それとも違う理由からか、あらぬ疑いをかけられない様振る舞つたのも事実である。今にして思えば既にあの時から嫌疑をかけられていたのかもしれない。

頭を駆け巡らせる真壁は妙典より一足先に横開きのガラス扉をくぐり抜けた。真壁に遅れて両手をポケットに突っ込んだ仏頂面の妙典もガラス扉をくぐり大部屋に向けて歩を進めた。

「ああつ　妙典さあくん」

背後から男の茶色い声が萌えあがってきた。妙典は振り返るまでもなく肩を落とし、声の主にうめき声をあげる。

「…何の用だあ？　…アキバ二丁目え！」

真壁は踵を返し「アキバ二丁目」と称号付けられている男に目を向けた。おかつぱ頭に度の強そうな丸い黒縁眼鏡、分厚いタラコ唇にそばかす、肘にかけたコンビ二袋の向こうから見え隠れする出っ

張った腹、オタク想像図というものが、この世に存在するならば一筆たりとも違わぬ見事なまでのオタク像がそこにあった。

「もう　妙典さんたらあゝ、いつつも冷たいんだからあ」

大きな腹を揺り動かし妙典の背中に急ぎ足で詰め寄った。

「でもそんな妙典さん、素敵よ」

大きな腹を押し付け背中に抱きつくアキバ二丁目と呼ばれる男を妙典は悲鳴をあげて振り払う。

「うぐわああーっ！　気色悪いーぞおー！　てめえっ！　…いいから、近寄るなっ！」

「あら？　何言ってるんのお　最大限の愛情表現なのに　まあ、そういうトコが堪らないんだけど」

アキバ二丁目と呼ばれる男は妖しく微笑み妙典に指差し言った。

「聞いたわよあゝ、また刑事部長に怒られたんですって？」

「…おめえ、相変わらず俺様のことよく知ってるんなあ…」

目元を押さえ、うつむく妙典は吐き捨てるように言った。

「妙典さんのことなら、なぐんでも知ってるわよ　…知りたいんでしょ？　南砂町の事件のこと」

「…そこまでお見通しかよお。お前え、ウチのお袋よりすげえなあ

…」

呆れ果てた妙典は舌打ちをして腰に手を当てた体勢でうな垂れた。

「いくら妙典さんでもダゝメ　守秘義務で担当外の人には教えられませ〜ん！」

「…んなあこたあ、百も承知だあ。どうせ教える気なんか更々ねえんだろおが？」

アキバ二丁目と呼ばれる男は両手の甲を腰に宛がい妙典を挑発しにかかった。

「じゃあ、受けてみる？　…いつもの倉田検定！」

肩を落とした妙典は俯いたまま真壁に手招きをする。

「真壁え、お前の出番だ」

呼び出された真壁は事態を把握できないまま、妙典とアキバ二丁

目と呼ばれる男の傍らに赴いた。

「紹介するぜえ。こいつが前に言った鑑識の変態オタク。…倉田勝くらたかつ則のり巡查長」

「あら？ この無造作ヘヤーの人が妙典さんの相棒!?」

倉田は腕組みをし、真壁を頭のでっぺんからつま先に至るまで蔑むような鋭い目つきで眺めた。真壁はある種の嫉妬心のようなものを感じ全身に寒気が走った。

「ふーん。…今どきって感じね。でも、あたしのタイプじゃないわ！ もっとワイルドでないと！」

きつぱりと振られた真壁は安堵感に満たされた。振られてホツとする事など生まれて初めての経験である。

「…で、この人が何？ あたしの検定受けるつもりなの？」

「ああ、ウチの有望株の真壁伸一巡查部長だ」

未だ状況を把握できないでいた真壁は妙典に問いただした。

「妙典さん、いったい自分に何をしろと言うのです？」

妙典は一瞬顔をそむけ、午前に比べ随分と人数の減った行き交う職員を見回した後、真壁に向き直り言った。

「…見ての通り、こいつはオタクでオカマだ。もうひとつ妙な趣味でもありや、奇跡の人とも呼んでるぐれえだ」

「あら？ 失礼ねえ！ …妙典さんじゃなきゃ、ひっぱたくところ！」

気を慨し一段と鋭くなった倉田の眼差しは何故か真壁に向けられた。

「こいつの出すオタク問題に正解すりゃ、捜査情報が聞き出せるっちゆう訳だ。ちなみに俺様、一度も正解したことねえがな。しかし！ 変態オタク眼鏡小僧の真壁、お前ならできる！ …いや、てめえじゃなきゃ出来ねえっ！」

真壁は妙典に初めて上司命令ではない頼み事をされたことに気をとめた。しかし未だ理解しがたい用件に少々困惑していたのも事実である。

「…でも、倉田巡査長は何故こんな回りくどいことをなさるのですか？」

「ひとつの求愛行為よ！ …ちよつとでもあたしのこと知ってもらいたいのよお！」

倉田は腕組みをしたまま、ふくれた面でそっぽを向く。

「実地訓練その4！ …変態オタクのアキバ二丁目を攻略せよ！」

妙典の叫びに、もはやパブロフの犬と化しつつある真壁は思わず反応し集中力を高めた。

南砂町の刺殺事件については妙典の言うとおり、確かに捜査本部が大きいと感じる。その理由は未だもって分からずじまいである。今現在、担当外ではあるが、それを知りたいと思うのも刑事という職業柄であり心情だ。それは真壁とて同じであった。

「…分かりました、妙典さん。この挑戦：お受けすることにします」
その言葉を待っていましたとばかりに、妙典は真壁の肩を抱き倉田に向き直った。

「…ちゆう事だ。アキバ二丁目！ ウチの変態オタク眼鏡小僧が、てめえの挑戦を受けて立つってよ！」

妙典に背中をポンと押し出され、真壁に対して何らかの対抗心を燃やす倉田の前に一歩踏み出した。

「いいわよ、妙典さんの頼みなら…。じゃあ、行くわよ。…倉田検定」

真壁と倉田はしばし無言のまま向き合った。大きく唾を飲み込んだ倉田の口がゆっくりと開き、決戦の火蓋が切って落とされた。

「赤い彗星のシャア。…当然、知ってるわよね？ シャア・アズナブル。本名は…」

「キャスバル・レム・ダイクン！」

真壁は間髪入れずに答えを言った。それをあざ笑うかのように倉田は続ける。

「…ですが、エウーゴ時代に非合法的に名乗っていた氏名は…」

「クワトロ・バジーナ！」

「またも即答する真壁。二人の熱いバトルは、妙典にとってもはや異次元の世界の出来事の様に見える。」

「…ですが、ジオン公国を追われた幼少期に改名した名前は何でしょう?」

警視庁本部庁舎六階の廊下にピンと張り詰めた空気が充満し、しばしの静寂が訪れる。余裕の表情を浮かべる倉田に対し、真壁は無表情そのものだった。その静寂を破るかのように真壁はニヤリと口元を緩め、ゆっくりと声を発した。

「…エドワウ・マス。ジンバ・ラルにかばわれて養子入りし、改名した名前はエドワウ・マスです」

「またも沈黙が訪れ、行き交う職員を余所に真壁と倉田の二人の間だけが止まったかの様であった。」

「…負けたわ。正解よ」

口元を緩め脱帽した倉田は妙典と真壁に負けを認めた。

「いいわ。何でも聞いて。…でも全部答えられるかどうかは分かりませんが」

「じゃあ、遠慮なく聞かせてもらおうとするぜ!」

手柄をあげた真壁を差し置き、妙典が身を乗り出し言った。

「単刀直入に言わせてもらおう。たかが集合住宅の刺殺事件のわりにや、捜査本部デカくねえか?」

倉田は困惑した表情を見せたが、辺りを見回し言葉を選び、少々小声で語り始めた。

「流石は妙典さんね。…害者はIT企業の社長。とは言っても社員はたった五名の零細企業。ここのとこ厳しかったみたいよ、経営状態。…所轄は取引先とか社員とのトラブルを疑ったわ。でもね、仏さんの状況が不自然というか、あまりにも手際が良かったの。背面から心臓を一突き。それも肋骨にかすりもしない横向きでね。傷の深さから言っておそらく凶器はブートナイフ。…はっきり言ってみろね」

話を聞き終え、口を尖らせ物思いに耽る妙典はゆっくりと倉田に

目を向け、呟いた。

「ひよつとして、“竜のうろこ”か？」

「さあ、それはどうかしらね？」

倉田は妙典の問いをはぐらかした。

「ふーん。参考になつたぜ、アキバ二丁目。：まあ、今んとこ俺様には関係ねえがな」

ジーンズのポケットに両手を突っ込んだ妙典は踵を返し、そそくさと大部屋へと歩を進めた。取り残された真壁は倉田に一言礼を言う。

「無理なお願いをきいて頂き、ありがとうございます」

「あつ！　そうそう真壁くんとか言つたわね。：あなた、相当なガンオタね。そこだけは気に入つたわ。妙典さんのことよろしくね

あの人すぐ無茶するから」

了解しましたと軽く頭を下げた真壁は上目で倉田に問いかけた。

「あのう、倉田巡査長の好きなミュージシャンで、誰でしょうか？」

真壁の思いがけない質問に倉田は少々驚きの表情を見せたが、妖しい笑顔で答えた。

「そうねえ、月島きらりちゃんかなあ。モー娘の方じゃなくて、月島きらり！」

捜査一課はロック度が高いと聞いてはいたが、そうでない人間もいると知り真壁は少し気分が楽になった。

半日ぶりに妙典と真壁は大部屋に戻ってきた。日の暮れた大部屋は更に閑散としており、一番奥の13係の島机に佇む人物は否が応でも目に付く。パソコンの前に鎮座する馬場係長の傍らに雷門管理官の直立する姿も見受けられる。何かを談笑している穏やかな雰囲気のようなようだった。妙典と真壁の足音に気付いた馬場と雷門は二人に振り向いた。

「先程は大変失礼致しました。今後このような事がないよう慎んで行動致します」

真壁は雷門管理官に深々と頭を下げた。

「真壁巡查部長、あれも自分の仕事のうちです。誰も痛い目に会わず良かったと思っっています。痛い目に会ったのは、飛び降りた妙典だけですかね？」

雷門は落ち着いた静かな口調で真壁を諭すように言った。

「せっかく二人分の始末書を用意してたのに徒労に終わりましたよ。ずり下がった老眼鏡の奥から覗く馬場の優しい目が全てを物語っているかの様であつた。

「係長、着任早々ご迷惑をおかけしました。申し訳ありません」

続いて馬場にも詫びを入れる真壁は頭を垂れた。

「さつきから真壁君だけがペコペコしていますよ。妙典君にも見習つて欲しいものです」

人の良さそうな馬場の笑顔が妙典にも向けられた。

「係長、まさか俺様がそんな殊勝な奴だと思ってるんすか？」

相変わらずジーンズのポケットに両手を突っ込み、反り立つ妙典はふてぶてしく言った。

「全然思っっていますよ。付き合いは長いですからね」

馬場は何食わぬ笑顔で妙典に言い返す。馬場と妙典が長年築いてきた信頼関係が見て取れる光景だと真壁は思った。

「ところで二人に頼みがあるのですが、構いませんか？」

和んだ雰囲気の中、雷門管理官は妙典と真壁にあらたまって向き直り告げる。

「北参道警察署より、代々木近辺での連続不審火の件で応援要請が来ています。帰ってきたところ早々ですが、今すぐ向かって下さい。捜査会議は二十時からです」

雷門は妙典の顔を見据え念を押すように言った。妙典は小さくあくびをしつつ答える。

「了解しましたあ…。今すぐ向かいますう…」

ふんぞり返った妙典は踵を返し大部屋の扉へ歩を向けた。真壁も遅れまいと続いた。

その二人組の後姿を眺める雷門は馬場に向かって呟いた。

「最近の若い者は適応能力が高いようです。…あの二人、早くも息が合ってきたように思います」

「…まったく、羨ましいかぎりです」

馬場の笑顔は小さく頷いた。

青いGT-Rに乗り込む妙典と真壁。真壁は運転担当に一任されたようである。シートベルトを締め、真壁はシート脇の赤いエンジンスタートボタンを押した。

「…妙典さん。妙典さんの言っていたことは本当でした」

持ち替えた左手をステアリングに載せ、真壁は呟く。

「ん？ 何の話だあ？」

くぐもった声で妙典は尋ねる。

「…確かにジャングルです。妙典さんのおっしゃる通り…」

「ちっ！ 出世組のくせにトロいなあ、お前え！」

舌打ちした妙典はサイドウィンドウに顔を向け、相変わらずの皮肉を吐いた。

「でも、少し違っていました」

意味深げな口調の真壁に妙典は振り向いた。

「…何が違うってんだあ、ああ？」

真壁はステアリングに一瞬向けた額を上げ、静かに言った。

「ジャングルなのは、妙典さんの方です。今日一日、ご一緒に痛感しました」

「真壁え。お前、大場さんに何か言われたら？」

「ええ、まあ…」

「どうせ、アイツといったら気の休まる暇なんかねえ！ …みたいな事だろ？」

「そんな粗暴な言い方ではありませんでしたが、まあそんなところですよ」

妙典は口を尖らせ、地下駐車場の薄汚れた天井を眺めた。

「みんな、そう言うぜ。お前といると疲れるってな。お前もそう思うだろ？」

真壁は妙典の言葉を黙って聞いていた。おとなしく天井を見上げていた妙典はグローブボックスを漁り、一枚のCDを手に取った。

「じゃ、てめえにぴったりなバラード・ナンバーお聴かせするぜ！」
妙典は虹色に輝くCDをダッシュボードに突っ込み、五曲目までスキップさせた。

“1…2…、1…2…3…4…”とカウントする微かな男の音が始まり、静かなアコースティック・ギターの音色が流れだした。そのギターの色に重なるように感傷的な口笛が鳴る。やがて声を押し殺したようなヴォーカルが耳に届く。

「…では、自称“ガنز”好きの変態オタク眼鏡小僧くんに贈ります。…曲は“Patience”」

お世辞にも上手いとはいえない、曲名を紹介するDJのような言い回しで妙典は言った。

“Patience”。意味は忍耐。真壁にとって今日一日最も必要としたことであった。それを知ってか、忍耐を強いさせた張本人の妙典はこの曲を選んだ。妙典の地味な皮肉かとも思ったが、いたわりの気持ちも感じ取れた。…気がした。

青いGT-Rはヘッドライトを点し、静かに走り始めた。

Fight Fire With Fire (1)

夜の外苑西通りを快走する青いGT-Rの車内には、真壁にとつて比較的耳触りのよい曲が流れていた。オルゴール音に重なり外国人女性がたどたどしい日本語で“さくら さくら”を囁くように歌い始めたかと思うと、つみさくエレキギターが雰囲気を一変させるかといって不快という訳ではなくノリの良いギター・サウンドに真壁は身を任せた。

「妙典さん、珍しい始まり方ですね？ 何と言う曲なのでしょう？」

「これかあ？ “Tokyo Road”」

「ああ！？ だから“さくら さくら”で始まるんですね。…ボン・ジョヴィってかなりの日本通だと聞いたことがあります」

「日本通つてもんじゃねえよ！ 日本のお陰で今のあいつらはいるようなもんだからよあ…」

「そうなんですか？」

妙典は一瞬ギョツと真壁に顔を向けパッセンジャーシートに深く寄りかかった。講釈タイム始まりの合図である。

「当時はLAメタル全盛期でロック・シーンはすっかり西海岸に移つちまった。…で、あいつらは東海岸のニュージャージー出身。ハドソン川を挟んだニューヨークの隣の街だ。デモテープを散々つばらレコード会社に送ったが全然相手にしてもらえなかった」

「へえ、今からは想像もつかない扱いですね」

「みんなそうさ。金もねえ、人もいねえ、時間だけはあるって時さ。まだリッチー・サンボラが加入する前だから、ギターはジョンが弾いていた。…で、そのデモテープを九州のラジオ局の奴が入手して番組で流したんだ」

真壁は黙って妙典の講釈に耳を傾けた。十時間前なら押し付けられるような気分だけでいい感じはしなかったが、今となっては慣

れたもので気にもならなくなり始めていた。妙典も機嫌よくまくし立てる。

「…そしたらよあ、もの凄い反響ですよ。ラジオ局の電話は鳴りっぱなしだったそうさ。そのうち“こないいいバンドを放っておくのはもったいない”という有志が署名活動をおつ始めて、九州はおるか関西あたりまで運動が広がっていった」

「まだ、インターネットがなかった時代ですもんね」

真壁は妙典の講釈に口元を緩め、神宮前三丁目の交差点でハンドルを左にきった。

「…それが日本のレコード会社の耳に入り、音を聴いてみたら惚れ込んでしまつて提携先のアメリカ本社にデモテープを逆に送りつけたそうさ。…で、奴らはメジャー契約が決まった。デビュー当時のキヤッチコピーは“ニュージャージーから現れたヘビーメタルの新星”だったけかな？」

「ふーん、それって凄い話ですよ。逆輸入されたデモテープでデビューが決まるなんて」

「だから、あいつらは今でも日本への感謝を忘れねえ。…こんな話もあるぜ。西武球場でライブがあった時、取材やら何やらで時間が押して仕方なく新宿から西武線で西武球場まで行くことにしたんだが、ボン・ジヨヴィのライブを観に行く客でこつた返す電車に乗り合わせちまつて、車内で即興ライブまでやってるからなあ」

「それは世界的スターにあるまじき行為じゃないですか？ …今なら迷惑条例違反で逮捕ですね」

「…そうだよなあ。今思えばいい時代だったのかもなあ」

「もしその場に妙典さんが居合わせたら、現行犯逮捕しますか？」

妙典の様子を伺うように真壁は問いかけた。束の間の沈黙があり妙典は一転しておとなしい口調で呟いた。

「…多分、一緒になつて騒いでただろうなあ」

一呼吸おいて鼻を鳴らし真壁は神妙な面持ちで言った。

「妙典さんらしいと思います。…ところで何故我々なのでしょう？」

… 火災犯捜査係ではなく、何故妙典さんと自分が応援に行くのでしょうか？」

「… ほう、流石は優秀な変態オタク眼鏡小僧。いいところに気付いた！」

妙典は悪戯っぽく手を叩いて褒め称え、真壁は呆れたとばかりに首を傾げはしたが、心ばかりの賞賛を甘んじて受けることにした。

神宮前一丁目交差点を右折する為、一旦停車し直進車が行過ぎるのを待つ間に次の曲に変わった。鋭くつんざくゆっくりとしたギター音が鳴り短いフレーズのキーボードの後、ヴォーカルが入る。それと同時に直進車の切れ目を縫って青いGT-Rは交差点を右折し明治通りに進入した。

「そこなんだよなあ。何か嫌な予感しねえか？ … 雷門さん、絶対何か隠してんぞお！」

パッセンジャーシートに体を預ける妙典を他所に真壁は問いかけた。

「… ところで、この曲かっこいいですね。何て言う曲ですか？」

「ん？ … Hardest Part Is The Night」かな…」

思わぬ問いを投げかけられた妙典は少々驚きながらも落ち着いて答えた。

「… 訳せば“大難は夜にあり”ですか。… 嫌な予感がしますね」

真壁は目を細め左手で眼鏡のブリッジを押し上げアクセルを踏み込んだ。青いGT-Rは、けやき並木が続く夜の明治通りを新宿方面に向けて、V6ツインターボの奏でるエンジン音と共に走り去った。

有数のビジネス街の西新宿と「若者の街」原宿の真ん中に位置する北参道署は今年三月に新庁舎に移転したばかりである。地上十五階・地下二階建てで屋上には太陽光発電パネルがあり、三百人の収容が可能な留置所も設置されている。

真壁はパーキングサインの後ろの立ち番に警察手帳を見せ、地下駐車場へと案内された。本庁に比べると随分狭く感じる駐車場ではあるが、いささか古びた本庁庁舎とは比較にならない程、綺麗な駐車場である。GT-Rのエンジンを止めると同時にボン・ジョヴィの奏でる音も止み、妙典と真壁の二人は車外に出た。

妙典は両腕を大きく広げ大あくびをし、辺りを見渡すことなく言った。

「しかし、新庁舎だけあってキレイだなあ。おい」

「そうですね。警視庁では一番新しい庁舎ですからね。設備も整っていますよ」

二人は緑色に灯る非常灯を指し横並びで歩き始めた。

「…んじゃあ、食堂もきつと美味いんだろうなあ？」

「食堂も充実しているでしょうけど、もっといい所がありますよ。」

…妙典さん

真壁は意味深げに妙典に言った。

「何だよあ？ いい所って？」

あくびの涙が渴ききらない妙典は非常灯を見据えたまま真壁に問いかけた。すると真壁は足を止め、床を指差し答えた。

「射場施設です。地下二階にありますよ、8的ほど」

妙典も足を止め真壁に向き直った。

「まだ撃ち足らねえってのか？ 変態オタク眼鏡小僧…」

「いえ、そういう訳じゃ…。まだ時間もありませんし、何ならリベンジでもと思ってます…」

妙典は苦虫を噛み潰した顔を見せた後、ニヤリと笑う。

「ざーんねんっ！ …俺様、年間発射実弾数使い果たしちゃった」

「ええっ！？ 妙典さん、今朝の射撃訓練で50発全部使っちゃったんですか？」

「ああ、今日の訓練に備えて先週45発撃ってきたからなあ」

妙典は悪びれることなく、驚く真壁に告げた。二人は再び緑色の非常灯を指し、無言で歩き始めた。ポケットに両手を突っ込んで

口笛を吹き歩く妙典に唾然とした真壁は恐る恐る問いかけた。

「妙典さん。…ところで、どうだったんですか？ …着弾数は？」

口笛が止み、妙典は緑色の非常灯を見据えたまま答えた。

「…当たってたら45発も撃たねえわな」

Fight Fire With Fire (2)

大部屋ではなくオープンフロアと呼びたくなるほど綺麗で新しく、清潔感が漂うも閑散とする部屋の片隅にホワイトボードがある。そのホワイトボードを始点に一見場違いとも思える男達がコの字を描くように立っていた。

「…こちら本庁から応援に来て頂いた妙典さんと真壁さん」

一階ロビーで二人を出迎えてくれた河口警部補の紹介に一礼する真壁とポケットに手を突っ込み反り立つ妙典。

「で、ウチの…」

「石田巡査部長です」

「木下巡査長です」

太い手を差し出す河口に合わせ大柄ながらも穏やかそうな石田と真壁より若干年長と思しき物静かそうな木下も軽く会釈をした。一通りの挨拶が終わり手近にあるデスク・チェアを引きずり出し、腕組みをして妙典はドカンと反り座った。そんな妙典に一瞬目を向けた真壁ではあったが、何事もなかったかのように河口に顔を戻した。

「… たった三人ですか？」

真壁は少々面食らった心境で河口に尋ねた。河口も額を親指でかきながら心苦しそうに答える。

「ええ、そうなんです。…クスリ関係の大ヤマで皆持つてかれちまつて、三人で地取りやらガサやつとるんですが、なかなか。…で応援に来てもらった次第です」

申し訳なさ気に話す河口の日焼けした顔に捜査の困難さを真壁は感じ取った。

「北参道署はそれほど大掛かりな薬物捜査に携わっているのですか？」

明らかに年下の真壁ではあるが、年長者の河口を諭すように問う

た。

「…何でも大物タレントが絡んでいるらしく、本庁と宮益坂署との合同で追っかけとるんですわ」

なるほどとばかりに真壁は頷く。

「…で、連続不審火と伺ったのですが」

河口の困惑した表情を見守り、静かに本題に切り替えた真壁の横で妙典は相変わらず腕を組み黙って座っていた。

「ええ、そうなんです」

河口の口癖とも思えるその一言でたった五人の小さな捜査会議が始まりを告げた。

「3月13日、27日を皮切りに先週までに七件の不審火が発生しています。…幸いボヤ程度で済んでいて、負傷者も出てはいないんですが…」

ホワイトボードに貼られたカレンダーと犯行地点を指す地図の赤い印を指差し河口は語り始めた。

「…毎週金曜日なんですな」

真壁はカレンダーの赤丸を目で追いつ間髪入れずに言った。

「ええ、そうなんです。…犯行は毎週金曜の夜8時から9時ごろ、代々木一丁目と二丁目の雑居ビルのゴミ集積所で起こつとります」

「…ということは次の犯行は明日、5月8日の金曜日ということになりますよね？」

真壁はホワイトボードのカレンダーから目を逸らす事なく眼鏡のブリッジを押し上げた。

「ええ、そうなんです。真壁さん…」

河口もホワイトボードのカレンダーを見やり答えた。

「すみません！ 大変申し上げ難い事なのですが、山手線の内側と外側とでは防犯カメラの設置状況が異なっております、代々木一丁目・二丁目界隈の建物は古く設備が整っております。ゲソ痕もゴミ集積所ということもありまして、特定には至りませんでした」

一瞬空いた間に割り込んだ木下が悪材料を告げた。好材料でなく

悪材料を最初に切り出した木下に本気具合を感じた真壁は切り返す。「他に何か変わったことはありませんでしたか？」

小さな捜査会議の主導権が瞬く間に真壁に移った。暫しの沈黙を破る様に大柄な石田が口を開く。

「C-4の燃えカスが全現場で見つかっております」

「C-4!？ プラスチック爆弾ですか？」

真壁は驚きの声をあげ、妙典は目を閉じ腕組みをしたまま聞き込んでいた。

「手で引きちぎったと思われるC-4から指紋採取は出来たのですが、残念ながら該当者は浮かびませんでした」

石田は淡々と現状を報告した。

「指紋照合で合致者が出なかったという事ですよ。…ということはない」

「前がないと言うことです。…しかし、C-4なんて、そう安々と素人の手に入る物じゃないんですがね」

真壁の言葉に連ねるように河口は言った。

「…しかし、変ですよ。プラスチック爆弾を何故燃やすのですか？ ……爆弾なら爆破すると思われのですが？ ……しかも引きちぎっているというのが腑に落ちません」

真壁は椅子に踏ん反り返り目を閉じる妙典を横目に落ち着いたら口調を貫いた。

「さあ、そこは何とも…」

首を傾げ困り果てた面持ちの石田から河口に目を移し真壁は続けた。

「それに後もうひとつ。…犯行は毎週金曜に起こっていますが、3月20日だけ犯行に及んでいない理由が理解できません」

「そりゃ、国民の休日だからじゃねえのか？ ……世間一般様は春分の日だぜ！」

目を閉じ腕組みをしたまま足を投げ出す妙典は面倒くさげな口調で真壁に言い放った。居眠りでもしているのかと真壁は心配してい

だが、捜査状況を把握している妙典にいささか安堵感を覚え、残る4人に告げる。

「人数も少ない上、時間として24時間しかありません。皆さん出来る限りのことをして下さい。それと情報の一元化ということで必ず河口警部補への報告を怠らないよう重ねてお願い致します。我々も今から現場の再検証を行います」

小さな捜査会議の終了を告げた真壁の一礼に呼応するかの如く、木下ははつきりとした口調で言う。

「消防の方には既に巡回要請を出しております。再度ルートの確認を取ります」

「鑑識課指紋センターにも再照合の旨、手配要請してみます」

そう言い残した石田は大きな体を揺り動かしオープンフロアを後にする。木下も後に続いた。

「若いのに優秀でらっしゃいますな。ご協力感謝します」

軽く会釈した河口の目線が椅子に腰掛け目を瞑る妙典に移った事を認識した真壁は耳元で諭す様に囁いた。

「大丈夫です。最後には頼りになる人です。…自分が保障します」

それを耳にした妙典は片目を大きく開き、真壁に何かを訴えんばかりに凝視した。

若者の街・原宿に妙典と真壁はいた。ゴールデンウィークという事もあるせいか午後八時半を回ったというのに人通りは減るどころが増えるばかりである。混雑する人通りの流れに乗って二人は夜の原宿を歩いていた。

「…今から現場検証ですかい？ 変態オタク眼鏡小僧さんよあ…」

「まあ、時間はありませんからね。…嫌ならお付き合い頂かなくて結構ですよ」

「へっ！ 一応俺様にも監督責任つてもんがある。…お前さんが変態行為に及ばないかどうかのな」

「妙典さんのご厚意に感謝致します」

つい十時間前なら、けして吐けなかつた皮肉を真壁は吐いた。それを聞いた妙典も口元を緩め、相も変わらずジーンズのポケットに両手を突っ込んだ格好で行過ぎる人波に目をやった。

「でも、その前に買いたい物があるのですが…」

真壁は妙典を呼び止めた。

「ん？ ねえちゃんへのプレゼントかあ？ ……色男」

妙典も足を止め、振り向き言った。

「残念ながら…着替えです」

「おいおい！ お色直してもするつもりかあ？ ……二・三日ならパンツ裏返して履きゃあ問題ねえーぞおー」

「いえ、そもいきませんし…」

そう言い残した真壁は煌びやかな照明が灯るショッピングモールの中に消えていった。妙典は女の買いた嫌々付き合わされる男の様にガードレールに腰掛け手持ち無沙汰に夜空を見上げた。

今日はいい天気だ。薄汚れた空の筈なのに星がくつきりと見える。

妙典は携帯を取り出し、天気予報を確認した。

「やっぱ、いい天気じゃねえーか」

まったく意味を成さない行動で時間を潰していると、さほど大きくはない紙袋を提げた真壁が急ぎ足で戻ってきた。

「妙典さん、すいません。お待たせしました」

「気にすんな。こう見えて俺様、気は長げえー」

けしてご機嫌とは言えない妙典は携帯を閉じガードレールから立ち上がり歩き始めた。

「…で、何買ってきたんだあ？ ……お洒落番長」

「ま、下着とワイシャツ…後は洗面具にネクタイですかね」

「真壁え。お前、修学旅行とかで無駄に荷物多かつたタイプだろ？」
「凶星をつかれた真壁は言葉を失い苦笑したものの言い返した。

「妙典さんは、よろしいのですか？ ……着替え。今日は帰れませんよ」

「はあ！？ そんなの俺様が気にするわけねえだろあ？」

「妙典さんは気にしなくても、周りの人間は気にするかもしれない。…少なからず自分は」

舌打ちした妙典は顎をしゃくって向きを変えた。

「こつちの方が近道だろ？ …現場」

両手をポケットに突っ込んだ妙典と紙袋を提げる真壁は路地裏に歩を向けた。表通りとは違い裏通りに入った途端、小さな古着屋が目につく。妙典にとっては全く縁のないSFの様な世界が広がっていた。奇妙な二人組みが混みあう狭い路地を闊歩していると、妙典は不意に足を止めた。不思議に思った真壁は妙典を見やる。

「…どうしました？ 妙典さん」

これといった特徴もなく、何の変哲もない古着屋の前で妙典は無言で立ち止まった。

「真壁。ちよつと待ってるや」

場違いとさえ思える古着屋に妙典は足早に入っていった。少々面食らった感じの男性店員と何やら話をしている。すると耳にピアスをした店員はハンガーに架かったTシャツを手に取り妙典に見せた。妙典は納得した様子で五百円硬貨を指で弾き渡し、店員は紙袋にTシャツを折り畳み詰め込んだ。満足げに古着屋から出てきた妙典は開口一番に大声を張り上げる。

「あの店、馬鹿だよなあ。こんな掘り出し物、滅多にねえぞお！」

状況が把握できていない真壁は妙典に尋ねる。

「掘り出し物って、何だったのですか？」

「これだよ。これ！」

妙典は紙袋から黒いTシャツを取り出し、自慢げに真壁に見せつけた。

「スラッシュメタル四天王の一角、メタリカ！ “ Ride The Lightning Fire”のTシャツですぜえ！ …背中には“ Fight Fire With Fire”って入ってるし、ネットオークションにでも出しゃあ、スゲー値がつくのになあ」

真壁は半ば呆れた口調で妙典に言った。

「火でもって火を征す」：今回の事件に実にマッチしたTシャツですね。…ひよつとして着替え用ですか？」

妙典は真壁を睨みつけ、語気を強め言い放つ。

「コレクシヨン用に決まってるんだろお！」

妙典はさも大事そうにTシャツをそそくさと袋に詰め直し、歩き始めた。真壁も分かりましたとばかりに連なつて歩を進める。紙袋を提げた奇妙な二人組が人通りの多い狭い路地を悠長に歩み行く。突然、真壁は何かを思い出したかのように妙典に顔を向けた。

「そういえば：妙典さんの携帯番号、まだ聞いていませんでした」

妙典もハツと真壁に顔を向け言った。

「えっ！？ そうだっけ？ …野郎の携帯番号聞いたところであんまし嬉しくはないんだがなあ…」

「そうはいきません。職務で必要ですから…。赤外線で送ってください」

奇妙な二人組は混みあう路地で足を止め、お互いの携帯を向かい合わせた。しかし何の反応もない。

「…ひよつとして受信にしていますか？ 妙典さん」

「ああっ！？ お前が送ってくんじゃねえの？ 言った方から送ってくるのが日本人的礼儀だろがあ！」

全くもって意味不明な言い訳をする妙典に真壁は怒る気も沸かなかった。

「ひよつとして妙典さん、送信の仕方知らないんじゃないですか？

…わかりました。こちらから送信します」

流石に真壁の言うことが正しかったのか、妙典は携帯を構えたまま無言で立っていた。

「おうっ！ 来た、来た！ …ここへ電話とメールすりゃあ、いいんだよなあ？」

「…ええ、是非そうしてください」

無駄なパケット量を使う羽目になった真壁は赤外線モードを解除し待受け画面に戻る。真壁の携帯の電話呼び出し音が一度鳴り、続

けてメール着信音が鳴った。妙典からの空メールを一目見て真壁は問うた。

「妙典さんのメルアド“megadethhangar-18”となってますが、またヘビーメタル関係の何かなのでしょうか？」

「正解！：スラシユメタル四天王・メガデスの名曲“Hangar 18”ですぜ！」

鼻を鳴らし相変わらずと言った面持ちの真壁に今度は妙典が大声を上げた。

「おいっ！ 変態オタク眼鏡小僧の真壁え。てめえのメルアドこそ、何なんだこりゃ！？」 “pm056330279a”だあ？：まったく意味分からんぞお！」

真壁は眼鏡のブリッジを緩やかに押し上げ静かな口調で言った。

「“真紅の稲妻”ジョニー・ライデン少佐の軍籍番号です」

ブロック塀に立掛けられたふたつの紙袋が夜風に揺れていた。紙袋の袂で妙典は相変わらずポケットに両手を突っ込み左足重心で立っている。そんな妙典を余所に真壁は雑居ビルに設置されたゴミ集積ボックスを携帯電話のカメラに収めていた。正面から、横側から、斜めから、裏側に至るまでシャッターを切る度に一瞬の光と共にビームライフルの射撃音が鳴り響いた。

「おいしい！ 変態オタク眼鏡小僧の真壁え。もういいだろお。…いい加減、一年戦争終わっちまうぞお！」

苛立つ表情の妙典は皮肉じみた苦言を吐いたが、真壁は携帯を閉じることなく入居プレートに赴いた。

「妙典さん、まだです。…まだルウム戦役といった段階です。コロニーも落ちていません」

真壁は澄ました顔で言い放ち、入居プレートの前でビームライフルの射撃音を鳴らした。妙典は呆れ果て雑居ビルを見上げる。流星にこの時間にもなると、どのフロアも灯りが消えており目撃情報がないのも頷ける。

「妙典さん、見つけました。…ある関連性を見つけました」

真壁は携帯をパタンと閉じ妙典に顔を向けた。

「はあ？ 関連性だあ？ …まさかニュータイプだから、分かったとか言うなよなあ」

妙典は思いつく限りのガンダム用語で応対し少々頭がくらくらしていた。真壁は上着の内ポケットに携帯をしまい紙袋を取りに戻る。妙典に紙袋を差し出し、雑居ビルに顔を向け言った。

「入居する会社です。犯行現場七件の雑居ビルには、ある共通した業種の会社が入居しています」

「ほおー、聞かせてもらおうじゃねえか。…優秀な準キャリアさんよお」

妙典は紙袋を奪い取り、真壁は条件反射的に顔を戻したものの慌てる様子はなかった。

「映像会社です。犯行が行われた雑居ビル全てに映像会社が入居しています。他に一致する業種はありませんでした」

「ふーん。おめえ、スゲーなー。だから入居プレート見てたのかよ。ま、俺様にそんな頭はないわなあ」

真壁は感嘆する声に得意になるところか、現場に居るだけでこれといって何もしようとしない妙典に少々落胆していた。紙袋を小脇に抱えポケットに両手をつまみ込む妙典は路地に向かい踵を返す。

「あと…建物に誰もいない時間帯を知ってたつちゅう可能性も高いわなあ…」

真壁はハッと顔を上げ無造作に伸びた妙典の襟足に目をやった。妙典は何もしていなかったわけではない。真壁が見落としていた現場状況を見逃しはしなかった。相変わらず何を考えているのか分からない人物だと真壁は思い知らされ耳を傾ける。

「…犯行は短時間で行われている。それも最初から犯行現場を選んだ様なフシだ。だから目撃情報がない。業界を知らん人間からすりゃ、映像関係とかメディア関係って夜働いて昼寝るもんだと思うわな。普通…」

真壁は眉をひそめ妙典の背中に問いかけた。

「…ということは、妙典さん」

「…同業関係者の可能性もあるつちゅう事だわな」

雑居ビルの薄暗く手狭な駐車場に二人は暫し立ち尽くした。するとヘッドライトが二人を照らしたし、一台のワゴン車が停車する。運転席からキャップを後ろ向きに被った小太りの男が飛び出し、スライドドアから撮影機材を抱え雑居ビルに向かい始めた。妙典は小走りで近寄り、後ろ向きキャップの男を呼び止める。

「わりい！ ちよつとすまねえ！」

男は面倒くさそうに顔を向けた。

「…何？ あんたら？」

「一応、こういうもんだけど。…この人だよな？」

妙典と追いついた真壁が警察手帳を広げて見せると男は撮影機材を置き二人に向き直った。

「ああ、警察の人？ …先週の放火のことでしょ？」

少々横柄な口調ではあるが、協力的な人間のようにであった。

「まあ、そうなんだが…いつもこの時間に戻ってんのか？」

妙典もいつも通りの横柄な口調で言った。

「いやあ、いつもはもっと早いよ。日没までにはロケ終わらさない
と無駄な照明費とか、かかっちゃうし…」

「…で、何で今日はこの時間なんだ？」

意味もなく凄みをきかせ妙典は言った。

「明日の早朝ロケ、急にキャンセルになっちゃってさあ。機材戻し
に来たわけよ…」

「機材を戻されるなら明日でも構わないのでは？」

続けて真壁も問うた。男は少々言い難そうに答える。

「…あのねえ、最近不景気さあ。無駄な電気代節約したいのよね。
なんせハイビジョン対応になったお陰でディスクサーバーの容量も
増えちゃってさあ、テラだよ、テラ。…だから休みの日はサーバー
落しとかないと、電気代も馬鹿にならないのよねえ」

「それは他社さんでも同じなのでしょうか？」

「今はどこもそんな感じ。放送業界全体が冷え込んだじゃって、昔み
たいに派手にやってらんないわけよ」

吐き捨てるように男は言った。

「ご協力感謝します」

一礼する真壁を見届けた男は機材を抱え上げ雑居ビルに消えてい
った。

「なかなか参考になる、ナイスな話だったな…」

妙典はポツリと呟いた。横に立つ真壁も頷く。

「…そうですね。シャアなら“早々に木馬に出会うか。私は運がい
い”とも言うでしょうね」

北参道署を目指し紙袋を提げた二人組がすっかり暗くなった路地を歩いていった。まばらになったとはいえ、それでも人通りは絶えない。不夜城と呼ばれるのも納得のいく話だ。

「やっぱ、雷門さんにはハメられたなあ……」

「……プラスチック爆弾のことですか？」

「おお！ そうよ。ただのアカネコ狩りかと思ったら、C-4なんて物騒なもんが出てきやがった」

アカネコとは警察の隠語で連続放火魔のことを言う。アカイヌやアカウマとも言うが放火犯や放火事件の総称的な意味であり、連続放火魔となるとアカネコと呼称されることが多い。どちらかと言うと犬派の真壁はあまり気にも留めていないが、猫好きからするとさぞ不愉快であろうと思った。

「しかし、さっぱり分かりませんか？ 犯人の意図が……」

流石の真壁もプラスチック爆弾を燃やす犯人の意図が読めずにくた。

「……C-4、所謂プラスチック爆弾は粘土のような柔軟性があり、必要な量だけを切り取って使用することが出来る便利な爆弾です。信管が無いと絶対に爆発しませんし、運搬する際も非常に安全です。……信管さえなければ金属探知機やX線にも反応しません。しかも無臭ときています。テロリストが好むのもよく分かる話ですよね」

真壁は頭の中を整理する為、自分に言い聞かせるかのように呟いた。

「燃やしちまえば、ただの燃焼物だもんなあ。よく出来てるぜ……」

その呟きに妙典も反応した。

「犯人はテロが目的だとお考えですか？ 妙典さん」

妙典は口を紡ぎ暫し考え込んだ末に答えた。

「……多分違うなあ。C-4を燃やすってことは信管持ってねえってことだろ？ ……テロリストじゃねえわな」

「……処分に困っての犯行という線もありということですか？」

「ま、そういうこと。…しかし真壁よお、お前腹減らねえ？」

真壁は妙典に言われるまで気付かなかった。思えば昼に術科センターの食堂でカレーを食べて以来、何も口にしていなかった。

「そういえば何も食べていませんね。…もうこの時間だと牛丼屋ぐらいしか開いてないのではないでしょうか」

街道に出た二人は疑心感と空腹感に苛まれ歩幅も多少狭くなっていた。街道脇に明るい照明の飲食店が目に入る。二人は目を凝らし看板を見た。「レッド・ホット・チリ・ペッパー」との表記が確認できる。

「妙典さん、カレー屋さんなのですが。お昼もカレーライス食べましたよね？」

空腹感に耐えかねたのか歩を早める妙典は更に看板に近寄り凝視した末、真壁に言った。

「真壁、安心しろお。“インド風本格カレーライス”と書いてある。カレーライスじゃねえ！」

Fight Fire With Fire (4)

大あくびの妙典が眠気眼と共に宿直室から出てきた。まだ顔も洗っていない様子で若干伸びた髭と、ボサついた頭髮が目についた。

「おはようございます。お迎えにありがとうございました」

既にダークスーツを着用し身なりを整えた真壁が扉の向かいの窓に沿って、きおつけの姿勢で立っていた。

「真壁え、お前早ええなあ……」

ポケットに手を突っ込みよろよろと歩き出す妙典に合わせて真壁も歩を進めた。

「……お着替えになられたのですね？」

「ああ！？ ……これかあ？」

昨夜、古着屋で買った黒Tシャツを右手で軽く引つ張り妙典は答えた。

「流石に“ガンズ”のは汗臭くてよお。しょうがねえから、コレクシヨンのメタリカを泣く泣く着たわけだ」

「それはお気の毒に、昨日食べたカレーの匂いはしませんでしたか？」

「……加齢臭とでも言いたいのかあ？」

妙典は真壁を横目で睨み、口を尖らせ言った。

「いえ、そういう訳じゃ……」

真壁は妙典のつまらない駄洒落に失笑し、俯いた。

「しかし腹減ったなあ？ ……飯でも買ってくるか！」

「……そうしましょう。自分も腹ペコです」

妙典と真壁はエレベーター・ホールに向かい、北参道署の白く輝く廊下を歩いていった。

二人は北参道署の通り向かいのビジネスビルに隣接するコンビニに入った。

「ここはコンビニ近くていいよなあ。…本庁の周りにや、何にもねえ。最近になってようやく庁内にコンビニが出来たぐらいだしよあ…」

来客を知らせるベルが鳴り響くと同時に妙典はスポーツ新聞を手に取り、広げて見るまでもなく文句をたれた。

「…ったく、相変わらず石川にやあ…やられっ放しだぜえ。結局、桜井のホームランだけでもんなあ。未だ久保に勝ち星は付かねえわ、ガイエルひとりにやられちまうし…ダメ虎まっしぐら…」

そこまで試合内容を知っていて文句をたれるのなら、新聞を買う必要などないだろうと真壁は思ったが、黙って聞き流すことにした。きつと、阪神ファンの多くはこうなのだろう。

「昨日、現場検証なんか行かずに神宮行ってりや、勝ってたかもな。せっかく近くなんだしよあ…」

真壁は思った。たとえチームが勝てなくてもこういう心理を持つファンが多いから人気不衰えぬ。時には愛情余って暴走することもあるが、それはサッカーのサポーターとて同じ事で相通じるものを感じる。正確にはファンというよりもサポーターに近い。まさにチームと一丸になって戦っているのだ。

真壁は手に持つチルドカップコーヒーのラテと明太子パスタ、サラダをレジカウンターに置いた。バイトのキャッシャーがバーコード機ではじき出した料金を携帯の電子マネーで支払う。電子レンジから取り出された明太子パスタとは別にもらったコーヒーとサラダの入るビニール袋を受け取った。レシートをカウンター下のくずかごに屈み入れ、邪魔にならないよう出入口の袂で妙典を待つ。

少し遅れて妙典はレジカウンターにやって来た。新聞と缶コーヒーと弁当らしき物を置き何か番号を言っている。おそらく煙草であろうと真壁は思った。レンジで温められた弁当の袋を受け取り、真壁の元へやってきた。何だかスパイスの効いたいい香りがする。

「妙典さん、弁当何を買われたのですか？」

妙典は弁当の入ったレジ袋を自慢げに広げて見せた。

「特製大盛りカレー丼」

「妙典さん！…またカレーですか！？」

「目覚ましにはちょうどいいいな。腹持ちもいい。…ま、安心しろお。カレーライスじゃねえ。カレー丼だあ！」

「昨日、真壁さんから頂いた携帯の画像から作成したのが、一枚目の犯行現場の雑居ビルに入居する映像会社の一覧です」

木下の赤く腫れた目が遅くまで作業をしていたことを物語っていた。その疲れを感じさせない、はきはきとした口調で木下は説明を続ける。

「…で、二枚目以降がホームページ等から拾ってきました各社の詳細です。尚、犯行現場七件の雑居ビル中、該当する映像会社は十二社。どこもロケ班と言われる屋外ロケーションを主に行っている会社でした」

まとめられた書類には会社商号と従業員数、所在地、電話番号、代表者名、役員名、事業許可番号の明記はもちろん取得出来る限りの役員や社員の氏名と顔写真が網羅されており、乱雑という表現は相応しくなく明確且つ整理されており木下の几帳面な性格が如実に現れている。ホワイトボードを始点に昨日同様、コの字を描く男達の中、妙典だけはデスク・チェアに踏ん反り返り書類をパラパラとめくっていた。流石に顔は洗ったらしく髭は剃られ、髪も少々整っている。

「…今朝あらためて地取りしてみたんですが、ハイビジョン対応になって以来どこも映像保存用のディスクサーバーは肥大化しており、中にはバックアップ用を含めるとペタ単位にまでなる所もあるとのことです」

大柄な石田が神妙な面持ちで真壁の目を見据え言った。

「…ペタ。ふーん、何かしらんが、かわいい響きだなあ」

デスク・チェアで足を組む妙典が茶化すように呟いた。真壁は妙典に顔を向けようとせず、石田の話に耳を傾けた。

「…どこもサーバーと空調の光熱費には頭を抱えているらしく、休日前の夜8時頃には電源を落とすところも少なくないようです」

石田の視線を外した真壁はコの字全体を見渡すように労いの言葉を述べる。

「皆さん、朝からご苦勞様です。今のところ有力な手掛かりとは言えませんが、映像業関係者が事件に関わっているという可能性は出てきました。引き続き捜査の方よろしくお願いします」

真壁がそついい終わるや否や河口が口を開いた。

「流石は真壁さん。まだ決定的とは言えませんが、たった半日でここまで捜査状況が進むとは…。我々の無能さを思い知らされました。…感謝しております」

「いえ、河口さん違います。自分は入居会社の関連性を見つけただけに過ぎません。同業者の関与に気付いたのは、妙典巡査長です」

真壁は首を軽く左右に振った後、妙典に顔を向けた。妙典はデスク・チェアに踏ん反り返り、右足の踝を左膝に載せる体勢で大きくピース・サインを突き出した。河口警部補も眉を吊り上げ、妙典を見やった。

すると突き出したピース・サインが小刻みに震えだし、余裕綽々だった妙典の顔色がみるみると青ざめだす。妙典は何かを訴えかけるような口調で真壁に言った。

「真壁。すまねえ！…腹のパトランプが回りだした。ちよっくら、駆け込み寺に行ってくるわっ！」

妙典はこれまでにない素早い動きで立ち上がり踵を返した。危機迫る妙典の背中を見守る真壁は思わず声をあげた。

「待つてください！ 妙典さん。今、何と仰いました!？」

小刻みに震える妙典は恨めしげな表情で振り向いた。

「…腹のパトランプが限界だあ。…腹がいてえんだよあ！」

妙典の情けない呟きに何かを気付いた真壁は石田に顔を向けた。

「石田さん！ C-4から指紋採取が出来たのは何件目の犯行ですか!？」

驚きの表情を隠せない石田は真壁に言った。

「…一件目です。3月13日の初犯時のみです」

石田の言葉を聞いた真壁は何かを確信したかのように木下に告げる。

「木下さん！ 洗い出した会社の中で3月19日の週に健康保険を使った者がいないか調べてもらえますか？ …それも内科…食中毒症状の者がいないか調べて頂けませんか？」

少々面食らった表情の木下は真壁に顔を向けた。

「3月19日って犯行が行われなかった週ですよ？ …それが何か？」

「最初から不思議だったんです。何故3月19日の週だけ犯行が行われなかったのか？ …それが分かるかもしれせん！」

真壁は珍しく語気を強め、木下に言った。

「りよ…了解しました。すぐ調べてみます」

真壁の考えが理解できない木下は戸惑いつつも言葉を返した。真壁は腕組みをし、ホワイトボードのカレンダーを睨みつける。

「…おそらく、間違っていないと思う」

確信する真壁の背後から亡霊かのような妙典の戦慄く声が漏れ伝わってきた。

「…おい。…真壁えく。もう俺様の腹のパトランプはリミットだあ

…」

一時ではあるが妙典の存在と状況を忘れていた真壁は我に振り返り向いた。

「ああっ！ すいません！ 妙典さん。どうぞ、駆け込み寺へごゆつくり…」

両足をくの字に曲げ、クネクネ動く妙典はそそくさとオープンフロアから駆け出しに行った。

Fight Fire With Fire (5)

紙マッチを一本引き千切り、茶色い擦る部分に平行に宛がう。「喫茶ヴァンデンバーグ」と印刷された淡い紺色の外紙で挟み込み、紙マッチを真横にスライドさせた。外紙の裏側で小さな火花が弾けるのを押さえつけた親指に感じ、紙マッチを引き抜くと一際大きな火が灯る。やがて火は小さくおさまり、マッチの軸に燃え移ろうとしていた。それを見計らい、ひらで外紙を挟んだ左手を添え、啞えた煙草に近づける。煙草の先に火が触れ、大きく息を吸う。緩めた口の両側から煙を吐き出し、紙マッチを小刻みに揺さぶって火を消した。紙マッチを漏斗形の灰皿に投げ入れ、外紙をエアリウムカウンターに置かれた青い包み紙の袂に投げ出す。今一度大きく煙を吸い込み、啞えた煙草を右手の人差し指と中指で挟み、煙をゆっくり吐き出すと、右手をカウンター脇に沿えた。右手に挟まれた煙草の煙がエアリウムカウンターに吸い込まれる様を見届けた後、再び煙草を啞え部屋全体を見渡す。正午を過ぎたにも関わらず、人っ子一人いない広く綺麗な広間で小雨混じりの曇った弱光を背中に浴びていた。

入れ違いで出て行った制服は左手に事務用指サックをはめていた。おそらく庶務か事務の人間であって捜査に携わってはいない。刑事課の人間をここまで目にしないのは不自然だ。河口警部補が言っていたクスリ関係のヤマとやらは相当でかいらしい。クスリ関係といえば宮益坂署がいわば専門だ。捜査本部はそっちにあるのだろう。しかし河口が捜査から外されている理由は何故だ？ …いかに叩き上げて部下の石田と木下からは慕われているようだし、人望もありそうだ。大物タレントが絡んでいると、河口も言っていた。…となると捜査は慎重になり必然と長期化する。例えその大物タレントをパクったところで、供述から更に大物が浮かび上がり、捜査は芋

づる式に終わることはない。警官という職業は離婚率が高い。捜査が長引けば家に帰れることなく、家庭を鑑みず犠牲にせねばならないからだ。河口警部補には家庭があるのだろう。それで捜査から外された。言ってみれば上司の温情だ。それを河口警部補が甘んじて受けるとは思えないが、運よくアカネコが現れそっちに回された。そう考えるのが妥当な線だ。しかし、ただのアカネコじゃなかった。予め現場と時間を絞った土地勘に長けた食わせ者だった。更にC-4という物騒な代物まで出てきちゃった。それも爆破させるわけではなく、燃やしているに過ぎない。テロリストとは考え難い。河口警部補は基本に忠実な刑事のようだ。それ故一筋縄ではいかない。捜査が混乱するのも頷ける。それで人的被害が出る前に本庁に応援を要請してきた。いたって適切な対応をとっている。少々押し弱さは見受けられるが警部補という肩書きに恥じない人物のようだ。

そして真壁という変態オタク眼鏡小僧。数時間で犯行現場の関連性を見つけやがった。北参道署の連中が二ヶ月かかっても辿り着けなかった関連性をいとも簡単に見つけやがった。しかも武器や爆発物に関する知識も豊富なようだ。C-4：プラスチック爆弾に含まれる成分を見抜いてやがる。症状を食中毒に限定したのが、その証拠だ。ただの眼鏡小僧：準キャリアじゃねえ。流石は雷門さんが引き抜いただけのことはある。ただ、頭だけで考えるフシが強い。思わぬ見落としがあるのは、そのせいだ。こういうタイプは最後の一步が踏み出せねえ。だから俺様に押し付けたんだろう。雷門さんと係長は……。いわば子守りってわけか。しかし踏み出す勇氣さえ備われば、あの変態オタク眼鏡小僧：すげえ刑事デカになるわな。今から何年かかるか知らねえが、それは確かだ。俺様なんかより遙か先に行っちゃうだろう。…いや待てよ、階級は既に俺様より上じゃねえか。やり難い小僧には違いねえ。なんせとんでもねえガンオタだし…。

横開きのガラス扉が開き、慌てて駆け寄る真壁の姿が目に入った。

「妙典さん！ 浮かびました！ … 被疑者が浮かび上がりました！！」

それを耳にした妙典はゆっくりではあるが勢いよく煙を吐き出し、面倒くさげに煙草を揉み消した。短く折れ曲がった煙草で漏斗形の灰皿を何度も小突き、視線を合わす事なく言った。

「変態オタク眼鏡小僧の真壁え。今のお前え、通常の三倍速ええなあー！」

荒っぽく開かれたドアの音にオープンフロアの片隅にあるホワイトボード前で佇む、河口、石田、木下の三人が反応し振り向いた。

「すいません。お待たせしました！」

真壁と妙典は早足でホワイトボードに詰め寄った。妙典は歩く速度を一旦緩めたものの慣性の法則に逆らうことはせず、定位置のデスク・チェアにドカンと座りこんだ。その姿を目認した木下は手にした書類を軽く揺さぶりながら、真壁に顔を向け興奮気味に口を開く。

「真壁さん！ 真壁さんのおっしゃったとおり、食中毒で入院した者が浮かびました！」

木下はホワイトボードにレセプトのコピーを止め用マグネットで勢いよく固定した。

「西川拓朗^{にしがわたくろう}、43歳。株式会社ムーヴィン・オン映像社長。3月15日から18日まで東中野中央病院にて食中毒症状で入院しております」

「ムーヴィン・オン映像：確か、最初の犯行が行われたビルに入居する会社でしたよね？」

真壁は木下の報告に間髪入れることなく自身の記憶の確認の為に聞き返した。

「その通りです、真壁さん。… 被疑者は退院後も東中野の自宅で療養しており、この週は入社しておりません」

木下は毅然とした口調で真壁の問いに答えた。そこに河口が割っ

て入る。

「真壁さん。何故、食中毒症状者がいると予想されたのです？」

「それはC-4の主成分、トリメチレントリニトロアミン…別名RDXに中枢神経に作用する毒性があるのと、爆発物の発見を容易にする為に混入される爆発物マーカーに毒性の強いエチレングリコールジニトラートが含まれているからです。…石田さん、指紋採取が出来たのは3月13日の初犯時のみでしたよね？」

真壁は石田に向き直り問うた。「ええ、そうです」と石田は頷く。それを目視した真壁は再び続ける。

「つまり被疑者はC-4に含まれる成分を知らずに素手で引き干切ったのです。当然、手にはそれらの毒性の強い物質が付着します。それが何らかの拍子に口から入ったとすれば中毒症状が出ますよね。三月といえどもまだ寒いですから、咳き込むことぐらいだっただけでしょう。中央病院とはいつてもトリメチレントリニトロアミンやエチレングリコールジニトラートといった特殊な化学物質を摂取したなどと想定はしません。食中毒と診断されるのがオチです」

「なるほど…それで、食中毒症状の者が出ると予想されたのですか…流石です、我々では思いもありませんでした」

河口は納得した表情で真壁を眺め言葉を続ける。

「…で、医者に思い当たりはないが、被疑者には心当たりがあった。二件目からは素手でなく手袋をして犯行に及んだということですか…だから指紋が出なかった」

「おそらくフィルムや精密機械等を扱う薄手のゴム手袋を使用したのでしょうか。映像会社ならそれくらいあっても不思議ではありません。…3月19日の週は犯行を行わなかったのではなく、行えなかったのです」

真壁は鼻から軽く息を抜き束の間の緊張感を解き放った。

「被疑者の前科を洗ってみたのですが…」

大柄な石田の発する言葉に妙典を除く全ての刑事の目が寄せられた。

「：駐車違反ぐらいしかなく、違反切符にも印鑑を使用しています。指紋の照合は出来ませんでした」

石田の言葉に一瞬差しかかった光が掻き消された。コの字を描く人垣からも言葉が消える。被疑者は浮かんだが、確証がない。ただ沈黙するのみであった。

ガチャーンっ！と金属が叩きつけられる音がオーブンフロアに鳴り響いた。音のする方向へコの字を描く人垣が目を向けた。

音の主は妙典だった。腕組みをして俯き、目を閉じ座り込む妙典が手近にあるデスク・チェアを蹴り上げた音であった。

「：つまり、状況証拠は揃ってるが、物的証拠は一切ねえってことだよなあ？」

妙典はぶつきらぼうな口調で確信を付いた。

「：そ、そうです。妙典さん。捜査令状：取れませんか」

真壁は力ない言葉で返した。それを無言で見守る北参道署の三人。妙典は目を大きく見開き、勢いよく立ち上がった。立ち上がった拍子にそれまで座っていたデスク・チェアが音をたてて転がった。

「誰がガサ状持って来いっつったあ！？」

凄みを効かせた妙典は真壁に詰め寄る。

「変態オタク眼鏡小僧お。てめえ、テレビの探偵みてえにそこまで追い詰めといて、何まごついてやがる！：自信ねえのかあ？ ああ！？：てめえの推理に自信はねえのか！？と俺様が聞いている！」

妙典から目を逸らした真壁はうつむき加減で呟いた。

「多分：間違いないと思います」

妙典は真壁の胸倉を力強く掴み上げた。引き戻されるかの様に真壁は妙典に顔を向けた。

「真壁え、そこまで積み上げたんだろ？ 自信あんだろ？：だつたら何で現場指揮の河口さんを説得しねえ！？ガサ状？：そんなもんいるか！ 現行犯逮捕すりゃいいんじゃないのか！？」

妙典は真壁を見据えたまま胸倉から手を離れた。

「河口さん。：いや河口警部補。ウチの小僧がここまで積み上げたこの一件：最終判断お任せします」

河口は暫し思案にふけり、力強く答えた。

「やりましょう！ 真壁さんがここまで積み上げて下さった。私は信じます！」

河口の言葉に呼応するかの如く石田と木下も声を発した。

「こっちは五人。向こうはひとりです。追い詰めましょう！」

「令状がないなら、現行犯逮捕しかありません。相手は分かっています」

コノ字を描く人垣に妙典が初めて加わり士気が高まるのを真壁は感じた。

「おい！ 真壁え。お前はどうすんだ？」

「：ここまで積み上げた責任があります。妙典さん、当然捕まえま

す」

その言葉を聞いた妙典はふーんと鼻を鳴らし、木下に言った。

「消防の巡回ルートから代々木二丁目外してくれるよう頼んでくれや。最後の二件は二丁目で起こってる。：奴はそこに現れる筈だ。

そこへ追い込む！」

木下はハツときおつけの姿勢をとり妙典に答えた。

「了解しました。そのよう要請しておきます」

妙典は河口に向き直った。

「河口さん、後はお任せします。そちらの指示に従います」

河口は妙典の目をしっかりと見つめ静かに告げた。

「お任せください。管轄内の事件の責任は我々にあります」

それを聞いた妙典は呆然とする真壁に言った。

「真壁え、腹減ったなあ。食堂何時までだあ？」

「：確か、一時半までだったと思います」

妙典は壁掛け時計を見やった。

「もう時間ねえじゃねえか。急ぐぞー！」

「あ…はい」

真壁は妙典の後を追うようにオープンフロアのドアに向かう。背後から河口が言葉を投げかけてきた。

「妙典さん！ 妙典さんのことを誤解しておりました。ご協力感謝致します」

妙典は振り向きもせず左手を大きく広げ、あばよ！ とばかりにドアに向かった。更に河口は続ける。

「あと…今日のA定食は豚カツです。個人的にはお勧めメニューです」

妙典と真壁は新装間もない広く明るい食堂に入った。終了時間ギリギリということもあって人も随分と少なく、その広さが一層強調されていた。

「河口さんはA定食がお勧めと仰っていましたね」

真壁は妙典の肩口から声をかけた。真壁にとって少なからず今日の昼食はカレーでないことだけでも満足だった。

「警部補のお勧めメニューでも食うか…」

妙典はプレートを手に取り、カウンター越しにA定食を注文した。カウンターを挟んで食堂の従業員のおばちゃんが嘆くように言った。「ごめんなさいね。もう定食終わっちゃって、カレーしかないのよ」

自動販売機とベンダーに囲まれた休憩所。白で統一されたテーブルに白い紙カップのコーヒーだけが異彩を放っていた。立つ湯気も徐々に弱まるもののコーヒーの量は一向に減りはしない。曇り止めレンズの筈なのに紙カップのコーヒーが霞んで見えた。テーブルの上で組んだ両腕から職員の歩く振動だけが伝わる。胸倉を掴まれるなんて学生の時、不良に絡まれて以来の事だ。しかしあの時と今とは心境も立場も異なる。「だったら何で現場指揮の河口さんを説得しねえ!？」その言葉ばかりが頭を駆け巡る。ようやく手にした紙カップを一口啜り、駆け巡る妙典の言葉を掻き消そうとした。気がつくと同じく紙カップを手にした石田巡査部長がテーブルを挟んで立っていた。

「お邪魔じゃありませんか？」

大柄な体格に反して丁寧な口調で石田は言った。真壁は紙カップを白いテーブルに置き、どうぞとばかりに手招きをする。石田も大きな体を滑り込ますかの様に真壁の正面に座り湯気の立つ紙カップを白いテーブルに置いた。

「ちよっとお疲れのようですね？」

「いえ、そういう訳じゃ……」

真壁は心中を悟られまいと紙カップで表情を隠すかのようにコーヒーを啜った。

「いやあ、真壁さんに来ていただいて感謝してます。昨日までは、まるで雲を掴むかのような現状でしたから……」

「尽力できまして光栄です」

今の真壁にはそう答えるのが精一杯だった。石田もコーヒーを一口啜り一呼吸おいた後、微笑と共に言葉を発した。

「真壁さんの頭脳はまるでシャア少佐のようですね。我々……いや、通常の三倍の速さで回転してます」

石田の言葉に自分と同じ匂いを感じ取った真壁は幾分か気分が楽になり問いかけた。

「ひよっとして石田さんもガンダム・マニアなんですか？」

「いやあ、マニアって程ではありませんが子供の頃よく観てました。今でも機会があれば観てますけどね。…そういう真壁さんも？」

人間というものはある共有経験が存在すると距離感が近くなるという。真壁は上着の内ポケットに左手を突っ込み、携帯電話を取り出す。テーブルの上に手で覆い被せるように静かに置き、勿体ぶつてゆつくりと左手を引き石田に見せ付けた。

「…真壁さん！ これって？」

驚きの声をあげる石田に向かって真壁は語り始める。

「ジオン公国軍のデコレーションメタルシート携帯です。ご覧の通りシヤア専用の赤色です」

白いテーブルに栄える真っ赤な携帯を目にした石田は目を丸くし真壁に問うた。

「こんな携帯、どこで売ってるんです？」

「いや、これは普通の携帯に塗装コンプレッサーでシヤア・レッドを着色し、デコシールを貼っただけです。ただ一般のデコシールと違ってアクリルではなくニッケル素材でして、かなり見栄えのする一品です」

「…確かにジオンのマークも浮き出ていますし、こりゃ凄いですなあ。…まさかこれをご自分で？」

真壁は控えめながらも自慢げに相槌をうった。石田も携帯を手に取りまじまじと眺める。

「でもひとつ欠点があります」

両手を膝にのせた真壁はやや残念そうな口調で切りだし、石田も顔を向けた。

「着信音やメロディはジオン公国のものが少なくて、ほとんどが連邦軍なんです。…ガンダムのビームライフル音とかは割とダウンロードできるのですが、ジオン公国のモビルスーツとなると機体の数

も多く、なかなか満足のいく音源がなくて困っています。もはや自分でサンプリングするしかないかと諦めています」

それを聞いた石田はシェア専用携帯を白いテーブルに恐る恐る慎重に置いた。

「しかし相当なマニアでいらっしやいますな、真壁さんは…」

「あまり家宅捜査はされたくありませんね」

シェア専用携帯を懐にしまい紙カップコーヒーを啜る真壁に石田は静かに言った。

「自分はリュウさんが好きなんです。リュウ・ホセイみたいに包容力があり皆から理解され、時には厳しく叱咤する人間になりたいんです。…まあ、ガタイだけはリュウさんみたいになりましたがね」

紙カップを携え遠い目をする石田ではあったが、どこか微笑んでいるようにも見えた。

「…実際は河口さんや木下に助けってもらってばかりで、中身はまだまだ程遠いです」

石田は湯気の立つコーヒーをグイと一口飲み、紙カップを白いテーブルに置いた。それを見守る真壁は石田に告げた。

「結局、リュウさんはハモンの乗るマゼラトップに特攻して戦死します」

それを耳にした石田は紙カップから手を離し、あらためて真壁に向き直った。

「…それでもいいんです。刑事としては三流ですが、河口さんや木下の為にもそういつた心持ちでいます。…別に死に急ぐつもりはありませんよ。ただリュウさんの様に同僚の心を繋いで心の痞えを受け止められる人間になりたいんです」

真壁は石田の刑事としての誇り、人間としての使命を強く感じた。「石田さん。自分には死に急いでいるとしか思えない上司がいます。本人は自身の事を心底不死身と信じています。数々の伝説を持ち、実際本庁では不死身と呼ばれています」

真壁はテーブルの上の紙カップを両手で軽く握り、うつむき加減

で打ち明けた。

「もしや、妙典さんのことですか？」

「ええ、そうです」

暫しの間の後、石田は頷きつつ口を開く。

「…噂ですが、聞いたことありません。何でも日本刀で切り付けられても無傷だったとか、十数人のマル暴にチャカ向けられても傷ひとつ負わず叩きのめしたとか…。そんな不死身と言われる刑事^{テカ}が本庁にはいるって…。それが妙典さんでしたか」

噂というものは恐ろしいものだと思われは痛感した。実際出会ってまだ二日でしかなく、噂のどこまでが真実で、どこからが一人歩きしているのかさえ判断が付かない。俯いた顔を石田に向け真壁は言った。

「でも石田さん。不死身の第四小隊、サウス・バニングでさえ爆死しました。…不死身なんてことはないんです」

「被疑者・西川拓朗は毎週金曜の19時ごろ、JR代々木駅西口改札を出て株式会社ムーヴィン・オン映像に向かっていることがICカードの使用記録と防犯カメラから判明しました」

木下の張り詰めた声がオープンフロアに行渡る。ホームページと免許証センターから得たと思われる被疑者の顔写真がホワイトボードに貼られ、そこを起点にもはや定例化したコの字の陣形の中、何の違和感もなく妙典だけは腕組みをしてデスク・チェアにどっしりと座っていた。

「ムーヴィン・オン映像は代々木一丁目、U2ビルの五階に位置します」

木下は差し棒で地図上の赤く印されたビル的位置を示した。

「駅からは徒歩でおよそ十五分弱。バックアップ等を行った後、サーバー及び空調設備を落とすまでに三十分は要すると思われます。

よって被疑者がビル外に出るのはおよそ20時前後との想定がつかます」

「確かにそれだと犯行時間とも一致しますね」

真壁は木下の発言の信憑性を補足した。それを聞き終えた木下は続ける。

「…消防には代々木一丁目を巡回するよう既に要請しています。ただ、万が一に備えて20時から21時にかけて消火体制の旨も伝えてあります。…それと、代々木一丁目から二丁目にかけては路地などが多く被疑者の経路特定は極めて困難かと思われます」

軽く会釈した木下は一通りの説明を終え、折り畳んだ差し棒を河口警部補に渡し、立ち位置を入れ替えた。

「相手はひとりですが、犯行ルートは絞り込みは非常に困難です。真壁さんと妙典さんには代々木駅西口で被疑者がU2ビル方面に向かった事を確認した後、代々木二丁目に向かつて頂きたい。場所は北代々木小学校。そこからだと代々木二丁目全体をカバーできると考えました」

伸ばした指し棒で代々木二丁目を丸く囲んだ河口は、真壁、妙典の順に顔を向け呼応するかのごとく二人も相槌をうった。

「…で、石田、木下の両名はU2ビル付近の交差点で張り込み、二十時ごろ外出した被疑者を尾行」

石田と木下も相槌をうつ。それを目視した河口は続ける。

「覆面ワゴン車を一台手配しております。千代通り入り口付近で待機し、車内から私が指示及び伝達を取り行います。…ですので、全員にイヤホンとピンマイクの携行をお願いします。初動は18時からとします。…以上」

河口は指し棒を両手でパチンと畳み、コの字全体を見渡した。

「河口警部補。石田さんと木下さんの尾行は一丁目までとしてください。逆に一丁目のカバーが疎かになるおそれがあります」

真壁はホワイトボードに貼られた地図を見据え河口に言った。

「ええ、確かに…。では、石田と木下は尾行し経路を都度報告のこと。真壁さんと妙典さんには北代々木小学校から報告経路に従って先回りしてもらおう形でよろしいかな？」

真壁は了解とばかりに頷き、木下が口を開く。

「おそらく被疑者は犯行後、JR代々木駅に向かうと見るのが妥当でしょう。ICカードの使用記録でもそれは確かです。自分と石田さんは引継ぎ後、代々木駅に向かいます」

「それで結構だと思います」

真壁は納得した表情で石田と木下に言った。

「ちよつといいかあ!？」

デスク・チェアに反り座る妙典が声を張り上げた。

「なあ河口さん、こっちは二丁目でスタンバってるのはいいが、被疑者が犯行に及んだ段階でとっ捕まえていいんだよなあ?」

少々驚いた面持ちの河口は間を空けることなく告げる。

「ええ、それは勿論。現行犯逮捕が目的ですから…」

「それは石田巡査部長と木下巡査長も同じだよなあ?」

河口は妙典から目を逸らすことなく大きく頷いた。

「…だったら、問題ねえ。俺様からは以上だ」

妙典は腕組みをして目を瞑り、デスク・チェアに大きくもたれ掛った。

「では、初動は18時です。皆さんよろしくお願いします。くれぐれも報告だけは怠らないよう…」

力強い河口の声がオープンフロアに響き渡った。コの字が崩れようとした瞬間、目を瞑ったままの妙典が再び声をあげる。

「その前に…やつとくこと、忘れちゃいませんか?」

呆気にとられる崩れかけたコの字の面々は妙典に顔を向けた。

「おい! 変態オタク眼鏡小僧の真壁え。…お前、音頭とれや」

威圧的な口調で妙典は真壁に言った。

「お…音頭ですか? …エイエイオー! とか、ああいったやつですか?」

困惑しきつた真壁は妙典に聞き直した。

「当たり前だろっ! おめえが積み上げたんだろお! それを河口さんが仕切ってくれた。お前がやるのが筋だろおがっ!」

目を見開き真壁を見上げる妙典が怒鳴りつけた。

「わ…分かりました。妙典さんのおっしゃる通りです」

真壁は左手を腰に当て声を張り上げた。

「では皆さん、よろしくお願いします。…エイエイオー！」

綺麗で新しく清潔感漂う閑散とした明るいオーブンフロアに真壁の虚しい雄叫びがこだました。静まり返る崩れかけたコの字を眺め赤面する真壁に妙典は言う。

「真壁え、全然魂こもってねえぞお！…おめえ、あんだろ？こ
ういう時、言ってみたかった台詞がよお…」

心の奥底を覗かれた気がした真壁はあらためてゆっくりと向き直った。それに合わせ崩れかけたコの字が元の陣形に戻る。

「では、あらためて失礼します！」

再度左手を腰にあて、真壁はこれ以上ない大声で叫んだ。

「立てよ！国民！市民は諸君らの力を欲しているのだ。…ジ―

ク・ジオンっ！！」

「…ジーク・ジオン！」

魂の限りをこめた真壁の音頭に呼応したのは石田巡査部長だけであつた。

Fight Fire With Fire (7)

午前中降り続いた小雨もやみ、蒸し暑さだけが残る夕暮れ。都道414号線に面してJR代々木駅は存在する。タクシー乗り場の隣には電話ボックスが二台あり、真横の案内板と軒を連ねるように妙典と真壁は立っていた。ここからだとしてJRの改札口と都営地下鉄へと通じる階段、そしてスクランブル交差点が一望できる。目の前のちっぽけな駐輪所に止められた自転車が少ない鬱陶しく感じるもの、かえって目立ち難く張り込むには絶好の場所だ。

「真壁え、今のうちに飯食つとけよ。体力が勝負だからなあ。時間なら、まだあるぜ」

「妙典さん、自分が先に行つてよろしいのですか？」

「まさか、セレブみてえに何時間も飯食うわけじゃねえだろ。先に行けつて！」

小声ながら凄みのある声で妙典は言った。

「じゃ、お言葉に甘えて……」

駅ビルに隣接する「とんかつ」と書かれた看板に向かう真壁の姿を妙典は見届けた。よほど昼のA定食に未練があるらしい。19時まであと四十五分。煙草でも吸いたいたいところだが生憎、喫煙禁止区域。おまけに携帯灰皿もないときてる。妙典にとつてある意味苦行に近い感覚ではあったが、刑事である以上仕方がない。待つ事も刑事としての立派な仕事だ。そう自分に言い聞かせ妙典はガードレールに腰を預けた。

それにしても代々木という街は変わった街だ。新宿と渋谷に挟まれて、その中間層ぐらいの人間が駅前を歩き交う。仕事帰りのサラリーマンやOLはもちろん、学校が多いこともあり肩から大きな筒を提げた学生の姿もやたらと目に付く。既に一杯ひっかけた赤ら顔の役所勤めに今から出勤のキャバ嬢、妙なコスプレをしたゴスロリ風の若い女までもが行き交う。そんな中に張り込み中の刑事もこ

ここにいるのだ。ある意味人種の坩堝であることは間違いない。左耳を半周させた透明チューブイヤホンからはまだ何の応答もない。刑事にとっては堪らない緊張感ではある。それをどこかで楽しんでいる自分に気付き、もはや若手でないことをあらためて実感した。

「妙典さん、お待たせしました」

憧れのとんかつ定食を食べ終わったと思われる真壁が電話ボックスの脇の自転車を半身で避けつつ戻ってきた。妙典は携帯を開き時間を確認する。

「おう、早かったな。…きっかり十分か」

「早飯は刑事の鉄則です。やっとなカレー以外のものに取り付けました」

真壁はさも満足げな表情で答えた。

「…んじゃ、俺様も行ってくるわ」

「了解しました。ごゆっくり」

「ごゆっくりってのおかしいだろお！ てめえが十分なら俺様は五分で戻ってきてやるからな！」

いったい何の理由で勝負を挑まれたのか真壁には理解できなかったが、妙典の負けん気の強さだけは理解ができた。妙典も半身で自転車を避けタクシー乗り場の前に歩み出る。駅ビルに隣接する牛丼屋の前で立ち止まる姿が目にとまった。

妙典は狭い店舗の入り口の端にある横向きになった券売機を見渡し、デイナー・メニューを何にするか検索した。紆余曲折があり、昨日からカレーの類しか食べていない。ここは普通に牛丼大盛り、玉、豚汁というのが規定路線であろう。硬貨を数枚、券売機に投入し、ふと真横の窓ガラスを見やると大きな垂れ幕が目についた。「誕生」と大きく題された文字が目にとまる。どうやら新メニューの広告らしい。「フレッシュ・トマトカレー」そこにはそう書かれていた。並で290円、大盛りで390円、しかも税込み。みそ汁付きとの旨も、ちゃんと明記されている。安い、安すぎるじゃないかと妙典は思った。牛丼屋のこの手の新メニューは期間限定である

ことが多く、評判が良くないと途端にメニューから姿を消す運命にある。何度も痛い目に会い、それを思い知らされた妙典は迷いに迷った。規定路線の牛井大盛り、玉、豚汁でいくか？ ……いつメニューから消えるか分からないフレッシュ・トマトカレーにするのか？ ……既に券売機のボタンには明かりが灯っている。背後にはサラリーマン風の男が立ち、券売機の順番を待っていた。もう一刻の猶予も許されない。真壁には五分で帰ると言っている。既に順番待ちの客もいる。もはや迷っている暇などない事は妙典でさえも肌で充分に感じていた。意を決し光るボタンを押す。一枚の半券が発行されると同時に釣りボタンを示すボタンが光った。半券を手に取り軽く唇で啜え、お釣りボタンを押す。小銭がじゃらじゃらと転がり落ちるのを待った末、片手ですくって財布の小銭入れに流し込んだ。後ろに並ぶサラリーマン風の男と背中越しに入れ替わり、入り口に向かう。右隅にある黄色い丸印を中指の第二関節の外側で軽く叩き、自動ドアが開いた。唇に啜えた半券を右手に持ち替え店内を見渡す。カウンター左手奥に空きがあるのが確認できた。カウンターに座る先客にぶつからない様、やや半身の状態で歩を進める。空いた丸椅子に辿り着き、軽やかに身を回して座った。右手の半券を厨房側に向け、中指と薬指ですつと差し出した。やがて店員が水の入ったコップと布巾を持って妙典の前に現れた。店員は手馴れた手つきでカウンターを拭いた後、水の入ったコップを置く。その空いた手で半券を取り、半分を引き切った。半分にされた残りの半券を元の位置に戻し、プリントされたメニューを大きな声で読み上げる。

「フレッシュ・トマトカレー大盛り一丁入りまーす！」

19時まであと五分と迫った。妙典と真壁はJR代々木駅西口改札を凝視する訳でもなく、駅前全体に目を配っていた。都営地下鉄入り口の下へ降りる階段はもちろんスクランブル交差点にも気を払っていた。刑事という職業を長くやっている、こういった全体を一望できる地点は自然と判断がつく。本来ならば都道414号線の

対向側で張り込むのが定石なのだが、今回の場合は被疑者の顔と外見的特徴を確認せねばならない。その為、比較的近い位置で張り込む必要がある。幸いにして東京という街は人に溶け込みやすい。代々木という街も新宿や渋谷、池袋などに比べ駅前はさほど明るくはなく適度な薄暗さが確保されている。左耳のチューブイヤホンや胸元に着けた送信用小型ピンマイクもあまり目立ちほしくない。

19時まであと二分弱。否が応でも緊張感が漲ってきた。辺りを見回す目の動きも小刻みになる。こういう場合、大切な事は顔全体で見回さないことだ。顔を大きく動かすと目立つという事もあるが、視野が動き対象を見逃しやすくなる。顔の動きは最小限に留め、目玉だけを忙しく動かす。しかし最重要地点はあくまで西口改札であり、そこを中心にして目を配る。

来た！　：ホワイトボードに貼られた顔写真の男が西口の自動改札にICカードを当て、さも普段と変わらないであろう挙動で駅構内から出ようとしていた。再度顔を確認した後、妙典はすかさずピンマイクに聞こえる程度に言葉を発する。

「18時59分。マル被、代々木駅西口に単独で着。西川拓朗と現認。：黒いジージャン着用。小脇に夕刊紙」

くぐもったノイズ音だけが微かに発せられ、イヤホンの向こうから河口の緊張感が伝わってきた。妙典は被疑者を目で追い、歩く方向を確認する。

「マル被、スクランブル交差点にて信号待ち。都道414号線の対面に向かう模様。：今、進行開始」

河口の鼻息であろうノイズが先程よりも強くなっている。妙典はスクランブル交差点の人ごみに埋もれた被疑者の姿を一瞬こそ見失いはしたが、対向側の歩道を歩み行く新聞紙を小脇に抱えた後姿を確認した。

「19時01分。マル被、都道414号線を右折。千代通り入り口方面に西進。ムーヴィン・オン映像に向かう模様」

「：こちら河口。マル被、現認了解。石田、木下はU2ビル付近交

差点での張り込み続行』

やや緊張した声ではあったが、的確に情報共有と指示を出す河口には叩上げのベテラン刑事の風格があった。

『妙典さん、真壁さん。現認ご苦労さまです。張り込みは石田、木下に引き継ぎました。北代々木小学校での待機のほど、よろしく頼みます』

「了解。当方二名、待機地点に直ちに向かう」

妙典も叩上げの風格で河口に答えた。緊張した面持ちの真壁に顔を向け、顎をしゃくって「向かうぞ！」との合図をした。真壁も黙って頷き半身で駐輪所をすり抜け、スクランブル交差点に向かった。

夜の人っ子一人いない学校というものは相変わらず不気味だ。妙典はその光景を眺め、そう思った。妙典が子供の頃と違うのは校門横に警備員の待機所がある。小学校に侵入し子供を狙った刺殺事件が相次いだ。あれ以来、警備員を待機させる学校が増えている。待機所から警備員が顔を出す。不審人物と思われるも仕方はない。何せ稲妻が飛び交う黒Ｔシャツとダークスーツの眼鏡の男が立っているのだ。疑われて当然である。門扉越しに初老の警備員が声をかけた。

「どうかされました？」

妙典と真壁はすかさず警察手帳を広げて見せた。警備員も納得したようで、声を和らげる。

「ご苦労様です。何かありました？」

「いえ、別に…」

真壁は静かに答え接遇した。警備員も事態を察知したのか、無言で待機所に戻っていく。

「しかし夜の学校って、怖いーよなあ…」

妙典から「怖い」という言葉が聞けるとは思ってもいなかった。

この不死身と呼ばれる人物にも怖いものがあると知り、真壁は少々滑稽に思った。

「妙典さんにも怖いものがあるのですね？」

「そりゃ、お化けは怖いだろ……」

「妙典さんの実家って、お寺さんですよ？ ……まさか幽霊を信じているのですか？」

「いや、そういうわけじゃねえが……」

妙典は不器用な照れ笑いで言い訳をする。

「…子供のころから、何かに付けてお化けネタで怒られたからな。

…俺様に怖いもんなんかあるわけねえだろお！」

「ま、そういうことにしておきます」

真壁は妙典に見向きもせず、ぴしゃりと言った。その時イヤホンからノイズ雑じりの河口の音が飛び込んできた。

『マル被、U2ビルから外出現認了解。石田、木下は尾行開始。随時報告せよ』

妙典と真壁にも緊張感が走った。真壁は腕時計で、妙典は携帯を広げ時間を確認した。20時03分、遂にアカネコが動きだした。

「いやあ……まったく、あそこの営業部長には毎度毎度まいるよなあ……」

石田はスーツの襟裏に仕込まれたピンマイクを左手で覆い、音を拾わぬ様に呟いた。その右横で木下は電信柱の地番表示用のプレートを目で追い、辛うじてピンマイクが拾う程度の音量で現在地の報告をする。

「一丁目25から26へ移動中。マル被、千代通り入り口方面へ向かっております」

狭く薄暗い一方通行の路地の右側にある路側帯を沿うように、新聞を左脇に挟んだ被疑者から十数メートル離れた位置で石田と木下は尾行を続けていた。通常、尾行の時は尾行対象者に対して左寄りに歩くのが定石である。人が後方に振り向く際、首を右に向けるのが一般的であり左に振り向くことは確率的に低いからだ。しかしこの狭い路地において電信柱ばかりで路側帯のない左側を通行するのは不自然極まりない。石田が営業帰りのサラリーマンを装っているのは不自然さを少しでも緩和する為である。飲料の自動販売機が立ち並ぶアパート前を過ぎ、T字路に差し掛かった。右に曲がれば代々木駅方面、直進すれば河口が車内で張り込む千代通り入り口交差点へと向かう。石田と木下は被疑者の動きに注視した。被疑者・西川は何の躊躇いもなくT字路を直進した。その旨を木下は伝える。

「マル被、直進。千代通り入り口交差点へ入ります」

『了解』

ノイズ雑じりの河口の声がイヤホンから発せられた。石田と木下も後に続くかの様に直進した。被疑者は未だ一度たりとも振り向きもせず千代通り入り口交差点に向かっていった。

『交差点までに被疑者との距離を縮めておけ』

イヤホンの河口の声に従い、石田と木下は歩幅を若干広げた。千

代通り入り口交差点の赤色に灯る信号機が目に入る。路側帯に連なるように横断歩道があり、被疑者は左隅で足を止めた。二人は被疑者から半歩下がって右側に並び寄るように信号待ちをする。

「…で、どうする？ …一杯引っかけて帰るか？」

石田は被疑者に聞こえるかのように呟いた。石田の右隣に立つ木下は腕時計を見て時間を確認する。

「まだ8時過ぎですか。…そうしますか、先輩」

木下も続けて言い放ち、被疑者の顔を石田越しにチラリと見やる。横顔ではあるが間違いなく西川はそこに居た。あれだけ顔写真を見た張本人なのだから見紛うことはない。やがて信号が青に変わり、横断歩道の両端を若干の間はあるものの、ほぼ横一列になって一人と二人の男が歩を進めた。

石田と木下は右に曲がりJR代々木駅方面に向かう。西川は左に折れ小田急小田原線方面を目指した。

「石田、木下、両名：JR代々木駅へ向かいます」

左襟から手を離れた石田は、ピンマイクの向こうの河口に告げた。

『ご苦労さん。後はこちらで現認引き継ぐ』

エステティックサロンの前で停車するワゴン車の運転席からミラーに映る新聞を小脇に抱えたアカネコの姿を目の当たりにした。被疑者は対向の歩道をまっすぐに歩んでくる。西川はさも普段通りの様子で道を挟んでワゴン車の横を通り過ぎて行く。河口にはひとつ懸念があった。この先には五差路の代々木一丁目交差点がある。見失う可能性があるとするればそこ以外にない。河口は被疑者の後姿を見送り思案に耽った。千代通り入り口交差点から代々木一丁目交差点まで右に折れる道はひとつもない。ここは代々木一丁目交差点まで先回りするしかないだろう。

河口は覆面ワゴン車のサイドブレーキを下ろし、右ウインカーを点滅させ輸送トラックを一台やり過ぎした後にアクセルを小さく踏んだ。輸送トラックに連なる様ゆっくりと代々木一丁目交差点へと

向かう。途中、被疑者の歩く横姿を一瞬見やり直進した。

「妙典さん、真壁さん。当方にて尾行引継ぎ。マル被は代々木一丁目交差点に進行中。代々木一丁目交差点にて先回りし待機する」

小学校前で張り込む本庁の二人の刑事に河口は告げた。暫しの間があり『了解』とだけ妙典からの応答があつた。代々木一丁目交差点を越えたとすぐ先の左手にコンビニの灯りが見え、その奥の酒屋の前でワゴン車を路側帯に寄せ駐車させた。河口はインカムをむしり取り、車外に飛び出てコンビニを足早に目指す。来客ベルと共に雑誌コーナーに向かい、ウィンドウを背にした雑誌ラックから無造作に一冊を抜き取った。立ち読み客に混じって無意義にページを開き、あたかも立ち読み客を装うかのように振る舞い店外の様子を窺った。幸いにもここからは代々木一丁目交差点の五差路が一望できる。ページの間にインカムを忍ばせマイクだけが頭を出す状態で被疑者を待ち続けた。

対向の歩道を注視し雑誌を握る手に自然と力が入る。三度、被疑者の姿が目飛び込んできた。灯りの消えた営業後の喫茶店の前を通り過ぎたものの右に曲がる気配はない。手前に植え込みのあるビルに差し掛かると同時に被疑者の進行方向が急変し、植え込みに沿うように右に折れ曲がった。この先には小田急小田原線の小さな踏み切りがある。

「妙典さん！ 真壁さん！ …マル被、二丁目に入りました。小田急小田原線の踏み切りを渡る模様。…北代々木小学校方面に向かうと思われます」

間髪入れず『了解。…先回り試みる』との妙典の声がインカムのヘッドホンから届く。ホッと一息ついた河口は手にした雑誌を閉じ、元の位置に戻した。おもむろに雑誌の表紙を見やると「投稿！ 人妻歡樂温泉50連発！！」という文字が目に入る。これ以上ない恥ずかしさと気まずさが込み上げ、河口は赤面し俯くしかなかった。

「なあ、真壁え。お前の携帯で地図見れるだろ？」

「え…ええ、見れますが。妙典さんのだってGPS付いていますよね？」

「う、うるせえっ！ごちゃごちゃ言っただけで、早ええとこ地図見せるやつ！」

真壁は渋々内ポケットから携帯を取り出し開いた。左の親指を小刻みに素早く動かし暫らくの間の後、妙典に告げる。

「…出ました。妙典さん」

真壁が手を返して携帯を向けると妙典は首を伸ばして覗き込んだ。「ん？この二重丸が現在地か？」

「そうですね。二丁目35…まさしく北代々木小学校前です。…河口警部補の話から察するに、小田急小田原線南新宿駅から若干外れた踏み切りを渡って代々木二丁目に入った様ですから、この道を直進していると思われます」

真壁は液晶画面を指差し妙典に分かるように地図上の道を辿った。すると妙典は何かに気付いたかのように呟いた。

「なあ、昨日最後に行った雑居ビルってここだよなあ？」

妙典は液晶画面にはつきりと指紋が残るくらいの圧力で指を差し、やや迷惑気に真壁は答えた。

「そ…そうですね。…確か、代々木二丁目32の雑居ビルでした」

「…てえと…真っ直ぐここに向かってることになるわなあ。…ここら辺、他に映像会社の入居するビルってあったっけか？」

妙典の言葉に反応し真壁の頭が急速に回り始めた。

「あ…あります。その前の犯行現場は二丁目34で…32の近辺には他にも映像会社の入居するビルがひとつだけありました。…それも対向かいにっ！」

「そこ臭くねえかあ。…しかし何でまたわざわざ南新宿まで行って遠回りするんだろっなあ？…千代通り入り口からまっすぐ行けばすぐじゃねえか…」

真壁は眼鏡のブリッジを押し上げ妙典に向き直った。

「犯行、特に窃盗や放火などを行う者は比較的に見通しの良いまっす

ぐな道を嫌います。やましいと思う心理が働くからでしょう。河口警部補の示した道は程よく右に曲がっています。千代通り入り口からだと道幅も広く直線で見通しも良いです。…この道を通るのは、犯罪心理学上いたって正しい動きですね」

「ほお、流石は変態オタク眼鏡小僧！ …そういうことはやけに詳しいなあ」

妙典は液晶画面から顔を逸らし真壁の顔をマジマジと眺めた。携帯を片手に上目の真壁は妙典と目が合った。

「妙典さん、警察学校で習いませんでしたか？」

「ん？ …そんなの習ったっけ？」

「習いました。基本中の基本です！」

ふて腐れた妙典はポケットに両手をつ込み、顎を左に向け叫んだ。

「河口さん！ 聞いてるか！？ 代々木三丁目から西新宿方面回ってマル被が通った道を逆走してもらえねえか！」

しばらくの沈黙の後、ノイズ音が聞こえくもった河口の声がイヤホンから響く。

『 …聞いております、妙典さん。 …何故そんなことを？ 』

「おそらくマル被は先週の犯行現場の対向かいのビルに向かっつもりだ。それを現認してもらいてえ。それと二丁目32に追い込んでもらいてえんだっ！」

イヤホンの向こうでガシャガシャとしたノイズ音が聞こえる。河口が地図を広げ位置を確認していると思しき音であった。ノイズ音がいささか小さくなりイヤホンから声が飛び込んできた。

『 了解しました。 …二丁目36辺りでハザードランプを点滅させ停車させます。張り込み状況は逐次報告致します 』

「河口さん、よろしく頼む」

妙典は河口に応答し、再び真壁の携帯に目を向けた。

「 …で、真壁よお。昨日行った雑居ビルって何て名前だったっけ？」

「 …確か“北代々木ヒルズ”でしたね」

「ええ！？ あんな、きつたねえビルのくせして、そんな洒落た名前つけてんのかあ？ ……まあ、いいや。そこに行くにやあ、どう行けばいい？」

真壁は携帯を顔に近づけ液晶画面を凝視した後、舌打ちをした。

「妙典さん。…残念ながら一旦小田急小田原線を越えて大回りしないといけませんね。…でないとマル被と鉢合わせます」

妙典は両手をポケットから出し、半ば諦めたような口調で告げる。
「…つたく、しょうがねえなあ。…突っ走るしかねえか。まあ、まさに“Run To The Hills”つちゅう訳だな」

それを聞き終えた真壁はパターンと閉じた携帯を内ポケットにしまい、小田急小田原線高架下を指し一目散に走り出した。

「妙典さん！ こつちですっ！！」

一瞬出遅れた妙典も全力で走り出した。

「真壁えっ！ てめえっ！ ……勝てると思うなあ、小僧おっ！」

思わぬ台詞を耳にした真壁は一瞬ではあるが腰が砕け、走る速度がガクンと落ちた。追い付いた妙典に真壁は顔を向けることなく問うた。

「…妙典さん。…まさかシロッコをご存知で？」

「何だそれ？ ……甘いのか？」

「…安心しました。今の台詞、パプテマス・シロッコの名言なんです」

二人の刑事は薄暗い高架下を通過し、人っ子一人いない寂れた商店街を駆け抜けた。

北代々木ヒルズ。名ばかりの古びた雑居ビルの郵便受けの前で、妙典と真壁は張り込んでいた。ステンレス製の郵便受けの幾つかは扉が外れ、郵便物の幾つかも床に散らばっており、投げ込みチラシを踏み締める度に埃が散在しカビ臭さも鼻につく。かろうじてガラス戸の扉だけは最低限の雨風はしのぐものの隙間風が埃とカビの匂いを舞わせる一因となっていた。

エレベーターは一階で停止したままで動く気配さえ見受けられない。全てのフロアも消灯されており薄暗いというよりも真つ暗な建物内に警察手帳を携えた二人の男だけが薄汚れた壁に寄りかかって並び立っていた。この位置からだと対面の雑居ビルのゴミ集積ボックスが一望できるのだ。今件のアカネコの習性からすれば同じ現場で二度犯行は行わない。二丁目32に追い込みさえすれば対面のゴミ集積ボックスに行き着くはずである。そこで犯行を行えば……いや犯行に及んだ瞬間に取り押さえれば現行犯で逮捕できる。何ということはない。警官として幾度もこのような現場に遭遇している。今更臆することもない。ただ、ひとつ不安要素があるとすれば、予期せぬ邪魔が入ることだ。昨夜の後ろ向きキャップのような男が現れないことを祈るばかりである。

ようやく暗闇に目が慣れてきたお陰でお互いの位置関係を目視できようになった。今は河口警部補からの連絡を待つのみである。妙典は左手で透明チューブイヤホンをあらためて固定し直し、真壁は眼鏡のフレームを右手の親指と中指で挟みグツと奥へ固定し直し、対面のゴミ集積ボックスを注視した。

イヤホンから発せられたノイズ。河口警部補に何か動きがあったのであるうか？

『……こちら河口、二丁目36。マル被現認』

妙典は息を潜め、河口の声を待った。真壁は目を閉じ、口を噤ん

で天井を見上げた。

『マル被、ハザードに気付いた模様』

暫しの間があり、河口は続ける。

『マル被、二丁目32方面に右折。そちらに向かうと思われる』
『妙典は左胸のピンマイクを人差し指でちょんちょんと二回叩き「了解」との合図を送った。遂にアカネコを追い込んだ。後はここでその時を待つだけである。もはや若手とは言えない歳ではあるが漲る緊張感を実感した。真壁に顔を向けると無理に目を合わせ緊張している様子が窺える。真壁にわざと見えるように口元を大きく緩め、再度ガラス扉の外へ顔を向けた。』

すると手前側から新聞を小脇に抱えたジージャン姿の男がゆつくりと歩んできた。名前負けする北代々木ヒルズの前で一旦立ち止まり、ゴミ集積ボックスを見渡しているようだ。先週の犯行現場を想起しているのだろうか？ ……幸いにもガラス扉には一度も目をくねず、フロアの灯りだけを確かめるようにビルを見上げている。その顔を見る限り西川であることは目認できた。

「アカネコ、二丁目32にて現認」

『……………』

河口の発するノイズ音だけが耳に入った。河口の緊張感も尋常でないことが十分に伝わってくる。

ジージャンの男は顔を前に戻し、再びゆつくりと刻むかのように歩き始めた。妙典と真壁はアカネコの姿を目で追う。同時にいつ何時でも飛び出せるよう膝と踵に力を込めた。

アカネコは対面の雑居ビルに向かう。同じくフロアの灯りを確認するように建物を一瞥しながら歩き続ける。一度雑居ビルの前を通り過ぎ、人が居ないことを目視したアカネコは踵を返しゴミ集積ボックスに歩を向けた。ジャケットの右ポケットに手をしのばせ柄の長いデイスプーザブライターをまさぐり出す。ゴミ集積ボックスの前で立ち止まり、小脇に抱えた新聞紙を左手に持ち直した。新聞紙の不自然な厚みに妙典と真壁は気付く。C-4は新聞紙の間に挟

まれているに違いない。ディスプレイライターを持つ右手でゴミ集積ボックスのスライド式の蓋を開け、折り曲げた新聞紙を身体全体で覆うようにゴミ集積ボックスの中に身を乗り出した。ディスプレイライターをカチカチとする仕草が見受けられる。妙典と真壁は埃っぽくカビ臭い建物から飛び出そうとガラス扉に手をかけた。

そこへ夜警の制服警官が悠長に自転車に乗って北代々木ヒルズの手前側から現れた。

「こちら二丁目32。アヒルが来た！」

妙典は静かにピンマイクに向け叫んだ。

『アヒル！？ …制服警官ですか！？ …しまった、そこまで手配は…』

河口の焦る声がノイズ雑じりに聞こえた。今、飛び出すことはできない。ガラス扉越しに状況を見守るしかなかった。

アヒルはゴミ集積ボックスのアカネコに気付き自転車を止め叫んだ。

「お前っ！ 何やってるんだ！？ …例の連続放火魔か！？」

その声にあカネコは振り向き、ディスプレイライターを片手にアヒルがまたがった自転車を強引に押し倒し走り去った。もんどりうって倒れたアヒルは頭と膝を強打し、起き上がれずにいる。痺れを切らした妙典と真壁はガラス扉を勢いよく開け、埃っぽくカビ臭い北代々木ヒルズから飛び出しアヒルの元へ駆け寄った。妙典はアヒルの首根っこを両手で掴み、引き立たせた。

「おいっ！ てめえっ！ 何てことしやる！」

朦朧とするアヒルは眠気眼で立ち上がり、妙典の背後で警察手帳を広げる真壁を見て事を察知したようである。

「本署の方ですか？ …本官は代々木二丁目交番の天谷巡查であります」

帽子は転げ落ち、ボサついた髪も気にせず敬礼をする天谷の首を揺さぶり妙典は叫んだ。

「馬鹿野郎っ！ 本署じゃねえっ！！ 本庁だっ！」

「…いや、本官はただ連続放火魔と思い…」

配属間もないと思しき若い警官を責める事はできない。真壁は妙典と若い巡査の間に左腕で割って入った。

「妙典さん。こんなことしている場合じゃありません。巡査は最善の事を行ったままで…。若さゆえの過ちというものです！」

落ち着きを取り戻した妙典は天谷の首根っこからゆっくりと両手を離した。

『どうしました！？ 妙典さん！』

河口の慌てた声がイヤホンに響いた。

「河口さん、すまねえ。…取り逃がした」

妙典はそう言うや否や巡査の自転車のまたがりペダルをひと漕ぎした。しかしペダルは空回りするばかりである。押し倒された衝撃でチェーンが外れたようであった。

「ちっ！ …よくよく運のない男だな。てめえも…俺様も…」

妙典は自転車を蹴り倒しピンマイクに叫ぶ。

「河口さん、今からアカネコを追う！ 駅前を固めておいてくれねえか！」

『了解です。…木下は西口にて待機。石田は北口へ移動。西川を見たらすぐさま取り押さえる。駅前交番の職員に協力要請も認可っ！』

河口の適切かつ迅速な指示を耳にした真壁は若き巡査に静かに告げた。

「ゴミ集積ボックス内の新聞紙と粘土状のC-4を証拠物件として確保して下さい。ただ、いかなる時も予想外の事は起こるもの…それだけは肝に銘じておいて下さい」

敬礼する天谷の姿を見届けた真壁は妙典に向き直った。

「…で、妙典さん。アカネコ…いや西川はどこに？」

暫し思案に耽る妙典は顎を杓った。

「逃げた方向から考えて、小田急には逃げ込まない。JR代々木駅は二人が待ち構えている。…最悪のケースだが…自社だ。自社のあ

るU2ビルだな」

「向かいますよう、妙典さん！」

「間に合うかどうか分からねえが…行くしかねえな。…逃す訳にはいかねえ！」

「突貫します！」

未だ動転している若い巡査を置き、妙典と真壁は代々木一丁目のU2ビルに向かって走り去った。

薄暗い小田急小田原線の高架下を駆け抜け、明かりの灯る寿司屋を左に曲がった。死に物狂いで走れどもアカネコの姿は見当たらない。完全に見失った。無駄に時間を浪費した事は間違いない。それとも目測を誤ったか？…U2ビルでないとしたらどこだ？…しかしU2ビル以外に西川の逃げ込める先はない。あくまでそれは最悪のケースに過ぎないのだが…。

全力で走りながらも妙典は頭を張り巡らせた。

「もう…時間がねえ…」

ポツリと漏らした一言に真壁は反応した。

「…時間がないって？ どういうことですか？」

妙典は頬をつたう汗を拭い真壁に答える。

「奴は死ぬ気だ。…自社もろとも焼け死ぬ気だ」

「ま…まさか？」

「大マジよお。奴がただの放火魔なら別だが、…C-4の処分に困つての犯行だと思われ。…ならば証拠品もろとも消し去るつもりに違いねえ。何らかの事情があつて押し付けられたんだろ…多分」

「…いつも二手三手先を考えて行くものだ。…そういう事ですか？」

「へっ！…考えてたら、こうやって走っちゃいねえがな！」

代々木一丁目41の交差点にさしかかろうとした時、右手から一台のワゴン車が飛び出し軋むタイヤの音と共に急停車した。左側のサイドガラスが下がり男の怒鳴る声が響く。

「妙典さん！ 真壁さん！ 乗ってくださいっ！」

声の主は河口だった。真壁と妙典はスライド式のドアを開けワゴン車に飛び乗り、様々な機材と地図を押しつけシートに腰掛けドアを勢いよく閉めた。

「河口さん、恩に着る！」

珍しく妙典が礼を言うのを真壁は聞き漏らさなかった。

「…行ってもらいてえのは…」

妙典の言葉を遮るように河口は言い放つ。

「U2ビル！ 代々木一丁目24のU2ビルですよ。…もう時間はありません！」

妙典と同じく最悪のケースを想定していた河口はそう言うや否やアクセルを踏み込み、ハンドルを大きく右に切る。妙典と真壁の体は鋭く左に揺らぎ、タイヤを軋ませ大きな弧を描いたワゴン車は千代通り入口方面に向かった。

ワゴン車はU2ビルの正面で停車した。エンジンを切った河口はインカムを外し首からぶら下げる格好でU2ビルを見上げる。

「どのフロアも明かりが灯っていませんが、ここにいるのでしょうか？」

「さあ？ ここに居たら間違いなく最悪の状況ですが、河口さんいつもの調子で階級の上下など気にしない妙典が口を開いた。真壁も不審に思い河口に問う。

「代々木駅で張り込む石田さんと木下さんからは？」

「…まだ、何も」

暫くの沈黙の後、妙典はスライド式ドアを開けた。

「考えても仕方ねえ。行くぞっ！ 変態オタク眼鏡小僧っ！」

妙典は足早にワゴン車を降り、真壁も無言で続いた。

「妙典さん。自分も同行します」

折り畳んだインカムを胸ポケットに押し込んだ河口はサイドドアを閉め妙典に向いた。

「じゃ、向かいますか。…警部補殿」

妙典はややうつむき河口と真壁に一瞥をくれることもなくU2ビルに歩を進めた。真壁と河口は妙典を挟むかの様に後に続いた。

やはりどのフロアも消灯している。人の居る気配がまるでない。ビルの入り口で妙典は突如立ち止まった。

「どうしました？ 妙典さん」

異変に気付いた真壁に妙典は呟く。

「やっぱ夜の建物って怖ええよな？ …マジで“Fear Of The Dark”だなあ」

夜の学校を怖いと言って、今度は無人のビルを怖いと言う。とても修羅場をくぐってきた刑事の言葉とは思えなかったが、真壁は妙典の純粹さを見たような気がした。

ガラス扉に手をかけ一足先に妙典が中に入り、歩を進める。真っ暗な屋内で硬い足音だけが響く。真壁と河口も続けて足音を響かせた。

「…河口さん。最悪の状況みたいですね。…エレベーターが五階で止まってる」

ぶつきらばうな妙典の言葉に真壁と河口は「5」で光るエレベーターランプを目の当たりにした。アカネコ・西川拓朗がU2ビル五階のムーヴイン・オン映像に居ることを「5」で光るエレベーターランプによって証明された。妙典と河口の言うところの最悪の状況である。しかし真壁だけは未だその状況を把握できていない。妙典はボタンを押しエレベーターを作動させる。メインロープが軋みガイドレールを滑るかこの音が微かにではあるが徐々に大きくなり、やがて到着を知らせる音と共にドアが開いた。三人は無言でエレベーターに乗り込み正面を向いた。真壁は「5」と書かれた丸いボタンを親指で押し、続けて「閉」ボタンを押そうとする前にドアは閉まった。定員六人、容量450kgの古いエレベーターは軋むメインロープの音と共に三人を五階まで運んだ。チーンという音と共にドアは開き、三人はエレベーターから足音を立てずにゆっくりと歩み出た。背中ではドアの閉まる音と風圧を感じ、妙典は「(株)ムー

「ヴィン・オン映像」と明記された扉のノブに手をかけ勢いよく開いた。真つ暗闇の部屋の奥でゴスンという物音が聞こえ滑り込むように三人は中に入った。

プーンと灯油の匂いが鼻につき、最悪の状況の意味を真壁も理解した。真壁は壁伝いに電灯のボタンを手探りで見つけ、明かりを点ける。そこには黒いジージャンに身をつつんだ温厚そうな丸顔の男が灯油のポリタンクを抱えて、こちらを鬼気迫る形相で睨んでいた。「な…何者だあ？ お前らあっ！」

西川はポリタンクを揺さぶりながら叫んだ。妙典は警察手帳を広げ大声で返す。

「警視庁捜査一課の妙典だ！ …西川…西川拓朗だな？」

「け…警察かよあつ！ 何の用だっ？」

「非現住建造物等放火及び現住建造物等放火の罪で現行犯逮捕する！」

西川は不敵な笑みを浮かべ、ポリタンクの灯油を撒き散らす。

「逮捕あ？ …逮捕なんかさせねえぞ！ 俺は被害者なんだからな！」

意味不明な言動をする西川はもはや危険な状態であった。妙典は警察手帳をかざしたまま西川にゆっくり近づく。

「…と思ったが、やめた」

妙典は警察手帳を背後に投げ出し言った。警察手帳が足元に転がり真壁と河口は呆気にとられはしたが、万が一に備え右手をスーツの左裏にしのばせシヨルダーホルスターのグリップを握る。呆気にとられたのは真壁と河口だけでなく西川も同様であった。

「じゃあ…何しに来たんだよ、刑事さん？」

西川の言葉が耳に入らないのか、遮断しているからなのか定かではないが、妙典はピンマイク、イヤホン一式、携帯電話、財布を続けて背後に投げ捨てた。興奮した西川はポリタンクをぶち撒き、声を張り上げる。

「な…何してんの！？ 逮捕しに来たんじゃないのっ？」

意に介さない妙典はヒップホルスターまでも外し床に投げ捨てた。
「これもいらね！」

「うぐああああーっ！」

丸腰になった妙典に恐れ戦き言葉にならない言葉を発する西川はポリタンクを投げ出した。ポリタンクは妙典の足元に転がる。妙典は灯油が滴り落ちるポリタンクを拾い上げ両手でかざした。瞬間、妙典はポリタンクを逆さに向け頭から灯油を被った。全身が灯油塗れになり、髪の毛の先からも油の雫が滴り落ちる。

その様を見届けた西川は右手に持った柄の長いディスプレイライターを顔の前に突き出し呟く。

「お前、馬鹿じゃねえの？ ……これ点火したらどうなるか、分かってんの？」

「…警官殺しだ」

妙典は静かに言い放ち手近にあるデスクテーブル上の灰皿を手に取った。

「これ、借りるぞ」

妙典はステンレス製のへこんだ灰皿を片手に、あぐらを組みしやがみ込んだ。ジーンズのポケットから青い小さな包みを取り出し、右手の平に挟んだ煙草を一本、指で引き出そうとする。しかし油でぐしゃぐしゃになった煙草は思うように出てこない。青い包みを左手に持ち替え、右手の指でほじくり、ようやく一本を引っ張り出した。

「な…何してんだ？ お前っ！」

不審に思った西川はブルブル震える手でディスプレイライターを垂直に構えた。

「えっ？ 何って、一本吸わせてもらおうかと思ってな」

「そ…そんなことしたら、どうなるか分かってんのか？」

「…お前こそ、分かってんだろ？」

素っ頓狂に答える妙典は油に塗れた煙草を咥え、ジーンズのポケットをまさぐり始めた。前後左右…全てのポケットをまさぐり淡い

紺色の紙マツチを取り出した。

「今更聞くが、ここ禁煙じゃねえよな？」

妙典は紙マツチを一本引き千切り、茶色い擦る部分に平行に宛がう。「喫茶ヴァンデンバーグ」と印刷された淡い紺色の外紙で挟み込んだ。

「や…止めるおおおー！」

西川は奇声を発し垂直に構えたディスプレイライターを両手で握り締め、ブルブル震えて窓際の壁にもたれ掛った。

「お…お前、死にたいのかあ？」

今にも泣き出しそうな声で西川は叫んだ。

「…俺様、何て言われてるか知ってるか？ …捜査一課では“不死身”って言われてる」

「ふ…不死身なんて、あるものか！？ …人間誰だつて死ぬんだ！」

「…ところが俺様は死なねえ。…至近距離でぶつ放されても、猛スピードで激突しても、高圧電流流されても、高い所から飛び降りても、刃で斬りつけられても…ほれ、まだ生きてるぜ」

西川が震える手で握るディスプレイライターだけがカチャカチャと音をたてていた。静まり返る中、グリップに手をやる二人の刑事が事の成り行きを見守っている。

“Fight Fire With Fire”。油でずぶ濡れた妙典の背中にはそう書かれている。まさに“火でもって火を征す”。真壁の目には嫌でも妙典の背中が大きく焼きついた。

「お…お前…く…狂ってる」

妙典の獲物を狙うかの様な眼差しに怯えた西川は小声で震え呟いた。妙典は淡い紺色の外紙のふたで挟み込んだ紙マツチを今一度強く握った。

「や…やめろ…止めるお。頼むからやめてくれ…」

顔の前でディスプレイライターをカチャカチャ震わせ虫の息のような声で西川は祈りにも似た口調で言った。暫しの間があり、妙典は口元を緩め外紙のふたで挟み込んだ紙マツチを勢いよく真横

にスライドさせ引き抜いた。

「ぐわああああー！ やめるおおおーっ！」

断末魔とも思える西川の叫びが部屋中をこだまし、窓際の壁に寄り掛かったまま床にへたり込んだ。ディスプレイライターは西川の手を離れ床に転げ落ちる。妙典が手にする紙マッチは燻った煙だけを残し火は灯っていなかった。

アカネコ・西川拓朗は落ちた。

「21時14分、被疑者・西川拓朗、代々木一丁目24、U2ビル五階、ムーヴイン・オン映像にて身柄確保。…緊逮及び消防の手配要請」

河口は胸に挿したインカムのマイクに向かって言った。河口は西川のもとへ、真壁は妙典のもとへ駆け寄る。

「…つたく。佐藤さんとこのマッチ、点きが悪いよなあ。…まあジジイだから仕方ねえか…」

相変わらずの悪態をつく妙典の姿に真壁はホッと胸を撫で下ろした。その背後で手錠を締める音が聞こえる。

「なあ、西川さんよお。…何があつたんだあ？」

薄手のゴム手袋の上から手錠を締められ、張り詰めた全身の力が抜けグツタリする西川に妙典は言葉を投げかけた。

「…刑事さん。すいません。…知らず知らずのうちに悪に手を染めていたんです」

しゃがみ込む二人の間に初めての会話が成立した。

「俺ら映像屋は1月から3月が稼ぎ時。民放の改変期前が一番忙しいんです。…でも制作費の削減で一向に仕事は回ってこなかった。

…でAV。ピンククリーム69というアダルトビデオの会社から依頼があつたんです。本当はやりたくはなかったんですが、背に腹は変えられない。…それで受けたんです、その仕事。…ところが支払期日の3月10日になつてもギャラは振り込まれない。連絡をとつても連絡がつかない。翌日、心配になつて渋谷のピンククリーム69の事務所に行つてみたら、もぬけの殻でした。…騙されたんです」

油で湿った煙草を啜えながら妙典は続けた。

「…で、C-4はどこから？」

「契約時に久木というピンククリーム69の社長から木彫りの像を贈られたんです。商売繁盛のお守りだとか言って、後日国際便で…。でも、騙されたと分かって自暴自棄になった自分は、その木彫りの像を投げつけました。そしたら、中からプラスチック爆弾が出てきたんです。…最初は警察に届けようと思いましたがよ。けど、そんなことしたら家族にバレてしまう。…人に誇れない恥ずかしい仕事に手を染めたことを…」

「…それで処分に困ったって訳か」

「そ…そうです。…以前、取材でプラスチック爆弾で暖をしのいだという逸話を聞いていて、燃えることは知っていました。それで少しずつ燃やして処分しようとしたんです」

「でも何で同業者の所で燃やしたんだ？」

「…確実に人がいないのは分かっていました。同じ映像屋ですからね。…でも、やっかみもあったと思います。ウチには回ってこない仕事が終わらには回ってきてたんです。結局、ウチは借金がかさみ、来月には差し押さえです…全部」

妙典は啜えた煙草をペツと吐き出しあぐらを組んだまま両手をついて後ろに仰け反った。

「もう十分だよ。…西川さん」

外がけたたましくなり、暗がりの向こうから赤いパトライトが近づいて来るのが分かった。

「さあ、行こうか…」

河口は西川に声をかけ、立つよう促した。西川も黙って立ち上がり、妙典と真壁の前を通り過ぎた。二人もそれに続き非常階段に向かう。警察と消防の入り乱れたパトライトが眩しく感じる。非常階段を下りながら妙典は西川の背中に声をかけた。

「西川さん。あんた偉いよ。…そこまでして家族を養おうとしたんだろ？」

西川は無言で非常階段を下りきつた。眩いパトランプの中を警察と消防の人間が行き交い、西川は立ち止まった。背中越しにビルを見上げる仕草を暫くした後、石田と木下が待つパトカーに乗り込んだ。それを見送る、妙典、真壁、河口の三人の刑事。

「…妙典さん。真壁さん。今件では大変お世話になりました」

三人の中では最も階級の高い河口が深々と頭を下げた。

「い…いえ、こちらこそ。お役に立てて光栄です」

取り成す様に真壁も頭を下げたが、妙典は相変わらず両手をポケットに入れて踏ん反り返っていた。そして何かに気付いて叫び声をあげた。

「真壁えっ！ 俺様の財布とか携帯とか手帳とか銃とか、上に置いてきたまんまだよなあ！？ 今すぐ取って来いや！」

「ああっ！？ は…はいっ！ 今すぐ取ってきます」

真壁は踵を返し警察と消防が入り乱れる人波の中に駆けゆき、紛れた。それを見守る河口は微笑ましい表情で妙典に言った。

「息の合ったいいコンビでいらっしやる。もうお二人は長いんでしようっ？」

「いや、河口さん。…それがまだ二日目なんだ、これが…」

「えっ！？ とてもそうには…。それにしても妙典さん。あなたは今どき珍しいぐらいにとても熱い人間です。自分は感動しました」

暫しの間があり、反り返る妙典は答える。

「いや、河口さん。…それが灯油被って、今めっちゃ寒いんだ、これが…」

「そ…それは大変じゃないですか！ 早く乗って下さい！」

妙典は河口に覆面ワゴン車へ押し込められた。車内で震える妙典を乗せたワゴン車はパトカーと消防車と野次馬を蹴散らし走り去る。

“スモーク・オン・ザ・ウォーター”。おそらく世界で最も有名なギターリフで始まる名曲であろう。エレキギターを一度は手にした者ならば必ず真つ先に弾きたくなるリフレインである。コードそのものはたいして難しくはなく、寧ろ簡単なコード進行だ。しかし、これが滅茶苦茶かつこいい。それ故、ギター小僧ならば誰しもが一度は弾き、そうでない者でも知っているフレーズである。そのフレーズを口ずさむ妙典はシャワーの熱い湯を頭から被っていた。

真壁に渡されたボディブラシと洗剤を使い全身の油をくまなく洗い落とす。しかしどうも泡立ち方が変だ。とても身体を洗う洗剤とは思えない。いくら擦っても思ったほど泡が立ちやしない。シャワーの湯から立ち込める湯気の向こうに謎の洗剤の容器が見える。「除菌プラス」との文字が目に入り、その上面に視線を移した。「しつこい油污れに、しつかり洗浄、除菌もできる！」と書いてある。ひよっとして、これって換気扇やレンジの油污れを落とす洗剤であつて人間用の物じゃないんじゃないか？…通りで体がカピカピになる訳だ。まったく人を汚物扱いしやがって…。あの小僧、なかなか舐めたことしてくれるじゃねえか…。

妙典は全身の泡を洗い流す。備え付けの人間用のボディソープを一押しし直接肌に擦りつけた。やっぱり泡立ち方が全く違う。流石は人間用だ。すべすべ感が違うじゃねえか。

妙典はバスタオルを腰に巻き、宿直用のシャワー室から出てきたコンビニの袋を携えた真壁が立っており、袋の中から下着と靴下を妙典に手渡す。

「妙典さん、あいにくこの時間ではコンビニしか開いていませんでした。…トランクスで良かったですね？」

「…気が利くじゃねえか。よくトランクス派だと分かったなあ？」

「お茶くみ三年…。刑事の世界では当たり前じゃないですか？…先輩刑事の嗜好や心理状態をつかむこともできず、犯罪者の心理を見抜くことなど不可能です」

「ほう。…じゃあ、あの洗剤も嗜好や心理状態をつかんでの選択か？」

真壁はコンビニ袋を片手でクシャッと握り潰し、バレたかとはばかりに視線を外した。

「…普通のボディソープでは油は落ちないんです。それで仕方なく…」

トランクスを穿き終えた妙典は腰に巻いたタオルをとり、頭を拭き始める。

「お陰で年末の大掃除…しなくて済みそうだ。…で、着る物はねえのか？」

「一応、石田さんには頼んでおきました。あまり…若者をいじめないでいただきたい」

気まずい面持ちの真壁はコンビニの袋を両手で握り、口をへの字に曲げた。そこへビニールに包まれた衣類を手にした石田が駆けつける。

「妙典さん！ すいません。今はこれしかありませんでした。…防災用のフルテクト・ジャージです」

妙典は薄いブルーのジャージを受け取り、ビニールから取り出した。ジャージを広げマジマジと眺める。

「仕方ねえ。ないよりはマシか…」

妙典は薄いブルーのジャージパンツを穿き、ジャケットに袖を通した。ジッパーを胸元の下辺りまで上げ、両手をポケットに突っ込む。

「なんか、ひとりだけ修学旅行みてえだなあ…」

「抗ウイルス効果もあり、パンデミック対策も万全です！」

自慢げに話す石田に「また汚物扱いか…」との眼差しを妙典は向けた。

「ところで妙典さん。携帯、鳴ってましたよ」

真壁は妙典の私物の入った籠を拾い上げ、差し出し言った。着信を知らせる小さい紫のランプがゆっくりと点滅している。妙典は携帯を手に取り、開くと同時に苦虫を噛み潰すかのような顔をする。

「ちっ！ 親父かよ…」

妙典は着信履歴から発信を押し、携帯を耳に宛がった。暫くの間、口を開く。

「…ああ…俺だけど…」

「ひろみちいいいいー！」

携帯の向こうから、ドスの利いた太い叫び声が漏れ伝わった。妙典は一瞬携帯を耳から遠ざけ叫びがおさまるのを待つ。

『阪神：また負けおったぞおっ！ またしても三浦にやられたあっ！ お前の行いが悪いからじゃあああー！』

「…あのなあ、こつちも忙しいんだ。戯言なら後にしてくれや…」
妙典は半ば呆れた口調で返した。

『…おお、そうじゃ。大事な用件を忘れるとこじゃった』

落ち着きを取り戻した電話の向こうの声は本題を話し始める。

『博道：大変なんじゃ。…仏像が盗まれた』

「はああー！？ 仏像ってウチの寺のか？ …それじゃ、商売にならねえじゃねえか…」

妙典は完全に呆れた口調になっていた。

『博道。お前、警察だろ。何とかしてくれっ！』

「県警には連絡したのか？」

『…もちろん電話したが、頼りにならん。…だから、お前に電話したんじゃ』

「あのなあ、便利屋じゃねえんだぞ！ こつちは…」

『あの仏像が無ければ、ダメ虎まっしぐらじゃ！ それでもよいのか！？ お前は！？』

「…ったく、…分かったよ。そっち行くから勘弁してくれや！」

『おう！ 待つておるからな。阪神の命運はお前の行いにかかっ

るからのお!」

「…じゃ、お袋に伝えてくれや。着るもん用意しといてくれってな…」

すっかり意気消沈した妙典は携帯を閉じ、手近な長椅子に腰掛けた。籠を携えたままの真壁が声をかける。

「ご実家が大変なようです…」

真壁を見上げる妙典は再び携帯を開き、耳に宛がった。

「…ああ、係長。アカネコ捕まえたんで…明日、休暇貰っていいすか? …ええ、妙典と真壁の二名です」

思わぬ言葉を耳にした真壁は籠を持ったまま驚きの口調で妙典に詰め寄った。

「みよ…妙典さん、何を勝手に!?!」

妙典は詰め寄る真壁を右手で制し通話を続ける。

「…つつす。ありがとうございやす! …オツケーであります」

パタンと携帯を閉じた妙典はうつむいたまま静かに真壁に告げる。「まあ、そういう訳だ。ちよっくら付き合えや。…タダ飯にはありつけるぞお」

呆れたと言わんばかりに真壁は大きく鼻を鳴らした。

「…分かりました。…ここで止めたら、自分が自分で無くなっちゃう」

地下駐車場に戻ってきた。ヒップホルスターを左肩に掛け、悪役レスラーの様な井出達の妙典は四人の刑事に囲まれ地下駐車場を歩く。スーツ姿の中に一人だけジャージを着た男があり、端からすればまるで妙典が護送される容疑者かのように見える。

「妙典さん。ジーパンとTシャツはちゃんとクリーニングし、後日本庁の方へお届けします」

河口の言葉に軽く右手を挙げ、礼をする妙典は歩を緩めることなく青いGT-Rに向かった。

「妙典さん、真壁さん。無事検挙することができました。本当にあ

りがとうございました。」

河口はGT-Rの袂で深く一礼し、石田と木下も続いて頭を下げた。

「こちらこそ、尽力できまして光栄に思います」

真壁も一礼し、お互いの労をねぎらった。悪役レスラーは我関せずの様子で青いGT-Rの助手席のドアを開け、そそくさと乗り込んだ。

「おらあつ！ 真壁え、行くぞ！」

真壁は慌てて運転席のドアへ回り込み、再度頭を下げてGT-Rに乗り込んだ。シートベルトを引き下ろし、シート脇の赤いエンジンスタートボタンを押すとV6ツインターボを搭載したエンジンが唸りをあげ、ヘッドライトが灯る。青いGT-Rは右に曲がり静かに走り始めた。ルームミラー越しに一礼をする河口、石田、木下の三人の姿が小さくなってゆく。小さいループを上りきり、敬礼する立ち番の脇で停車するGT-Rの中、真壁は問いかけた。

「…で、妙典さん。どちらへ向かいます？」

「千葉の山奥だ」

妙典は明治通りを右に指差した。

「しかし、さつきまでとは違って静かな夜だなあ…」

妙典の言葉に反応した真壁はお茶くみ三年の精神で慌ててダッシュボードをいじくった。入れっぱなしだったボン・ジョヴィのCDが回転を始めたものの操作を誤り何曲か前に戻ってしまった。

「おつ！ “Silent Night”か…。変態オタク眼鏡小僧の割には、なかなか気が利くじゃねえか…」

妙典はパッセンジャーシートに深く寄り掛かり、静かなキーボードで始まるその曲に身をまかせた。真壁はハンドルを右に切り、明治通りに進入する。V6ツインターボの奏でるエンジン音が、けやき並木の続く静かな夜の明治通りを渋谷方面に向け駆け抜けていった。

“龍勢寺”。庵の様な小門の脇に打ち付けられた、その文字をペンライトの小さな灯りが照らし出していた。それを確認し終えた防寒用の目出し帽を被った男は茂みに挟まれた石畳の階段を静かにではあるが足早に駆け上がってゆく。山奥の山陰だけあって夜九時半ともなると辺りは真つ暗で、石畳の不規則な階段に躓かないよう男は細心の注意を払った。階段を上りきると立派な門があり、閉門はされていなかった。敷き詰められた砂利の上、音を立てずゆるりと足を踏み入れる。田舎の山寺は殺風景極まりない。月明かりだけで境内の様子が窺える。真つ先に目に飛び込んで来たのは本堂だった。奥には釣鐘と母屋と思しき灯りが見え隠れし、幾つかの石碑を通り過ぎ本堂を指す。男は灯ったペンライトを片手に本堂正面の階段を慎重に上り始めた。木製階段の微かに軋む音が耳に触るものの風に揺れる木々のざわめきに掻き消されることを願い、一段々爪先に力を込め、静かに踏みしめ上る。ペンライトを口に咥え、本堂の扉を両手でそろりと横に開いた。月明かりと口先のペンライトが本堂の内部を照らし出し、さほど大きくはない仏像の影が浮かび上がった。男はペンライトを右手に持ち替え仏像を照らしはしたが、これがお目当てのブツではない。仏像の袂まで忍び寄り、ペンライトで辺りをくまなく照らす。そう大きくもなく荘厳でもない台座の上にお目当てのブツは佇んでいた。男は再度確認するかのように、その木彫りの仏像を照らし出した。「猛虎復活」と刻まれた台座に立ち尽くす小さな仏像を左手で掴み、数歩後退さる。爪先立ちした姿勢で踵を返し、月明かりが示す本堂の出入口を目指し足早に歩を進めた。表の明かりが間近に迫ろうとした矢先、廊下をドストドと歩み来る音が聞こえる。男はとっさに壁に寄り添ってペンライトを消し、足音が去るのを待つ。耳を澄ますと、怒号とも悲鳴とも聞こえる大声が響いてきた。

「ああああー！　また三浦にやられおつたああー。安藤の好投も一向に報われん！　打線…打線がいかんのじゃー！！」

目出し帽の男の希望も虚しく、怒号とも悲鳴ともとれる大声が本堂に踏み込んで来た。怒号は突如止み、開扉された本堂の様子を窺う息づかいだけが放たれる。月明かりに照らし出されたその主は場にそぐわない黄色の法被をはおり、首からはヌンチャク・バットを提げ、スキンヘッドが光り輝いていた。黄色い法被男が二・三步前に出たのを見計らい、意を決し背後をすり抜けようと試みた。

「誰じゃ！？　お前はっ！？」

黄色い法被姿の男は振り返り、目出し帽の男の腰元を引きつかんだ。歳のわりには随分と力強い。法被姿の男から抜け出さんと目出し帽の男はもがいた。

「お…お前え、わしの大事な仏像をおおおー！　…この盗人がああー！！」

目出し帽の男が左手に携える仏像に気が付いた法被姿の男はこれでもかと力を増し、仏像を引っ手繰った。目出し帽の男はブツを取り戻そうと勢い余って後ろ向きになった法被姿の男に襲い掛かる。しかし相手の方が一枚上手であった。黄色い法被の袖から不意に放たれた左肘が目出し帽の男の顔を直撃し、本堂の階段をもんどりうって転がり落ちる。追いつちをかける様に黄色い法被姿の男が階段の上で仁王立ちし吼えた。

「立ち去れいっ！！　この盗人があー！　…盗んでもよいのは墨だけじゃー！！」

目出し帽の男は顔と膝を押さえよると立ち上がり、逃げ去った。

「がっはっはっは！　お前の様な不埒な奴に我が阪神タイガースはやられはせんぞおっ！　猛虎魂は不滅じゃー！！」

月明かりに照らされ僅かに反射するペンライトだけが砂利の上に残されていた。

ゴォーン！ という鐘の響きで目が覚めた。真壁は枕もとの眼鏡を手繰り寄せ、掛け布団の中で隠れるように眼鏡をかけた。布団の隙間から覗き見ると和式の部屋におり、ふすま越しの朝の陽光を柔らかく感じた。畳一畳挟んだ真横の布団の中で妙典は孵化する直前の幼虫の様にもそもそと蠢いている。

表の廊下をドスドスとけたたましく歩み来る足音が聞こえ、勢いよくふすまが開かれたかと思うとやさしい陽光が眩い朝日に変わった。

「ひろみちいいーっ！！ 起きんか！ この馬鹿者があああつ！！」

差し込む朝日に照らし出され逆光を帯びた人影が大きく怒鳴り散らした。そこに立っていたのは虎縞の法被にヌンチャク・バットを首から提げた男であった。妙典は眠気眼でようやく孵化に成功する。

「…相変わらず…朝からうるせえなあ。馬鹿親父…」

「馬鹿に馬鹿と言われる筋合いなど、ないわああー！ 起きんか！ この馬鹿息子おっ！！」

嫌々上体を引き起こす妙典につられて真壁も起き上がった。

「…こつちは昨夜、大変だったんだあ。着いたのも夜中だしよお…」
「飯のしたくは出来ておるっ！ 早よ、せいっ！ 馬鹿者おっ！！」

虎縞の男はドスドスと足音をたて、ふすまを開けたまま部屋を後にした。

妙典は北参道署から借用している防災用のフルテクト・ジャージを着たままの姿であった。そういう真壁も妙典のパジャマを借りている身である為、大きな顔が出来る立場ではない。真壁は丁寧に布団を畳み、部屋の隅に寄せた。

右手で目を擦り、左手をポケットに突っ込んだ妙典に連なり、パジャマ姿の真壁も部屋を後にした。

「…なあ…真壁え、あの鐘の音聞いて起きたら…死んだ気分になんねえかあ？」

「いや、自分は風情があつて良いかと思いますが…」

真壁は妙典の背中に向かって返した。

「…そつかあ、俺様は毎日…あれ聞かされてたからなあ。…いつも
“Wake Up Dead”って感じになるんだがなあ」

「朝から“死を呼び覚ませ!”とは縁起が悪いですね」

「しょうがねえだろお…。メタルって、そんな曲ばかりなんだからよお。…ま、だからメタル好きになっちまったんだが…」

二人は丸みを帯びた大きな木製の机のある和式部屋に足を踏み入れた。虎縞の男は一足先にあぐらを組んで座っており、寝起きの二人を見上げる。

「…博道、そちらさんは？」

「ああ、こいつか？…こいつは、俺様の上司の…」

「いえ、部下の真壁と申します」

真壁は妙典の言葉を強引に遮り言った。二人は虎縞の男の向かいに座り、妙典は紹介を始める。

「…で、これが俺様の馬鹿親父、博信ひろのぶだあ」

「おう！ 真壁さんと言うのか。いつもウチの馬鹿息子が世話になっておる」

丁重にスキンヘッドを垂れる博信。「まだ三日目に過ぎません」との言葉を押し殺し、真壁も合わせて一礼をした。

「母さんっ！ 飯じゃっ！ 飯っ！！」

博信の大声に誘われるかのように台所から大きなお盆を抱えた初老の婦人が現れた。物腰の穏やかそうな婦人は無言ながらも笑みを絶やすことはなく、四角いお盆から朝食と思われる大皿を机に並べ始めた。博信はスプーンをそそくさと手に取り、喜び勇んで二人に叫ぶ。

「さあっ！！ 食べっ！ 食べっ！！ 朝飯食わんと元気が出んぞお！」

朝食を目の当たりにした妙典と真壁の二人は凄まじく血の気が引くのを感じた。その二人に対し虎縞の博信は上機嫌で大声を張り上

げる。

「我が阪神タイガースの今日こそその勝利を願ってカツカレーじゃあ
っ！ ……二日目のカレーは格別じゃぞおっ！」

クウクウという鳩の鳴き声が辺りから聞こえる。真壁は境内の井戸の冷ややかな水を顔に浴びせ顔を洗っていた。首にかけたタオルで顔を拭いた後、同じタオルで手を拭く。井戸の脇に置かれた眼鏡を腕まくりした手で掴み取り水滴が付いていないか、前後左右に傾け見回した。若干の水滴が見つかり、胸ポケットから取り出した速乾性ウェットクリーナーで眼鏡を拭う。もはや水滴が付いていないことを確認し終わるとタオルを小脇に抱え眼鏡のテンプルを両手で持ちゆつくりと掛けた。レンズ越しに見えるその光景は東京では考えられない程、緑豊かで木々のざわめきが心地よく感じられる。首にかけたタオルを軽く握り周囲の木々に思わず見を奪われた。比較的緑色は目に良いとされている。これで少しは近眼が緩和されればよいのだが…と真壁は思った。歯みがきセット一式を手にとって踵を返し、母屋の張り出した廊下へと向かう。砂利を踏みしめる音が心地よく線香の匂いも心が洗われるかのようであった。不意に顔を横に向けると、山と平地と海が一望できる牧歌的な美しい風景が広がっていた。真壁は歩を緩めはしなかったものの日本の良き情景に満たされていたのは間違いなかった。

母屋の廊下に到着し綺麗に折り畳まれたワイシャツとハンガーに掛けられたスーツが目止まる。知らぬ間に妙典の母親が出て置いていてくれたことは想像に疎くない。ワイシャツに袖を通し、ネクタイを締める。職活していた当初は随分と難儀したものであったが、今となっては日常のこととなり目を瞑っていても出来るまでになった。社会人になって久しいものだとあらためて痛感する。スーツの上下、靴下を履き、真壁なりの戦闘服状態になった後、借り受けていた妙典のパジャマをキチンとたたみ、母屋の外に張り出した廊下を伝って妙典の母親を探し始めた。すると背後から初老の女性の声だし、真壁は振り返った。

「ああ、真壁さん。パジャマはこの籠に入れて下さいね」

妙典の母親がいつの間にか背後に立っていた。刑事にとって不意に背後をつかれることは絶対にあってはならないことではあるが、妙典の母親とあっては特段気に留める必要はない。

「パジャマ、お借りしまして…ありがとうございます」

「サイズはどうだったかしらね。博道のだから若干身体に合わないかと心配してりましたが…」

「いえいえ、大丈夫です。…寧ろ、夜中に訪問致しまして申し訳ありませんでした」

「いいんですよ。…あの人がお呼び立てしたのですから…。それにしてもスーツじゃなく、もっとゆったりとした服の方がよろしくなくて？」

「いえ、お母さん。…これが刑事にとつての普段着なんです。お気遣いなく」

「あら？ そう？ ウチの博道はスーツなんか着た事あるのかしらね」

「あつ！？ いや、妙典さんはあれでいいんです。…刑事にもいろいろありまして…妙典さんは…あれでなきゃ妙典さんらしくないです」

冷や汗交じりに真壁は取り繕った。

「あら、そう？ …博道がご迷惑をかけているかと思うと、こちらこそ申し訳ありません」

「いえいえ、お母さん。お世話になっっているのは寧ろ自分の方です」
「…そう言っただけだと嬉しい限りです。何せ手のかかるわがままな子ですから…。こちらこそ、博道をよろしく頼みます」

妙典の母は深々と頭を下げた。真壁も一礼し折り畳まれたパジャマを丁寧に籠に入れる。妙典の母が行こうするのを真壁は呼び止めた。

「あつ！ お母さん。ところで、お名前は？」

妙典の母親は立ち止まり、ゆっくりと振り向き頭を垂れた。

「…由紀子ゆきこです。由紀子と申します」

「あ…ああ、由紀子さん。お洗濯の程よろしくお願い致します。パジャマありがとうございます。…それと今朝のカレー、大変美味しかったです」

真壁は再度一礼をし、由紀子を見送る。

「あら、お若いのにご丁寧ですこと。…ウチの博道にも見習って欲しいものですな」

軽く会釈した由紀子はそう言い残し廊下を後にした。真壁にとつては羨ましく思う家庭である。既に乾燥している携帯用歯みがきセツトを内ポケットに入れ廊下に正座した。座り込んだ真壁は再び境内を見渡し情景と妙典の家族愛に浸るのであった。木々のざわめきと鳩の鳴き声が心地よく耳に響き渡り目を瞑った。

暫くすると遠くから大きくかなり立てる声が耳を劈いた。

「おりやくつ！！ 現場検証じゃあー！ 今すぐ、現場検証じゃぞおーっ！」

妙典の父親、博信の声であった。声のする方向に顔を向けると、博信に続いてジーパンに黒Tシャツのいつもの井出達に着替えた妙典がポケットに手をつ突っ込んだ姿勢で廊下をドスドスと歩んでくる。真壁は静かに立ち上がり、妙典親子に声をかけた。

「どうしました？ …妙典さん」

「妙典さん」という言葉に妙典親子がそろって反応し振り向く。

「どうもごうもねえっ！ 今すぐ現場検証始めろってよ！」

「何を言っとる！ 馬鹿者。早よせんと阪神が負けてしまふのじゃあー！」

妙典は真壁を睨みつけ顎をしゃくって「着いて来い！」との合図を送った。

「ほれ、行くぞ。優秀な準キャリアさん」

「…おだてないで下さい」

合図を受けて真壁は妙典親子の背後に連なり本堂に向かう。博信

は相変わらずの大声で怒鳴り散らした。

「良いかあつ！ 今日の先発は能見！ そしてデーゲームじゃ！ それまでに劣悪なる犯人を捕まえんと、ダメ虎ましつぐらじゃからなあー！」

博信は本堂の横開きの扉を勢いよく開け、ズゴズゴと入っていた。ポケットに手をつ突っ込んだ妙典は口笛を吹き、何かを蹴散らすかのように踏ん返り返って本堂の中に勇み行つた。真壁はその後に続き、一礼して神妙な面持ちで敷居を跨ぐ。

仏像の傍らにたどり着いた妙典は素っ気無く言い放つた。

「何だよお？ …… 仏像、盗られてねえじゃねえか！ …… それよりも親父、仏壇がないんだが……」

「ああ？ 仏壇か？ …… 仏壇なら、山下さんここに修繕に出しとるわい」

博信はそう言い返すと傍らの木彫りの小さな仏像を指差した。

「これじゃよ、これ。…… 昨夜、憎き盗人が奪おうとしておつたのはっ……！」

妙典と真壁は顔を見合わせ呆気に取られた。

「…… 何だあ？ 馬鹿親父い。…… 全然、盗まれてねえじゃねえかあ……」
「ま、それはわしが昔取つた杵柄で盗人をこれでもかと叩きのめし、追い返したからじゃなっ……！」

自信満々にシャドーボクシングをする博信の横で、妙典は目頭を押さえ頭を揺さぶる。

「あのなあ、馬鹿親父……。盗られてねえってことは未遂だろおが！ …… そりゃ県警も動かんわなあ。寧ろ、過剰防衛でパクられるトコだぞお」

「何言つとる！ 日本の警察は世界一優秀じゃなかったのかあ！？」
「…… そうゆう訳じゃなくてよ、未遂ということで事件は起きてないんだわ。…… それじゃあ、県警も捜査は出来んわな」

「そんな筈ないじゃろお！ …… 殺人未遂だつて立派な犯罪で逮捕されるじゃろおーに？」

「あれは凶悪犯罪だからなあ。…窃盗未遂ごときじゃ、しょつ引けん！…昨日、県警が来て何かやってなかったか？」

「…うーむ、そう言えば、犯人が残していったペンライトを袋に入れて持って帰っておったわい。そうじゃ！？…それに付いた指紋で犯人が分かるはずじゃろ？」

ポケットに手をつ突っ込む妙典は本堂の天井を見上げ、鼻を鳴らす。「残念ながら、そのペンライトからは指紋の採取は出来ねえ。…手袋ぐれえしてるだろ？ その盗人も…。それに指紋採取できたとしても、盗人に前科がなけりや照合のしようもねえ」

虎縞の博信は膝から崩れ落ち、大声で嘆いた。

「じゃあ、わしはどうすれば良いのじゃあ！？…むざむざとこの大事な仏像を悪党に渡せとでも言うのかあ！？ お前は！？ この馬鹿息子っ！！…この…この仏像はなあ、10点差をひっくり返した金本のサヨナラ安打の時、ずーっとわしが抱いておったのじゃ！ この仏像のお陰で真弓阪神は新装甲子園で初勝利をあげおったのじゃぞあー！」

「…しかしよあー、こんな仏像ウチにあつたけかあ？」

博信はふつふつと笑い声を上げ、妙典を見上げる。

「はっはっはっは…これはなあ、三月に母さんとタイ旅行に行ったんじゃが、現地の方が親切でなあ。…商売繁盛のお守りという事でくれたんじゃ」

ポケットに手をつ突っ込んだままの妙典はうな垂れる。

「あのよあー。坊主のくせに商売繁盛って…何考えてんだあ？…

この馬鹿親父！」

「また親を馬鹿扱いしおって！ 寺の経営もなかなか大変なんじゃ！」

「そーれーはー、てめえが巨人ファンの真っ只中で阪神ファンやってるからだろおがあ！…そりや檀家も逃げるわなあ」

博信はスクッと立ち上がり、妙典を睨みつける。

「坊主もちよつとばかし儲けてもよいじゃろあ！？…親切なこと

に現地の人がわざわざ船便で送ってくれたんじゃぞっ！ …その真心を理解できぬのか！？ この馬鹿息子があ！」

妙典は右手をポケットから出し、博信を制するようにゆっくりと手を揺さぶった。

「わーた、わーた。…取り敢えず見張りだけはしといてやるよお…。ただし今日一日限定だがなあ」

「おうっ！ そうか！ やっと、分かってくれおったか。あの悪党は今夜必ず現れるに違いない。…まあ、わしの勘じゃが…犯人はオレンジ色の法被を着ておるに違いない！ …後は任せたからのおっ！」

博信は大きな高笑いと共に本堂をドスドスと後にした。妙典と真壁は一步近寄ってマジマジと木彫りの小さな仏像を眺める。

「こんなものに価値があるとは思えんがなあ…」

妙典は木彫りの仏像を手に取り吐き捨てるかの様に呟いた。

「…しかし、犯人にとってはとても重要なものかもしれないよ」
真壁は眼鏡のブリッジを押し上げ呟いた。それを聞いた妙典は木彫りの仏像を台座に戻すと再び右手をポケットに突っ込み踵を返して出口に向かった。

「何とか鑑定団とかに出したら、思わぬ値が付いたりしてな。…まあ、俺様には何の価値も見出せんが…。しかし“猛虎復活”の台座はどうにかした方がいいよなあ…」

妙典が敷居をまたごうとした瞬間、不意に振り向いた。真壁はまだ木彫りの仏像の袂に立っている。妙典には仏像を小突いている様に見える。

「変態オタク眼鏡小僧の真壁え！ 何やってんだあ？ お前え…」
真壁は慌てて手を引っ込め恥ずかしげに言い訳をする。

「いや、残念ながら…いい音色はしませんでした。…北宋ではなさそうですね」

妙典は本堂の前の階段に腰を掛け、一本目を吸っているところであつた。ギシギシ軋む木製の階段の隅には空の缶コーヒーがひっそりと佇んでおり、消しゴムカスの様な煙草の灰がプルタブに乗つてついている。妙典はフーっと口から煙を吐き出し境内の様子を眺め、物思いに耽つていた。

本堂の張り出し廊下を踏みしめる足音が徐々に大きくなる。

誰かが近づいてきたのは間違いないが、あの馬鹿親父の足音とは明らかに違う。かといつてお袋のでもなさそうだ。…と、なるとひとりしかいねえ。…あの小僧だ。

煙草を啜え込んだ妙典は空き缶を右手で掴み、両膝の真ん中でぶら下げるかのように左指二本で持ち替えた。短くなつた煙草を口元から引き抜いて斜めになつたプルタブのワツカ部分で揉み消すと辺りに煙が漂つた。鎮火した吸殻を空き缶の中にポトリと落とし込み、またギシギシと軋む階段の袂に置いた。空いた手で青い包み紙と母屋の台所で見つけた百円ライターを鷲掴み、包みの端を右の中指でトントンと小突き、飛び出した一本を口で啜え出す。真後ろで立ち止まつた足音を無視するかにように点きの悪い百円ライターの擦りをジツジツと数度回し火を点した。軋む足音は階段をゆっくりと降り始め妙典の真横で止む。妙典は啜えた税金の塊にライターの火を宛がおうと若干首を右に傾けた。すると真横に座る真壁の姿が視野の端に収まり、煙を大きく吸い込んだ。火の灯つた社会悪を啜えたまま青い包みとライターを空き缶の手前に投げ置き、煙を勢いよく鼻から抜いた。

「何だあ？ お前も時間：持て余してんのかあ？」

「ええ、まあ。…そういうことになりますかね」

「…田舎だから何にもねえだろお？」

真壁は一瞬口を噤み、境内を見回しながら話を始める。

「そういう妙典さんこそ、どうなのですか？」

「えっ？ 俺様か？ ……何か知らねえが、ウチの馬鹿親父。阪神の勝利の為だとか言つて禁煙してるんだとき。…だから俺様はここでひとり蛭族つてわけよ」

「…お父さんの阪神タイガースにかける思いは尋常じゃありませんね。…ある意味、自分も見習わないといけません」

「おいおい！ それ以上、変態度が増したら俺様の手には負えなくなるぞ…」

「それはご心配なく。…これでも人並みに大人のつもりです。自制心ぐらいありますよ」

真壁は膝の上で手を組み微笑んだ。

「自制心で、お前。…やっぱ変態願望あんだなあ？」

「ふっ…妙典さん、何をおっしゃいます。変態と決め付けたのは妙典さんじゃないですか？」

真壁は微笑みつつ顔を左右に揺さぶった。

「そりゃ、まるで俺様こそが変態みてえな言い方だよなあ。…でもなあ、真壁。匂いがすんだよ。お前さんから込み上げる変態の匂いがプンプンと…」

真壁は鼻から大きく息を吸い込む。

「それは妙典さんの誤解に過ぎません。…でも、線香のよい香りがしますよね？ ……ここは」

風情に浸りきっている真壁の口元は緩み、都会の喧騒から離れた観光旅行者のような口調で身の回りの風景を口にした。

「…まあ、ここは俺様の実家。別に何の思い入れもねえ。…ただ、よくここで遊んだよなあ…とは思うがな」

「望郷の思いですか…。都会育ちの自分からすれば羨ましい限りです」

「そおつかあ？ お前、住んだことねえから知らねえだけだぜ。何にもねえーんだぞ、この一帯。学校もやたらと遠いし、買い物に行くにも車がなけりゃどうにもならねえ。…夜が更けるのも早えし、

おまけに真つ暗だ」

「でも…綺麗…美しいじゃないですか。風景が…」

「ま、それだから田舎な訳よ」

妙典は円柱形に固まり、今にも崩れ落ちそうになっている灰をゆつくりと空き缶に持つてゆき、人差し指でやさしく小突いて中に落とすと、再び啜え込んだ。

「ほら、妙典さん。本道の前の砂利だってこんなに綺麗なんですよ」
真壁にしては珍しく顎を突き出して、敷き詰められた砂利を示した。

「朝早くから、親父が竹箒で均してたからなあ…」

「…実際、美しいと思います」

妙典は啜えた煙草に右手をそえ、煙を小刻みに吐き出した。

「…で、変態オタク眼鏡小僧。これ見て、何か思わねえか？」

突然、何かを試されていることに気付いた真壁は妙典に顔を向けた。

「何かって…何がですか？」

妙典は煙草に右手をそえたまま鼻から煙を小さく抜き、しおらしく咳く。

「真壁え。…確かにてめえは頭がいい。おそらく俺様の一兆倍は頭がいい。…でもなあ、真つ正直に真正面から物事見てたら見落とすことは多いからなあ…」

「…それは一昨日の雑居ビルの件の事でしょうか？」

煙と共に一呼吸置いて妙典は返す。

「まあ、確かにそれもそうだが…。見てみるよ、砂利が綺麗だろ？」

「…て、ことはどういうことだあ？」

「…砂利が綺麗に均されている？」

真壁は敷き詰められた綺麗な砂利から軋む木製の階段の木目に目を移し考え込んだ。ゆつたりとした空気と時間が流れる中、いつもの様に頭はフル回転とはいかない。真壁はもそもそと足の指を動かした。昨夜走り回ったセイであろうか、靴下の親指の部分が若干薄

くなつており、今にも穴があきそうである。それに見入る真壁は声をあげた。

「分かりました。…ゲソ痕です。残念ながらゲソ痕が掻き消されています」

「…流石は優秀な準キャリアさん。…正解だ。ま、県警もゲソ痕を押さえてるとは思えんがな…」

妙典は煙草を啜えたまま階段に沿って後ろに返った。正解と云ってもらえたにも関わらず真壁はどこか浮かない様子である。

「妙典さん、どうも自分がガルマに思えてきました」

「すまねえが、何言ってるか。さっぱり分かんねえ…」

真壁はあらためて抱え込んだ膝の前で両手の指を交差させ語る。

「シヤアはガルマに愚痴を垂れるんです。“どうもお坊っちゃん育ちが身に染み込み過ぎる、甘いな…”と」

「分かつてると思うが…俺様はシヤアみたいな切れ者じゃねえからな」

真壁はうつむき笑った。

「…妙典さんは…サウス・バニングです。…不死身の第四小队、サウス・バニング隊長です」

「ほおー！ “不死身” って響きは…いいなあ」

「でも…」

真壁はそれ以上話す事を躊躇った。いくら架空の話とはいえ不死身の第四小队隊長、サウス・バニングは計画書と共に爆死したという事実を告げるのに戸惑いを感じていた。妙典もそれ以上聞きはしなかった。おそらく興味がないだけであろうと真壁は思った。

「…で、どうする？ …優秀な準キャリアさんよお？」

相変わらず悪態をつく妙典に真壁は言い返した。

「ワツケイン司令のように“貴様もいっぱしの指揮官ヅラになつてきたかな…結構なことだな”…と、まだ言っていただけそうにありませんね…」

諦めにも似た溜息をついた真壁は膝を押し上げ立ち上がった。

「じゃ、後は目撃証言に頼るしかありませんね」

反り座ったままの妙典は愚痴を垂れた。

「おいおい！ …あの馬鹿親父から証言とるのかあ？ …どうせオレンジ色の法被を着たウサギを見たとしても言い出すぜ、あの馬鹿親父」

「それでも、捜査の鉄則です。妙典さん」

「わーた。わーた。…一応、馬鹿親父にちゃんと聞いてとくか」

妙典も青い包みと百円ライターを手に取り立ち上がり、階段を横足加減で上り始めた。

「妙典さん、空き缶が？」

「ああ？ どうせまた吸いに戻る。…俺様のささやかな聖域だ」

真壁は妙典に続き本堂横の張り出し廊下をギシギシと軋ませ歩を進めた。

「しかし、妙典さん。妙典さんの実家は静かですよね」

「そーかあ？ 俺様的にはノイズに満たされてえっ！ …て、気分だがな！」

「そういうものですかね？」

「ああ、そんなもんさ。一年もここに居てみるお。間違いなく“Cum On Feel The Noize”が聴きたくなるぜい！」

「おい、親父！ ちょっと邪魔するぜ」

妙典と真壁は母屋の和式部屋の敷居をゆるりとまたぎ座り込んだ。虎編法被姿の博信は相変わらず丸みを帯びた大きな机にあぐらを組んで座っており、これでもかとはかりに新聞を広げ読み耽っていた。やがて新聞を握る両手が小刻みに震えだしたかと思うと堰を切ったように悲鳴をあげる。

「ひ…博道いつ！ た…大変じゃっ！ 今岡が…今岡が最後の一軍登録なんじゃとお！？ これで…これで結果が出んかったら…もはや戦力外通告されるのは確実じゃあー！」

博信はロゴの長音符が虎編の尻尾になっているスポーツ新聞を握り締めたまま机に叩きつけた。新聞が千切れなかったのが不思議なくらいの衝撃が大机を襲い、湯飲み茶碗が一瞬浮き上がる。真壁は博信の甲が若干ではあるが赤く変色していることを見逃しはしなかった。

「なあ、博道っ！ もしも…もしもだぞ？ 今岡が戦力外になってみるお！ 背番号7は…誰が受け継ぐのじゃあああーっ！？」

妙典は半ば呆れた面持ちで口を尖らせぶつきらばうに呟く。

「…何なら、真弓でいいんじゃない？ ……現役時代の背番号は7だったろ？」

スキンヘッドが一際輝いたように見えたかと思うと博信の表情は一変した。感激のあまり目を潤ませ叫び声をあげる。

「ひ…博道っ！ 流石はわしの息子じゃあ！ ……そ…そうじゃ、虎将”真弓監督が7番を付ければよいのじゃ…。 “史上最強の一番バッター”真弓^{まゆみあきのぶ}明信が背番号7か…。うーむ、まるで夢を見ておるようじゃのっ…」

先程までとは打って変わり、すっかりと悦に入った博信は天井を見上げ憚ることなく大粒の涙を流し始めた。流石に見かねた妙典は

咳払いをし、博信を猛虎妄想ワールドから現実世界に無理矢理引き戻す。

「せつかくの感涙のところ悪りいんだが…ちよっくら、話し聞かせてくれや」

「んんっ？ …何だあ？ 我が阪神タイガースの来季の構想を練っておったというのに…」

呆れ果てた口調で妙典は博信に嘆く。

「何だよお、親父い。もう来年の話かあ？ …ま、阪神ファンらしいっちゃらしいが、もう諦めちまったのかよお？ …今年の阪神に」

「あのなあ、博道。何せ、今月はまだ一勝しかしておらんのだぞ。」

「わしも長年、虎ファンを貫いておる。…だから分かるのじゃ。駄目な時は、どうやっても駄目なんじゃとな…」

「ふんっ…すっかり諦めムードかよお？」

「いいや、博道っ！ このわしを見くびるでないぞ！ わしはまだ諦めた訳ではない！ 絶対に諦めぬわっ！ よいかっ！ 博道！！」

「…そして全国の阪神ファンの同志諸君よ！ 諦めるのはまだ早いっ！ …来年があるっ！」

右手で顔全体を覆った妙典は天を仰ぎ、もはや付き合いきれないとの仕草を見せた。

「…ところで、何用じゃ？ お前ら」

勢いを取り戻した博信の言葉に妙典は一息ついた後、あらためて座り直し机越しに親子揃ってあぐらを組むこととなった。少々萎縮気味の真壁は正座の姿勢で二人の話を聞き入ることにした。

「…なあ、詳しく聞かせてくれや。…昨晚のこと」

「おおっ！ あのコソ泥の事件か？ …それはもう、ギッタンギッタンにして六甲おろしで送り出してやったわいっ！」

「…あのなあ！ そうじゃなくてえ。まずは何時頃の事だったか覚えてねえーか？ まさかとは思うが…歌ったのスナッフの六甲嵐・パンク・ヴァージョンじゃねえよな？」

「パンクじゃと？ 何なんじゃ、それは？ …タイヤの話か？」

「知らねえなら、いいわ。続けてくれや」

「うーむ…そうじゃのう？ …我が阪神タイガースは安藤の好投空しく三浦に完封負けを喫してしもつた。わしは悔しくてのお、本堂に勤行に行こうとしたんじゃ。…試合終了直後じゃから九時半は回っておつた筈じゃ」

「…ふーん、犯行時間は九時半と…。真壁え、メモ取る係、お前な！」

「ええっ！？ …自分がですか？ きゅ…急に言われたところで！」

「つべこべ言うなあ、変態オタク眼鏡小僧っ！！ …こうして先輩刑事様が親切に聴取してやってんだあ。てめえが全部記録するのが筋だろがあっ！」

不服そうな顔をする真壁は見せ付けるかの様に手帳を左の内ポケットから取り出し、メモを取る態勢に入った。

「妙典さん、ひとつだけ忠告しておきます。基本的に自分は…人の指図では動けないんです」

妙典の目が「勝手にしろっ！」と語り、聴取を再開する。

「…で、何人だった？ コソ泥は？」

「…ひとりじゃ。ひとりじゃったぞ」

「風貌は？」

博信は暫し黙り込み頭を捻って思い出そうとしたが、たちまち諦めた面持ちに変わり果てた。

「…そんなもん。知らんわい！」

妙典の顔色はみるみる赤面し、激高している様子が見て取れる状態であった。

「何だあ？ それえっ！？ …見てねえのかよお？ …この馬鹿親父いっ！」

「うるさいわいっ！ …馬鹿に馬鹿と言われる筋合いなどないわっ！ …この馬鹿息子がっ！」

思わず膝立ちした博信を真壁は両手を広げて制止させ座り込ませ

た。

「…なあ、博道。…夜のあの本堂じゃぞお。真つ暗に決まっておるわい」

「ぶん殴ったんだつたら、少しは相手の外見ぐらいは分かるだろ？」
博信は突然意味もなく、さも自信ありげに笑い始めた。

「ふっふっふ…侮るでないぞ、博道。…わしはこの目でしかと見たんじゃ！」

「見たのなら、見たと最初からそう言えや！ 馬鹿親父…」

落ち着きと自信を取り戻した虎縞の法被男は腕組みをし、高飛車に語り始める。

「そうじゃのう、背格好は博道…お前より小さく、やや痩せ気味じやった。…黒い薄手の運動着を上下に着ておったかのお」

「で、顔は？ …顔の特徴は？」

虎縞の男は妙典の目を強烈に見据えたまま再び黙り込み、暫しの沈黙の後に口を開いた。

「…それがのおー。黒い覆面を被っておったからのお…」

「はあ！？ 目出し帽かあ？ …それじゃあ、何にも分かんねえだるおがぁ！ 馬鹿親父！」

「う…うるさいわいっ！ この馬鹿息子が！ 覆面の上から顔が分かっっておつたら、タイガーマスクもミル・マスカラスもわしは正体を知つとるわいっ！」

真壁はメモを取る仕草を止め、妙典に告げる。

「妙典さん、仕方ありません。…暗がりですら全身が黒。目出し帽を被つていてはニュータイプといえども正体はつかめません」

妙典は両腕を後ろにずり動かし上半身を大きく反り返らせた。

「…まあ、しゃあねえか。…しかし、ひとつはつきりした事がある。顎を引いて語る妙典の眼差しに真壁は目を合わせた。

「…犯人は最初から、あのちんけな木彫りの仏像が目当てだった。

…それも奴にとつちや相当重要なものらしい。…だとすれば、必ずまた現れる。それも今夜かどうか、近いうちに…必ずな！」

虎縞姿の男の又ンチャク・バットが小刻みに揺れたように思えた。
「博道。あれは本当に大事なもんなんじゃ。あれが…あれが無ければ我が阪神タイガースはまたも暗黒時代に逆戻りする筈じゃ。ダメ虎まつしぐらじゃぞ。それだけは絶対に避けねばならぬ。それが御仏に与えられたわしの使命！ もう一度…もう一度でいい、日本一になる阪神の勇姿を見たいんじゃよ。博道よ…新庄、亀山、赤星フアンのお前なら分かる筈じゃ？ …このわしの気持ちがお…」
心の奥底から阪神タイガースを溺愛する親の言葉を聞いて妙典も少しはしおらしくなった。

「親父い。…悪いが、あの仏像。囿に使わせてもらっぞ。…あれが本堂にある限り、もう一度奴は現れる」

「うむ、それも覚悟の上じゃ。我が阪神タイガースの為なら、この命いつでも投げ出す覚悟は出来ておる。実際、こうして禁煙も続行中じゃからのお…健康にもよいことだし…」

命を投げ出すと言っておきながら健康にも気を使う博信の矛盾した言葉に敢えて突っ込みを入れず聞き流した妙典は上半身を起き上げらせ、元にあぐらの体勢に戻った。

「ま、後は俺らに任せろや。幸いにもFC東京サポーターの真壁伸一 巡查部長もおられることだし…。とっ捕まえてやんよ、親父。…猛虎復活の為にな！」

「そ…その言葉、待っておったぞ。なるほど…真壁さんはFC東京のサポーターじゃったか…」

きちんと正座する真壁は申し訳なさ気に小さく一礼をした。

「まあ、緑色のあのチームじゃなくて良かったわい。…しかしのお…」

途中で口を噤んだ博信を食い入るように真壁は見つめ返した。耐え切れなくなつた博信は渋々口を開く。

「…できたら、浦和レッズのサポーターなら良かったんじゃがお…。精神的構造は非常に似ておるし…」

「ご安心ください。妙典さんにも同じことを既に言われております。

…ところでお父さんは何故、阪神ファンなのでしょう？ …千葉だとミスターの出身地ですし、巨人ファンが圧倒的に多いかと思われるのですが…」

妙典は顎を引いて真壁をキツと見やり舌打ちをした。「それ聞くんじゃねえ！ 馬鹿野郎っ！」と言っているのがひしひしと伝わってきた。どうやら真壁は禁断の言葉を投げかけたようである。

「おお…真壁さん。よくぞ聞いてくれおった。…このわしもなあ、昔は巨人ファンじゃったんじゃ。…しかしなあ、見たのじゃよ。この目でしっかりと…奇跡というものを…」

既に諦めの面持ちの妙典は腕枕状態で寝そべり天井の灯りを見つめながらも、「勘弁してくれや」との気を全身から発散していた。その向かいで虎縞法被姿の博信は饒舌に話し始めた。

「…あれは、一生忘れはせん。…1985年4月17日。わしは阪神甲子園球場一塁側のアルプス・スタンド席で見たのじゃ。…3対1で巨人がリードする7回裏、ピッチャーは絶好調の榎原。2アウト一塁・二塁、長打で一挙同点のチャンス。バッターボックスには三番“神様・仏様・バース様”じゃ。しかしその年のランディ・バースは絶不調に喘いでおった。ホームランはゼロ、打率も二割を切っておった。ところがじゃ、榎原の初球をアッパースイングで打ち返し、打球は小さな弧を描いてバックスクリーンに飛び込みおった。…逆転の3ランホームランじゃ。続く四番“若虎・ミスター・タイガース”かけふまさゆき掛布雅之は1ストライク1ボールで迎えた三球目。高めに甘く入ったストレートをフルスイング。これもバックスクリーン左側に飛び込む連続ホームランとなった。おかたあきのぶ活気付くスタンドとベンチ。さらにホームランを狙う勝負師・五番、岡田彰布は1ストライク・ノーボールの二球目、またも甘く入った高めのストレートを見逃すことなく見事バックスクリーンに放り込みおった。恐れ慄いた榎原は巨人側ベンチを呆然と眺めておったわい。あの光景、あの姿、そしてあの歓声と揺れる大甲子園…全てが、今でもはっきりと記憶に焼き付いておる。…これが、かの有名な伝説のバックスクリーン

三連発じゃ。…既にあの日、阪神の日本一は約束されておつたんじや。あの三つの放物線を目の当たりにしたわしは確信したんじや。

…神の存在を」

灯りを見つめ過ぎた妙典は目を瞬き、口を挟む。

「なあ、馬鹿親父。神の存在だったら、仏じゃなくてキリストの方じゃねえのか！…たまたま出稼ぎで京都の寺の修築工事に行つてただけだろおーに…」

「ひろみちいいーっ！！お前は相変わらず信心が足らんようじや。あれは全て神と御仏の思し召し。あれをわしに見せる為にあの日あそこに呼んだのじやよ。…よいか、神も御仏も人の心に宿るもの。呼び名に違いはあれど、人の心が変わりはないのじや！！」

「じゃーよお、何で仏像なんて物が、ウチにあるわけだあ？…人の心の中に居るんだろお？…神も仏も」

静かに目を瞑り、腕組みをする博信は突如目を見開き叫び声をあげた。

「分かったっ！分かったぞおー！阪神低迷の原因がの…。博道！お前じや。きつとお前の信心不足が阪神低迷の原因なのじやっ！来いっ！今すぐわしと本堂で勤行するのじやああー！」

虎縞法被姿のヌンチャク・バットの男は勢いよく立ち上がり、今まさに本堂に向かおうとの勢いであつた。またも真壁が膝立ちで割つて入り応対した。

「まあ、お父さん！落ち着いて下さい！…人類の知恵はそんなものだって乗り越えられます！」

真壁の一言に博信はやや落ち着きを取り戻し、再びドカンとあくらを組んで座り込んだ。何とか場を和ませようと真壁は問いかける。「…ということはお父さん。住職をなさる前は何を生業とされていたのでしょうか？」

「んん？わしの前の仕事か？…解体専用の土木作業員じゃったよ」

相変わらず我関せずの様子で寝そべる妙典も腕枕の向こうから口

を挟む。

「ああ、そういえばシャー専門だったよな？ 親父って…」

敏感に反応する真壁の脳裏にけして聞き捨ててはならない名詞が過ぎった。ニュータイプという訳ではないが、一瞬ではあるものの顔の前で稲妻の様な小さな火花が走るのを感じた。

「な、何だ…！ このザワつとした感覚は！ …… 妙典さん。今、何と仰いましたっ!？」

真壁の異様な食い付きに半身になった妙典は素っ頓狂に答える。

「シャー」と言っただが、何だ？ 変態オタク眼鏡小僧お…」

「シャー」？ …… シャアと言いましたよね？ …… 今、まさに」

興奮気味の真壁をいまひとつ理解できないでいる虎縞姿の博信も腕組みをし、淡々と答える。

「真壁さん。“シャー” ってのはのお。建築用語で言うところの解体作業とか解体用部品の事を指すんじゃないよ。…… 解体専用のシヨベルカーとか昔はウチにもあったもんじゃがなあ。博道、お前は覚えておらんか？」

腕組みをする博信は問いかけ、腕枕をする博道は答えた。

「ああ！ そういえば、あったあった！ シャア専用とか言っただけでたっけな…」

真壁はゴクリと唾を飲み込み、もはや興奮を抑えきれないといった口調で妙典に問う。

「妙典さん。…… それは“シャア専用シヨベルカー” というものが、この世に存在するという事に他なりませんか!? …… す…… 素晴らし、まるでジオンの精神が形となったようだ！」

すっかりガンダム・ワールドの虜になった真壁は両手を天に向け広げた。

「真壁え、今のお前は宇宙世紀かもしれんが…… こっちは平成だからなあ。言つとくが、所詮はシヨベルカーだからよお。…… それにしても、大丈夫かあ？ …… お前」

「大丈夫です、妙典さん。自分の心は、今の宇宙そのように震えてい

ます…。お父さん、もうひとつだけ伺わせてください。色は赤でブレードアンテナがあつて、通常の3倍の速度で走るシヨベルカーなのでしょうか？」

「いや、普通じゃよ。アタッチメントのバケットが解体用になっておるだけじゃわい…」

それを聞き、いささか落胆した様子の真壁は両手を膝にのせ、項垂れ硬直していた。あまりの落胆ぶりに見かねた虎縞法被姿の博信が真壁を諭すように語りだす。

「十年ぐらい前かのお、確かコマツから“ダイナシャー”と言う名で業界初のシャー専用機のシヨベルカーが発売されておつたかのお…」

それを耳にした真壁はスクッと顔を前に向け大きく口を開いた。

「お父さん！ それは本当ですかっ!？」

「嘘ついても仕方ねえだろ…。当時は業界でも随分話題になったもんよ」

横向きに寝そべる妙典はあくびを交えて真壁に言った。

「大変感謝致します。…この世に“シャア専用シヨベルカー”という五艘飛びをも可能にしかねない機体が存在すると分かつた今、自分にとって生きる大きな目標ができました。二十八年間…この日をどんなに！…いつか…いつか必ず“シャア専用シヨベルカー”を手に入れ、そして見事なシャア・レッドに染め上げます。そして、ブレードアンテナも装着し通常の三倍の速度で動かしてご覧にいきます!!…この作戦、必ずや成功させてみせましょう!…まさに自分の生涯をかけて!」

真壁はそう言うや否や座布団を真横にずり降り、深々と頭を下げた。それを見入る呆気にとられた妙典親子。興奮する真壁に反していたって冷静な口調で妙典は忠告する。

「なあ、真壁え。大変盛り上つてるとこ悪いんだが…“シャア専用”じゃなくて“シャー専用”だからな!」

「え…ええ、勿論分かっております。…でも、妙典さん。こうい

馬鹿な男もいます。：世の中捨てたものではありません。：妙典さんだって、そう思いませんか？」

真壁は自嘲気味に問うた。そして妙典は軽く目を閉じフーっと思を吐き出す。

「ま、これが若さか……」

「妙典さん……若さを可能性と考えてはもらえませんか？」

両足を肩幅に広げ後ろ手を組んで正門の裏側を眺めていた。背筋をピンと張り鼻から大きく息を吸い込むと漂う線香の香りが心中を無の状態に保つ。数秒の間、目を瞑って息を止め腹に力を込めた。腹の力を緩やかに抜き口からフーッと大きく長く息を吐き出すと心底に眠る幾多のわだかまりまでもが抜け出ていくようであった。

真壁は正門の袂にゆっくりと歩み寄り踵を返して、あらためて境内を眺めいった。向かって左側手前には本堂があり、右手奥には母屋が佇んでいる。母屋の手前には小さいながらも釣鐘があり、正門から本堂にかけて石碑が立ち並ぶ。その先には霊場を示す大きめの石碑が目に入った。本堂と母屋の間にはコケの生え包む樹齢百年は下らないであろう幹周6、7mにもおよぶクスノキが人々の幸せを育むかのようにそびえ立っている。

この宗派の寺には祖師堂というものがない。浄土真宗のお寺にとって祖師堂とは本堂の事であり、他の宗派とは大きく異なり祖師と本尊の阿弥陀如来が同列で崇められており、祖師を敢えて必要以上に崇めはしない。浄土真宗の祖師である親鸞は鎌倉時代初期を生きた人物で法然を師とするもの自ら開宗する事はせず、独自の寺院を持つ事もなかった。あくまで念佛集団という位置づけで日本各地につつましい念仏道場を設けては教化していくという当時としては希有な布教の形をとっていた。それ故、既存の仏教教団や浄土宗の他派からは、度々非難と攻撃に晒された歴史を持つ。そんな状況の下で宗派としての教義の相違が益々明確になってゆき、親鸞の没後に祖師として確立されることとなったのである。本尊と教えは違うもののそういった意味ではキリスト教に近いのかもしれないが、祖師信仰ではないので同一視することはできない。

真壁は正門裏の脇に立てられた駒札と呼称される名所説明立札を読み耽り、この寺の由来、沿革、歴史、祖師、教義について即席で

はあるが学びとった。実家の墓の宗派さえ知らない無神論者の真壁にとっては新鮮さと神聖さが渦巻き、この歳になり初めて宗教というものに触れ開眼した気がした。

真壁は窃盗犯：正確には、未遂犯が辿ったと思しき道筋で本堂に向かい歩を進める。本堂の階段の隅には妙典の灰皿代わりの空き缶が佇んでおり、荘厳とまでは言わないが壮麗な本堂に似つかわしくない異物と感ずるものの妙典のささやかな聖域を奪い去るわけにはいかず、そのままにしておく事にした。妙典の父、博信の話によれば未遂犯は本堂から最短距離の正門をくぐって逃走したものと思われる。真壁は本堂を離れ母屋に向かった。継手のない寺を引き取ったと数日前に妙典から聞いていた記憶があり、本堂に比べると母屋は幾分か新しい木造建築物であった。母屋の張り出す廊下の前を通り過ぎ、下り勾配に差し掛かるにつれ砂利道の石粒が次第に疎らになり、やがて土道へと変わる。ちょうど土道に変わる辺りに博信のものと思われる軽自動車と原付バイクが停められており、その真後ろでジェットストリーム・アタックを今まさに試みるかのように青いGT-Rも列を成していた。おそらく飛び上がり連邦の白い悪魔を砲撃する役目はperlセウスブラウンメタリックのディオ・チエスタが担い、軽自動車は踏み台にされるのであると真壁は勝手な妄想を働かせ、黒くはない三連星を行過ぎる。真壁は一度振り返り境内からここは見渡せないことを目認しながら後ろ向きで坂道を下った。

木々の間を縫うように大きく「つ」の字を描く土道は更に下に伸びており、前に向き直った真壁も緩やかな坂道を歩み下りる。時折周囲の風景を眺めつつ、木漏れ日の中でひと時の自然を心のどこかで楽しみながらも他に逃走侵入経路がないかと目を配りながら下った。やがて「龍勢寺」と刻まれた庵の様な小さな門の前に出る。小門の前の土道には車の轍が幾重にも重なり合っており、未遂犯のものとはとてもではないが特定できる状態ではなかった。鬱蒼と生い茂る鮮やかな緑色に挟まれた不規則な石畳の階段を一段々々ゆっくり

と踏みしめて上り、侵入及び逃走経路はここ以外にあり得ないことを確信する。大きく「つ」の字を描く土道からでは、随分遠回りした上に母屋の正面に出てしまうことになり、目撃されるリスクが極めて高いからである。

石畳の階段を上りきる数段手前で顔を上げると正門が目に入った。同時に、その傍らに立つ人影にも目を止める。まるで待ち構えていたかの様に正門前で黒Tシャツにジーンズという、いつもの出で立ちで、ポケットに両手を突っ込み左足重心の姿勢で立ち尽くす妙典がいた。

「…真壁え。お前え、よつぽど暇してんだなあ。…自然との戯れか？ …それとも、ミステリー・ハンターかよお？ …お前え」

石畳の階段を踏み締め、やや上目ながらも妙典の黒Tシャツを見る。まるで血しぶきが飛び交ったようなロゴ体で“ I W I I I Live Again ”と、はつきりとプリントされていた。意味的には「再び生き続ける」とでもなるのであるが、このような仏道の宗教的空間においては「輪廻転生」と捉えたくなるものである。もちろん“ Reincarnation ”と訳するのが正しいことは真壁にも分かっていた。

「いやあ、個人的にはとても充実した時間ですよ。…妙典さんにそう言われても仕方ありませんね。…でも、ラアラの言葉を借りるなら“美しいものが嫌いな人がいて？”とでも言いたくもありません」「何、感傷に浸ってやがんだあ、この変態オタク眼鏡小僧が！ …で、何か掴んだのかあ？ 優秀な準キャリアさんよお…」

「妙典さん…わざと自分を放っておいて、モルモットにしているおつもりですか？」

「んん？ …モルモットじゃ、不服かよお。真壁伸一 巡査部長殿！ …妙典は最上級の嫌味を言ったつもりのようにだが、少し滑稽に思えた。おそらく当の妙典はまったく意識などしていないであろうが、ガンダム会話がほんの少しだけ成立していたことが滑稽であった。思わず口元を緩めた真壁は答える。

「…ええ、まあ。たいした事じゃありませんが、窃盗犯…いや未遂犯はこの石畳の階段を逃走侵入経路に使うしかありませんね。…単独犯なら尚更です」

妙典は大きく鼻を鳴らし呟く。

「真壁え。お前が単独犯だと思っ根拠は何だあ？」

真壁の選択肢になかった妙典の言葉に少々慌てた心中を隠すべく冷静な口調を貫き答える。

「それは勿論。…お父さんの証言が全てです」

それを耳にした妙典は肩をすくめ目を逸らし、「残念」とでも言いたげな面持ちで返した。

「お前え、前にも言ったるお？ …物事を正面から見過ぎるなっつて！」

「は…はあ。確かに…」

真壁はやや意気消沈した様子で妙典の言葉に耳を傾ける。

「ウチの馬鹿親父、何っつてたあ？ …犯人はペンライトしか持たず、本堂に侵入したんだよなあ？ …じゃあ、盗ろうとした仏像…どこにしまっつて帰るつもりだったんだらうなあ？」

「そ…それは、下の小さな門のところにもも鞆が隠してあったとか…」

妙典は一呼吸置き、あらためて真壁に顔を向ける。

「急いで盗ろうとしている奴にそんな暇あると思うかあ？ …しかも、夜だぜ。ここは真っ暗だかな。…小さめの肩掛けカバンかウエストポーチぐらい持つてて当然だよなあ。でも身に付けてなかった。…更にペンライトは親父に一喝され、落として帰ってる。でも鞆なんかどこにもなかった。どうやって見つけたんだらあ？ …暗闇の中で。本気で手に提げて帰るつもりなら別だが…たいそう大事なもんなんだらあ？ …奴らにとっちや」

真壁は妙典の言う正面からしか物を見ないという事実をあらためて思い知らされることにはなったが、気になる点もあった。

「…と言う事は、妙典さんは単独犯ではないと思っつてらっつしゃるの

「ですね？」

「まあな…あんまし根拠はねえが、だいたいこんな片田舎まで一人で歩いて来るわけねえわな。車停めとくにも、単独つてのは考え難い…。何せ暗くて静かなとこよ、エンジンかけっぱなしで放置してたら、いくらウチの馬鹿親父でも気付くだろ？ …いや、寧ろお袋の方がもな…。いくらなんでも、そんなに分かり易い不審な真似はせんだろあ…。下門より下りた辺りで一台待たせるか転がしておいて時間が来たら拾って逃走するわなあ、俺様だったら…」

「…で、大事な仏像は車内で慎重にしまうと…。妙典さん、何だか今回は大変勉強になりました。…今の自分は真壁伸一、それ以上でもそれ以下でもありません」

真壁は素直に一礼をした。おそらく妙典に純粋な気持ちを持って本気で礼をするのは初めての行為に違いない。しかし真壁にはそれが当然のように思えた。だから純粋に一礼をしたのである。それもこれも、この充実した時間を過ごしたからに他ならない。

少々照れくさそうな妙典と現状の自分に満足できない真壁は横並びで正門をくぐり、境内に入った。

「ところで妙典さん、そのTシャツなのですが…」

「おおっ！？ これか？」

妙典はポケットに突っ込んでいない片方の手でTシャツを小さく引っ張った。

「これは一昨年、LOUD PARKつちゅうメタル・フェスティバル、略して“ラウパー”に行った時のやつだな。ここ最近では最もフェイバリットな“アーク・エネミー”のやつだ」

妙典が得意げに話し始めるあまり真壁は話に乗っかることにした。「その“I Will Live Again”という言葉が少々気になりました…」

「ああ、こりゃ曲名だなあ。すっげーかつこいい曲だぜ！」

「いや、そうじゃなくて“I Will Live Again”だと一度は死ぬということです。…不死身と豪語される妙典さんらし

くないと思つたに過ぎません」

妙典は再度ポケットに両手をつ込み、にやけた眼で返した。

「そんなちつせえ事、気にすんな。俺様は絶対に死なねえ！…なんせ不死身なんだしよお！」

「…だといいのですが。…しかし“Live Again”ですから、結局は生きていますよね？」

「ま、ゴキブリ並みの生命力とでも言つてくれや…」

妙典は皮肉交じりに微笑み、真壁も笑みを返した。

「ところでよお、このアーク・エネミーってバンド。スウェーデンのメロディック・デスメタルバンドなんだが、ヴォーカルが女なんだわ」

「ええっ！？ デスメタルって…あの“ゴオー！”とか“ガアー！”とか叫ぶ騒音の様な音楽ですよ？…それが女性なんですか？」

真壁は極めて乏しい音楽的表現でデスメタルを表した。

「おうよ！…それがなあ、アンジェラ・ゴソウというドイツ人なんだが、バンドやる前はモデルやってたぐれえのエライベツピンさんですよ…スタイルもばつちし！…またそれが、女とは思えんほどの強烈なデスヴォイスの持ち主で、これがまた凄いだわ」

「にわかには信じ難い話ですよ。…一度、聴いてみたいものです」
「そのうち嫌でも聴かしてやるから、覚悟しとけや。…何せ俺様のフェイバリット・バンドだからよお。…ちなみにアンジェラ嬢の左上腕部には、これまた“虎”って漢字の刺青が入ってるんだわ。きつと阪神ファンに違いねえ…。そこがまた、たまらねえ訳よ」

強烈なデスヴォイスに対してなのか、彼女の美貌に対してなのかはたまた“虎”の刺青に対してなのか、真壁には判断がつかなかったものの、にやける妙典の顔を横目に見てアンジェラ嬢に何がしかの恋心を抱いているのは十分に把握できた。

「…しかしなあ、残念な事に…もう人妻なんだよなあ、これが…ま、旦那がギターのマイケル・アモットだから諦めるしかねえわなあ…」

境内に漂う線香の煙の彼方から、虎縞法被に身を包んだ博信が又ンチャク・バットを叩いて呼ぶ声が妙典の嘆きを打ち消した。

「おらあああああーっ！！ お前らあ！ 早よ、せんかつ！ もう昼飯の時間じゃぞおー！」

博信の叫び声に妙典は携帯を開き、真壁は左手の腕時計を見やると既に正午を少し回っていた。これといって捜査は進んでいないが、時間だけは進んでいた。これも心穏やかな証であろうと真壁は納得する事にした。

博信は又ンチャク・バットを繰り返して叩きながら張り出す廊下を伝って母屋へと向かう。妙典と真壁も敷き詰められた砂利を踏み締めつつ向かった。

母屋の和式部屋の丸みを帯びた大机に三人の男が朝食時とまったく同じ位置で座り込んでいる。妙典親子はそろってあくらを組んだが、未だ真壁だけは正座で座っていた。すると隣の部屋の台所から妙典の母親が朝と同じく大きなお盆を抱え暖簾をかき分けて姿を現した。

「お待たせして、ごめんなさいね」

そう由紀子は言いながら、大机に食器を並べ始めた。何だか、とつつもなく嫌な予感が込み上げる。漂うスパイシーな香りが妙典にそう抱かせたのである。

「はい、お召し上がりくださいな。…ハムかつカレー」

妙典は呪われた自分のここ数日間の食生活を嘆くかのように天井を仰いだ。

「…だってね。真壁さんが、今朝のカレー美味しいって言ってくれたものですから…。奮発しちゃってハムかつカレーです」

博信は物も言わず貪る様に食べ始めたが、妙典はスプーンさえ手に取ろうとしない。それを目にした真壁は流石に気まずい気持ちになり、俯くしかなかった。妙典は横目で真壁を睨み小声で警告する。「真壁え…。てめえ、いらねえ事言いやがって…。お袋が調子付い

「ちまつただるおーが…」

「すいません！ とばかりに真壁は小さく頭を垂れた。その姿を目にした由紀子は二人を気遣い言葉をかける。

「あら？ カレーはお嫌い？ 博道は大好きな筈だけど…。真壁さんには？」

「いえ…大好きです。い…いただきますうううっ！」

真壁はスプーンを勢いよく手に取りガツガツと食べ始めた。相変わらずスプーンさえ握ろうとしない妙典は由紀子に呟く。

「なあ、お袋。…交流戦中だったら、きつと俺様も親父も激怒してただろうなあ…」

「言っている意味がまったく理解できていない由紀子は目をパチクリさせ妙典の顔を覗き込んだ。

「“ハムかつ” だろお！？ …ハムが勝つ。…日本ハムが勝つ。…

すなわち阪神は負けるつちゆうことだわな。…ま、再来週の交流戦中でなくて良かったけどな」

暇を持って余す真壁は釣鐘堂にいた。青銅を鑄造して作られた鐘の口径はおよそ60cmといったところで二尺という計算になる。大ききから言つて鐘というよりも梵鐘じゆんしんと呼んだ方がより正確なのであろう。梵鐘は上部を乳の間ちのまと呼び、下部を池の間いけのまと称される。乳の間には突起状の装飾がなされており、池の間には銘文が鑄出され佛像の具象的な図柄が目を引いた。上部と下部の間の中帯は草の間くさのまと呼ばれるそうで、撞木つづきが当たる位置に二箇所の撞座つづきざが対照的に位置づけられている。ここを撞木で敲いて鐘を鳴らすのだ。

ある種、宗教に魅せられ始めた真壁は興味深く梵鐘の周囲をぐるりと回り観察をした。見れば見るほど新たな発見があるもので心密かにマンダラガンダムを想起していたことも事実である。

マンダラガンダムとは「機動武闘伝Gガンダム」に登場するネオネパール代表のモビルファイターでありジオングの様に脚部はなく巨大な釣鐘状の防御モードと釣鐘から露出したノーマルモードに変形し、切れ味の鋭いビームサーベルと錫杖じゆくじやうから炎を噴出させるといった攻撃を仕掛ける随分と変わったイロモノ系のモビルスーツである。「機動武闘伝Gガンダム」はアムロとシャアを中心とした一連の宇宙世紀を時間軸とした所謂ガンダム年表からは全く独立した単独作品であり、登場する兵器もモビルスーツとは呼ばずモビルファイターとなっている。ガンダム・ファンの間でも賛否両論が分かれる作品であり、正直なところ真壁も強硬な否定派のひとりであった。しかし、こうしてあらためて梵鐘を眺めみるとファンの間で悪夢とさえ評されたマンダラガンダムも趣のある機体に感じられ、休日きゆうじつに帰宅した暁には録画したまま放置してある「機動武闘伝Gガンダム」のDVDを鑑賞してみようかとまで思うようになっていた。梵鐘をゆるりと回り込み注視することに意識を傾け過ぎた為か、すんでのところで撞木に頭をぶつけそうになり首を引っ込めた。目の前

でぶら下がる撞木に手をかけ、鐘を鳴らしてみたいとの衝動に駆られる。釣鐘、撞木、真壁が一直線に並び、両手は既に互い違いに撞木を掴んでいた。既に真壁の心中は“ガンダムGP03ステイメン&ウエポンシステム”か“デンドロビウム”であった。真壁はそのまま数歩後退り、今まさに鐘を鳴らすべく手を離そうとした瞬間、聞き慣れた声が背後から飛び込んできた。

「おい！ 真壁え…。何やってんだ？ お前え…」

気まずく思った真壁は咄嗟に撞木を押し戻し、何事もなかったかのように妙典に振り向いた。

「あ…いや、別に…。ちよつと、珍しかったものですから…」

悪戯がばれた子供のように口を尖らせ俯き加減で言い訳をする真壁の背後で撞木だけがブラブラと小さく揺れていた。

「お前え、鐘鳴らそうとしてたよなあ？ そんな事してみるお…あの馬鹿親父が素っ飛んでくんの間違いないぜ！」

「す…すいませんでした」

真壁は頭を下げつつ釣鐘堂の段をゆっくりと降り、砂利を踏みしめた。

「さっきお前えの事、ミステリー・ハンターと言ったが…ありや撤回だな。…ミステリー・ハンターは女じゃなきゃいけねえ。残念ながら、てめえは男だ。よってミステリー・ハンターの資格はなし！」

…ボツシュートっ！！」

いかにも妙典らしい皮肉とユーモアのこもった説教だと真壁は思った。しかし、多少なりとも真壁にも言い分はある。

「勝手に寺院のものに触れた事は謝ります。…捜査とは一切関係ありませんし、職権乱用と解釈されても仕方ありません。しかし、こんな経験…今までありませんでしたから…」

ポケットに両手を突っ込む妙典は鼻を高らかに鳴らし、真壁に顔を向けた。

「まあ、そこまで責めるこたあ、ねえだろお？ …ミステリー・ハンター失格の真壁巡查部長殿！ それとも…てめえは地井武男かあ

？ ああ！ ぜってえー、そうだ！ “まか散歩”ごっこでもしてたんじゃね？ 変態オタク眼鏡小僧なら、やりかねん！」

半ば妙典に怒鳴り散らされる覚悟でいた真壁は取越し苦労に終わったことに感謝した。いつたいこの妙典という男は何を考えているのか、未だもって理解も予想もできない。大場係長が言っていた言葉が頭を過ぎった。「一緒に居て、とにかく疲れる奴だよ」…どうやらそれは間違いではなかったようである。しかし、そんな自分も妙典からすれば、ただの変態オタク眼鏡小僧でしかない。

「ところで妙典さんこそ、何を？」

「おおっ！？ そうそう…！」

妙典はポケットに突っ込んだ右手を引き抜き銀色に光る小さな物体を掲げ持った。車のキーである。

「これ返しとくわ、運転手さんよお…！」

そう言うつや真壁の差し出す両手にイモビライザーキーをポトリと落とした。丸みを帯びた黒い握りの真ん中には「GTR」と刻印されており、やや大きめの「R」の文字だけが赤みを帯びている。間違いなく青いGT-Rのキーであった。イモビライザーキーにはICチップが内蔵されており、例えば鍵山が同じ構造であってもIDコードが一致しない限りエンジンはかからない。従来メカニカルキーに比べ格段に防犯性を向上させたキーである。

「妙典さん…いつの間？」

「…お袋が洗濯機の中で見つけたつてよ。ワイシャツ洗ってたらガラ音がるもんだから、何事かと思って手繰ってみたら胸ポケットに仕舞い込んであったとさ」

真壁はキーをギュツと強く握り締める。

「刑事として失格ですよ。物をなくすなんて…！」

「いや、失くした事に気付かなかったことの方が問題だが、よくある話さ。俺様なんかジッポーよく回すもんなあ。ま、お袋が勝手に洗濯したんだから、しよげ返る事はあるめえ…！」

「妙典さん、度々すいません」

真壁は心が洗われた充実した一日を過ごしていたが、車のキーまでもが洗われていたことを恥じた。心穏やかなのは間違いないが、それ故ポカも多い。気をつけねばと自分を律した。

「…で、妙典さん。いつの間に出外していたのですか？」

「ん？ …いや、外には出てねえ。…ちよつと車ん中で探し物をな…」

「え？ それは何を？」

「あ…いや、たいしたもんじゃねえ！」

「口ごもる妙典に真壁は眉をひそめる。

「何かは分かりませんが、大事な物らしいですね。…自分も同行いたします」

「いや、いいんだ。真壁巡查部長殿、…個人的なもんだからよお」

いつもなら周りを巻き込むだけ巻き込んで大騒ぎする妙典が両手で真壁を制する姿にとてつもない違和感を覚えた。これも刑事ゆえの勘であろうか。

「いや、妙典さん。昨夜からお世話になりっぱなしですから、自分も同行し妙典さんにご協力いたします！」

鼻から息を吐き妙典は諦めきつた表情で呟く。

「…わーった、わーった。てめえの気持ち、ありがたく受けるぜえ。だがなあ…これだけは言っておくっ！ …見返りは絶対に期待するな！ それだけだっ！！」

「妙典さん、それは“好意は受ける。だが取り引きには応じない”ということでしょうか？…まるで五飛のようですね」

妙典と真壁は母屋のコの字に折れ曲がった手狭な階段をギシギシと音をたて二階へ上がっていた。階段を上りきると廊下伝いに窓から差し込む陽光が眩しく、反対側には何部屋かの横開きの扉が並んでいる。妙典はつかつかと廊下を歩きだし、真壁もそれに続く。窓から見える景色はまた絶景であり山々の木々の上から東京湾が一望でき、薄っすらとだが三浦半島までもが垣間見える。真壁は思わず

立ち止り、その絶景に暫し見入った。するとどこか機嫌の悪そうな妙典の声がし、慌てて前に向き直った。

「変態オタク眼鏡小僧の真壁え！ ……てめえ、誰の部屋の前で立ち止ってやがる！？」

「えっ！？ ……この部屋ですか？」

ポケットに両手をつ突っ込んだ妙典の背中は更に怒気を強める。

「…そこは妹の部屋だ！」

「え？ 妙典さんに妹さんがいらしたのですか？」

「ああ、そうだが…。とつくに嫁いじまって、もうここには居ねえがな。…変態のお前のことだ。俺様の目を盗んで忍び込もうとしただろ？」

真壁は根も葉もない罪をきせられ身の潔白を主張する。

「妙典さん、自分がそんな人間に見えますかっ！？」

「見えるから言ってるんじゃないかねえかよ。…お前、やっぱアレか…妹のタンスの下着見て喜ぶタイプだろ！？ ……絶対！」

「いえ！ 断じてそんなことはっ！ 大きな誤解です。妙典さん！ ……！」

「じゃあ何か？ 男好きなのか？ てめえは？」

もはや何を言っても無駄なようである。冤罪は覆せそうになかった。真壁は諦めた口調で妙典に告げる。

「…妙典さん。ご存知の通り、自分はガンオタです。けして女性に興味がないわけではありませんが、自宅でガンプラ制作やDVD観賞、ゲームをするのが何よりも好きな言わばオタクです。…だから、妙典さんが思ってたらしやるような変態ではありません」

妙典はポケットに両手をつ突っ込んだまま天井のグロー式の蛍光灯を見つめる。

「真壁え…。やっぱ、おめえ…変態じゃねえか。…正直、そんな奴を俺様の部屋に入れたかあないんだが…。仕方ねえ。…まあ、入れや！」

妙典は横開きの扉をガラツと開け、そそくさと入っていった。や

がて部屋の蛍光灯が灯り、真壁はそろりと廊下を歩きはじめ妙典の部屋の前で向き直った。真っ先に目に飛び込んできたのは壁際にたて掛けられた白黒モノトーンのV字型をしたエレキギターであった。白色の部分に赤色で描かれた「仏滅」という文字がとても印象的である。爪先立ちで敷居を跨ぎ、妙典の部屋に足を踏み入れた。

既に妙典は押入れを開け、中を覗き込み何かを探しているようであった。

「妙典さん、ギターお弾きになるのですか？」

押入れに顔を突っ込んだ妙典は背中越しに語る。

「ああ？ 昔な。ちつとも巧くならなかったがなあ。…そこにあるのはギブソンのフライングV。シエンカー・モデルよ。もう手に入んねえから、あんまし触んじやねえぞ！」

「そ…そうですか。とても貴重なものなのですね。でも…“仏滅”という文字が、イカしてますね…」

未だかつて聞いたこともない名詞が立て続けに並び、真壁は戸惑いながらも相槌をうった。よく見ると弦の何本かは既に切れており、長い間手入れがされていない状態のようである。

「へっ！ イカすだろお。その仏滅っ！ …下の方に“Most Unlucky Day”って小っさく入ってんだろ？」

「ええ、確かに…」

「それ、イイだろ？ なかなか…」

「しかし、お父さんから叱られませんでしたか？」

「いいや、全然！ 仏滅って“仏も滅するような大凶日”って意味だよ、俺様の熱いロツク魂で死んだ仏も生き返らせてやるっ！ …て、親父に言ったら“おう！ それはええええ！！ …ついでに、阪神も蘇らせてくれ！”と喜んでたぜ」

「そ…そうなんですか？ あまり聞きませんが、いい話ではありますね」

父親との思い出がないに等しい真壁は妙典親子の奇妙なやり取りさえも羨ましく思い口元を緩めた。

「それにしても、部屋中ポスターだらけですよね」

真壁は埃とかびで変色した部屋の壁紙と擬態化するバンドメンバーと思しきポスターを見回した。

「おう！ そりゃ、ハロウィンとガンマ・レイのだな。…当時はジヤーマン・メタル全盛ですよ。アホほど聴いたもんだぜ」

真壁にしてみれば趣味趣向と清潔さこそ違いはするものの自分の部屋とたいして変わらないことにある種の安堵感を覚え、ポスターに見入った。

「妙典さん！ このハロウィンとガンマ・レイというバンドに似た人物がいるのですが…」

妙典はかび臭い押入れの奥から振り向き真壁に言った。

「それ、似た人物じゃねえ！ 同一人物だ」

「えっ！？ 同じ人が二つのバンドを掛け持っていたのですか？」

「いや、そうじゃねえ…。そいつはカイ・ハンセンでいつてハロウインの前身バンドからのリーダーだった。でもなあ、バンドも段々デカくなり大きな問題を抱えたんだわ」

「問題と申しますと？」

「…ひとつのバンドに三人の天才が存在したんだわあ…。ひとりはそのカイ・ハンセン。ヘヴィメタル然とした攻撃的なギターを弾く音楽的イニシアチブを握るバンドのリーダー」

真壁は部屋に舞う埃を右手で払い除けながら、押入れに顔を戻した妙典の話に耳を傾ける。

「そして、もうひとりのギタリスト、マイケル・ヴァイカート。奴はキャッチーでメロディアス、そして泣きメロを得意としていた。

…最後はマイケル・キスク。他のバンドの追随を許さぬパワフルなハイトーンボイスでジヤーマン・メタルというジャンルのヴォーカリストの理想形を確立した。…そんな三人がいたら、そりゃバンドもギクシャクするわな。そのうちカイ・ハンセンが体調を崩して入院しちまって、その間に半分出来上がっていたアルバムを残ったメンバーで完成させちまった。それがまた成功し自信もつけた奴らと

カイ・ハンセンの人間関係は崩れちまった。…結果的にリーダーのカイ・ハンセンがバンドを脱退する事になるんだが…」

「リーダーが抜けたら組織、いやバンドも上手くいかなくなるのが世の常ですけどね」

「それはハロウインも例外じゃねえ!! カイ・ハンセンなき後はヴォーカルのキスクが音楽的イニシアチブを握るんだが、これが見事に大失敗。結局キスクもバンドを去ることになった。残った“ヴァイキー”ことマイケル・ヴァイカートはもう一度バンドの原点に立ち返り、新メンバーを加えて見事ハロウインを復活させたんだ。それが今も続いている」

「その“ヴァイキー”って人も凄い人物なんですな…」

「まあな、奴もただの天才じゃなかったわけよ」

「…で脱退した…誰でしたっけ？」

「カイ・ハンセン! …ハロウイン脱退後にちよつとしたソロプロジェクトを始めたんよ。そしたらそれがあまりにもいい出来でレコード会社も本人もバンドとして活動することにしたのさ。…それがガンマ・レイ。このふたつのビッグバンドなしにジャーマン・メタルは語れねえし、未だ奴らを凌ぐバンドは現れてねえよなあ…。教えて言えば、ブラインド・ガーディアンぐらいだなあ…」

「ふーん。やつぱり何にでも歴史というものが存在するものですね。…結局その三人は今でも険悪な仲なのでしょうか？」

「さあ、キスクは知らねえが。カイとヴァイキーは和解してるなあ。…てか、元々仲いいし。結局は急にビッグになったバンドの間に入り込んだレコード会社の奴らに仲たがいさせられて結果的にあなっちまったただだし…今やダブル・ヘッドライナーとして一緒にツアー回ってたりするぜ。まさに愚像“アイドル”さ、俺たちのな…」

「それは良かったです。一件落着ですね」

これと言って何の思い入れもない真壁も安堵感に浸り、ため息をついた。

「ま、俺らからすれば目から鱗、一石二鳥、一度食べて二度おいしい

いつちゅう贅沢なツアーではあるがな」

そう言い終えた妙典は大きな目の段ボール箱を真壁に手渡す。

「おい！ ちょっとコレ持つてるや！ ……いいか真壁え、絶対に…絶対に開けるなよ！ ……言っておくが俺様は上島竜平じゃねえからな！ 開けたら一気にお爺さんになっちまうから、気をつける！」

真壁は封のされていない大きな目の段ボール箱を両手で受け取った。大きさのわりにはたいした重みはない。寧ろ軽い感覚ではあるが、如何せん中途半端に箱が大きく持ち難いのが難点であった。少し揺さぶってみたところ中でカラカラと箱の擦れる音がする。開けるなと言われると余計に開けてみたくなるのが人間というもの。封のされていない上蓋をそっと覗き込もうとしたその瞬間、妙典の叫ぶ大声に驚き顔を向けた。

「うおおおおおーっ！！ やっぱここにあつたじゃねえかよっ！ ウチにもねえ。一課の机にもねえ。車にもねえ。…となるとこしかあり得んのだよ、真壁くん」

妙典は押入れから上体を抜き出し得意気に叫ぶ。

「ずっと探してたんよお、これ」

右手に黒っぽいジャケットのCDを握り水戸黄門の印籠かのように見せ付けた。

「ヘヴィメタル史上最高傑作っ！ ……80年代を代表するコンセプト・アルバム“Operation: Mindcrime”だあああーっ！！」

段ボール箱を抱えたまま呆気にとられる真壁は異常にテンションの高い妙典に反して随分と温度差があった。

「真壁よお、こいつはなあ……ストーリー・アルバムだよお。一曲目のSEから最後の曲まで切れ目なく音とストーリーという名の歌詞が続いているんだわ」

「は…はあ…」

段ボール箱を抱える腕がだるくなりつつあり真壁は気もそぞろに耳を傾けた。妙典は若干顎をしゃくり上げ、講釈タイムの始まりの

ゴングを鳴らした。

「… 廃人同様のニツキーって男がよ、病院で記憶を取り戻すんだ。… ヘロイン欲しさに自堕落な日々を送っていた自分。そんな若者達を洗脳して犯罪組織の手下として操る黒幕ドクターX。殺し屋として雇われたニツキーは、腐敗したアメリカ社会に対する革命だと信じて仕事をこなす。しかし現実とは違った。気付いちまったのさ、単にヘロインを入手する為だけに人を殺している自分に…。 そんなニツキーにも心を許す女がいた。シスター・メアリー。彼女なら自分の罪を洗い流してくれるに違いない。ニツキーはそう信じていた。ある日、彼に任務が舞い込む“メアリーと神父を殺せ！”と。シスター・メアリーは組織の連絡係を担う女で組織の男達の情婦でもあった。神父もメアリーの弱みに付け込んで弄ぶ組織の人間だと知らされる。メアリーを愛するニツキーは任務と愛の狭間で揺れ動く。メアリーが自らの屈辱に満ちた境遇をニツキーに告白した時、ニツキーは決心する。“神父を殺して彼女と逃げる”と。それを神父に気付かれたものの首尾よく射殺し、メアリーと共に街を脱出しようとする。ヘロイン中毒の禁断症状と闘いながら、メアリーと新たな人生を送る為にな。しかしドクターXの魔の手は既に伸びていた。メアリーが殺されたんだ。そして容疑はニツキーに掛けられ、メアリーを失ったショックと禁断症状で精神が病んでいく。もはや廃人と化したニツキーは殺人容疑で逮捕され、記憶喪失の中毒患者として病院に収容される。…そして記憶を取り戻したニツキーは苦痛に叫ぶ日々を送るのであった…」

妙典の永遠に続くかとも思われた講釈タイムがようやく終わりを告げ、真壁はホッと一息をついた。正直言えば段ボール箱の重みさえなければ、なかなか面白いストーリーではある。しかし何分大きさが中途半端で持ち難く、手も汗ばんできた。講釈タイムを終えた妙典は念願の“Operation: Mindcrime”のCDケースを裏表ひっくり返しマジマジと眺め、ご満悦の様子でケースを開けていた。

ドツシャー！ 真壁は中途半端な大きさの段ボール箱を遂に薄汚れた床に落つこととしてしまった。

「お…おいっ！ 真壁え！？ 何やってんだあ？ この馬鹿野郎おっ！」

「す…すいません！ 妙典さんっ！」

真壁は箱から飛び散った重みのない小さな箱を慌てて拾い集めた。おもむろに手に取った箱に目が行き驚嘆の声をあげた。

「みよ…妙典さん、これって…」

あからさまに「しまった！」との面持ちで妙典は顔を覆う。

「…ガンプラですよね？ …しかも、水陸両用アッグガイ！ …こっちはジュアッグで…これはギャンにマゼラアツク、そしてゾゴツクに台座・コアファイター付きのコアブースターっ！！ …ガンダムもガンキャノンもあるじゃないですか！？」

押入れの前でしゃがみ込んだ妙典は“Operation: Mindcrime”のCDジャケットで顔を覆い隠していた。

「…だから、おめえをこの部屋に入れたくなかったんだよあ！」

既にガンダム・ワールドの住人となっている真壁は妙典の嘆き声さえ聞こえない状態であった。

「妙典さん、ひよつとして、このガンプラって…1980年7月以降に発売された1/144スケール…所謂、初回発売版じゃないですか！？ …しかも未開封です。…その証拠にアッグがあります。

これは復刻版が出るまでは生産されていませんでした。ほら旧型ザクにわざわざ“平手付き”との記載まであります。間違いありません！ …このガンプラは全て初回発売版の未開封という極めてレアな代物ですっ！！」

「真壁えっ！ すまねえ！！ 俺様、親父に買ってもらったはいいが、不器用でよあ。全然作らなかつたんだあ…」

妙典は“Operation: Mindcrime”を袂に置き、三つ指について真壁に詫びを入れた。“Mindcrime”…「心の罪」とでも言うのだろうか？ 長年貴重なガンプラを作ら

ず腐らせ置いてきた妙典にとっての「心の罪」を独白した瞬間であった。そんな哀れな上司の姿を目の当たりにした真壁も思わず妙典の正面に正座をする。

「…妙典さんっ！！ 一生のお願いですっ！ この…この初回発売版のガンプラ全部、自分に譲っていただけませんかっ！！」

真壁は勢いよく額を床に擦りつけ平伏すかのように土下座した。

「もちろんタダでは言いません。…妙典さんの言い値で構いません。出世払い、いや何年掛かってでもお支払いは致しますっ！！」

大名行列はいまだ続いていて、妙典の部屋に平伏した真壁は床に額を押し付けたまま身動きひとつとらない。時と静寂だけが流れ、二人の男が鎮座しているだけであった。平伏した真壁は面を上げることなく口を開く。

「この真壁伸一、妙典さんの御為ならば、この身を滅ぼしてまでも尽くす所存にございます」

「……………」

妙典はあぐらを組んで腕組みをし、目を瞑って真壁の表明を受け流した。もはや引き下がる訳にはいかない真壁は面を上げると同時に立ち上がった。

「妙典さん！ 妙典さんは先程、“不器用だから、全然作らなかつた”と仰いましたが、それは嘘です。…妙典さんは一体だけガン普拉を作っています。…いや、作るうとはしたが完成しなかつた。その理由は分かりません。…しかし、そのガンプラが原因で初回発売版はおるか以降のプラモさえ、二度と作るうとはしなかつた。…今からその原因となったモビルスーツを推理してご覧にいきます。…そうすれば“理解はできても、納得できないこともある…”と妙典さんは言えなくなる筈です！」

真壁は自信に満ちた眼差しを妙典に向けた。

「ほおー。…じゃあ、当ててみるよお。…俺様が失敗したというモビルスーツをよお。見事当てたら俺様の気持ちもほんのちょびつと変わるかもなあ…」

「了解しました！」

待っていましたとばかりに真壁の目は輝き、自信に満ち溢れた微笑を浮かべた。

「…1980年7月から1982年11月までに発売されたガンプラの事を、所謂“初回発売版”と呼びます。一個三百円。…今にし

て思えば破格に安いプラモデルです。スケールは全て1/44分の1サイズ。パッケージに合わせて逆算して設計した結果、たまたま国際基準スケールと一致していた為に採用されています」

「能書きはいいから、早く答えてみなよ。名探偵・真壁さんよ……」

「…所謂、初回発売版は全部で28種類。1980年7月のガンダムを皮切りに、シャア専用ザク、グフ、量産型ズゴック、量産型ザク、ジオング、ジム、武器セット、ガンキャノン、ガンタンク、ゴック、シャア専用ゲルググ、リックドム、ギャン、シャア専用ズゴック、アツガイ、ゾック、Gアーマー、ボール、旧ザク、ドダイYS、マゼラアタック、量産型ゲルググ、アツガイ、コアブースター、ジュアツグ、アツグ、ゾゴックが発売されています」

真壁の計り知れない知識と記憶力に戸惑いの表情を見せた妙典は思わず目を見開いた。妙にもつたいぶる如何にも探偵らしい口調にゴクリと唾を飲む。

「ご存知の通り、機動戦士ガンダムにはそれまでのロボット・アニメに見られない現象が起こっています。…それは主役機よりも敵役機に人気が集まりました。…ジオン人気です。しかし全てのジオンのモビルスーツに人気があった訳ではありません。テレビに登場しない全く人気のなかったガンプラは“ハズレ”と呼ばれていました。…ですが、そんな中でも特に人気の高いモビルスーツが存在します。妙典さんのこの部屋に存在する初回発売版ガンプラは全部で27種類。…しかし、不思議なことに…その最も人気の高いモビルスーツだけが…この部屋には存在しないのです。…買い忘れた。買いそびれた。…その可能性も否定はできません。しかしっ！ 初回発売版がここまでは完全に揃っておきながら、その一番人気のモビルスーツだけが存在しない。…そんな事はあり得ないのです」

戦々恐々とした妙典は思わず立ち上がり、真壁に背を向けた。その背中に真壁は語る。

「…妙典さん、もういいでしょう。…もう楽になりましょうよ」

諭すように語る真壁に妙典のうな垂れた背中が最後の抵抗を見せ

る。

「…だったらよお、だったら言ってみるよ！ その大人気モビルス
ーツとやらをなー!!」

「分かりました、妙典さん。ズバリ言わせて頂きます。…そのモビ
ルスーツは…」

真壁は一旦間を空け、妙典の背中に突き付ける。

「…“シャア専用ザク”です！」

ポケットに両手をつ込み、薄汚れた天井を見上げる妙典の背中
から数枚の鱗が剥がれ落ちたかのように思えた。妙典は鼻を鳴らし
呟く。

「…流石だあ…真壁え、その通りだあ。…当時、いや今でも一番人
気なのがシャアだ。それくらい俺様でも知ってるぜ。…ふもとのお
もちや屋にガンプラが入荷したと聞いて親父に頼み込んだんだ。親
父はシャア専門の土方作業員でちょうど纏まった金が入ったんだあ。
…そこは片田舎のおもちや屋、日本全国にガンプラ・ファイバーが
巻き起こり、殺到する小学生が将棋倒しになる事故で怪我人まで出
る始末、そんな中でも静まり返っていたさ。…その店はな。親父も
いいトコ見せようとも思ったんだらうなあ…。店主に言ったさ。

“ガンプラとかいうヤツ、全種類くれっ！”ってな」

淡々とした妙典の独白は続いた。

「そりゃ喜んださ、俺様も…。で、真っ先に作り始めたのが…シャ
ア専用ザクだ。真壁、お前の言うとおりの一番人気だった。クラス中
の誰もが競って作っていた。…俺様だつて一生懸命作ったさ。でも
なあ、不器用な俺様は大失敗しちまった…。何て言うんだ？ …あ
のシャア専用の角。…勢い余ってあれを折っちまったんだあ。…あ
れがなけりゃ、ただの色違いの量産型ザクでしかねえ。…で、落ち
込んだ俺様は、そのまま仕舞い込んだのさ。…三十年近くも
の間な」

全てを告白し終えた妙典は振り返り、その表情は清々しく輝いて
いた。

「名探偵・真壁伸一。お前にや、負けたぜ。この俺様が負けを認める。…そんなこたあ、滅多にあるもんじゃねえ…」

はつきりと負けを認めた妙典の言葉に真壁は返す。

「じゃあ、譲っていただけますよね？ …初回発売版ガンブラ」

「ふっ…見事な推理だったぜ。名探偵さんよお。…ま、考えとくわ」「是非ご考慮ください。妙典さん」

妙典と真壁、二人の間で大きく翼を広げたスワンが飛翔した。まるでアムロとラレアのように…。そう感じたのは、きっと真壁だけなのであろう。

突如真壁の中のスワンが掻き消され、妙典が言った。

「真壁！ 聞いたか！？ …今の音？」

真壁は暫し耳を澄まし、答える。

「はい、確かに。本堂の階段から空き缶の転げ落ちる音が…」

妙典と真壁は、埃が舞いガンブラが散在する部屋を飛び出し、東京湾が一望できる窓まで勢いよく駆け寄る。すると転げ落ちる空き缶の音に驚きつつも本堂に駆け込む人影が大きなクスノキ越しに目に入った。

「…来やがったな。ウカムリの盗人野郎お。…行くぞっ！ 真壁

！！ 俺様は本堂。てめえは車転がして下門の前で待ってるやつ！」

「は…はい！」

真壁は妙典の真剣な眼差しに相槌を打ち答えた。途端、二人は陽光眩しい廊下を駆け抜け、コの字に折れ曲がった母屋の階段を慌てて駆け下りる。しかしあまりにも手狭な階段であった為、二人の肩と肩はぶつかり合い身動きがとれなくなった。

「おいっ！ この変態オタク眼鏡小僧っ！ 俺様の邪魔する気かっ！？」

「いえ、そんなつもりは毛頭ありませんよ！ 寧ろ、妙典さんの方こそっ！」

「あああ！？ この俺様に楯突く気かよお！？ お前え！ …迂闊に俺様に近づく奴は、死ぬぜえー！」

妙典が発した思わぬ台詞を耳にした真壁は全身から力が抜けきつた。その隙をぬって母屋の一階に飛び下り、着地間もなく一目散に外に駆け出そうとする妙典を真壁は呼び止める。

「妙典さん！ …まさかデユオって、ご存知ないですよね？」

「何だそれ？ …原チャリかあ？」

妙典はスパンコールがさり気なく輝く黒いハイカットスニーカー“Metallica”を履いた足で勢いよく砂利を巻き上げ、樹齢百年のクスノキを指した。苔に覆われたクスノキに身を隠し、仏像を手にして本堂から出てくるのである。ウカナムリを待つ。

窃盗犯の事を警察用語で“ウカナムリ”と言う。窃盗の「窃」の部首はうかんむりでないにも関わらずウカナムリと呼ぶのは漢字が苦手な妙典でさえも妙に思うことだが、実際にそう言うのだから仕方がない。だからと言って「窃」の部首は何か？ と問われたとしても妙典に答えられる筈はなかった。ましてや何故ウカナムリと言うのかと問われても同じことである。業界用語とは時として意味不明なものだ。このウカナムリもそのひとつなのであろう。

妙典は息を殺しウカナムリを待つ。僅か数十秒の時間でしかないが、とてつもなく長く感じた。母屋にふと目をやると虎縞法被姿の馬鹿親父がヌンチャク・バットを敲いてテレビにかぶり付いて見入っていた。どうやら阪神戦が始まったらしい。…ということは2時をとつくに回ったということである。低迷する阪神の命運を左右するとまで言っていた仏像が今まさに盗まれようとしているの。に我が親父ながら呑気な奴だと感心するしかなかった。半ばあきれ果てた心境で本堂に顔を戻すと本堂の出入口からジーンズにランニングシューズを履いた足がそろりと姿を現した。周囲を警戒するかのように軋む床をゆっくりと踏みしめ階段に向かう男の姿。黒い丸首長袖にやや茶髪がかかった長髪の男の左脇には猛虎復活の願いがかけられた仏像が抱えられ、軋む階段の袂まで進んだ所で立ち止った。本堂の階段下の砂利の上には妙典の灰皿代わりのコーヒーの空き缶

が無造作に転がっており、吸殻が散在している。

「…たくつ。行儀の悪い奴だよなあ。…だいたい土足厳禁って書いてあんだろが！」

妙典は声を押し殺し嘆いた。辺りを見回し人の気配が感じられな
いと判断した長髪の男は本堂の階段を一段々下りようとはせず、
階段の上から敷き詰められた砂利まで一気に飛び降り、着地と同時
に右肩を基点に前回りで一回転し片膝を立てた。ふてぶてしくもあ
る立ち振る舞いで膝の砂利を右手で払い落とし、仏像を左脇に抱え
直して正門に向かい走りはじめようとする。それを見計らって妙典
はクスノキから飛び出し叫ぶ。

「おいっ！ この茶髪の盗人野郎っ！！ ……ちよっくら職務質問し
てえんだが…」

後ろポケットから警察手帳を取り出し広げ、茶髪がかつた長髪に
妙典は足早ににじり寄った。長髪の男は「しまった！」とばかりに
立ち止つたものの抵抗する様子もなくゆっくりと振り返る。

「何だ、あんた？ 警察の人！？ 本物なのお？ それ。…最近
よく出来た偽物もあるくらいだしねえ…」

長髪の男は臆することなく妙典を挑発しにかかった。妙典は警察
手帳をしまい、ポケットに両手を突っ込んだ左足重心の姿勢で立ち
はだかる。

「てめえのその顔のアザ…まだ、新しそうだなあ？ 昨日のかあ？
…忘れもんなら仏像じゃなく…ペンライトじゃねえのか？」

それを耳にし、突然血相を変えた長髪の男は右腕を伸ばし妙典に
殴りかかる。妙典は避けようとせず、若干前に突き出した左肩で
受け止めた。力が最も発揮されるミート・ポイントを前にずらし、
相手のパンチの威力を半減させる高度な防御手段である。

「何だよお…。大した事ねえなあ、てめえ…」

当たりはしたものの効いた様子が全く見受けられないことに驚き、
思わず右手を引いた長髪の男は拳を握り直し、再度振りかぶって妙
典の左頬から鼻に向け、ありつたけの力を込め殴りつけた。今度は

顔面をヒットし妙典は右側へ大きく仰け反ったものの倒れることはなく、間髪いれずに長髪の男に向き直る。左側の鼻の穴からは少量ではあるが赤い鮮血が細く流れ出ていた。妙典は長髪の男の目を見据え静かに告げる。

「…てめえ、これで公務執行妨害及び傷害罪が成立しちまったなあ。ちゆうことは…こつから先は、全面的に俺様に正当防衛が認められるちゆう事だわな」

妙典は右腕で滴り落ちる鮮血をゆっくりと拭い手首が鼻から離れようとした瞬間、右肩と右肘を小さく引き、肘をしならせてパンチを浴びせた。ウィップ・パンチ。右肘を鞭ウィップのようにしならせてパンチを放ち、ミートする瞬間には拳が肩ひとつ分前に出る。相手からすれば鼻先で大きく伸びる感覚に襲われ、気付いた頃に避けたところでもう遅く右拳の餌食になっている。長髪の男は顔面を強打し、よろよろと後退って尻餅をついて倒れると左脇に抱えた仏像は手元を離れ転がり落ちた。俯き加減の長髪の男は覆い被さった前髪で表情こそ窺えないものの驚きと怒りの感情が入り雑じる叫び声を上げた。

「うぐわあああああああー！！」

叫び声と共に勢いよく立ち上がり妙典に駆け寄った。妙典の腰に腕を力任せに絡ませ飛びつく。妙典は組んだ両手で男の背中の上部を軽く押さえ込み、勢いに身を任せる。膝と踵に力を集中させ軽く踏ん張り、スニーカーを数十センチ程後ろに滑らせて相手の力を逃がした。

「なあ、茶髪の長髪あんちゃんよ。…てめえに足りねえのは、喧嘩根性！…喧嘩根性ってのはなあ…こういうのを言うんだよっ！」

そう言うや否や妙典は右膝で長髪の男の腹を蹴り上げた。「ぐふっ！」という呻き声を耳にし、続いて左膝で同じく腹を蹴り上げる。堪らず長髪の男は絡ませた腕を解き、妙典から距離を置こうとした。しかし妙典はその瞬間を見逃さない。間髪入れず右ウィップをもう一発顔面にお見舞いする。長髪の男はよろめきながらも両腕で防御

の体勢をとり、続けて来るのであろう妙典の攻撃に備えた。妙典は構う事なく、もう一度右ウィップの体勢に入る。長髪の男は全身の力を両腕に込める。

「だから言つたろお。てめえにや、喧嘩根性が足りねえって…」

妙典は右ウィップと見せかけて、顔面をかばうがあまりに、がら空きになった脇腹に下側から左フックを捻り込んだ。左ボディアツパー。辰吉丈一郎が最も得意としたパンチである。辰吉ほどのキレもスピードも威力もないが、長髪の男には絶大な効果を発揮した。膝からガクンと崩れ落ち、前かがみで突っ伏し倒れた長髪の男は呻き声を上げることさえ出来なかった。

それを見届けた妙典は後ろポケットから黒色の手錠を取り出し、男の左側にゆっくりと歩み寄る。動かなくなった長髪の男を後ろ手にしようとして右手首を掴み上げようとした。

その時である。左脇腹に凄まじい電流の駆け巡る感覚があり、高熱が全身を貫いた。途端に妙典の身体は硬直し、小刻みに震え始める。時間にして僅か一秒ならず、大きな光と音、そして硬直し全く自由の利かない身体の中、徐々に意識が遠のいてゆくのを感じた。大きな光と音から開放された妙典は旭日章が彫りだされた手錠を握つたまま仰向けで倒れる。

長髪の男はゆっくりと這い上がり、倒れこんだ妙典を見下ろした。「やっぱ、キングコブラの猛毒って、凄いよなあ…」

ふてぶてしい笑い声を上げた長髪の男は妙典の顎に踵を押し付ける。ぐつたりとした妙典は、抵抗する素振りさえ見せない。

「TMM社製キングコブラ・セダン。90万ボルトの中型ハンディタイプスタングァン。…業界最高レベル。…恐ろしい猛毒だぜ。刑事さんよお」

痙攣して身動きが取れない妙典の耳元でそう囁き、長髪の男は踵を返して正門に向かう。途中、袂に転がる仏像を拾い上げゆっくりと正門から石畳の階段に足を踏み入れた。

「うわっはっはっはっはっは…」

背後から擦れた笑い声が聞こえた。長髪の男は驚き振り返るとついで先程まで身動きひとつとれなかった刑事が片膝をついて立ち上がるうとしてている。

「そんな馬鹿な！」

長髪の男は率直に思った。

「…だから言つたる。…喧嘩根性が足らねえとな。…てめえみてえに震えてスタンガン鳴らしてもなあ、威力は半減しちまうだけだわなあ！」

妙典は全身から放電するかのようになり、ゆっくりと立ち上がり長髪の男を見据えた。恐怖心に駆られた長髪の男は足が竦み、びっこを引いて歩み来る刑事を見届けることしか出来なかった。

「いいかあ、この茶髪野郎！…スタンガンてのはなあ、威力を信じて突っ込んでいく喧嘩度胸がねえと効力は発揮しないんだわ」

じりじりと距離を縮める妙典は立ち止り、大声を上げる。

「おらあつ！ 見せてみるや！！…てめえの喧嘩根性とやらをよおつ！！！」

長髪の男は静かに木彫りの仏像を足元に置き、スタンガンを両手に構えなおした。

「そんなに死にたいのか？…刑事さんよお！」

「へつ！ 残念ながら、俺様死なねえんだわ！…なんせ不死身なんだな！」

「な…何、わけ分かんねえこと言つてやがるつ！！…じゃあ、とくと見せてやるよ。…喧嘩根性をよおつ！！！」

長髪の男はTMM社製キングゴブラ・セダン、90万ボルトの威力のあるスタンガンから大きな光と音を発し、妙典の懐に勢いよく飛び込んだ。腹部で高圧電流と高熱を受け、前屈みの姿勢で硬直し、小刻みに震える妙典。目は血走り、大きく開いた口から噛み締める歯が見える。全身から噴出す汗、湯気をも発散しているかのようであった。長髪の男は妙典の懐からめり込ませた両腕を引き抜くとキングゴブラの電源を切り、石畳の階段を数歩後に下がる。暫くの後、

妙典は石畳の階段の上に前のめりで倒れ、両手について必死の形相で踏ん張った。その様に満足したのか、長髪の男は石畳に佇む仏像を拾い上げ踵を返す。二段、三段と石畳をゆっくりと下りる背後でまたもや声がする。

「今、思い出したぜ。…今日の俺様のラッキーナンバーは…2！」
全身はおるか遂に脳味噌までもが高压電流にやられたのであろうか。背後の声はもはや意味不明な戯言を呟くばかりである。

「今日のラッキーナンバーは2つてな。…そう…デイリーの占い欄にあつたぜ」

長髪の男は振り返ると信じられない光景を目の当たりにした。立っている！…確かに立っている。まるで電流が全身を迸るかのように刑事は立っていた。

「おいっ！ 茶髪のあんちゃんよおっ！ てめえが俺様を殴つたのは二発。…スタンガン鳴らしたのは二度。…そして、今日の俺様のラッキーナンバーは2！ …これ絶対何か関係あんだろおなあ？ …ラッキーカラーを覚えちゃいねえーのが、ちいーと残念だがよ！」

長髪の男を支配しているのは恐怖心以外の何物でもなかった。全身から電流を放ち続ける刑事が一步、一步と近づいてくる。

「なあ、知ってつか？ …メタリカの二枚目のアルバム名？」
妙典はそう言いながら石畳の階段を一段下りた。

「…そして、そのアルバムの二曲目のタイトル、知ってつか？」
更に一段下りようとした妙典は全身から電流を放ちつつ長髪の男に言い放つ。

「…“ Ride The Lightning” …まさに今の俺様だな！」

長髪の男は迫り来る刑事をこれ以上ない恐怖の眼差しで見上げた。黒Tシャツにジーンズにハイカットスニーカー、何の変哲もない格好である。最高水準のスタンガンを二度もぶち込んだ…にも関わらず、未だ立っている。…90万ボルトだぞ。下手すりゃ死んでもおかしくないレベルだぞ。思わず黒Tシャツの文字が目飛び込ん

だ。“I Will Live Again”。「再び生き続ける」
そんな意味だ。さつきこの刑事は言った。自分のことを“不死身”
だと…。あの時はほんの脅しだと思っていたが、こいつ本当に不死
身なのかもしれない。…いや、そんな事があるものか!? 人間、
誰だって死ぬ。不死身なんて事はあり得ないんだ! …なのにこの
刑事…まだ生きて歩いてやがる。

「ぬぐうわあああああーっ!!」

恐怖心に苛まれた茶髪の長髪男は叫び声を上げ、踵を返し一目散
に石畳の階段を駆け下りた。“稲妻に乗った”妙典も後を追う。不
規則な石畳の階段も妙典にとっては自分の庭でしかない。みるみる
差を縮め下門に差し掛かった。長髪の男は下門から抜け出し、土道
を駆け下りる。妙典はすぐそこまで迫っていた。長髪の男は背中に
妙典の気配と息遣いと足音、そして嵐の前の雷鳴のような恐怖心が
すぐそこまで迫っているのを感じた。

妙典はあと数歩のところまで迫り、長髪の男を引き捕まえようと
右手を伸ばす。その瞬間、白いワゴン車が妙典と長髪の男を引き裂
くかのように左側から割り込んだ。ワゴン車は急停車し車内から叫
び声が飛ぶ。

「南田っ!! 早く乗れっ!!」

やはり単独犯ではなかった。仲間がもうひとりいたのだ。サイド
ドアの荒々しく閉まる音が妙典を挟んでワゴン車の反対側から響く。
途端、急発進し土道をかき上げた。タイヤが巻き上げる土と小石を
被りながらも妙典は必死にワゴン車を追いかける。しかし距離はみ
るみる離れ、妙典の手の届かぬ所まで行ってしまった。流石の妙典
も追いつのを諦め、息も絶え絶えに両膝を押さえ立ち止った。

「おいつ! 変態オタク眼鏡小僧の真壁っ!! いったい、何もた
ついてやがるっ!!」

妙典は怒りとも嘆きとも焦りとも言える叫び声を上げ下門に振り
返った。すると青いGT-Rがゆるゆると現れ、妙典の前で停車す
る。

「妙典さん！ どうしたのですか！？ ……何かあったのですか！？」
真壁がそう言い終る前に妙典はGT-Rの助手席に乗り込みシートベルトを締めた。

「どうもこうもねえっ！ 何ちんたら走ってやがる。…ウカンムリはもう行っちゃまったじゃねえかよおっ！！」

「…すみません！ 母屋の前の道が狭くて、折り返すのに何度も切り返してまして…思った以上に時間がかかってしまいました」

「…たく。肝心な時に役に立たねえ奴だな！ この変態オタク眼鏡小僧が！ ……車の色を赤色にでも変えたら少しは速くなるのかよっ！？」

「いえ、色は関係ないです。…何せ、土道だったもので…」

「もついい！ 言い訳はいいからとっとと追いやがれっ！ ……変態オタク眼鏡小僧っ！！ ……相手は白いワゴン車だ。ここからふもとまでは、ほぼ一本道。余程の地元民でもねえ限り、横道には逸れねえ！ ……このGT-Rならすぐに追いつく！」

「了解しました。…でも、妙典さん。何かあったのですか？ ……髪の毛が逆立っています」

「…ちよつと、イメチェンでなあ。アフロにでもしようと思ったのさ。…って、さっさと車出せやつ！！ 真壁えっ！！」

「ああ…はい！ やります。相手がワゴン車なら人間じゃないんだ、僕だっつて」

唸りを上げるV6ツインターボのエンジン音と共に青いGT-Rも土煙を大きく巻き上げ、白いワゴン車を追った。

片田舎の街道は都会以上に美しく整備されていた。地元の名士、所謂“先生”が選挙での票を確保する為に山や畑の真ん中にこれ見よがしに立派な街路を作りたがる。そのくせ通行量は極めて少なく、路面の損傷も殆んど見当たらない。それ故、走り屋やドリフト族などが多く集う要因となり騒音問題にも繋がっているのだ。

片側一車線の道路ではあるが、道幅も比較的広くアスファルトの路面状況も極めて良好である。必要以上に頑丈そうなガードレールも延々と続いていた。しかし、そんな立派な街路の所々が雀の溜まり場と化している状態はもはや笑止の至りと言えない現状である。

緑色の木々が連なる山々の狭間にV6ツインターボの奏でるエンジン音が微かに響き、徐々に音量を増し轟いてくる。ドップラー効果でいうところの波の発生源が今まさに頂点に達しようとする瞬間、雀たちは一斉に飛び立った。雀たちの溜まり場であったアスファルトの上を青いGT-Rが駆け抜ける。

「…なあ、真壁え。…お前え、峠攻めたことねえだろ?」

パツセンジャーシートに深くもたれ掛った妙典はぶつきらぼうに呟いた。

「ええっ? …峠ですか?」

「ああ! 峠だよ。…これじゃあ、ちつとも追いつかねえぞ!」

「そうは言われなくても、自分は暴走族でも走り屋でもありませんでしたし、…寧ろゴールド免許取得者です」

「…だろっな。…峠の走り方がまったくなっちゃいねえ…」

妙典はもたれ掛る腕枕の上でわざとらしくアクビをして見せた。

「で、どうしろとおっしゃるのでしょうか?」

真壁は眉を吊り上げおどけてみせた。

「直線が速えーのは当たり前! …コーナーを如何に素早く抜ける

かが勝負だな」

「警察学校で、その様なことは言われませんでしたけど…」

困惑した表情の真壁は木々で覆われたブラインドの左コーナーを中央線からはみ出る事なく道なりにスムーズに曲がった。

「“どうもお坊っちゃん育ちが身に染み込み過ぎる、甘いな”…だっけ？ お前の尊敬するあのお方にお叱り受けても仕方ねえぞ、これじゃあな…。ま、これ聴いてぶっ飛ばしてみやがれっ！」

妙典はグローブボックスからいつもの慣れた仕草でCDを取り出しダッシュボードに突っ込んだ。

「いくぜえ。…ジューダス・プリースト “Free wheel
Burning”」

如何にもヘビーマタルという騒々しいリフレインが始まり、同じリフがハーモニックスで重なる。同様にベースとドラムも刻みだし、かきむしる様なエレキギターが乗った。彼方からハイトーンな叫び声が響き始めたかと思うと、ヒステリックなヴォーカルが疾走する曲の始まりを告げる。

音楽というものは不思議なものだ。曲の雰囲気に応答して人の心身も揺り動かされる。アクセルの踏み込みが先程よりも力強くなつており、コーナーを抜けるタイミングも心なしか早くなっている気がした。V6ツインターボの奏でるエンジン音も曲調に合わせ勇猛になっているかのようである。

「おお…、いい感じになつてきたなあ」

妙典はご機嫌な様子で曲のリズムに合わせて言った。

「えっ！？ 妙典さん。もしかや運転の事でしょうか？」

「…いや、ジューダスの方な」

ややむくれた様子ながらも真壁は右コーナーの進入でブレーキを小刻みに二度踏み、立ち上がったところでアクセルを小さく踏み込む。一瞬の間をあげ更に大きく踏み直した。

「ほーれ、見えてきやがったぜ。…獲物がよお！」

妙典はパッセンジャーシートに座り直し、白いワゴン車に目を向

けた。

「…日産セレナ・ハイウェイスター。Vエアロセレクションか…。何気に逃げる気満々だなあ、あいつら…」

サイドウィンドウを半分だけ下げた妙典はルーフにパトランプを置き赤色灯を回した。赤色灯を載せた青いGT-Rに気がついたセレナは突如スピードを上げ振り切ろうと試みる。同じ日産車ではあるものの排気量から搭載されたエンジンに至るまで、あまりにも違いがありすぎる。ホワイトパールのセレナの真後ろに青いGT-Rがピタリと着いた。セレナは蛇行運転を始め、前に出させまいとGT-Rの行く手を遮る。

ここは田舎の一本道である。一度、前に出て横向きに停車されれば完全に逃げ道は塞がれる。マシンパワーに歴然とした差はあるものの絶対に前に出す訳にはいかない。この一本道を凌ぎきり街道に出さえすれば何とか活路は見出せる筈である。色白でガタイの良い黒ぶち眼鏡の男はルームミラーに映る青いGT-Rの動きに合わせハンドルを小刻みに切り返した。

「真壁え、どうするよお？ 前に出させねえつもりだぜ。…対向車線でも何で構わねえから真横に着けるや！」

「た…対向車線ですか！？ …もし、対向車が来でもしたら？」

「来ねえよ。…あのなあ、ここはてめえの想像を遥かに越えた田舎だぜ。…対向車なんか、来るわけねえだろっ！」

妙典の楽観的な意見に賛同しかねる真壁は皮肉交じりに言った。

「あの〜、妙典さん。…前方のワゴン車のタイヤ…撃って頂けませんか？」

妙典は大きく鼻を鳴らし悪びれることなく返す。

「なあ、真壁よお。…お前、本気で言ってるのかあ？ …だとしたら…人見る目ねえなあ。…優秀な準キャリアさんにとっちゃ致命的だなあ、おい！」

皮肉を皮肉で返され、小さく溜め息をついた真壁は小声で詫びをいれる。

「失礼、また後程」

真壁の侘びを掻き消すかのように妙典は叫んだ。

「おい！ 真壁え！ この先にブラインドの右コーナーがある。そこで一気に対向車線に突っ込めっ！ いいな？」

「了解しました。：“やれるとは言えない。けど、やるしかないんだ！” という心境で頑張ります。：ところで、妙典さん。因みに次の曲もノリの良い曲なのでしょうか？」

「ええ〜と、次は：“Jawbreaker” だから問題ねえなっ！ めっちゃ、かつけーアグレッシブな曲だぜっ！」

「安心しました。“Jawbreaker”：早口言葉ですか。少し無茶しますが、妙典さんこそ舌を噛まないようにしてください」

「おう！ 言ってくれるじゃねえか。：期待してますぜっ！！：優秀な準キャリアさんよお！」

妙典は真壁を見やり、にやけた表情を返した。

真壁はG T - Rを左一杯に寄せ、ワゴン車の様子を窺う。間髪いれずに左に寄るワゴン車。すかさず真壁はハンドルを右に切り、対向車線にはみ出した。すると慌てた様子でワゴン車も対向車線に出しゃばる。

「真壁え、もうすぐだかな。：右コーナー」

真壁の目線の先に右ブラインドコーナーがチラついた。妙典のナビゲートに従ってハンドルを左に切り、対向車線から走行車線に戻った。思惑通りワゴン車も走行車線に戻り、右コーナーを迎える。

その瞬間を逃さず、真壁はハンドルを大きく右に切って対向車線に飛び出し、アクセルを大きく踏み込んだ。

「僕が一番G T - Rをうまく使えるんだ。一番、一番うまく使えるんだっ！」

真壁は大きく叫び、右コーナーの頂点に達した瞬間にアクセルを踏み直した。

突如、目の前に軽トラックの姿が大きく飛び込んできた。真壁は慌ててブレーキ・ペダルに踏みかえるとハンドルを左に切り戻し、

セレナの真後ろに再び舞い戻った。行過ぎる軽トラックを真壁はル
ームミラー越しに見やり、安堵の溜め息をついた。

妙典はシートから身を乗り出し振り返る。

「…ありや、うちの檀家の山下さんだ。…仏壇の修繕、終わったみ
てえだなあ…」

絶対に来ない筈の対向車が来てしまった。胸の高鳴りを抑え真壁
は呟く。

「妙典さん…またやり直しですね。…もう同じ手は通用しませんよ」
妙典はフロントガラスに顔を戻し、頭の中でこの先の道筋を辿っ
てみた。ヒステリックに叫ぶ“Free wheel Burning
”もいよいよ佳境に迫ろうとしている。

「…真壁え。…このまま真後ろにピッタリくっ付いてるや!」

「…このままですか?」

「ああ…このちよいとばかりか先に見通しのいい緩やかな下り右カー
ブがある。…合図したら距離を縮めて思いつき煽れ。相手はワゴ
ン車だ。下りの右で煽られりや、嫌でも外に膨らんじまう。…そし
たら今度こそ対向車線…右側に寄って、真横に着けるや!」

「わ…分かりました。…今度こそという言葉はあまり使いたくない
ものですが…」

青いGT-Rはホワイトパールのセレナの真後ろにピッタリとつき、
妙典の合図を待った。“Free wheel Burning”の
激しいサウンドが二人を包み込む。もはやヒアリング不可能なほど
の早い歌い回しと破壊的なギター・サウンドが緊張感を呼び覚まし
た。

「…おしっ! 真壁え、今だ! 踏めえっ!!」

妙典の合図に真壁はアクセルを踏み込んだ。前を走るセレナも速
度を上げる。妙典はシートベルトを外し、サイドウィンドウを全開
にした。

「みよ…妙典さん! 何をするつもりですかっ!?!」

真壁の問いに妙典は不敵な笑みを返した。

「…まあ、黙って見てろや！ 適材適所ってやつだ！」

妙典の意図が把握できない真壁は戸惑いながらもアクセルを踏み続けた。妙典はシートから仰け反り全開のサイドウィンドウから身を乗り出す。嫌な予感が漂いチラリと妙典の様子を窺う真壁には、先輩刑事の指示に従う以外の選択肢は残されていなかった。

ルーフの両端を逆手で掴み、両足はウィンドウの下枠で踏ん張る。その妙典の姿たるやもはや箱乗りとは言えず、蛙飛びとでも形容しなくなる態勢であった。そして下り勾配の右カーブにさしかかろうとした瞬間、真壁はアクセルを踏み直す。セレナも必死に加速を試みるが、既に蛇行する余裕などなく左側のガードレールに接触しない事に専念していた。それを見計らった真壁はハンドルを大きく右に切り、アクセルを小刻みに二度踏み込んだ。前に被さる気配が見られないセレナの真横にG T - Rはピタリと並ぶ。色白の眼鏡男がG T - Rにぶら下がる妙典の姿を再三見やり、焦りの表情が窺えた。

妙典は膝と踵に力を込め、大きく飛び跳ねる。空中で身体を半回転捻り、ホワイトパールのルーフにうつ伏せの状態で飛び移った。左手でルーフの端を掴んだ妙典は右腕を大きく振り、下がれとの合図を真壁に送る。それを横目で見た真壁は減速し、セレナの後方に下がった。右カーブは程なく終わり、またも峠道に差し掛かかろうとしていた。ルーフにしがみ付いている妙典に気付いたセレナは大袈裟に蛇行運転を繰り返し、振り落そうと試みる。しかし妙典はルーフの端を両手でしっかりと握り締め、両足も大きく広げて踏ん張り続けた。

根競べに負けたセレナの左サイドウィンドウの開く音がした。すると茶髪の長髪男が箱乗り状態で身を乗り出し、大きな光と音を発した。キングゴブラが妙典の左手をめがけ襲い掛かる。妙典は左手を離し、半身でキングゴブラの猛毒を避けたものの右腕だけでルーフにしがみ付くのは至難の業であった。攻撃をやめたキングゴブラが一度首を後に引くと妙典は身体と左手を戻し、元の位置を掴み直した。飛び散る火花とともにキングゴブラの猛毒が再び襲い来る。

妙典はまたも既の所で大きな光と音を発する猛毒を半身になつて避ける。キングゴブラはルーフに接触し火花を散らし続けていた。それを目にした妙典は半身の体勢から力を込めた左肘を長髪の男の右手首に突き落とした。堪らず長髪の男は右手を離し、キングゴブラは大きな光と音と火花を発したままルーフの上を転がり滑る。妙典は目の前に転がるスタンガンに手を伸ばし、長髪の男も被さる様に腕を伸ばした。わずかに早くキングゴブラを握った妙典は大きな光と音と火花を発し続ける先端部分を上面に向ける。そこに長髪の男の手が覆い被さり、悲鳴と共に硬直した。妙典が電源を切ると長髪の男は硬直状態から開放され、痺れの残る右手を引つ込め、車内に逃げ込んだ。

妙典はキングゴブラを後ろポケットに突っ込み、振るい落とされないよう右手一本でルーフにしがみつく。ふと顔を前に向けると急な下り坂が迫っていた。ホワイトパールのセレナは急加速する。妙典は嫌な予感がした。下り坂で更に加速したセレナから急ブレーキを踏む音が突如発せられた。妙典は慣性の法則には逆らえず、ボンネットにもんどりうって転がり落ちる。不意に左手がサイドミラーの根元を掴み、振るい落とされはしなかったもののセレナは再加速を試みた。ワゴン車のボンネットの大きさは知れたものでノーズとの表現が適切である。大人一人覆い被さるのが精一杯であった。下り坂で加速を続けるセレナはまたも急ブレーキを踏み、妙典の左手はミラーから離れボンネットをずり下がる。辛うじてエアロパーツの両端に爪先で踏み止まり、ボンネットの両端を掴んだものの、次にまた同じ事をされれば振るい落ちるのは目に見えていた。Vエアロセレクションのセレナはまたも加速を始める。

右手一本で妙典はボンネットに掴まり、後ろポケットのキングゴブラに左手を伸ばす。ボンネットの端を掴む右手はもはや限界に近づいていた。手にしたキングゴブラをフロントグリルのエンブレム裏に押し込み電源を入れる。大きな光と音、そして火花がエンブレムの裏側から発せられた。空いた左手をボンネットの端に素早く戻

し、両手を今一度強く握り締めエアロパーツ上で踏ん張る両足をフロントグリルに宛がう。ホワイトパールのセレナはまたも加速を始めた。握り締めた両手が汗ばみゆるゆると滑る。不意に振り向くと下り坂の先が左に折れ曲がっており、頑丈そうなガードレールが目飛び込んできた。

「ほう、ガードレールにブチ当てようつてか？ なかなか、面白くないこと考えやがる…」

妙典は顔を戻し、色白の眼鏡と茶髪の長髪に向ってニヤリと笑みを浮かべる。つられてフロントガラスの向こうの二人も笑みを返した。

妙典はその微笑を見届けると両足を力強く蹴り上げる。滑りながらも両手はボンネットの端を力強く掴み、妙典の身体は一瞬だけ大きな弧を描く弓反りとなった。セレナは更に加速を続ける。色白の眼鏡男はアクセル・ペダルからブレーキ・ペダルに踏み換えるタイミングを計っていた。弓反りとなった妙典は全身の力と勢いをスパンコール輝く黒いハイカットスニーカー“Metallica”を履く両足に集中させ、フロントグリルのエンブレムの上から火花散るキングコブラを力任せに蹴り込んだ。加速度センサーが過度に反応したのか、ECUが誤作動したのか、インフレーターが誤爆したのか、セレナの車内からバン！バンっ！と複数の大きな破裂音が響く。

前面と側面から一気に膨張したエアバッグがフロントガラスの向こうにいる男たちの姿を瞬時に覆い隠した。驚いたセレナは減速することもできず、急ハンドルを切り横転する。妙典は咄嗟にエアロパーツを蹴り、ホワイトパールのセレナから飛び離れた。アスファルトの上をゴロゴロと横向きに転がる妙典。やがて転がる勢いはおさまり、大の字で空を見上げた。ホッとする妙典の耳に金属の擦れる嫌な音が急速に近付いて来る。横転したセレナはホワイトパールのルーフを妙典に向け、火花を散らし下り坂を急速に滑り落ちてきた。妙典は慌てて立ち上がり、坂の下のガードレールに向かい全力

で駆け出す。徐々に迫り来るホワイトパール。妙典に振り向く余裕などなく、ガードレールを凝視し一目散に走った。ガードレールは目の前に迫っていたが、肥大化を続けるアスファルトを削る金属音が背後から劈く。一点だけをただ見つめ、極度の疲労を感じるものの妙典は最後の力を振り絞り、“レッド・スター”赤星の鋭い盜塁の如くガードレールの下をスライディングし潜り抜けた。緑が生い茂る草むらに飛び込んだ背後でVエアロセクションのセレナがガードレールに激しく激突する金属音を感じた。

妙典は草むらに大の字で寝そべり、夕焼け迫る流れゆく雲を見つめていた。大粒の汗が顔全体から流れ落ち、息を切らし大きく呼吸を続ける。やがて落ち着きを取り戻し、這いつくばった体勢から起き上がるのと激突により、ひん曲がったガードレールを目指して歩を進めた。もはや走行不可能となつたセレナ・Vエアロセクションの前で青いGT-Rは立ち塞がるかのように横向きで停車している。余程焦っていたのだらう。真壁にしては珍しく運転席のドアが開いたままになっており、ジューダスの“Jawbreaker”が漏れ伝わっていた。まだ前輪がカラカラと回る横倒しのセレナに真壁は乗っかり半開きのサイドドア越しに叫んでいた。

「あなた方は黙秘権を有します。あなた方が供述したことは裁判にてあなた方に不利な証拠となりうります。弁護士と相談する権利、並びに取調べに際して弁護士を立ち会わせる権利も有します。ご自分で弁護士を雇うことができない場合は、公費で弁護士を雇うことも可能です。あなた方はこれらの権利を放棄致しますか!？」

音楽というものは凄いと思った。これだけの台詞をひとつも噛まずに早口で捲くし立てる真壁に少し感動を覚えた。妙典はガードレールを跨ぎ、腰を掛け事の成り行きを静かに見守る。

サイドドアとエアバッグの狭間から長髪の男が顔を出し、左腕を突き出した。真壁も顔の右横で銃を構え、常時応戦できる状態にあった。真壁は茶髪の長髪男の左腕を引き上げ、横たわったホワイト

パールのセレナにしゃがみ込ませた。長髪の男は境内で一戦を交えた時の威勢のよさはすっかりなくなり、疲れきった表情でセレナ・Vエアロセレクションからゆらりと飛び降りた。着地して間もなくガードレールに腰を掛ける妙典と目が合ったが、肩掛け鞆を提げる長髪の男は目を逸らした。妙典は長髪の男にそこに座れと合図をし、男も大人しくガードレールを背にしゃがみこむ。ホワイトパールのセレナの上では色白のガタイのいい男が真壁に引き上げられていた。ご自慢の眼鏡はエアバッグの衝撃でどこかへ吹き飛んだらしい。色白の男は横たわったセレナにしがみ付くかのようにアスファルトの上に降り立った。妙典は顎をしゃくり長髪の男の方に顔を向ける。ガタイのいい色白男も無言で茶髪の長髪男の隣にしゃがみこんだ。それを見届けた妙典は自慢げに呟く。

「茶髪のおんちゃんに、色白のデカブツ…。やっぱり俺様のラッキーマンバーは2だったなあ」

真壁はスーツの下のショルダーホルスターにニューナンブM60をしまい、Vエアロセレクションのセレナから飛び降りた。妙典と目が合い真壁は小声で言う。

「安心しました！ 妙典さん！ …やはり、あなたは“不死身”…かもしれません」

「ふっ…若造の言う事かあっ!?!」

妙典の思いがけない一言に真壁は微笑んだ。

「クラックス・ドウガチ。…ご存知ないですよね？」

「ドウカテイなら知ってんぞ！」

真壁はご自慢のジオン仕様携帯を内ポケットから取り出し「1」

「1」「0」と続けて押した。

「…こちら警視庁捜査一課の真壁と申します。…電話番号で照会して下さい。…はい、そうです。…警視庁捜査一課の真壁伸一 巡査部長です。只今、当方にてウカムリ二名の身柄を確保。…場所は…はい、そうです、GPSで表示されている通りです。…ワゴン車が一台横転しておりますので、消防の手配もお願いします。…では、

お疲れ様です」

真壁は携帯をパタンと閉じると内ポケットにしまい、妙典に告げる。

「10分で到着するそうです」

妙典は腰を上げ、ガードレールに沿ってしゃがみこむ男達に声をかけた。

「おい！ 茶髪のおんちゃん。…その肩掛け鞆、こっちに渡せや！」

茶髪の長髪はゆっくりと妙典を見上げ、もはや観念した様子で肩掛け鞆をゆるりと手渡した。半開きの鞆から猛虎復活の願いの込められた木彫りの仏像が顔を出している。丁寧に引き抜くと鞆の底にドシリとした重みのある感触があった。妙典は仏像を手に取り見回す。すると木彫りの仏像の底に穴が開いており、中は空洞になっていた。鞆の底には木彫りの像の裏蓋らしきものと見覚えのあるブーツが転がっている。

「…これが目当てだったか？ …お前ら、何者だあ？」

茶髪と色白の男はしゃがみこんだまま俯き、口を噤んだ。

「妙典さん。何です？ …何があつたのです？」

「C-4だ」

妙典は真壁の目を見据え静かに言った。

「C-4って、まさか？」

「そついや、昨日アカネコの西川も言っただけか？ …木彫りの像からC-4が出てきたってなあ」

「ええ、確かに言っていました。…何かの関連でしょうか？」

「さあな！ …後はこいつらがじっくり県警にお話してくれるだろうよ」

妙典はそう言いながら携帯を取り出し電話をかけた。呼び出し中の携帯電話を真壁に投げ渡す。受けとめた真壁は妙典の携帯を耳に宛がい、声の主を待った。

「…はあゝい 妙典さん、何か、あたしに御用かしら？」

声の主は鑑識の倉田勝則巡查長であった。携帯を押し付けられた

理由に真壁は納得した。

「あ…もしもし、…真壁です」

『あら！？ 真壁くん？ …これ妙典さんの携帯でしょ？』

「…いや、ちよつと渡されました…」

『あら、そう？ …で、何の御用かしら？』

「昨夜、北参道署で連続放火犯が逮捕されています。…その押収品に木彫りの像はありませんでしたか？」

暫しの間があり、倉田は口を開く。

『でも、その前にやっておく事があるでしょ？』

また例によつて倉田検定のようである。真壁は黙つて携帯を握り締めた。

『まあ、電話口だから手身近にいくわよ。…ガルマつて何故、死んだのかしら？』

携帯を耳に宛がつたまま真壁は思案に耽る。そして何らかの答えを導き出した。

「倉田さん、ガルマ・ザビが死んだ理由。それは…“坊やだからさ

”…です」

『…ふ〜ん、流星ね。…真壁くん …で、木彫りの像だったかしら？』

「ええ、そうです」

ツーン と吸い込む倉田の鼻息が聞こえ、手元のマウスを小刻みに動かす物音が窺える。

『…うん あつたわ。…まだ、画像だけだけど…。確かに木彫りの像に違いはないはねえ。…でも、これつて…仏さまよね？ …きつと』

「やはり、ありましたか。木彫りの仏像」

『なるほど…これにC-4が隠されていたのね？ …で、これがどうかして？』

「今、こちらでも同じ物を見つけました」

電話口に暫しの沈黙があり、倉田のマウスを動かす音だけが微か

に伝わった。

『…なんかコレ、重要物件っぱいわね。…雷門管理官名義で証拠品引渡依頼が出てるわ』

「えっ!?! 雷門さんが!?! …ひょっとして南砂町の事件でしようか?」

『うん。ここからは、ひ・み・つ』

「…しよがないですね。守秘義務がありますから…」

『で!…でえっ 早く妙典さんに変わってくれる?』

真壁は無言で携帯電話を妙典に手渡す。受け取った妙典も口を噤んだまま容赦なく電話を切った。

「…で、何か言ってたか? アキバ二丁目」

妙典は携帯をジーンズのポケットにしまい、何食わぬ顔で真壁に問うた。

「重要物件らしいです。…雷門管理官が証拠品引渡を依頼しているそうです」

ポケットに両手を突っ込んだ妙典は空を見上げ呟いた。

「…何か嫌な予感…するよなあ?」

真壁も黙って頷く。そんな折、峠道の彼方から悲鳴にも似た喚き声が聞こえてきた。二人は声のする方向に顔を向ける。

「ひ…ひろみちいいいいーっ!」

虎縞法被を翻し、猛スピードの原付バイクに跨る博信の姿であった。青いGT-Rの傍らで急停車し、慌てて駆け寄る博信。

「た…大変じゃー! 阪神が…阪神が、また負けおったわいつ!」

呆れた面持ちの妙典はポケットに両手を突っ込んだまま俯いた。

「…で、戦評は?」

「能見が…代打の金城に走者一掃のタイムリー二塁打を打たれおった。…4対0。…今日も打線の援護なしじゃあーっ!」

溜め息をついた妙典は博信に向き直った。

「…ところで、これで間違いないねえだろ? 猛虎復活の仏像ってのは…」

博信は大きく両手を広げ、喜びの気持を身体一杯に表現した。

「おおつ！ それじゃ、それじゃよ。博道。…流石はわしの息子じや。悪党どもから取り返してくれおったか…」

「…すまねえが、親父。…ちよつくら借りることになりそうなんだわ」

「な…何と！？ …それは、我が阪神タイガースに死ねと申すのかつ！？」

「ちよつと…重要な証拠みたいなんだわ。…事件が納まったら、ちやんと帰って来るからよ」

「…博道いつ！ …それは何年後じゃ？ 何年後になるんじゃ！？ …また二十年も待たねばなんのか？」

「いや、流石にそこまでは掛かんねえと思う。“The Spirit Carries On” …天に召されたと思って我慢してくれや。…輪廻転生、死んでもまた生まれ変わってくんだろ？

…仏の教えって？」

「…おう！ その通りじゃ、博道。…ようやく悟りを開き始めたようじゃのぉー」

照れたのか、呆れ果てたのか、妙典の心中は定かではないが、はにかんだ様子でガードレールにしゃがみ込む二人組みを手で示した。「紹介するぜ。こっちの茶髪のおんちゃんが昨日のコソ泥。…もう一人が共犯」

博信はしゃがみこむ二人組みを見やり説法を始める。

「…良い行いをすれば良い報いが訪れる。悪い行いをすれば悪い報いが必ず訪れるのじゃ…以上！」

博信の極端に短い説法が終わり、遠くからサイレン音が聞こえてきた。

「ところで親父よ。お前、ノーヘルだろ？」

「何を言っかつ！ この馬鹿息子っ！！ …この立派なスキンヘッドを見よ。これぞ、どう見てもヘルメット。…心が清らかな者にはそう見えるのじゃー！」

妙典は肩をすくめ博信の足元を見やる。

「…それと、その雪踏。…完全に道交法違反だからな」

博信は我が息子を優しい眼差しで見つめる。

「分かった。すまんかった。見んかったことにしてくれ！ わしは今すぐ帰るっ！ …後は任せたぞお！！」

博信はペルセウスブラウンメタリックのディオ・チエスタに虎縞法被を翻して駆け寄り颯爽と帰って行った。

「何が良い行いだあ？ あの馬鹿親父がっ！」

妙典は呆れ果てた面持ちでディオ・チエスタを見送った。

「…いいじゃないですか」

妙典の肩越しで真壁はアムロの様に呟く。その二人の背後には千葉県警の数台のパトカーがパトランプを回し近づいていた。

真壁は襖をピシヤリと背後で閉めた。母屋の一室を借り切った臨時取調室である。取調べは何も容疑者だけが受けるものではない。関係者も参考人としてその対象になる。事件の大小を問わず事実関係を把握する為には必要不可欠のことだ。しかし普段取調べを行う側の人間が逆の立場になると途端に調子が狂い、少しばかりの疲労を感じていた。

境内は千葉県警の人間でゴった返していた。正門、クスノキ、本堂と…制服、私服が入り乱れ右往左往する警官達。埃舞う境内の砂利の上のゲソ痕をひとつひとつ追いつ追いつ続ける鑑識には同業者の端くれとして頭の下がる思いであった。

右に左に行き交う警官達の向こう、本堂の階段の隅で煙草を啜えしゃがみ込む妙典の姿が目にとまった。真壁は行き交う警官達を掻き分けつつ、母屋の廊下を伝って本堂へと向かう。張り出した廊下の軋みは行き交う警官達の足音で、もはや絶え間ない騒音と化している。途中ネクタイの歪みに気付いた真壁は騒音に加担するのを一旦止め、右手でタイを軽く引き左手で結び目をキュツと上に押し上げた。何だか、胸騒ぎがする。その正体が掴めぬまま再び騒音に加担した真壁は妙典の聖域に到達した。

「妙典さんのこと、たくさん聞かれましたよ」

真壁は取り敢えずの上司報告を行う為、妙典の隣に腰掛けた。

「まるで俺様が犯人みてえだな…」

「いえ、そうじゃありません。…車に飛び移ってエアバッグを作動させた件を多く聞かれました。…聞いたところスタンガンを何度も喰らったそうじゃないですか。それも普通の人間ならとつくに死んでいるくらい強力なやつを。…だから県警も興味津々という感じでしたね」

「…まあ、…俺様“不死身”なんだから仕方ねえだろ」

軽く広げた膝に両肘をつけて真壁は苦笑いをした。

「ええ、まさしく不死身です。“不死身の第四小队”…サウス・バニングですよ、妙典さんは…」

「誰だ、そいつ？ 前にも聞いたかあ？ …その名前。…やっば、それって褒められてんのかあ？ …俺様」

「自分にとつて最上級の褒め文句ではありますが…」

「ふーん。…ま、俺様も…給料分くらいの働きはしなきゃならんからな！」

知る筈のないサウス・バニングの台詞を不意に口にしたら妙典には憑依能力があるのかもしれない。いや、サウス・バニング本人なのかもしれないと真壁は思った。しかし、そうだとすると…いずれ爆死する運命にある訳だが…。

突如、携帯のブルブルと震える音が伝わった。妙典はポケットをまさぐり携帯を取り出し開く。着信者名を一目見た妙典の顔色が豹変した。意を決し電話に出た妙典はいつも比べテンションが低いように感じる。

「…妙典です」

『雷門です。…ご活躍だったみたいですね。妙典巡查長』

「へっ！ …もう、雷門さんの耳に入ってますかあ？」

『何でも…地獄耳らしいですから、自分は…』

「…捜査から干されて、一応今日は貴重な休暇なんですけどね。いったい何の用ですかい？ 管理官殿」

『つまり“Out In The Fields”に置かれているとでも言いたいのですか？』

「わおっ！ 久々に出ましたね、ブリティッシュ・ハードロックの雷門っ！！ …それはゲイリー・ムーアの方ですかい？ それともシン・リジイの方ですかい？ …まさか、スキッド・ロウと言っんじゃない？」

思わぬロック話で威勢を取り戻した妙典は冗談めいた口調で尋ねた。それに対し、雷門は変わらず落ち着いた口調を貫いた。

『勿論それはどちらもです。ゲイリー・ムーアとフィル・リノット
…二人がいてこそ“Out In The Fields”なのです。
…ちなみに、“Out In The Fields”なのも
今日までです。明日、午前十時から捜査会議があります。13係に
も出席してもらいます。…場所は、警視庁第七方面本部。馬場係長
には既に伝えてありますから、真壁巡査部長にも伝えておいて下さ
い』

上司とはいえ一方的な話に妙典は口を尖らせ雷門に問うた。

「雷門さん、何か話が急すぎるんだが…デカイヤマなんスかねえ？」

…南砂町の刺殺事件って？」

『それは、明日会議でお話しましょう。…しかし、今日そちらで捕
まった二人組みは我々が追っていた二人でした。南砂町刺殺事件の
重要参考人です』

妙典は天を仰いで煙草の煙を緩やかに吐き出すと電話口に告げた。

「C-4も出てきましたぜ、雷門さん。…昨日のアカネコ、今日の
ウカンムリ、そのどちらにも共通する物証が。…C-4。…まさか、
今更無関係だと言いつ張りつもりじゃないスよねえ？ 一昨日、北参
道署に行けと命令したのも偶然じゃないスよねえ？ …雷門さん」

『妙典巡査長…それは申し訳ないですが、今は“Out In T
he Fields”とでも言っておきましょうか…』

「…つまり、ノーコメントって事っスね？ …関係大有りって
事ですわなあ」

『…明日は午前十時です。君は時間にルーズですから遅れないよう
に…。以上です』

妙典は閉じた携帯を左手で握り締めた。それを見やる真壁は問い
かける。

「妙典さん、どうかしましたか？ …もしや、明日捜査本部に向
けとでも？」

「あつたりっ！ 流石はニュータイプ！ …明日十時に第七方面
本部に來いとさ」

妙典は空き缶のプルタブ部分で煙草を揉み消し呟いた。先程から付き纏う胸騒ぎの正体に納得した真壁も鼻を鳴らし境内を眺める。「…ニュータイプでなくとも察しはつきます。でも、当たりが出たらもう一本。そんな子供の頃、ありましたよね？ …昨日が一本目で、今日が二本目。引きが強過ぎます。まあ、人がそんなに便利になれるわけ…ないですけどね」

虎縞法被姿の博信は大机に対して朝昼と全く同じ位置であぐらを組んで座っていた。妙典と真壁も朝と昼と同じ位置で座っている。

「なあ…博道、ひとつ相談なんじゃが…」

「何だあ？ 神妙な顔して…らしくねえぞ！ 馬鹿親父」

「それがのお、とても大事な話なんじゃ…」

朝と昼とで唯一違っているとするれば、虎縞法被姿の博信の異常なまでに神妙な態度ぐらいのものであった。

「…我が阪神タイガースは今日も負けおった。…猛虎復活の願のなかった仏像も手元がない。…おそらく帰ってくるのはカーネル・サングラスにも引けを取らぬ長きに渡る歳月…」

既に空腹感に苛まれていた妙典は父親の戯言の序文を耳にしたところで、まともに聞く気などなく左手の小指で耳を掻き聞き流していた。

「そこでじゃ！ 遂に、阪神低迷の原因が分かったのじゃ！」

虎縞法被の博信は目を輝かせ大机を両手で叩き膝立ちした。妙典は両手を後ろに伸ばし仰け反った姿勢で首を左右に振りポキポキと音を鳴らした。真壁は黙って、妙典親子の様子を見守っている。

「…寺の名前じゃよ。ウチの寺の名前は“龍勢寺”。これがイカンかったっ！…この名前じゃと益々中日を勢いづかせるだけじゃと悟ったのじゃ。…それで寺の名前を“虎勢寺”に改めようと思う！」

拍子抜けした妙典は思わず仰向けに倒れこんだ。すぐさま上体を起こし呆れた物言いで語る。

「馬鹿親父い…。お前、ホントに馬鹿だよなあ？ ……そんなことしたら、破門されるに決まってるだろーが！」

博信は膝立ちからストンと床に落ち、寂しげに口を開く。

「そうかあ…。やっぱり、駄目かあ、“虎勢寺”…これなら猛虎復活間違いないと思っただのじゃがお…」

虎縞法被にプリントされた「吼える虎」も寂しげに見える。流石の妙典も見かねたのか博信を宥めに入った。

「龍勢寺”つちゅう名前、俺様は気に入ってるがなあ…。なんせ訳せば“Dragon Force”だろお？ ……誰も到達できない究極の音数と速度のメロディック・スピード・メタル・バンドですよ。…超かつちよいいんだよなあ、コレが…」

頂垂れた虎縞法被はカツと顔を前に向け妙典を一喝する。

「この馬鹿息子があつ！！ ……やはり、お前の信心不足が原因だったようじゃのお！？」

「はあ！？ ……何でもかんでも俺様のせいだよ？ この、馬鹿親父があつ！」

突如ヒートアップする親子喧嘩に両手を広げて仲裁に入る真壁を隔てて虎縞法被姿の博信は妙典に追い討ちをかけた。

「まだまだ、修行が足らんようじゃのお！？ この馬鹿息子！ よいか、浄土真宗の教えの基本は“他力本願”じゃからのおー！ ……わっはっはっはっはっ！」

そこへ隣の台所から鍋つかみで土鍋を抱えた由紀子が現れた。

「あら。皆さん、仲がよろしいですこと…」

由紀子は大机にのる卓上コンロに土鍋を置き、火を点けた。

「なんか、警察の方がたくさんいらして、お夕飯の仕度が思うようにできなくて。…今日は簡単ご飯で申し訳ないわあー」

「いえいえ、お母さん。一向に構わないです。…こちらこそご馳走になりっぱなしで…」

「まあ…真壁さんて、お優しいのですねえ。博道もこれくらい優しい事を言ってくれると母さんも嬉しいのですけど…」

必要以上に横目で睨み付ける妙典の視線に耐えきれない真壁は土鍋に顔を逸らし、大声で言った。

「ああ、お腹ぺこぺこです！」

「じゃあ、たと召し上がれ！」

由紀子は鍋つかみで土鍋の蓋を掴み上げた。博信、妙典、真壁の三人は一斉に土鍋を覗き込む。

「なあ、お袋。これって……」

眉間に皺を寄せた妙典は由紀子に問うた。その問いに何食わぬ顔で由紀子は返す。

「これが…今、流行の“カレー鍋”。鶏肉、レタス、長ネギ、ニンジン、エリンギ、厚揚げ、白身魚、豆腐、そしてウィンナーもサーブスで入っていますから。…さあ、召し上がれっ！」

土鍋から顔をあげた真壁は由紀子に問いかけた。

「…お母さん。…鍋の締めは…うどんでしょうか？ …ご飯でしょうか？」

由紀子は頬に指をあて答える。

「…締めはチーズを入れてリゾットで！」

ゴォーン！ という鐘の響きで目が覚めた。妙典は布団を一段と引き寄せ、孵化する直前の幼虫の様にもそもそと蠢く。子供の頃から、この鐘の音で朝を知らされるのが嫌いだ。まるで生きた心地がしない。子供の頃も、そして今も、その心境に変わりはなかった。

表の廊下を軋ませて歩み来る足音が聞こえ、勢いよくふすまが開かれたかと思うと差し込む朝日が眩しく感じた。

「妙典さん…朝です。今日から捜査本部入りです！」

差し込む朝日に照らし出され逆光を帯びた人影が妙典を急かせる。そこに立っていたのはダークスーツに身を包み、インテリを匂わせる眼鏡を輝かせる男であった。妙典は眠気眼でようやく孵化に成功する。

「…相変わらず…朝早ええよな。変態オタク眼鏡小僧…」

「さあ、起きてください！ …日曜ですから、国道16号が混む前に出ないと間に合いません」

嫌々上体を引き起こす妙典はインテリ眼鏡の背後に立つもうひとりの人影に気がついた。

「ひろみちいいーっ！！ 起きんかあっ！ この馬鹿息子あっ！！」

虎縞法被にヌンチャク・バットを首から提げた博信は大声で叫んだ。

「博道…寺の跡取りは、真壁さんにしようと思う。今日初めて鐘を撞いてもらったが、筋がいい。…心に濁りのない清らかな音色じゃったぞ。お前とは大違いじゃ！」

思わぬ言葉に真壁は驚き、博信に顔を向けた。

「おうおう！ 分かった、分かった。親父が言うように俺様に寺の坊主は向いてねえ！ …なんせ、信じる神が違うからなあ。俺様が

信じるのは：“Metal Gods”。それだけだ」

防災用フルテクト・ジャージを着た妙典は立ち上がり、住職と住職候補の二人をすり抜け、張り出し廊下に出ようとした。真壁とのすれ違い様に小声で呟く。

「あの鐘、本当にお前えが撞いたのか？」

「え？ ……ええ。昨夜、お父さんには是非撞かせてくれとお願いしたのです。…どうでした？ ……いい音色でしょ？」

V6ツインターボには既に火が点っており、母屋の前で待機していた。アイドリング状態の青いGT-Rの傍らで真壁は立ち尽くし妙典を待っていた。そこへ由紀子が小さい紙包みを提げ、張り出した廊下からやって来る。真壁は「おはようございます」と一礼をした。

「まさか、朝御飯も食べずに出発なさるとは思ってもいませんでした。…警察の方って大変なんですねぇ？」

「ええ、まあ。…一種のコンビニです。土曜も日曜も関係ありません。しかも24時間営業ですし…」

「よくそんな大変なお仕事が博道に勤まるものです。…あつ！ そうそう。ご飯だけは炊いていましたもので…取り急ぎですけど、おにぎりです。…これ二人で食べてくださいね」

由紀子は小さい紙包みを真壁に手渡した。

「す…すいません！ 最後までお世話になりっぱなしで申し訳ありません」

真壁はおにぎりの温もりが伝わる紙包みを受け取り、礼を言った。

「おーいっ！！ 変態オタク眼鏡小僧お！ ……トランク開けてくれや！」

段ボール箱で顔の隠れた妙典が大声と共に張り出し廊下に現れた。

「は…はい！」

真壁はサイドドアを慌てて開き、受け取った紙包みをダッシュボードに載せる。妙典は張り出し廊下から下り、黒いハイカットスニ

「カーに爪先だけを通し踵を踏んだ状態でG T - Rの真後ろに立った。やがてトランクが開き、膝で段ボール箱を抱えながらトランクの蓋を片手で押し上げる。サイドドアから駆け込んで来た真壁は段ボール箱の片方を両手で支え二人で小さなトランクに押し込んだ。

「妙典さん、これって?」

「ああ!? 俺様からの餞別だ。初回発売版ガンブラ…全部くれてやる!」

「ええっ!? ほ…本当ですかっ!? …妙典さん!」

真壁は段ボール箱の上蓋を広げ、中身を確認した。

「ぬおおおおおおお! ガンダムにガンキャノン、ジオング、リックドム! …全部頂いてもよろしいのですかあっ!?」

初回発売版ガンブラの箱を両手に持ち、狂喜乱舞する真壁の背後で妙典が口を開く。

「…まあ、俺様が持つてても仕方ねえわな。…シヤア専用ザクがないのは勘弁してくれや…」

手に持つガンブラのパッケージを丁寧に且つ迅速に段ボール箱に戻し上蓋を閉める。と同時に上体を引き戻してトランクを勢いよく降ろした真壁は妙典に向き直り、深々と頭を下げた。

「妙典さんのそのお心遣いに大変感謝致します。…これは間違いなく、いい物です!」

「おいおい!! 変態オタク眼鏡小僧に礼を言われるのは気味悪いなあ。…ま、シヤア専用ザクだけは自分で何とかしてくれや」

ポケットに両手をつ込む妙典は少し照れているように見えた。

真壁は自慢のシヤア専用携帯を素早く開き、目にも止まらぬ速さで指を動かす。暫くして冷静な口調で告げる。

「妙典さん、問題ありません。…初回発売版シヤア専用ザク、現在ネットオークションで九件出品されている事が確認できました。…ひとつ! ふたつ! …みつっ! ……このつ! …落としてみせませす!」

「…まあ、勝手にやってくれや…」

半ば呆れた口調で妙典は言った。するとドスドスとけたたましく廊下を踏み鳴らす足音が耳に入る。

「おいっ！ この馬鹿息子っ！ もう行くのかああー!?」

虎縞法被姿の博信がビニール袋を片手に駆け寄ってきた。妙典は顔を博信から逸らしサイドドアに向かう。

「…親父、悪かったな。…あの猛虎復活の仏像、暫く帰ってこねえーわ。…かなり重要な証拠品らしい」

妙典はサイドドアを開いた後、博信に顔を向けた。

「があーはっはっはっはっは！！ この馬鹿息子があー！ まだまだ器が小さいのあー。…もう次の秘策は打ってあるっ！ …今日こそ、今日こそ、猛虎打線が爆発し福原に勝利をもたらすのじゃあああああー！」

それを聞いた妙典は口元を緩め、半分開いたサイドドアからシートに滑り込む。力強くドアを閉めシートベルトを引き降ろした。

「おらあっ！！ 真壁っ、行くぞ！」

「ああっ！ はい！」

妙典の叫び声に振り向いた真壁はGT-Rの運転席のドアに向かいかけたものの何かを思い出した様に踏みとどまった。真壁は妙典の両親に向き直り礼を言う。

「本当に何から何までお世話になりました」

「真壁さん、あんた筋がいいから大晦日、来てくれんかのお…。流石にこの歳になると百八回は辛くてなあ…」

真顔の博信は真壁に言った。真壁は笑みを返す。

「非番なら是非やらせて下さい」

「そ…そうかつ！ 期待しておるぞ。…で、これ持ってけ。握り飯だけじゃ寂しいじゃろお」

虎縞法被の博信はビニール袋を真壁に投げ渡した。胸で受けとめた真壁はビニール袋を広げる。中を覗き込んだ真壁から笑みが消え、博信に顔を向けた。

「甲子園に行った時の土産じゃ。…“神戸名物！ そばめしぶりか

「カレー味」じゃっ！！ 握り飯にはぴったりじゃぞ、わしが保証する！」

「…あ…ありがとうございます」

真壁はぎこちなく礼を言い、ビニール袋を丁寧に折り畳んだ。畳まれたビニール袋を小脇に抱え、由紀子に向き直る。すると突然敬礼をして見せた。

「これからも、お達者で…。お母さん…」

真壁はそう言い残し半開きの運転席に座り、サイドドアを閉めた。由紀子は小さく礼をする。

シートベルトを引いた真壁は無言でビニール袋を妙典に手渡した。中身を覗き見た妙典は、げんなりとした口調で呟く。

「また…カレーかよ…」

真壁はサイドブレーキを戻し、ゆるりとアクセルを踏んだ。青いGT-Rは原付バイクの横に出たものやはり一度では折り返せない。妙典はふりかけの入ったビニール袋をフロントガラスに叩きつけ叫ぶ。

「真壁えっ！ いや、境内に入っちゃまえ！」

「ええ？ …け…境内ですか？」

「おう！ 思いっきりアクセル踏んで、切り返せ！ 俺様が許す！」
真壁は言われるままにアクセルを踏み込み、境内に飛び込んだ。

急ブレーキを踏み一度停車させる。再度アクセルを踏むと同時にハンドルを右に切った。唸りをあげる青いGT-Rは見事に前輪を口ツクさせターンに成功する。真壁は怒られやしまいかと虎縞法被姿の博信をチラリと横目で見やった。

「がっはっはっはっは！ 砂紋じゃ、砂紋じゃ！ …見事な砂紋じゃわいっ！！」

幸い虎縞法被姿の住職は怒るところかご満悦の様子であった。安心した真壁はアクセルを踏み直し、母屋にゆつくりと戻る。再度、住職を見やると腕組みをして考え事をしている様子であった。

「こ…この砂紋、よく見ると“G”に見えるのじゃが…」

真壁と妙典は嫌な予感がした。

「馬鹿にすんのかあーっ！ “G” って巨人じゃる！？ 絶対にジヤビツトじゃー！」

突如、激高した虎縞法被の博信は青いGT-Rに向かって叫んだ。

「…真壁、逃げる！」

「は、はいっ！」

真壁はアクセルを踏み込み母屋を後にした。GT-Rの背後に裸足で駆け出し、大きく何かを叫び続ける虎縞法被の博信の姿をルームミラーで見やる。「っ」の字を描く土道をゆるりと駆け下り、青いGT-Rは難を逃れた。

「しかし、パワフルなお父さんですね」

真壁は「っ」の字に沿って緩やかにハンドルを右に傾け言った。

「…ただの馬鹿親父だ」

妙典はボソツと呟いた。

「でも、その遺伝子はしっかりと妙典さんに受け継がれていますよ」「勘弁してくれや。あの馬鹿親父と一緒にすんな！」

「いえ、県警の人も言っていました。…90万ボルトのスタンガンを喰らっても追いつけ、エアバッグまで誤作動させてホシを捕まえる…まるで鉄人だ！…って」

妙典は一瞬口を閉ざし、土道に身を任せ揺られていた。

「…そりゃ、“鉄人” 金本の兄貴に申し訳たたねえなあ」

「いや、妙典さんも立派な“鉄人”ですよ」

お世辞に堪えきれなくなつた妙典は話題を変える。

「…しかしよお、たかが仏像のくせにいろんなものが宿つてやがんだな。…馬鹿親父の猛虎復活の願いに、C-4まで宿つてやがったまさに…“The Spirit Carries On”。もう他に宿つてるもん、ねえよなあ？」

青いGT-Rが下門に到着した辺りで妙典が「止まれ！」と右手で合図した。

「どうかしましたか？ 妙典さん」

停車したGT-Rの中から妙典は下門を見つめている。流石に望郷の想いがあるのであるうと真壁は思った。

「おい、真壁え。あれえ見てみるよ」

妙典は顎をしゃくり、下門の脇に打ち付けられた寺の名前の刻まれる木彫りの看板を示した。「龍勢寺」の「龍」の部分に何やら張り紙がしてある。真壁は眼鏡越しに凝視をした。「虎」と書かれた貼り紙が朝の風に揺れている。真壁は小さく噴出し笑った。

「これが、お父さんの言っていた秘策ですか!？」

「ああ、そうらしい。…つたく、あの馬鹿親父らしいや…」

妙典は顔を前に向け「行くぞ!」と鼻先で合図をした。しかし青いGT-Rは停車したままである。妙典は怪訝そうな顔を真壁に向けた。

「妙典さん…曲はいいのですか? …BGMは何にしましょう?」

妙典はハツと顔を戻し、慣れた仕草でグローブボックスを漁った。

「確か、今日は日曜日だったよな? …それも捜査本部に出頭しろと雷門さんに命令されて今から向かうんだよな?」

「ええ、そうですね」

「…じゃあ、これしかねえだろ。…ブラック・サバス!」

「ブラック・サバス: “黒い安息日”ですか…」

「そして曲名は“Iron Man”。…ばつちりだろお?」

「そうですね。これ以上ない選曲だと思います」

ゆっくりと刻むドラムの音が鳴り、低く重いギターが重なる。「俺は鉄人だ」との意味の唸り声が出た後、地獄の底から蘇るような重たい印象的なギター・リフが産声を上げる。それに反応した真壁が声をあげる。

「この曲って、ロードウォリアーズの入場曲でしたよね?」

「まあな…あつちはタッグで、こっちはコンビだがな」

「…瞬殺といきたいものですね? …妙典さん」

「変態オタク眼鏡小僧にしちゃあ、随分と過激な発言ですなあ…」

「…ま、先輩を見習ってのことです。…一つ忠告があるとすれば…」

“死ぬ程痛いぞ”…ということですかね？”

真壁はギター・リフの唸りに合わせアクセルを踏み込み、青いG T-Rは土煙を大きく巻き上げて下門を後にした。V6ツインターボの吐き出す風圧に「虎」と書かれた貼り紙ははためき飛ばされそうになる。しかし飛び去る事はなく、貼り紙はしっかりとしがみ付き「龍」の字を覆っている。彼方から聞こえるV6ツインターボの微かな響きだけが「虎勢寺」に残されていた。

正午を回って久しい時間にも関わらず窓はおるかカーテンまでもが閉め切られ、隙間から差し込む陽の光がエアコンの風に舞う埃を照らし出していた。昼に食べた弁当の殻が机の端に投げ出され、その横のモニター上ではビキニ姿のグラビア・アイドルが所狭しに飛び跳ねている。無精髭の伸びた恰幅のよい男が情性に任せてビジネスチェアに座るとビキニ姿のグラビア・アイドルは消え去り、一面に敷き詰められたアイコンを表示する画面へと変わった。

男は左手に握った紙封筒を広げ、中を覗き見る。流石に隙間からでは数えきれず、逆さにした封筒から滑り落ちた中身を右手で引き出した。空になった紙封筒を弁当の殻の下に挟み込み、左手に持ち替えた中身を右手で軽く反らせる。押さえつけた右の親指を軽くずらしてゆくと中身は蛇腹のようにパラパラと跳ね上がり、右手の指から全て放れる頃には封筒の中に納まる形状に戻っていた。

「…確かに、五百万。…領収書の発行は必要ないよね? …お互い」
恰幅のよい無精髭の男は弁当の殻に敷かれた紙封筒を後ろ手で引き抜き、封筒の口に向かってフツと息を吹きかけた。丸く開いた封筒に中身を丹念に押し戻すと封を固く折り曲げ、右手の爪でキュツと滑らせる。

「今、確認したいよね?」

無精髭の男はビジネスチェアを素早く半回転させパソコン・モニターに向かった。無造作に手繰り寄せたキーボードの奥に紙封筒を片せ、右の親指と小指でマウスを軽く挟み込む。慣れた手つきでマウスを小刻みに動かし、人差し指と中指を幾度かクリックする。突如モニター上は真っ白になり文書作成ソフトの起動を知らせる。無精髭の男は「日本国」と素早く打ち込み、ビジネスチェアを半回転させ向き直った。

「どう? ばっちりでしょ? …まあ、そこまで必要とは思わない

けどフロントサイズ：36までなら、遜色ないレベルだよ」

無精髭の男は自身の体勢でエンター・キーを二度続けて押し、マウスをカチャカチャと動かし終わると、キーボードを叩き始めた。

「佐々岡 昭二」とスペース区切りで入力し自慢げに向き直る。

「こつちの方も申し分ないでしょ？ ……まあ、センターによって文字間スペースは若干異なるけど、問題ないレベルだと思う。微調整も利くし、…何なら住所も打ってみようか？」

「いや、もうけっこう。まだ修正の余地はあると思いますが、…今のところの出来栄えとしては十分です。満足しました」

ビジネスチェアの向かいに立ち尽くす牛革のライダーズジャケットを着る男は口を開いた。

「じゃ、納品ということでは？」

無精髭の男はマウスを素早く動かし、タスクバーの右隅をクリックする。ふきだしメッセージを確認することなくモニター横のパソコン本体からUSBメモリーを抜き取り、ビジネスチェアの向かいに立つライダーズジャケットの男に手渡した。男は内側に気泡緩衝材が貼られた梱包用の縦長封筒にUSBメモリーを落とし込み、封をする。

「…で、継続の仕事の件だが？」

ライダーズジャケットの男はモニターに向かう恰幅のよい背中に語りかけた。無精髭の男は思い立った様子でキーボードとマウスから手を離し、背中を向けビジネスチェアから立ち上がる。

「…継続の話だけど、やっぱ俺らは所詮コンピュータ屋で…。餅は餅屋、専門の人間がやるのが一番だという話」

恰幅のよい背中はラックの上に置かれた仏像に左手を伸ばし振り向く。手にした仏像の底を右の中指でコツコツと叩いて底蓋を剥ぎ取り、仏像を大きく上下に揺さぶった。中から飛び出す白く四角い粘土状の物体を右の手の平に出してみせた。

「…だからこれ、返品するよ。ビジネスとしては交渉決裂。…とい

うか、俺らの専門外」

無精髭の男は仏像から取り出した白く四角い粘土状の物体を手渡そうとライダーズジャケットの男に近寄る。

「クライアントは日付を指定している。既に“竜のうろこ”として動いている仕事だ。今更キャンセルは困る」

ライダーズジャケットの男は眉をひそめ言った。

「他にもっと適性のある連中いるでしょ？ ……所詮、俺らは素人。仕事がデカ過ぎるし、そもそもお門違いの仕事！」

「ギヤラの文句はないだろう？ ……今回の十倍近い金が転がり込みますよ」

「確かに…その単価は魅力的だけど…これ以上、犯罪に手を染めたくはないんだ」

梱包用封筒をライダーズジャケットの懐にしまい、ジッパーを引き上げた。ライダーズジャケットの男は一步近づき耳元で囁く。

「もう十分、手は染まっていますよ、…社長」

無精髭の男は溜め息と共に俯き、ライダーズジャケットを上目で睨む。

「それとこれとでは、まるで違う！ ……人殺しには手を貸せない！」
語気を強めた無精髭の男はライダーズジャケットに言い放った。

暫くの沈黙があり、ライダーズジャケットの男は無精髭の男の正面に立つ。

「…社長、それは社員全員で話し合つての結論ですか？」

「これは僕の独断だ！ ……いくら経営が苦しいとはいえ、社員…いや、仲間にこれ以上危険な橋を渡らせる訳にはいかない。社長の僕がそう判断した。…だから御宅とのビジネスはこれまでにするつもりだ！」

ライダーズジャケットの男は更にもう半歩踏み込み、恰幅のよい無精髭の男の肩に左手をそえた。

「…佐々岡さん。…あなたは正しい人だ。仲間を護る立派な人だ…」
だらりと下げたライダーズジャケットの右袖の内側に冷たく光る

漆黒のステンレス・スチールが滑り落ち、黒光りするハンドルを握り締めた。

「…我々はそういった正しい、信頼できる人に引き続き仕事をこなしてもらいたい」

ハンドルを逆手に持ち替え、刃を手首の内側に宛がう。

「…とても残念です。我々も佐々岡さんを信頼していましたが、あなたが言う以上、もう仲間ではありません。契約破棄です。…ですが、守秘義務は守ってもらいます」

ライダーズジャケットの男は肩から這わせた左手で力いっぱい無精髭の男の口を塞ぎ、逆手に持ったブートナイフを背面から肋骨の間を縫う様に素早く横向きに突き刺した。仏像は手元から床に転がり落ち、口を塞がれた無精髭の男は阿吽の呼吸を吐くこともできず、むき出した血走る目でライダーズジャケットの男を見つめ、白く四角い粘土状の物体を強く握り締めた。突き刺したブートナイフを背後から今一度押し上げ、絶命する無精髭の男を見守ると勢いよく引き抜いた。

口に当てた左手で無精髭の男を軽く押し倒すと力なく後ろ向きに崩れ落ちた。ブートナイフを数回素早く振り下ろして血を拭い、革の鞘に戻すとライダーズジャケットの腕ポケットにしまい込んだ。

無精髭の男に強く握られた白く四角い粘土状の物体を引き剥がし、ライダーズジャケットの胸ポケットから別のUSBメモリーを取り出した。そのUSBメモリーを目の前のパソコン本体に挿し込むと自動的に何かのソフトがインストールされハードディスクのアクセス・ランプが激しく明滅を繰り返す。画面は突如ブラックアウトし“ANNIHILATOR”との赤い文字が表示された。進捗状況を示すメーターが「破壊者」との意味の文字の下で左から右に推移を始める。

その間にライダーズジャケットの男は血塗れの無精髭の男を跨いで部屋中のパソコンを立ち上げて回った。パソコンを一通り起動させると無精髭の男のモニターにはDOS-Vウィンドウが表示され、

“ Been destroyed ”との文字が躍っている。「破壊済み」となったパソコンからUSBメモリーを強引に引き抜くとブルースクリーンを一瞬表示した後、自動的に電源が切れ、恰幅のよい無精髭の男と同様に断末魔をあげることなく静かに息を引き取った。

ライダーズジャケットの男は部屋中のパソコンに“ ANNIHILATOR ”を挿して回り、片端に「破壊済み」としてゆく。全てのモニターが破壊済みとなった証跡を表示し終わると、床に転がる仏像と裏蓋を手に取った。仏像の中にはもうひとつ白く四角い粘土状の物体が収まっている。それを一度抜き取り、無精髭の男から引き剥がした白く四角い粘土状の物体に重ね、仏像の中に押し込んで裏蓋を閉めた。多少揺さ振ってみたものの中から飛び出す音も気配も無く、仏像を小脇に抱え部屋の出入口に向かう。

扉にさしかかったところでライダーズジャケットの男は踵を返し、無精髭の男の机に舞い戻る。キーボードに片せてある紙封筒を抜き取るとライダーズジャケットの内ポケットにしまい込みジッパーを首元まで引き上げた。再度踵を返したライダーズジャケットの男は何事も無かったかのように部屋を後にした。

The Last Enemy (2)

「…えー、以上が…南砂町マンション刺殺事件の概要であります。部屋に荒らされた形跡が見当たらない事から怨恨等による顔見知りの犯行と断定。さらに犯行の手並み、パソコン内部の消去の手口と手馴れからいつてカタギとは考えにくく、筋者を含めて大掛かりな組織的犯行の線が浮上しました。その為、捜査本部の設置に至った次第であります。…尚、マンション設営の防犯カメラからは今のところ不審な人物は発見されておらず、犯行現場の四階へは非常階段を使用したものと思われます。…そのことから現場となったマンションの事情にも詳しい人物であるとの推測がたち、現在はゲソ痕の特定、目撃情報の収集に注力しております」

「三沢警部、ご苦労様です。臨機な判断と対応に敬意を表します。引き続き捜査の程、お願い致します」

警視庁第七方面本部三階の大部屋には五十名を超える本庁と木場署の捜査員が一堂に会しており、まさにその光景は壮観と言える。その最前列の長机に設置されたスタンドマイクを通した雷門管理官の声は普段通り穏やかながらも緊張感が漂っていた。

「…では、大場係長…検死報告から、お願いします」
大部屋のやや前方の中央に位置する席から大場は立ち上がり一礼をした。

「警視庁捜査一課9係の大場です。…司法解剖の結果、犯行時刻は5月6日の午後一時半から三時と断定。死因は背後からの刺し傷による失血とショック死。…ほぼ即死だったと思われます。凶器は刃渡り約12cmのブートナイフと推定。…所謂、ダガーナイフと国内で呼ばれている物です」

書類を片手に大部屋全体に行き渡る張りのある大場の声に真壁は聞き込んでいた。先日、喫煙ルームで見せた茶目っ気など微塵も感じさせない。本庁の大部屋で部下に指示を出していた時の大場係長

の姿である。真壁は顔の前で軽く指を組み人差し指を眼鏡のブリッジに軽く宛がい大場係長の報告に集中していた。しかし腕を組んで反り座り、目を瞑る右隣の妙典の姿がレンズの内側に反射する。端から見れば居眠りと思われても仕方のない姿であった。案の定、机の上には手帳もノートの類もなく、筆記用具さえ見当たらない。北参道署での小さな捜査会議の件が無ければ確実に不謹慎極まりないと思っていた筈である。しかし今となつては、さも自然で当然の光景となつていた。馬場係長も言及しないところから察するに以前からそうなのであろうとの推論がたつ。

「特筆すべきは、害者の右の爪先の間からトリメチレントリニトロアミン…別名RDXが発見されていることです。これは所謂C-4、プラスチック爆弾の主成分でありまして、害者は殺害時C-4を右の手に握っていたものと思われます」

「部屋からC-4の発見はされましたか？」

「すかさず雷門は問い質し、大場も即答で切り返す。

「C-4及び信管、起爆装置の類は一切みつかつておりません」

「つまり、犯人が持ち去つたということでしょうか？」

「信管、起爆装置の類が存在していたという確証はありませんが、少なからずC-4は持ち去られたと考えていいでしょう」

「雷門は大場に続けるよう目配せをした。

「…害者、佐々岡昭二。44歳。独身。サイバーワールド株式会社社長。ウェブデザイン…主に企業向けのホームページの制作を行っております。従業員は社長を含め五名。…所謂IT企業ではありませんが零細の部類に入る企業です。…昨年の年末辺りまでは、かなり羽振りも良かったようですが、今年に入って顧客数社との保守契約が打ち切られています。経営的には、かなり困窮していたようであります」

「C-4存在の確証。そして行方が気になります。…そちらの捜査を優先してもらいたいのですが…」

「了解しました」

雷門の鋭い眼差しに大場は落ち着いて即答した。大場が着席する動作に入るのに合わせ雷門はマイクに向かって声を発する。

「続いて…倉田巡查長、鑑識からの報告をお願いします」

「はい、倉田です」

部屋中に漲る緊張感を一気に吹き飛ばす一声と共に倉田は起立した。倉田の席は真壁の二列前、程なく妙典の席に近いのが嫌でも気になる。

「え、では報告します。…押収したパソコンのハードディスクは特殊なソフトで見事に消去されました。…と言うか、改ざんされていたというのが正しい表現です」

緊張感の欠片もない倉田の口調に真壁は少々面食らった心境であった。そして時折、こちらをチラリと見やる動作が妙に引掛かる。おそらく愛しの妙典巡查長の姿を目に焼き付けているのだろう。それを知ってか、妙典はじっと腕を組み一切目を開けようとしない。妙典にとって最大限の自己防衛手段なのだ。真壁は納得することにした。

「…ちょっと難しいんですけど、ランダムにバイナリー・コードを埋め込むタイプのハードディスク破壊ソフトを使用したようです。もちろん、メールや主なファイルのインデックスは消去されていますけど、ファイル本体は今言った通りで…完全な復旧にはまだまだ時間がかかりそうです。…おまけにボード関連も見事に焼きつかせてくれちゃってるしで…もう大変でした。一応、今のところ全部ではないですが、復旧できているファイルの一覧は資料にまとめていますので、ご覧下さい。…以上です」

「因みに押収品に木彫りの仏像の様な物はありませんでしたか？」

あくまで冷静な口調を貫く雷門は倉田に問いかけた。倉田は手持ちの資料を見渡し答える。

「…え、っと、その様な物はみつかってません」

「そうですか、分かりました。自分が聞きたい事はそれだけです。ご苦労様でした」

着席する倉田のお姉言葉に頭がクラクラしていた真壁に馬場は肩を寄せ資料を突き出してきた。

「…ねえ、真壁君。…この“TTF”とか“TTC”というファイルは何なのかなあ？」

鑑識の倉田と妙典以外にも緊張感が漂わない人物がこの部屋にもうひとり居る事に真壁は今になって気が付いた。馬場正警部はばたかし、警視庁捜査一課13係係長。我が直属の上司である。老眼鏡がずり下がり、愛嬌のある笑顔で真壁に問いかけてきた。真壁は手持ちの資料を数ページめくり小声で答える。

「…あ、“TTF”と“TTC”ですか？…これはフォント・ファイルですね、トゥルー・タイプの…。ワープロソフトなんかでも明朝とかゴシックとかありますよね？…あれです」

「ああ！？ あれね。…でもやけに多過ぎやしませんかねえ？」
馬場の一言に真壁も資料を見やる。

「…言われてみると、確かにそうですね。…それも特殊というか自作していた様です」

「うん。それとねえ、ファイルの日付が全部“1949年10月1日”になっているのも変だよねえ…」

「おそらく、ハードディスク消去…いや、改ざんソフトが一律この日付に更新したのだと思います」

小声でやり取りする二人にマイクを通した雷門管理官の声が鋭く飛び込む。

「…馬場さん、何か気になった点でもおありでしょうか？」

やや慌てふためいた様子で立ち上がった馬場は資料をめくりつつ声を発する。

「あ！…えー、そうですね。…先程、木場署の三沢警部が言っておられた第一発見者のバイク便の配達員の名前…久木大輔くぎだいすけでしたか。…彼、偽名使ってませんかねえ？」

「三沢警部、どうでしょう？」

眉間に皺を寄せた雷門は木場署の三沢に向き、あらためて問うた。

「えー、一応：勤め先のバイク便会社“ライド・オン”で身分証明書の類は確認しておりますが、それ以上は…」

「再度、身元調査して頂けますか」

雷門はすかさず指示を出した。

「：分かりました。久木の身元を洗いなおします。：本庁の馬場さんがおっしゃるなら、その価値は十分にありそうですね」

「どうやら、馬場係長の「刑事の勳」の伝説は木場署にも轟いている様だ。自らの捜査報告に突っ込みを入れられて普通ならばいい気などしないものだが、馬場係長の指摘となると話は別である。まるで太鼓判とお墨付きを同時にもらった様なニヤリとした三沢警部の表情が全てを物語っていた。

「あ、三沢さん！：それと、外国人の線も忘れずにお問い合わせくださいね」

「ああ、もちろんです。馬場さん！」

この馬場正という刑事、やはりただ者ではなかった。刑事の勳もさる事ながら、人柄というのか、持ち前の人懐っこさというのか、愛嬌というのか、言葉では表現し難い独特の雰囲気でもって周りを実に上手く動かしている。そして、誰一人悪い気にさせていない。おそらく自白や自供、落としに関しては天下一品なのである。と真壁は思った。そんな真壁も知らぬうちに、上手く動かされていることに今更ながら気付いた。それにしても、頭の片隅で何かが引っ掛かる。係長が今言った言葉を頭に張り巡らせた。：「外国人の線」：となると必然的にアジア人に絞られる。

「そうですっ！！ それです！ 係長っ！」

馬場の驚いた顔を思わず見上げた真壁は大声で叫び、机を叩いた。「：どうかしましたか？ 真壁巡査部長」

雷門の一言に我に帰った真壁は恥ずかしげに周囲を見やった。馬場と入れ替わりで真壁はゆっくりと起立する。

「：すみません。少し取り乱しました。：今更、謝罪したところで：時すでに遅いのだがな：ですよね？」

「真壁君、何か意見があるのではないですか？」

雷門管理官の鋭い眼光と物怖じしない冷静な口調に少々打ちのめされた真壁は一呼吸置いて落ち着きを払った。

「雷門管理官。この資料にあります復旧ファイルの日付が一律“1949年10月1日”になっておりますが、この日付にこそ犯人達の自己顕示が見受けられます」

真壁の言葉に静まり返る大部屋。マイクを通した雷門の声だけが響く。

「この日付に何らかの意図があると言うことですか？ …真壁巡查部長」

真壁はゴクリと唾を飲み込み、ゆっくりと口を開く。

「はい、そうです。…1949年10月1日。この日は…中国…中華人民共和国の建国日に他なりません」

大部屋は突如ざわめきたった。ただの刺殺事件ではないと大部屋の誰しもが思っただけだったが、現実問題として国際外事に発展するとは予想していなかった筈である。いや、そう思いたくなかったといった方が、正直なところかもしれない。

「…静粛に！ …静粛にお願いします！」

マイクを通した雷門管理官の声が響き渡るもののざわめきは一向に治まる気配はない。そんなざわめきの中、のん気に手を上げて声を張り上げる妙典の姿があった。

「雷門さんっ！ …ちよっと、いいスカあ？」

妙典の声に静けさを取り戻し、反り座る場違いな黒Tシャツを着た男に大部屋全員の目が注がれた。倉田の目だけは他と何かが違うように感じた真壁ではあったが、妙典に顔を向け見て見ぬふりをする。

「妙典巡查長！ 何でしょうか？ …長くならない様でしたら発言を許可します…」

流石の雷門管理官も妙典の態度に少し困惑している様子である。

「大丈夫っス！ …すぐ済みます」

「…では発言を許可しましょう」

雷門の溜め息混じりの声がマイクから伝わった。妙典は立とうともせず、座ったままでいつも通りの口調で話し始める。

「今日：ここに来た時から、ずっと気になっただけなんです、俺様の真後ろの列に座ってる連中：公安部外事第二課第6係の皆さんつすよね？ …確か、担当は東アジア。特に中華人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国が主な対象つすよね？」

妙典は腕組みをしたまま後に振り返った。列の後の捜査員と目が合い妙典はニツと笑みを浮かべ小声で呟いた。

「どうも、…本庁の喫煙所以来つすね？」

後列の男達は苦虫をかみつぶしたような顔で妙典を見やり黙り込んでいる。その中のひとりがゴクリと唾を飲み込む喉仏の動きを妙典は見逃さなかった。すると妙典は前に向き直り、雷門に睨みを利かせる。

「犯行の手口と鮮やかさ。パソコンの見事な消し方。残していった日付。組織的犯行の可能性。公安部外事第二課の出席。そして、C

- 4。…そこから推測されるキーワードは：“竜のうろこ”。…違いますか？ …雷門さん！」

机上で手を組む雷門はスタンドマイクから一瞬仰け反り、顔を背けた。しかしその顔はどこか笑っている様にも見える。あらためて妙典に向き直った雷門は落ち着いた口調でスタンドマイクに顔を近づける。

「…あくまで可能性に過ぎません。現段階での断定はできませんが、当然視野に入れておくべき事柄だと判断しました」

「へっ…流石は雷門さん。…目の付け所が違うねえ。…ま、俺様から、以上です」

“竜のうろこ”。名前だけなら真壁も聞いた事はある。国際的な犯罪組織だが、未だ実態は掴めず指示系統の存在さえもはっきりとしない。事件が起きてても末端の構成員が捕まるだけで、本体は全く謎のままである。何がしかの組織は存在するものの、末端構成員と

いう“うるこ”しか残さない。それ故、警察関係者からは“竜のうるこ”と呼ばれるようになり、いつしか末端構成員達も面白半分で“竜のうるこ”と名乗り始めた。人気ゲームのアイテムにも登場するその呼称から「ドラクエ」という警察隠語まで存在する極東アジアの犯罪組織である。

静まり返った大部屋で妙典だけに聞こえる様に真壁は呟く。

「妙典さんの部下になった時からいつかこのような時が来るとは思っていました。いざとなると怖いものです、手の震えが止まりません」

妙典も小声で返す。

「何なら逃げてもいいんだぜ」

「いえ、もう慣れました。…それに“逃げるな！ 生きるほうが戦いだ！”とカガリに叱られそうです」

「真壁巡查部長、まだ何か話足りないことでもあるのですか？」

雷門管理官の一言でまたも我に返り、気付けば静寂に包まれた大部屋に真壁ひとりが立ち尽くしていた。

「あ…いえ、ありません。ただ、雷門管理官は：“戦いとはいつも二手三手先を考えて行うものだ”…を地で行く人だと思ったままであります」

真壁自身も何を言いたいのかわからぬまま口だけが先走り、赤面して着席した。

「…真壁え。お前、手先は器用かもしれんが、それ以外は何気に不器用かもなあ…」

妙典は再び腕を組んで瞑想に入った。

「ホント…不器用ものかもね…」

真壁は額に手を当て自嘲気味に呟いた。

「…では、ここで進展報告があります。…大場係長、もう一度お願いします」

雷門は通路中央辺りに座る大場を再度指名した。

「えー、害者の経営するサイバーワールド株式会社社員について

報告があります。5月8日未明、晴海埠頭で副社長の狭山毅さやまたけしの焼死体が自家用車車内で発見されています。…左胸部背面に刺し傷があり、これが致命傷となった模様。その後、車ごと焼かれたとお台場署からの報告です」

既に第二の殺人が起きていた。またも大部屋がざわめく中、捜査本部入り口の立て札を書き換える必要がありそうだと真壁は思った。「連続」殺傷事件。益々、物騒な事件に進展している。今朝車内で聞いたブラック・サバスは何かの暗示だったのかも知れないとあらためて思った。初めて捜査本部入りした真壁にとってはまさに「黒い安息日」である。妙典にとっては、休みではない日曜でしかないのだろうか…。

「えー、更に刺し傷の形状が佐々岡昭二のものと同じしたとこのことで、同一犯による犯行との疑いが濃厚になりました。その為、残り三名の社員を重要参考人として手配した結果、昨日5月9日…千葉県警により南田敏正みなみだとしまさ、池内邦之いけうちくにゆきの社員2名が物取りの現行犯で逮捕されております。身柄は追って警視庁に移送される手配になっています」

大場の報告にケチを付けるかのように妙典はボヤいた。

「ちえっ、手柄は県警かよお…」

「ま、そもそも我々は非番でしたからね」

真壁は妙典を宥める様に言った。

「俺様的には、せつかく休みの日に働いたつちゅうのになあ…」

「妙典さん。“悲しいけど、これ休日なのよね…”とでもボヤいてみませんか？」

妙典は口元を緩め、目を閉じたまま俯いた。

「…ということで、社員はあと一名。田伏幸夫たふせゆきお…27歳だけとなります」

大場は一通りの報告を終え着席した。暫しの間があり、口を開いたのは雷門であった。

「残る五人目の社員、田伏幸夫の所在を全力で追ってください。今

現在の最重要参考人です。：彼自身、生命の危険に晒されている可能性もあります」

妙典は目を開き片手で資料をパラパラとめくり真壁に告げる。

「この田伏って野郎、お前と気が合うかもなあ。：趣味はプラモ制作とラジコンだってよ。オタク同士仲良くやっていけそうだなあ」

「：幸いであります」

大部屋に静けさが戻り、雷門が一言付け加えた。

「非常に困難を極める事件と思われます。皆さんの持てる力を最大限に発揮して頂きたい。そして早期解決、それが自分の望みです。

：自分からは以上です」

大部屋に張り続けた緊張感が一気に解き放たれた。馬場、真壁、妙典の三人も中央通路に向かおうと立ち上がった。

「あ、後：すいません。13係は残ってもらえますか」

雷門の非情な通告に13係の三人は無言で着席する。資料を片手に大部屋を出ようとする大場は妙典に顔を向け「ご愁傷様」とばかりにお口チャックとの手振りをし、意味深な笑みを残して出て行った。その背後で投げキッスをする倉田の姿も目に入る。

13係の三人の座る長机に雷門がゆっくりと歩み寄ってきた。背後に座る公安部外事第二課の面々も一斉に立ち上がり、13係の机に回りこんでくる。

「：何すか？：雷門さん。：何かNGワードでも言いましたかねえ？」

妙典はやや悪びれた態度で雷門に言い放った。

「妙典、君にはいつも冷や冷やさせられます」

雷門は物怖じすることなく冷静さも失わず言い放った。妙典は皮肉混じりに返す。

「とつくに慣れっこだと思ってましたがあ？」

「：まあ、慣れましたよ。お蔭様で。：ところで13係にお願いがあります。唐突ですが、ある人物の警護に当たってもらいたいです」

「はあ？ ……またつスかあ？ この間のアカネコも随分痛い目に会いましたかねえ…」

「…もう慣れつこだと思っていました」

雷門の皮肉返しに妙典は思わず苦笑いし問いかける。

「…で、誰ですかい？ ……その人物って？」

「すみません。今更、名乗るまでもないかとは思いますが、公安部外事第二課の鶴田と申します」

長机の前に並ぶ公安部のひとりが礼をすることなく挨拶をした。

「妙典巡查長：あなたがおっしゃる通り、今件は竜のうろこの存在がチラつきます。鑑識が復旧したファイルの中からこのようなドキュメント・ファイルがみつかりました」

鶴田はプリントアウトされた一枚の紙を13係の長机にさらりと置いた。妙典は無造作にその紙を片手に取り目を通す。

「…“天罰が下る”：脅迫文みたいですねえ。…で、誰宛てなんですか？」

「元内閣総理大臣、大滝龍一郎おおたきりゅういちろう議員宛てです。…同一の文章が都内の図書館からフリーメール経由で大滝議員の事務所に送られている事を確認しております」

妙典は暫し黙り込み、大きく椅子に仰け反って言い放つ。

「こりゃあ、とんだ大物ですねえ。俺様にはちよいとお門違いかと思いますが…」

「雷門警視には13係が適任と紹介されましたもので…」

「ほお、そうすかあ…。そりゃどうも！！ ……係長、良かったっスねえ」

やや険悪な空気を嗅ぎ取った雷門は13係の三人に告げる。

「本日午後二時から、大滝議員の街頭演説があります。その警護に当たってください。場所は杉並区阿佐ヶ谷です。…真壁巡查部長には、ゆかりの地ですよね？」

「…ええ、先週まで阿佐ヶ谷署勤務でしたからね。…結局のところ、本捜査にはまだ加えて頂けない訳ですか？」

真壁の問いに雷門は答える。

「何か不服ですか？ 真壁巡査部長」

「いえ、…捜査一課13係というのはおとり専門ということなんですか？」

「…そう捉えられても仕方ないかもしれませんが、…ですが、今件の肝になる重要案件と予想しています」

「まあ、まあ、…13係は発足からして独立部隊ですからねえ…」

馬場が宥める口調で割って入ってきた。当の妙典はあまり納得していない様子である。

「了解しましたあ。…直ちに向かうとしますかあ…」

妙典がゆっくりと立ち上がると馬場と真壁も立ち上がり、大部屋の出入口に向かった。その後姿に雷門管理官は忠告を発する。

「妙典！ ひとつだけ忠告があります。…スーツの着用を忘れないように！ …相手は現職議員、元内閣総理大臣です」

「…雷門さん。まさかスーツって、ウチの変態オタク眼鏡小僧の大好きな何とかスーツの事じゃないすよねえ？」

The Last Enemy (3)

新宿で青いGT-Rが都道4号線・青梅街道に乗り換えて久しい。平日とは異なり日曜だけあって昼間であろうともスムーズに走行ができる。

「こんな昼間に青梅街道を快走できるなんて初めての経験かもしれません。まことに我が身の幸運を祝福したい心地であります」

妙典は「何言ってるんだ？ コイツ」という眼差しで真壁を見やっただ。雰囲気を変えるべく真壁は咳払いをし、後部シートに座る馬場係長をルームミラー越しに気遣う。

「係長、後ろ…狭くないですか？」

「…ええ、大丈夫ですよ。私は皆さんと違ってコンパクトな体型ですからね」

まるで休日のドライブを楽しむかのようなニコニコした笑顔で馬場は答えた。GT-Rは横幅が189cmありスペック上は四名の乗車が可能ではあるもののお世辞にも後部座席は広いとは言えない。日本人の平均身長を上回る者ならば確実にリアガラスに頭をぶつける程の狭さである。

「確かに、馬場さんの腹回り以外はコンパクトだもんなあ…。おまけに髪の毛…」

妙典の失礼極まりない侮辱ともとれる発言に真壁は肝を冷やした。「はっはっはっは。…皆でドライブすると楽しいですねえ。妙典くん」

まったく意に介しない様子の馬場は相変わらずニコニコした笑顔を見せた。

「神懸かった刑事の勘」 そんな形容を微塵も感じさせない初老の男が後部座席にちょこんと座る姿がルームミラーに映っていた。馬場係長の神懸かりな勘、妙典の不死身とも言える強運的体力…確かに捜査一課13係は凄い面子が揃っている。9係の大場係長が言

つていたことに間違いはなかったと真壁は確信した。果たして自分は大場が言うところの13系の頭脳になっているのだろうか？ …不安に思いながらも「GTR」と刻印されたハンドルを握り続けた。「ああん？ どうしたあ？ …変態オタク眼鏡小僧お」真壁の小さな異変に気付いた妙典は面倒くさそうな口調で話しかけた。

「…あ！ …いや、ちょっと気になる事がありました…」

「何だよお？ もったいぶらずに言ってみるや！」

真壁はハンドルを小さく握りなおし、吐息をつく。

「…社員のことです」

「はあ？ 社員なあ？」

「ええ、サイバーワールドの社員の事です」

「…たく、仕事の話かよお。つくづく真面目な奴だよなあ。…流石は優秀な準キャリアさんだこと…」

「妙典くんに比べたら皆真面目に見えますよ」

馬場が後部座席から囁いた。それを、首を竦めて聞き流す妙典は真壁に問いかける。

「で、いったい何がご不満なんだあ？ …この変態オタク眼鏡小僧が！」

一呼吸おいて真壁は眼鏡のブリッジを左手の中指で押し上げた。

「会社：企業の社長って、社員に含まれませんよね？」

「…だから、どうしたってんだよお？」

「サイバーワールド株式会社の社員は五名。…南砂町のマンションで刺殺された佐々岡は社長ですから社員には含まれません。…となると、狭山、南田、池内、田伏以外にもうひとり社員がいることになりませんか？」

「ふーん。確かになあ。…しかしホームページの書き間違いか、水増しじゃねえのかあ？ …四人より五人と書いた方がキリ番で見た目もいいし、箔も少しは違うだろうしよお…」

「そんなものでしょうか？ …自分はどうも納得しかねます」

「人間、見栄っ張りだからなあ。特にIT関連の奴らはよお……」

車内に暫しの静寂が訪れ、青梅街道の町並みが流れてゆく。

「でも、その話。ちよつと引つ掛かりますねえ……」

後部座席の馬場が口を挟んだ。

「馬場さんっ！ ……そんな事言ったら、この変態オタク眼鏡小僧が調子のるだけですぜ！」

「…五人目の社員。果たしてそれが田伏幸夫なのか？ ……それとも別に五人目の男がいるのか？ ……確かに、引つ掛かりますねえ」

和田三丁目交差点にさしかかり、バツの悪そうな妙典は馬場の言葉を遮るようにグローブボックスを漁り始め一枚のCDを取り出すと半身になってダッシュボードに突っ込んだ。するとツイインリードのエレキギターがジャーン！ ジャーン！ と四度耳を劈く。

「真壁え、杉並ってお前のホームタウンだろお？」

「ええ、まあ。…今も住んでおりますし……」

「…だったら、この曲しかねえだろ。シン・リジイ “The Boys Are Back In Town”」

「ほお、“ヤツらは町へ”ですか。なかなか懐かしい曲ですね」

馬場もシートの後ろから声をあげた。

「曲は1976年のなんだが、フォークランド紛争、パナマ侵攻、湾岸戦争、イラク戦争…アメリカとイギリスが絡んだ戦争が終わった時には必ずヒットチャートの上位に顔を出す名曲なんだわあ……」

妙典の短い講釈に対し、真壁も返す。

「戦争が終わった時ですか…。何か微妙な心境です」

「どうやら白人さんにとつちや、戦争が終わって故郷へ帰る時にや聴きたくなる曲らしいぜえ。言ってみりゃ、凱旋の曲。故郷に錦を飾るって感覚なんだろうなあ。ま、定番ソングってやつよ」

「…卒業シーズンの“贈る言葉”みたいなものですか？」

暫しの間があり、シートに反り座る妙典は真壁を見やり呟く。

「真壁え。お前、小僧とばかり思ってたが、…意外とジジイなんだなあ。レミオロメンとでも言うのかと……」

「…シン・ジジイ！」

間髪入れず馬場が大声で言い放ち割り込んできた。

「えー、係長：車内でのオヤジ・ギャグは慎んでくださいな」

妙典は鼻につく口調で馬場に告げた。

「おお、それは失敬、失敬」

馬場は照れ笑いと共に禿げ上がった頭を掻いた。

「妙典さんも係長のこと言えませんか」

「なあっ!? そ…そうかあ？ 俺様がオヤジ・ギャグなんか言う

訳ねえだろおが？」

「…そうでもありませんよ。何度が拝聴しております」

「ひよっとして、…“日曜も仕事で、いそがシン・ビジイ”って言

ったらオヤジ・ギャグに認定かあ？」

「ええ。…“間違いない、それはダジャレだ！”と言わせて頂きま
す」

後頭部で腕を組んだ妙典は口を尖らせ呟く。

「まあ、馬場さんとは付き合い長いからなあ。一種の伝染病だわな

あ。…しゃあないわ」

妙典の言葉を耳にし、ニコニコ顔の馬場が割って入る。

「…それにしても、お腹減りましたねえ。…真壁くん、どこかい

いお店：知りませんか？ 阿佐ヶ谷署に入る前に昼食を済ませておく

のが得策だと思いますよ」

真壁は眉間に皺を寄せ、少々思案に耽る。

「今日は日曜ですから、ランチをやっている店は少ないです。…で

も心当たりはあります。きっと係長にも満足して頂ける海鮮定食屋

さんです」

「ああ、それはいいですね。そちらに向かいますようか、真壁“シ

ン・イチイ”くん」

「おい！ 真壁え。…この店、本気で大丈夫か？」

青梅街道から一本入った雑居ビルの一階にある海鮮定食屋の前で

妙典は立ち竦んでいた。

「ええ、自分も普段からよく通っているお店です。北海道の海鮮丼や定食、ご当地料理が食べられる、安くてボリュームがあつて非常においしいお店ですよ」

真壁の言葉を余所にポケットに両手を突っ込んだ妙典はあらためて店の看板を見上げる。「北海道海鮮ポセイ丼」 看板には楷書体でデカデカとそう書かれていた。

「なかなか面白い名前のお店じゃないですか。私好みのネーミングではありませんね。真壁くんのお薦めですから楽しみですよ」

ニコニコした馬場は随分と気に入った様子であつた。妙典は馬場と真壁の顔を眺め俯き加減で言う。

「しょうがねえ、変態オタク眼鏡小僧と馬場さんの勘がそう言うのだから入るとするか…」

「じゃ、行きましようか！」

真壁は暖簾をくぐり横開きのガラス扉を開けるなり指を三本示した。程なく店の奥のテーブルを店員は示した。13係の三人は示された方へ向かい、大きな切り株を加工したテーブルに着席した。真壁は壁に立掛けられたメニューを馬場と妙典に向かつて広げ置いた。「自分は既に決まっていますので…」

「ほお、流石は常連さん。で、何にするんだ？」

「もちろん“ポセイ丼”です！ …名前こそ変わってはいますが、海鮮丼です」

真壁は妙典の問いに答えた。

「うん。私は、この刺身定食にしますかね」

馬場はそそくさとメニューを決めた。妙典は店内を見回し、壁に貼り出されているお品書きを見つめる。

「…日曜なのに、日替わりあるんだ。ホント変わってんなあ」

「この辺りは警察署や消防署、レンタカー屋、不動産屋などが沢山あつて日曜でも日替わり定食があつたりするのです」

真壁は妙典の不安と疑心を拭い去ろうと懸命に説明をした。やが

ておしぼりとお冷をお盆に載せた肌襦袢姿の店員が現れ、それぞれを各々の前に丁寧置いて回り、お盆を小脇に抱え注文伝票を取り出した。

「何にいたしやしよう?」

「ポセイ井ください」

真壁は何の躊躇いもなくポセイ井を注文した。

「じゃ、私は刺身定食を…」

馬場も早々と注文を終える。腕組みをする妙典は壁に貼られたお品書きを見つめたまま注文をした。

「…日替わり定食、…大盛り」

全員の注文を復唱し終えた店員は厨房に消え、注文を読み上げる威勢のいい声だけが耳に響いた。

真壁はメニューを片せ、あらためて馬場と妙典に向き直る。少しばかり深刻な顔をする妙典は俯いたまま口を開く。

「…馬場さん、ちょっと相談がありました…」

ニコニコしながらも目をぱちくりさせる馬場は妙典に目を向けた。「妙典くん、どうしました? …君がそういう口調の時は決まって逼迫した時なんですよね」

顔を覗き込む馬場に妙典は顔を向け告白する。

「馬場さん。…俺様、スーツというか背広というか…そんなもん持つてないんですわ」

馬場と真壁は一瞬仰け反り、お互い困惑の表情を浮かべる。

「それは困りましたねえ。背広ってお店に行つてすぐ持つて帰れる品物ではないですからね。…誰かから借りないといけませんね。…真壁くん、妙典くんに合う背広持つていませんか?」

真壁も眉間に皺を寄せ困った様子であった。

「丈は問題ないと思いますが、妙典さんの方が肉付きが良いので、パツンパツンになると思います」

「どうせ、お前が持つてるスーツって…モバイルスーツばかりなんだろお?」

「…ええ、否定はしません。ことに妙典さんと接触してそう思えるんです。それに…ジオンくさいスーツはお嫌いですか？」

13係は思わぬ問題に直面し、沈黙が流れた。

「はいっ！ 刺身定食、お待ちいー！」

刺身定食を抱えた店員が威勢よく切り株のテーブルに割り込んできた。

「ま、妙典くん。それは食べてからにしましょう。何とかありますよ、きつと」

「馬場さん、それは…」

妙典は顔をあげ、馬場に向き直った。

「…刑事の勘です。…じゃ、お先に頂きますね」

馬場は箸を割り味噌汁に口をつけた。

「はい、こちらはポセイ丼一丁っ！」

威勢のよい肌襦袢姿の店員がポセイ丼の載ったお盆を真壁の前に滑らせるように置いた。

「何だよお。ただの海鮮丼じゃねえか」

ポセイ丼を一目見た妙典は呟いた。

「妙典さん、だから言ったじゃないですか海鮮丼ですって…。でも絶品ですよ」

真壁も箸を割りつつ答えた。

「あゝあっ！ …結局、俺様が一番最後かよお。…普通、日替わり定食が一番早えーもんだがなあ！」

少々むくれた様子の妙典に店員の威勢の良い声が飛び込んできた。

「お待たせいたしましたー。日替わり定食っ、大盛りー！」

妙典の前に日替わり定食が緩やかに置かれた。何だかスパイシーな香りが漂い、嫌な予感がした。

「えー、今日の日替わりは札幌のご当地スープカレーになりまーす！」

妙典は硬直し、肌襦袢姿の店員を見上げた。

「なあ、店員さんよお。因みに、ポセイ丼の他に丼物はねえのかよ

お？」

「ええー、味付けトリモモのザンギがのったオホーツク網走の“プテラノ丼” っるのが、ありやすが…」

The Last Enemy (4)

東京都杉並区阿佐ヶ谷。JR阿佐ヶ谷駅が街の中心部に位置し、東西を走るJR中央線を境に阿佐ヶ谷北と阿佐ヶ谷南に区分される。街のシンボルでもあるケヤキ並木が続く中杉通りが南北を走っており、北限は日大二高通りと早稲田通り、南限は青梅街道となっており、この範囲や道筋は江戸時代の阿佐ヶ谷村とほぼ一致しており、都会の中にポツンと存在する古き風情が少しばかり残る街である。戦前から戦後にかけては多くの文豪が棲家とした郊外住宅地であり溜まり場でもあった。現在はミュージシャンや芸人、作家、漫画家、編集者などが数多く住まいとし、カルチャーシーンをリードする人々が好む街として発展している。

南限の青梅街道と中杉通りの交差点には地下鉄・南阿佐ヶ谷駅があり、駅に隣接するかの如く杉並区役所が存在する。杉並区役所横の地下駐車場のスロープを真壁を先頭に妙典と馬場とで三角の陣形を描きゆつくりと上っていた。

「なあ、真壁え。阿佐ヶ谷署に駐車場はねえのかよお？」

ポケットに両手を突っ込み、蟹股で歩く妙典は後方からクラクシヨンを浴びせられ、両手を挙げ慌てた様子でスロープの脇に寄る。

区役所職員の乗る車をやり過ぎした真壁は振り向き答えた。

「あるにはあるのですが、如何せん建物が古く、駐車場も狭いんです。…なので区役所の駐車場の一部を借りているんですよ」

スロープの滑り止め用の丸い刻印をつま先でなぞりながら妙典は勾配を上った。

「…で、どこなんだあ？ 阿佐ヶ谷署つてのはよお？」

地下駐車場の勾配を上りきると目の前に阿佐ヶ谷署が飛び込んできた。確かに古めかしく小汚さの残る建物である。

「おい、真壁え。…青梅街道の反対側じゃね？ 地下からは行けねえのかよお…」

後から続く馬場は阿佐ヶ谷署を起点に青梅街道一帯を見渡した。「でも落ち着いた雰囲気のある綺麗な街ですね。区役所があつて、郵便局があつて、その隣には警察署もある。…綺麗な上に便利そうな街じゃないですか」

「そうですね。消防署もすぐそこですし商店街もこの裏ですから、この一角で大概の用事は済みます」

真壁は馬場に顔を向け澆刺と答えた。その横で今まさにガードレールを乗り越え青梅街道を横切ろうとする妙典の姿が目に入る。

「妙典さん！ 横断歩道はあつちです。…警察官は市民の規範となるべき存在だと教わりませんでしたか？」

真壁の一言に妙典はおずおずとガードレールから戻り下りた。

「あ！ いやな、ちよつとガードレールでも磨いておこうかな」と思つたりして…」

妙典の苦しい言い訳に真壁は苦笑いで返す。

「…そうだったのですか？ 妙典さんなら“イスを尻で磨くだけの男で、終わるものかよ！”とおっしゃるかと思つていました」

警杖を携えた立ち番に軽く右手を上げ、阿佐ヶ谷警察署に13係の三人は足を踏み入れた。警視庁のマスコットぬいぐるみが出迎える交通課のカウンターが目に入り、軽く挨拶がてらに会釈をする。お互い警察官である。持つている空気と立ち振る舞いで警察官と認識されたようであった。というよりも、真壁伸一巡査部長という顔馴染みがいたお陰かもしれない。エレベーターこそ設置はされているものの、随分と古く昇降速度も遅い。刑事組織犯罪対策課のある二階に行くには古びた階段を上るのが最も手っ取り早かった。交通課のカウンターを右に折れ階段を上り始める。

「あああーっ！？ 先輩っ！ …真壁先輩じゃないスか！」

真壁をはじめとする13係の三人の背後から大声が発せられた。

三人が振り向くと交通課の狭い車庫証明申請ロビーできおつけの姿勢で敬礼をする体格の良い生真面目そうではあるがどこか頼りなさ

気な制服警官が立っていた。真壁は上りかけた階段を下まで戻り制服警官の前まで歩み寄る。

「小川巡査、お元気でしたか？」

「はい！ お蔭様で今日も元気であります！ …それよりも、先週、壮行会を開いたにも関わらず、また阿佐ヶ谷署にお戻り頂き大変光栄であります！」

真壁は苦笑いし、制服警官に告げる。

「いやあ、残念ながら出戻りではありません。…要人警護を司りました」

「…もはや、大滝議員の件でありましようか？ まさか真壁先輩もその任務にお付きなられていたとは、これも何かのご縁。本官も精一杯任務を遂行するであります」

真横から制服警官を睨みつけるかの様に妙典は反り立っていた。

「何だあ？ このそびえ立つアヒルちゃんは？」

「申し遅れました。私、生活安全課の小川健太おがわけんた巡査であります。尊敬する真壁先輩のような刑事になるべく日夜努力している次第であります！」

「ほう。…もう、刑事任用試験は受けたのか？」

「…それが、…まだであります」

ポケットに両手をつっ込んだ妙典は薄汚れた天井を一瞬見やり、溜め息をつき小川に顔を戻す。

「じゃ、まだ所轄の推薦はねえってことか…」

敬礼したままの小川の背筋が若干丸くなり、発する声も小さくなる。

「…残念ながら、そうであります」

意気消沈する若い制服警官を見かねた馬場は口を開く。

「でも、刑事を目指して日夜市民の安全を守る。…立派なことですよ」

「…そうですね！ 警察官は市民の安全を守るのが第一であります！ それを怠っては真壁先輩のような立派な刑事にはなれません。本官これからも精一杯市民の安全を守ります！」

背筋を伸ばした小川は馬場に再度敬礼をした。真横にいる妙典の顔からは「むさ苦しい奴」との表情が伺える。

「妙典さん！ 自分と係長はちよつと挨拶に行つてきます。…ついでにスーツの件も伺つておきます」

「おいおい！！ 変態オタク眼鏡小僧！ …俺様でここで待つとけつちゅうのかあ？ …しかも、このアヒル隊長のお坊ちゃんとお？」

「ええ、しません。…流石に、そのＴシャツは如何なものかと思ひますので…」

妙典はポケットから出した右手でＴシャツを引き摘みあらためて眺めた。

「…“We Burn”。別に構わねえじゃねえかよお。…ハロウインの曲だぜえ」

背後から妙典の肩にポンと馬場の右手がのつた。

「まあ、真壁さんの言う通りです。スーツの件もありますから、ここで待機してして下さい。…妙典くん」

流石の妙典も馬場に言われたとあつては仕方がない。納得しかねる様子ではあるが、ポケットに両手を突っ込んだ体勢で車庫証明申請ロビーの長いすにドンと足を投げ出し、踏ん返り返つて座り込んだ。

「すみません、妙典さん。ちよつと行つて来ます。小川巡査は…妙典巡査長周辺の警護を」

「ああ…了解したであります！」

不本意ながらも了承した小川は敬礼をし直して真壁と馬場を見送つた。

長い沈黙が流れる。長いすに足を投げ出して反り座る妙典を小川は休めの状態で見守っていた。両肘を背もたれに引っかけ口笛を吹く黒Ｔシャツの刑事に恐る恐る語りかけた。

「あのう。もしや妙典巡査長つて、あの“不死身の妙典刑事”でいらつしやるでありますか？」

「不死身」という言葉に反応した妙典はギロツと小川に目を向けた。

「…だとしたら、どうする?」

「た…大変光栄であります! 伝説の不死身の妙典刑事にお会いでき、この上ない幸せであります!」

ビシツと敬礼し小川は答えた。

「あ…あのう。…おひとつ伺わせて頂いてよろしいでしょうか?」

「ああ? 何だあ? アヒル隊長」

妙典は天井を見上げ目を合わすことなく面倒くさげな口調で言った。緊張した面持ちの小川は恐る恐る口を開く。

「あのー、マル暴に日本刀で首を刎ねられたにも関わらず、検拳したというのは本当でありますか?」

呆れ果てた妙典は首をガクツとうな垂れる。

「…あのなあ、首刎ねられたら幾らなんでも死んでるだろーがっ!

俺様、ブロッケン伯爵じゃねえからなっ!」

「いや、それでも検拳なさったと伺っております。何せ“不死身の妙典刑事”ですから…」

妙典は溜め息をつき静かな口調で語る。

「…確かにアヒルの巡查時代、マル暴のガサ入れん時に日本刀で斬りつけられた。…でもなあ、ヤクザもそうそう普段から日本刀みたいな重いもん振り回すような練習なんてしてねえんだわ!! 斬りかかったはいいが重みに振られてよろけたんだは…流石に。…で、ポコポコにしてやったわけよ」

「しかしながら極道に斬りつけられたのは本当であらせられるのですね? …この上ない尊敬に値致します」

「…で、どういうわけか、所轄に推薦されて刑事任用試験を受けるハメになっただわ」

「そうでありましたか。…やはり、大きな手柄を上げないことには推薦されないのですね。…本官、死ぬ気で大手柄をあげる所存であります!」

「まあ、頑張つてくれや。…死なねえ程度に。アヒル隊長は不死身じゃねえからな」

「ところで刑事任用試験とはどの様なものでありますか？」

妙典は薄汚れた天井を見上げ、任用試験受験当時を思い返す。

「…筆記試験は五択。俺様は鉛筆転がして何とかなつた」

「ええーっ！？ 鉛筆を転がせば合格するでありますか？」

「…まあ、俺様の場合かな。…で、論文がある」

「論文…。何やら難しそうですね。妙典刑事はどのような論文を？」

「論文名は“俺様が如何に不死身であるか！”。…過去の出来事とか武勇伝をあることないこといっぱい書いて、俺様が死ぬわけねえ！…とまとめた」

「そ…それで合格したのでありますか？」

「…何か知らねえが合格したな。…でもなあ、最大の難関は口述試験。本庁の警視階級ひとり、警部階級二人の前での面接試験だわな」

「そ…それは緊張の絶頂でありますな！」

「ああ、大抵の奴はブルっちまうわな。…各署の推薦書と筆記試験の成績が試験官の手元にあつて、最初のお決まりの質問は『何故刑事になるうと決めたのか？』だ。…で俺様は『不死身だからです』と答えた」

「妙典刑事、本当にそうお答えになられたのですか？」

「他に何て答えりゃいいんだあ？ 俺様に気のきいた答弁なんか出来るわけねえだろお？ …で、最後の質問が『刑事は忙しく休みもない、事件が起これば呼び出しもあるし家にも帰れないことも多くなるが、家族が反対しないか？ もしこの試験が不合格であつた場合、刑事をあきらめるか？』だつたけかなあ？」

「…で、何とお答えになつたのでありますか？ 不死身の妙典刑事は？」

一呼吸空けた妙典は小川を見つめ静かに言う。

「『不死身なので何の問題もありません！』…と言つた」

「ほ…本当でありますか!? “不死身”という言葉だけで合格なさったのでありますか!?”

「…まあ、そういうことになるわな。…しかし試験官のひとりが今の上司、雷門管理官だったつてもラッキーだったのかもね。…当時はまだ警部だったがな」

「妙典刑事っ! 本官は痛く感動したであります。俄然燃えてまいりました!」

「まあ、頑張れや。…まずは手柄をあげるこつたな」

「了解であります。精一杯命がけで頑張る所存であります!」

ビシッと敬礼した小川に妙典は問いかける。

「ところで、アヒル隊長。貴様、刑事になりてえんだろ? 刑事に憧れてんだろ?」

「はい、そうでありますが…」

「これはあくまで俺様の推測だが、…貴様、刑事用のスーツ…既に持つてるだろお?」

小川は敬礼を素早く解き、慌てた様子で答える。

「な…何故、それが分かるでありますか? 確かにいつ刑事に任命されてもよいように買っており、常にロッカーに置いているであります!」

「アヒル隊長の小川巡查! 貴様は俺様と体格も背格好も似ている。

…俺様にスーツ貸してみねえか? …阿佐ヶ谷署の推薦、すぐにも出るかもなあ…」

The Last Enemy (5)

ケヤキ並木の木漏れ日が初夏の陽射しを射ししめし日陰とのコントラストを一層際立たせていた。

着慣れないスーツに苦闘する妙典は、時折堅苦し気に両肩を上下させ、首を左右に揺さぶっている。

「妙典さん、そんなに落ち着きませんか？」

笑いを堪える真壁は妙典の背後から問いかけた。

「お前ら、よくこんなもん、いつも着てられるよなあ…。シヨルダ―ホルスターもどうもじっくりこねえし…。肩こつてしゃあねえ」

「…慣れの問題です。…“不慣れなパイロットめ！”とでも言ったら怒りますか？」

硬直する肩を更にいからせた妙典はゆるりと振り向き真壁を睨みつける。

「失礼、撤回します。…“慣れていくのね…自分でも分かる…”に変更します」

二人のやり取りを微笑ましく見つめる馬場の携帯電話が突如音を立てて震え始めた。立ち止って腰袋から携帯を取り出し、耳に宛がう。

「…ああ、もしもし馬場です。…ああ、三沢さん！…何か掴みましたか？」

妙典と真壁も足を止め、電話口に向かう馬場の声に耳を澄ました。

「…ええ、…ええ。…ぴんくくりーむ・しっくすていーないん？はあ、…ちよつと聞いてみましょうか？」

携帯電話の通話口を片手で押さえた馬場は妙典と真壁に問う。

「妙典くん、真壁くん。…ピンククリーム・シックスティーナインという社名に聞き覚えはありませんかね？」

「…ピンククリーム・シックスティーナイン？　もしかやピンククリーム69のことでしょうか？」

「ああ、アカネコの西川が騙されたとか言ってたAV会社かあ？」
二人の言葉を耳にした馬場は通話口から手を離し再び会話を始める。

「もしもし、お待たせしてすみません。…どうやらドンピシャのようです。…ええ…ええ、そうですね。…わかりました。…引き続きよろしくお願いします。…では、ご苦労様です」

馬場は携帯を切って腰袋に戻すと妙典と真壁の二人にいつもの笑みを見せた。

「…第一発見者の久木大輔とピンククリーム69社長の久木は同一人物のようですね」

一瞬目を細めた真壁は馬場に問う。

「バイク便の配送員とアダルトビデオの制作会社の社長が同一人物…ですか？」

「…接点は…C-4ってわけですかあ。…益々、怪しいですなあ…
そいつ」

妙典も続き馬場が返す。

「でも残念ながら、バイク便の会社には退職の旨を今日になって伝えていたそうです。…急に実家に帰らなければならぬとかで…
自宅も既に引き払われていたそうです」

「…今日ですか？ 日曜ですよ、随分と急な話ですよ。…何かあったのでしょうか？」

真壁の問いに馬場は笑顔で答える。

「まだ分かりませんか？ …想定外の事が起こったんですよ」

七五三帰りの子供の様に浮いたスーツ姿の妙典はスラックスのポケットに両手をぎこちなく突っ込む。

「…それは、昨日俺様らがとっ捕まえた二人組ということですかね？」

…馬場さん

「ええ、そうだと思いますよ。…詳しいことは分かりませんが、何らかの協力関係にあった二人が捕まった。…まったくの想定外のことです」

「そして、昨日の二人組から出てきたのも…C-4。…たく、何を企んでやがんだあ？…あいつら…マジでテロリストかよお？」

「さあ、それはどうでしょうかねえ。まだ断定するには早計だと思いますよ。…久木大輔に田伏幸夫…それに、もうひとりの五人目の社員の存在。…引つ掛かりますねえ」

「馬場さん。…変態オタク眼鏡小僧の言う事、真に受けてるんスかあ？」

「引つ掛かるんですよ。何となくですが…」

「…刑事の勘というやつですかい？ 馬場さんが言うと言説力が違いますなあ。…俺様だと当てずっぽうって言われるのがオチですがねえ…」

「まあまあ、私は妙典くんみたいに飛んだり跳ねたりはできませんから。…それにしても、そのスーツちよつと大きくはないですか？」

「妙典はスーツの襟を軽く握り上半身を左右に振って見せた。」

「あの小川って野郎…随分とデカいんだなあ。…まさに聳え立つアヒル隊長！」

「ええ、小川巡査は立派な体格ですよ。それに、柔道も剣道も有段者ですし…」

「ちよつとした街角ファッションショーに真壁が一言付け加えた。」

「ええっ！？ あのアヒル隊長…強いのかあ？」

「阿佐ヶ谷署でも彼に敵う者はなかないません」

「と…とてもそうは思えんっ！ だって見てみるよお、スーツの裏側に“K・O”って刺繍があるくらいだぜ！」

「…妙典さん、それは彼のイニシャルです。小川健太…イニシャルは“K・O”です」

「へっ！ そういうことかよお。…俺様だったら“H・M”。変態オタク眼鏡小僧は“S・M”ってか！！」

「おどけて話す妙典は歩き始め、背後から馬場が声を投げかける。」

「じゃあ、私は“T・B”ですね」

「…係長、それは何の略語なのでしょう？」

真壁の問いに対し暫しの間があり、馬場は満面の笑みで答える。

「…ザ・ビートルズです！」

「おい！ 真壁え、それ以上ビートルズの話は絶対にすんなよ！

特に“Back In The U.S.S.R”なんて言ったら死を覚悟しとけっ！」

「あつ、ああ…大丈夫です。…係長には申し訳ないですが、よく知らないんです。…音楽は」

馬場は真壁の肩口に寄り添い囁く。

「じゃあ、今度一緒に“Twist And Shout”でもしましうか…」

曲名をどこかで聞いた覚えこそありはするが、曲自体はよく知らない。しかし“Back In The U.S.S.R”を熱唱し“Twist And Shout”する馬場の姿が真壁の脳裏を過ぎつた。何ともいえぬ悪寒が全身を駆け巡り気分を一蹴するべく真壁は若干歩を早め、大きく呟いた。

「それにしても、いつも歩く中杉通りとはどこか雰囲気違います。まるで別の感覚ですね」

「…そりゃ、まるで“Another Day”ってか？」

真壁の早足が妙典に追いついた途端、問いかけられた。

「ええ。…まあ、そんな感じです」

慣れないストラックスに両手をつまむ妙典は歩を緩めることなく返す。

「俺様はこんな慣れねえスーツを着る破目になって“Crushing Day”って気分だなあ…」

「く…“Crushing Day”ですか。…くくっ！ ご愁傷様、だな…」

地下鉄・南阿佐ヶ谷駅から向かってJR阿佐ヶ谷駅のちょうど中ほど、中杉通りに面した低層のオフィスビルに大滝龍一郎事務所はあった。事務所の前は支援者や若手政治家、警察関係者、野次馬、

そしてマスコミ関係者でこつた返し人だかりの山となっている。

13係の三人は警察手帳を広げ人垣を縫うように事務所内に入った。人でこつた返すが、誰も座っていない接客用のソファーが並ぶ玄関口に到着し、開けっ放しの扉から事務所の中の様子を窺う。すると如何にも警察官という匂いをプンプンと放つがっしりとした体型の男が肩口から潜めた声を投げかけてきた。

「おう！ 真壁。到着したか。…せっかく本庁勤務になったとこなのに、また舞い戻ってきやがったな」

「あ、藤波さん。先週の壮行会、ありがとうございました。…でも開催時期が少し早かったかもしれないですね」

「まあ、そう言うな！ …本庁から警護の者を送るって連絡があったて、“土地勘もありますし真壁伸一巡查部長をお願いします”と言ったのは、この俺だが…怒るなよ」

「藤波警部、…やはりあなたが黒幕でしたか？」

「人を悪者みたいに言うな。…で、そちらさんは本庁の…」
角刈りの警部が馬場と妙典に目を向けた。

「紹介します。現在の上司、馬場警部と妙典巡查長です。…で、こちらが先週末までの上司の藤波警部です」

真壁は手短に双方を紹介した。警察官といえども社会人である。人でこつた返す中、馬場と藤波は丁寧ながらも邪魔にならない程度に軽く会釈をした。妙典といえば、相変わらずスラックスに両手を突っ込んで反り立ってはいたが、どこかきこちなさを感じる。

「…で、どうですか？ ウチの…いや、元ウチの真壁は？」

「いやあ、着任早々活躍してもらって助かっていますよ」

「ああ、そりゃ良かった。何せウチのエースでしたからね」

同じ階級の二人の会話に妙典が口を挟む。

「…ところが、これがとんでもねえガンダム・オタクでして随分手を焼いておりますわあ」

藤波と馬場はハツと妙典に怪訝そうな顔を向けた。

「…ガンダム・オタク？ 真壁がですか？」

「まさか藤波さん、部下の趣味趣向を掴んでなかったんですかあ？」
妙典の辛辣に聞こえても仕方のない言葉を遮るように真壁は二人の間に割って入った。

「藤波さん、すいません。…こう見えても妙典巡査長は自分の尊敬する刑事なんです。…失礼がありましたら、自分からお詫び致します」

藤波は豆鉄砲を食らったかのような顔で真壁を見つめた。

「真壁：それ本当なのか？」

「え…ええ、まあ…そうですね」

真壁の自白に思わず舌打ちをした藤波は笑い声をあげる。

「はっはっはっは…。それはお見逸れ致しました。こいつとは何年も一緒にやってきたというのに、それを見抜けないとは刑事失格ですなあ。しかも僅か数日で探り出すとは…。真壁！ お前いい上司に着いたことに感謝しろよ」

「は…はい」

詫びが徒労に終わり、真壁は脱力感に苛まれた。

「いやあ、馬場警部：そして妙典さん。元々真壁は優秀な奴でしたが、刑事のいろはを叩き込んだのは自分です。今後とも真壁を厳しく指導してやって下さい」

藤波は深々と頭を下げた。反り立つ妙典の横で馬場と真壁も思わず頭を下げた。日本人独特の間の後、三人は同時に顔を上げる。

「…で、警護に関してなんですが、これ…着けてください」

藤波はピンマイクとチューブイヤホン、受信機の入った三人分のチャック付きの透明のポリ袋を手渡し、腕時計を見やった。

「…今から十五分後、大滝議員はこの事務所からJR阿佐ヶ谷駅南口のロータリーに徒歩で向かいます」

「あ…歩いてですか？」

真壁は思わず問い質した。

「まあ、パフォーマーンスというやつだろ。大臣の頃もパフォーマーンスで有名だったからな。…で、お三人方にはここから警護に着いて

いただきたい。なにぶん人が多い上、ご覧の通りマスコミも押し寄せています。なるべくそれらは我々の方で未然に対処しますが、歩道も狭い上限界があることはご容赦頂きたい」

「それはもちろんです」

相変わらず笑みを絶やさない馬場は言った。

「…そしてロータリーには街宣車が一台、既に待機しております。

真壁と妙典さんは街宣車の真後ろで警護にあたって頂きたい」

「後ですか？ 街宣車の上でなく？」

真壁の問いに藤波は顔色を変えた。

「ああ、そうだ。…秘書からきつく言われてるんでな、街宣車の上には絶対に上がるなと。…議員ひとりで演説する…それもある種のパフォーマンスのつもりだろうが…こちらとしては迷惑な話だ」

「脅迫文の存在する警護としては非常に困難な状況ですね」

困惑した真壁は中指で眼鏡のブリッジを押し上げた。

「…で、馬場警部にはロータリーの出入口付近に噴水があるんですが…そこで目を光らせて頂きたい」

藤波は馬場に向き直った。

「そうですね。それが、的確だと思います。…それで万が一の場合の逃走経路については？」

笑顔の奥から馬場の鋭い意見が飛ぶ。藤波も間髪入れずに答える。

「阿佐ヶ谷署方面用と中野新井署方面用の二台の車両を確保しています。使用は状況により現場指示致します」

「藤波さん、了解です」

真壁は納得した旨を伝え、馬場も頷いた。

「ところで、藤波さん。…おかしなヤツが突っ込んできたら、とっ捕まえても構わないんだよなあ？」

妙典はぶっきらぼうな口調で藤波に言い放った。藤波はやや困惑した表情で告げる。

「…あくまで警護が優先です。議員の身の安全を第一に考えてください。…まあ、状況にもよりますがね…」

「了解しましたー。大人しくしてますわ！」

妙典は両手をスラックスにぎこちなく突っ込んだ。それを横目に見た馬場は藤波に告げる。

「警護内容については十分承服致しました。無線局秘密番号も既に本庁から受理しています。…で、大滝代議士は、奥に？」

「ええ、議員なら奥の執務室にいますが…」

「じゃあ、ちよつと挨拶に伺って参りましょうか…」

馬場は軽く会釈し奥の執務室へと向かい始めた。妙典はスラックスのポケットに両手を突っ込んだまま肩をいからせ歩を向ける。真壁も軽く会釈し、後に続いた。

「なあっ！ 真壁っ！」

藤波は真壁を呼び止めた。真壁は立ち止りゆるりと振り向く。

「是非、真壁宅の家宅捜査を試みたいんだが…」

藤波の一言に真壁は笑みを浮かべる。

「ひとつお伺いします。…搜索差押許可状の物品欄には何と記載されるおつもりでしょうか？」

「ガンダムプラモデル…かな？ …ガンダム・オタクという確証がどうしても欲しい」

「藤波さん、それは刑事のプライドというものなのでしょうか？」

「ははっ、そうかもな…。しかし、これは個人的な詮索に過ぎん」

藤波は、はにかんだ表情で言った。苦笑いする真壁は藤波に一歩近づき口を開く。

「…ジオンの栄光、この俺のプライド、やらせはせん、やらせはせん、やらせはせんぞーっ！」

「…駄目だ、真壁。何のことだかさっぱり…。やはり、家宅捜査の必要は大いに有りといったところだな…」

チューブイヤホンを左耳に巻き、ピンマイクを襟の裏に仕込んだスーツ姿の三人は扉の前にいた。そのうちひとりはどうも落ち着かないらしく慣れないネクタイを右手で揺さぶり続けている。馬場は

扉をノックし、スーツ姿の三人は執務室に足を踏み入れた。

「失礼致します。警視庁捜査一課の馬場と申します！」

馬場と真壁は深々と頭を下げ、妙典は起立の体勢を崩さなかった。豪華な赤い絨毯が敷き詰められた部屋の奥の古びた執務机にはファックス電話と地球儀、卓上カレンダーが並んで置かれ、本皮の執務椅子に座り原稿に目を通す男の姿が目に入る。白髪交じりながらも議員としては珍しい長髪気味の髪型で百獣の王ライオンを思わせる様であった。中央に位置する分け目が原稿から警視庁の三人に向きを変える。それを遮るかのように一人の男が立ち塞がった。

「私設秘書の沢木と申します」

外国製ブランドのスーツに身を包んだ銀色に輝く眼鏡が印象的で、インテリな雰囲気醸し出していた。その左手には数枚の名刺が既に握られており、両手を添えて差し出す。

「警視庁捜査一課の馬場警部です」

馬場は警察手帳から素早く名刺を取り出し、受け取った返す手で丁寧に差し出す。続いて真壁も両手で名刺を受け取った。

「申し訳ございません。警視庁捜査一課に着任間もなく、まだ名刺を持ち合わせておりませんが、真壁伸一と申します。階級は巡査部長であります」

沢木は一瞬仰け反り値踏みするかのよう真壁を見下ろした。

「…確か、阿佐ヶ谷署に勤務していらっしやうと記憶しておりますが…」

「はい。先週末までは阿佐ヶ谷署にいました」

「通りで、どこかでお見受けしたと思っております」

真壁も深々と頭を下げる。その頭の先で空気の動く気配がし、上目で見やる。片手で名刺を差し出す妙典の姿があった。

「同じく捜査一課の妙典だ。不死身の妙典とでも憶えておいてくれや」

ムスツとした表情の沢木は両手で名刺を受け取り、同じく両手で名刺を差し出す。妙典は片手で名刺を引き手繰り胸ポケットにしま

った。気まずい空気が流れる中、沢木は口を開く。

「生憎、先生は街頭演説前につきお忙しい。…用件がありましたら、私が代わって承ります」

「いえ、議員の警護にあたります上、挨拶に参った次第です」

いつも程ではないが、笑みを絶やさない馬場は沢木に告げた。すると部屋の奥から呼ぶ声がする。

「沢木。通してさし上げてください」

沢木はスッと隅に寄り、警視庁の三人に手招きをする。その先には大滝龍一郎元内閣総理大臣が執務机の後で寄りかかって座る姿があった。大物政治家独特のオーラを全身から発散し、手にした原稿を裏向きに置く。三人は執務机の袂に横並びで近寄った。

「いやあ、どうも!」

大滝は大物政治家らしからぬ一声で三人を迎え入れた。

「本日の警護にあたらせて頂きます、本庁の馬場、真壁、妙典の三名です」

会釈する二人と起立するひとりに大滝は声をかけた。

「日本の警察は世界的に見ても実に優秀だ。…今日は頼りにしてますよ」

「心得ております」

微笑みながらも馬場は落ち着いた口調で言った。大滝は執務椅子を回転させ三人に向き直り、馬場に同じく微笑んだ。

「まったく、この私を脅迫するとは笑止千万! この国を良くしたつもりが、私には火の粉を振りかける。愚民という者はどの国にもいるものですな。…しかし、今日は優秀な日本の警察の最高峰、警視庁のエースがこうして三人もいらしてくれた。これ以上の強い味方はおりません。大船に乗った気でございますよ」

大滝はそう言うや否や執務椅子から立ち上がり三人に両手で握手を求めた。馬場は快く握手に応じ、真壁も握手を交わす。時間にして僅か十数秒、いと簡単に人の心を掴むものだと真壁は感心した。大物政治家の大物たる所以であろうと受けとめた。

「…どうしました？ こちらの刑事さんは？」

大滝の驚いた声が執務室に響き、真壁は真横の妙典に振り向いた。妙典は起立したまま手を差し伸べようとしない。不穏な空気がまたも執務室を覆う。

「…すみません。手洗っていないんで汚いつスよ！」

大物政治家、それも元内閣総理大臣の男に対して、発するに相応しくない台詞を妙典は吐いた。笑みこそ絶やしはしなかったが、不快感を伴って大滝はすごと腕を引いた。執務椅子に座った大滝はおもむろに右の人差し指で天井に指し示し声を張り上げる。

「ううん！ 実にいい！ そういう物怖じしない態度。それこそ国家の番人です！」

大滝は腹の中と真逆の台詞を吐いていると真壁は思った。それにしても妙典の言動はあるまじき事に違いは無いが、妙典らしさを感じたのも事実である。

「先生！ お時間です」

沢木の時間を告げる声が背後から響いた。

「…では、参るとしましょうか…」

大滝は執務椅子から立ち上がり、壁に貼り付けられた鏡の前でネクタイを揺する。身なりを整えた大滝は執務机を回り込み、13係の三人の前で立ちはだかった。

「しっかりと頼みますよ。私の命運は日本の命運でもありません」

妙典と真壁は議員の前を先導し、馬場は大滝の背後で警戒態勢に入る。大滝から半歩下がった左隣の位置で沢木も執務室の扉に向かった。大滝は沢木に顔を向けることなく囁く。

「沢木、原稿の二ページ目のくだり…少し変更します」

「先生の思う通りになさって下さい」

「…それと、安全は保証されていますよね」

「そちらも間違いないと聞いております」

執務室の扉を真壁が開き、警察関係者、若手代議士らの並ぶ人垣を掻き分けて大滝龍一郎事務所から歩み出る。外に出た途端、更な

る数の人垣が取り囲み、その頭上から射し込める撮影用ライトが
際眩しく感じられた。警護する妙典と真壁は思わず腕で光を遮った
ものの大滝議員は笑顔で手を振りゆっくりと歩を進める。

「：2425、中杉通りに既出」

雑踏の中、馬場は要人警護の無線局秘密番号を左襟に向かって呟
いた。

The Last Enemy (6)

中央線快速、中央総武線、それぞれに一面二線の島式ホームのあるJR阿佐ヶ谷駅は計二面四線を持つ高架駅である。出口は阿佐ヶ谷ダイヤ街に抜ける西口改札と中杉通り方面に抜ける改札口があり、更にそこから北口と南口、高架下の阿佐ヶ谷ゴールド街に抜ける東口に分かれる。北口、南口とも駅前にはロータリー形式になっており、北口はバス乗り場が集中し大手小売チェーンのスーパーマーケットが複数存在するショッピング街的な雰囲気漂っている。一方南口は時計台を中心とした噴水広場が設営されており、かなりの高さを誇る数本のケヤキが印象的な市民の憩いの場となっていた。

駅側に面したロータリーの内側に「民自党」と書かれた二本の幟が立ち並ぶ嫌でも目立つ街宣車が駐車している。南口付近はおろかロータリー全体をも取り囲みかねない人だかりの山が既に出来ており、ある種の熱気に帯びていた。その人だかりのエアポケットとも言える街宣車の真後ろ、大滝議員と沢木秘書から少し離れた位置で妙典と真壁は身を潜めていた。ダークスーツの男は周囲を取り囲む人だかりをぐるりと見回し、その人の多さに呆気にとられるばかりである。この立ち並ぶ建物のどこかで藤波もロータリーを見下ろし、きつと同じ心境なのであろうと真壁は予察した。駅から離れた出入口付近の噴水の斜め後ろにはロータリー全体を、より見渡そうと時折場所を変えつつも常に周囲に目を配る馬場の姿があった。そんな真壁の背後から着慣れない大きめのグレースーツに身を包んだ妙典が呟く。

「あの小川って野郎、…やっぱデカいよなあ。…こんな人ごみん中でも目立ってしゃあねえ」

ダークスーツの真壁は妙典に振り向く。

「…小川巡査、居ましたか？」

「居るも何も、聳え立ってやがんぞ！ …… 信号機の向こうですよ。
…あれじゃ、どっちが赤信号か分かりやあしねえ…」

グレースーツに身を包む妙典の目線の先に頭ひとつ飛び出す緊張して赤らんだ顔を見つけた。

「小川巡査の救難信号をキャッチしました！ 妙典さん、返答を！」

「…ほっとけ。あいつ強いんだろ？ …… ああ見えて」

「妙典さん、あなたはいつもそうして…いつも自分だけ高いところに居ようとする」

エアポケットのすぐ頭上では真つ赤な婦人用スーツに身を包んだ女性議員が金切り声を張り上げていた。この夏に総選挙が行われるのは間違いないらしい。流石の民自党も今回は相当な劣勢が予想されている。政権交代も非現実的な話ではない。女性議員の応援演説の必死さがそれらを物語っているように真壁は悲痛にさえ感じた。

「なあ、真壁え。…あのオバハン、絶対シヤア専用だろお？」

「…真つ赤ですからね。…でも、ジョニー・ライデン専用機かもしれませんよ」

「前にも、どこかで聞いたよなあ？ その名前。…で、誰なんだ、それ？ …… まあいいや、それよりも見てみるや！ 角生えてやがんぞ、あのオバハン。…絶対シヤア専用に違いねえ」

妙典は真つ赤なモバイルスーツの様な女性議員に顎を杓つて言った。「妙典さん、残念ながらジョニー・ライデン少佐機にも指揮通信用ブレードアンテナは付いています。…それに少々失礼ではありませんか？ …… 仮にも女性の社会進出問題で大変有名な議員の方ですよ」
「ああっ！？ …… こいつかあ？ …… どっかのミス・コンにケチつけてたクソババアはっ！？」

「…確かに、容姿や容貌だけで女性を差別するな…とは仰っていましたけどね」

鼻から大きく息を抜きつつ真壁は答えた。

「…で、結局あのババアも“女”という大看板で議員になったんだろおーが？ …… あんまし他人の事、…偉そうに言えんわなあ」

妙典という人物は実に不思議な男だ。常に当たる世間に唾を吐き散らかすかの様な物言いではあるが、時として実能的を射ている。下手な鉄砲も数打ちや当たる。それを口にすれば、きっと妙典は嫌味のひとつでも返すのであろうと眞壁は思った。

左耳に巻かれたイヤホンから未だ何の反応もない中、公国の赤いモビルスーツの金切り声のトーンが締めに入る。

「…では、今まさに日本の命運を握る…大滝龍一郎…第87代・第88代・第89代内閣総理大臣にご登場頂きましょう！」

街宣車の裏隅で沢木秘書に耳打ちする大滝議員が静かに動き始めた。街宣車の後部に設けられたステンレス製のハシゴを軽やかに駆け上がり、赤い婦人用スーツに身を包んだ女性議員に駆け寄る。すかさず両手で握手を交わし、手を握ったまま万歳のポーズで歓声に応える。再度、両手で握手を交わしてマイクを受け取り、街宣車の後部に後退く赤い女性議員に手を差し伸べた。女性議員がハシゴを緩やかに下りるのを見届けた後、片手を掲げて歓声を静めると街宣車のルーフの中央までゆつくりと歩を進める。マイクを力強く握りなおし第一声を発した。

「日曜の昼最中。お暇な阿佐ヶ谷の皆さん！ こんにちは！ 大滝龍一郎ですっ！」

ロータリーを取り巻く聴衆からドツと笑いがおきる。その笑いがまばらになるのを見計らい再度マイクを口に近づける。

「…正直、今現在の…日本は笑えない状況にあります。…アメリカがひいた大きな風邪に日本経済はまさに虫の息であります」

時折、聴衆の中を巡回していると思われる警官に指示を出す藤波の声は届くものの、これと言った不審人物は今のところ見当たらないようである。妙典と眞壁もロータリーの両側を見やるもおかしな動きは見られない。眞壁の視野に公国の曲線的なシルエットのモビルスーツが納まった。赤いモビルスーツは街宣車の後部で手を前に組み聴衆に大振りのスカートを見せ付けるかのように沢木秘書と並んで佇んでいる。それを目にした眞壁は思わず呟いた。

「…まるで、ゲルググ・イエーガーですね」

「はあ？ それってシャアのか？ それとも…ジヨニー何かのか？」

暇そうな間の抜けた口調で妙典は問うた。

「…さあ？ 赤くなければシン・マツナガ大尉の筈なのですが…」

眞壁は赤いゲルググ・イエーガー越しに聴衆に目を配り、呆れ顔の妙典は大滝議員を見上げる。

「…そんな中でも私は実行してきた！ 国際基準の市場経済の導入もそのひとつではありますが、…何よりも先に若者の雇用対策の為にハート・ワークを立ち上げた！ ハート・ワークは何も日本の若者だけに限ったものではありません。…世界中、特にアジアから日本で働きたいと願う若者にも門戸を開放し、職業訓練を経た後、様々な職種に今現在も送り出しています。…中には日本での永住を希望する者も数多くいると聞きます。その声には是非とも応えるべく永住権の取得も今後配慮せねばなりません。…アジアの若者から、あらためて日本の良さを思い知らされた…そんな気がしてならないのです。…そして少しずつではありますが、日本の景気の低下も鈍化に向かっています！ 今、この流れを絶対に止めてはならないっ！

…阿佐ヶ谷の皆さん。東京の皆さん。…首都である東京から過去何人の内閣総理大臣が生まれたのかご存知ですか？ …近衛文麿、東條英機、吉田茂、鳩山一郎…そしてこの私、大滝龍一郎。…たったの五人です。…政府という中央機関を置く東京から、まだたった五人しか総理大臣は誕生していません。…日本で最も人口が多く、最も経済活動が活発な大都市からまだほんの一握りしか総理が誕生していない、この歪な日本を東京から、そして日本を愛してくれたアジアの若者と日本の若者も一丸となって立て直していこうではありませんか！ …東京から誕生した五人目の内閣総理大臣、大滝龍一郎はその先陣となつて日本を必ず、もつと…もつと世界に誇れる素晴らしい国にしてみせます！」

着慣れないスーツの為か、興味のない演説の為か、一向に現れる気配のない脅迫犯の為か、大あくびの妙典は堪らず青い煙草袋を上下に揺さぶり一本を啜え出した。

「おい！ 真壁え、ここいらに喫煙所あつたよなあ？」

「喫煙所なら噴水のすぐ裏手…公衆トイレの前にあります。警戒体制の為…現在は使用できません」

真壁は妙典にとってこの上ない非情な通告をした。

「ちっ！ ……つたく、この国は納税者には手厳しいよなあ。…妙な奴も現れねえみてえだし、今日は空振りか…」

肩を落としポケットに両手をつ込んだ妙典は火が灯らない煙草を啜えたまま晴天の青空を見上げた。

「おい、何だ？ ありゃ…」

妙典の呟きに真壁も空を見上げた。

「…飛行機？ ……ですか？」

目を窄めた真壁は晴天の西の空に飛行機のような陰影を見つけた。しかし何かが違う。

「妙典さん、…ラジコンの様ですね。それもかなりの大型機です」

ラジコン飛行機の機影は西の空高く、ゆっくりとロータリーの上空まで到達すると旋回飛行を始めた。南口ロータリーに詰め掛けた聴衆の中で妙典と真壁以外に誰も気付いていないのである。ラジコン飛行機は突如先端を真下に向け急降下を開始する。それを目にした真壁は左襟に仕込まれたピンマイクに向かって叫ぶ。

「藤波さんっ！ ラジコンです！ ……ラジコン飛行機が急速に接近していますっ！」

『ら…ラジコン飛行機！？ どこだ？』

まだ目認できていない藤波から、それ以上の応答はない。急降下するラジコン飛行機は速度が最高に達した時点で水平飛行に素早く移り南口ロータリーの中央へと一直線に向かった。その先には街頭演説をする大滝の姿がはつきりと捉えられている。

「真壁っ！！ “Signs Of Danger”！ 狙いは議

員だっ！！」

妙典は啞えた煙草を吹き飛ばし、街宣車の最後部へ駆け走る。“危険な兆候”を感じ取った真壁も後を追った。ラジコン飛行機を目視した藤波の声が左耳に響く。

『至急報！ 2425にラジコン飛行機が一機、接近中。緊配発令！！』

緊張と興奮が入り混じった藤波の至急報を受け、ステンレス製のハシゴを上ろうと手をかける妙典に沢木秘書が食い下がる。

「事前に通達していた筈です！！ 絶対、街宣車には昇らないで頂きたい！」

「この非常時に何ぬかしてやがる！ てめえのボスが狙われてんだぞおっ！！」

妙典は大声で叫んだものの、それを掻き消すかのようなエンジンの爆発音が刻一刻と大きくなっていった。

「…先生から固く言われております。絶対に上がらないで下さい！！」

妙典は沢木の腕を振りほどきハシゴを登り始めた。沢木も登らせまいと妙典の足にしがみつく。街宣車のルーフを右腕一本で上体を押し上げた妙典の目の前にはマイクを握る大滝議員の姿があった。エンジンの爆音と聴衆の異変に気付いた大滝は大型のラジコン飛行機に顔を向け、我が身に危険が迫っていることを察知した。妙典は左足で沢木を蹴り落とし、街宣車のルーフに這い上がる。

しかし時は既に遅かった。爆音を轟かせ、白い煙を吐き出す大型ラジコン飛行機が大滝議員の目前に迫っている。大滝は咄嗟にしゃがみ込み、その頭上をかすめるようにラジコン飛行機は白い煙を残して通り抜けた。妙典は急上昇するラジコン飛行機を振り向き見上げると街宣車の中央に駆け込み、しゃがんだままの大滝の前に立ちはだかる。

「真壁っ！ 早く上がって来いや！」

真壁も街宣車のルーフに駆け上がり、大滝に覆い被さった。その

まま腰を低くして素早く街宣車の後部に引き寄せる。かなりの高度まで上昇した大型ラジコン飛行機は大きく旋回し、再度急降下を始めた。

「急げっ！！ 真壁えっ！ また来んぞ！！」

「みよ… 妙典さんはどうするつもりですか！？」

「ここは俺様が防ぐっ！！ … 議員は頼んだ！」

妙典に言われるがまま真壁は大滝に被さった状態で後に退く。最高速に達したラジコン飛行機はまたも水平飛行に移り街宣車を一直線に目指した。じりじりと後方に下がる真壁と大滝の前で妙典は両足を肩幅に広げ、爆音を上げて迫り来る大型ラジコン飛行機に対峙する。白い煙を吐き出すエンジンの爆音は音量を増し、街宣車の目前まで迫っていた。

タイミングを見計らい白い煙を吐き出す爆音に向かって妙典は駆け出す。今まさに街宣車を貫こうとする大型ラジコン飛行機を受け止めるべく街宣車のルーフの右前方の低い手すりを力強く蹴り飛ばし、空中に大きく舞った。大型ラジコン飛行機を腹部で覆うように受け止めたものの爆音と白い煙に納まる気配はない。プロペラは腹部を抉るかのように回転を続ける。ラジコンの胴体部分、水平尾翼のやや手前を両手で握り締めた。カ一杯に引き上げると同時に着地し、アスファルトに叩き付けられた。ラジコン飛行機の主翼の付け根部分に一本ずつ固定されていた小さいガラス・ビンが叩き付けられた衝撃で砕け散り、中の液体が瞬時に気化を始める。その瞬間、妙典は大きな炎に包まれた。

聴衆と赤いゲルゲグ・イエーガの悲鳴が響き渡り、後ろ向きのまま街宣車から飛び降りた真壁。引きずられるかのように大滝も街宣車から逃れた。

『2425、一号車に移送！』

左耳に轟く藤波の声に従い真壁は大滝を抱き抱えるようにして噴水の向こう、ロータリーの入出口に並んだ二台の黒塗りのクラウン

を目指して突っ走る。振り向く間もなく先頭のクラウンの開扉された状態の後部座席に大滝を押し込め、続いて駆け込んできた沢木も飛び乗った。真壁はドアを素早く閉め、ゴンゴンと二度ウィンドウを拳で叩き、発車の合図を送る。待機していた白バイがパトランプを回しサイレンと共にクラウンの前に割り込むと中杉通りを右に誘導して走り去って行った。ダミーとなった二号車も白バイに先導され中杉通りを左に曲がる。

二台の黒塗りのクラウンを見送った真壁は妙典のことが気になり、街宣車の方向に振り返った。街宣車の向こうにはJR阿佐ヶ谷駅が見え、パニック状態に陥った聴衆が警官達に誘導され騒然としている。不意に駅を見上げると総武線ホームにラジコンのプロポを両手に携えたナイロン製のミリタリーグリーンフードジャケットを着た男の姿が目飛び込んできた。

「藤波さん！ 総武線ホームにプロポを持った不審者を発見！ グリーンのフードジャケットを着用」

「総武線ホーム！？ 阿佐ヶ谷駅か！ ……真壁は待機。東口一班は現場に急行！ 総武線ホームだ！」

藤波が指示を出す間に、シルバーに黄色の太い線の入った車両がホームに到着した。プロポを持った男はアンテナを素早く畳み、乗客に紛れて黄色い線の入った車両に飛び乗る。扉が閉まり総武線車両は新宿方面に向け走り始めた。

「駄目です、…藤波さん！ ……ホシは総武線にて新宿方面に逃走しました」

真壁の報告の後、暫しの沈黙があり「ちっ！」とのノイズが入る。

「…北口一班は、PC…パトカーで中野に向かえ！」

落ち着きを取り戻しつつあった真壁は街宣車の裏側から上がる火の手を見やった。

「みよ……妙典さんっ！」

真壁は街宣車に向かって走り出した。

一瞬目の前が真紅の炎に包まれたものの、大き目のスーツが防いでくれた。足元には砕け散ったビンのガラスが散在し、光り輝くガラスの欠片の上で翼の折れた大型ラジコン飛行機が仰向けになって息絶えていた。

「…何だ、火炎瓶かよ」

そう呟くと同時に焦げた臭いが妙典を包み込んだ。振り返るとグレーのスーツに火が燃え移っている。火炎瓶の灯油がスーツに染み渡っており、妙典は瞬く間に炎に包まれた。炎を消そうと全身をバタつかせるものの、炎は燃え広がるばかりである。パニック状態の聴衆の中からひとりの制服警官が飛び出した。何か大声で叫んでいる様だが、燃え盛る炎の音で掻き消され何を言っているのか全く聞こえない。大柄な制服警官は炎に包まれた妙典を抱き抱えどこかへ連れ出そうとしている様であった。妙典は身を任せるように制服警官と共に駆け出す。炎に遮られた視界の彼方に噴水が見える。妙典と制服警官は噴水に頭から飛び込んだ。

やがて炎は治まり、お世辞にもきれいとは言えない泉から顔を出した妙典の目の前に、同じくずぶ濡れになった小川巡査の姿があった。

「…よう！ アヒル隊長、元気かあ？」

「元気も何もないであります！ 妙典刑事、…本官のスーツが…スーツが…」

妙典は噴水の泉からゆっくりと立ち上がり、借りていたグレーの仕立てスーツを見回した。

「すまねえ…。すっかり燃えちまったなあ…」

小川の目には涙が溢れ、泉の中に崩れ落ちた。

「妙典刑事…そのスーツは本官の刑事という夢と希望が込められた品であります。そ…それが、こうなってしまうとは…。あああ！本官の夢も燃え尽きた心境であります」

それを耳にした妙典も泉に座り込んだ。

「アヒル隊長。…俺様が今日着てたTシャツにはこう書いてあった。

“ We Burn ”：俺達は燃え尽きた」

そこへ真壁が遅れてやって来た。息を切らせながらも、妙典と小川：二人の安否に胸を撫で下ろした真壁は呟いた。

「：二人のこの手が真っ赤に燃える。幸せつかめと、轟き叫ぶ：： B y ドモン・カッシュ」

黒塗りのクラウン一号車は白バイの先導でケヤキ並木のトンネルの様な中杉通りを猛スピードで駆け抜ける。後部座席で興奮と緊張、そして苛立ちが入り混じった口調で大滝は秘書の沢木に小声ながらも怒りをぶつけた。

「沢木、話が違うではないか。：ロータリーに墜落させる手筈でなかったのか？」

「先生、申し訳ありません。何かの手違いかと：：」

「この大滝を狙うとは何事だ！？ 手違いでは済まされん！」

黒塗りのクラウンは阿佐ヶ谷署前の手狭なパーキングに滑り込む。待ち受ける警官達が大滝と沢木を車内から連れ出し、二人を覆うように署内に駆け込んだ。

その様を見届けた運転手は呟く。

「：：“話が違う”：引っ掛かりますねえ」

運転手は腰袋から携帯電話をゆっくりと取り出し、耳に宛がった。「ああ：もしもし、馬場です。：雷門さん：お忙しいところ、すいませんねえ。：今、よろしいですか？：ええ、マル被：現れました。：議員なら無事、阿佐ヶ谷署に届けたところです。：いや、C

- 4 ではない様ですよ。：はい、はい。：ありがとうございます。

：それより、：ちょっと引っ掛かる事がありました：：」

The Last Enemy (7)

“We Burn”とのロゴを胸で躍らせ、警杖を携える立ち番に一瞥をくれる事もなく妙典は肩で風を切つて阿佐ヶ谷署に踏み入った。左手はポケットに突っ込み、袖からだらりと垂らされた右手には黒い布が握られていた。

妙典は交通課のカウンターを折れ階段を上がった途端、真壁と鉢合わせた。

「みよ…妙典さん！ お身体…大丈夫ですか！？」

真壁は神妙な顔つきで言ったが、どこか気まずい雰囲気漂っている。

「ああ…医者も嘆いてたぜ。…いくら調べても軽い火傷と掠り傷しかねえつてな。…ところで真壁よお。なんか気まずそうだなあ。まさか…てめえ、俺様が居ねえ隙にガンブラ持って帰ろうとしたな？

…どうだ？ 変態オタク眼鏡小僧さんよお…」

真壁は大きく溜め息をつき、天井を仰いだ。

「やむを得んな。馬場係長も藤波警部も目の前の敵しか見ておらんその点、妙典さんは違う。真壁伸一全体の行く末を見通しておられる」

すっかり諦め口調になった真壁は踵を返し、今来た階段を登り始めた。妙典も後に続く。

「…なあ、アヒル隊長…見かけなかったか？」

「小川巡査ですか？ 随分前に相当落ち込んでいる様子を見かけましたが、あれ以来は…。小川巡査に何か用事でも？」

「んん？ …ちよつとな。奴が居そうなところ、お前だったら心当たりあるだろ？」

階段の踊り場で二人は折り返し、二階へと向かう。

「おそらく、六階の道場だと思います。…まあ、彼にとっての安らぎの場ですから」

「…了解。ちよつくら、顔出してくるわ。…で、ガンプラ持って帰んのなら…今のうちかもなあ…」

「心外ですな。自分とて、木の股から生まれた訳ではありません。

…自分もお付き合います」

「ほお、いい後輩に恵まれたもんだ…」

二人は二階に上がり、三階へ向かおうとした。すると刑事組織犯罪対策課の扉がそろりと開き、眼鏡をずり下げた馬場が顔を突き出す。

「妙典くん、怪我の具合はどうでしたか？」

「馬場さん、今更聞くまでもないっしょ？ この通りピンピンでさあー」

妙典は言った。

「…そうですね。全くの愚問でしたね。…まあ、かくいう私も妙典くん並に丈夫ですよ。何せ“毛が”ないですから…」

漂い続ける気まずい空気の属性が一変した。馬場の自虐的なギャグに返す言葉を失い、いささか硬直する真壁を余所に妙典は口を開いた。

「…馬場さん、何か用ですかい？」

「これは、失敬々々。…つい先程、本庁から捜査資料が届きましたよ。今日のラジコン飛行機襲撃事件の資料です」

妙典は刑事組織犯罪対策課の扉から顔を覗かす馬場に歩を向けた。左手でポケットを弄りキーを取り出し、馬場に投げ渡す。

「車のスペアキー、ありがとやんした！」

キーを受け取ろうと扉を大きく開け、よろめく馬場を突っ切って妙典は刑事組織犯罪対策課に入った。キーを落つことしそうになる馬場に向かって真壁は問いかける。

「スペアキーなんて物が、存在したのですね。知りませんでした」
「気まずい空気を発散し、硬直気味の真壁に馬場は言った。

「一応、これでも13係の監督責任者ですからね。…ところで真壁くん、真壁くんの干支は何ですか？」

「え…干支ですか？ 酉年ですが…」

「じゃあ、そんな所に突っ立ってないでチキンとして下さい！」

馬場のため押しとも言えるオヤジ・ギャグに打ちのめされた真壁はゆるゆると刑事組織犯罪対策課の扉に歩を進める。一步…一步と踏みしめる度に理解不能な可笑しさがこみ上げ硬直度合いは徐々に薄れていった。刑事の勘はもとより、他人を知らず知らずのうちに動かす馬場の能力の根底に在るものを垣間見た気がした真壁はある種の安堵感に浸っていた。しかし馬場により見事にオトされたのは間違いない。やはりオトシに関しては一級品なのである。自分を試みるわけではないが、真壁の心の内を最大限に表現する台詞を馬場に吐いた。

「係長、…自分が酉年であったことをこれほど嬉しく思ったことはない」

刑事組織犯罪対策課の大部屋の島机にはネット経由で本庁から送られてきた資料が所狭しに並べられていた。

「流石、本庁は仕事が早いすなあ。画像解析も既に終わっている…参りました」

藤波は驚きと賞賛の声を上げ、一枚の拡大写真を引っ張り出した。「いやあ…まあ、本庁ですから…機材も人材も充実しております。

…そもそも権限も大きいすしね」

申し訳なさ気に馬場は言った。とある資料に目を向けた藤波も表情を曇らせる。

「しかし、メールに添えられていた一文が気になります。…“Kより愛をこめて”…これは何かの秘密暗号でしょうか？」

「あ…いや、藤波さん！ 本庁にも色々あります…」

両手を広げ小刻みに振る真壁は取り成すかの様に言った。

「おお！ 真壁、もういっぱいの本庁面か？」

「いや、だから…藤波さん、本庁面とは違います。…まあ、ここに居る誰かに宛てられたメッセージであることは否定しませんが…」

机に手を付き前のめる三人の傍らでビジネスチェアにひとり反り座る妙典は腕組みを解き、手元の黒いマーカーを右手に取る。プリントアウトされたメールを手繰り寄せると倉田と思いきメッセーヂを乱暴に塗り潰した。それを横目で見た真壁は妙典に囁く。

「妙典さん、…暗号解読は間違つてないんだろうな？」

目を瞑り黙りこくつた妙典を、上目で見やつた藤波の瞳は馬場に寄せられた。

「本庁もいろいろ大変そうで…」

「さあ、藤波さん…始めましょうか！」

馬場の表情が硬くなり、これ以上踏み込むべきではないと悟つた藤波は本題に入るきっかけとして、一枚の拡大写真を小突いた。

「…これがホシです。JR吉祥寺駅公園口改札の防犯カメラが捉えた拡大写真です。…ホシは吉祥寺で京王井の頭線から総武線に乗り換えています。…ただ、肩掛け鞆だけでラジコン飛行機の類は見当たりませんなあ…」

引き伸ばされたミリタリーグリーンフードジャケット姿の男に真壁は一言添える。

「間違いありません。…自分が見たホシです」

「…そして、こちらが添付されていた顔写真つきの略歴…」

藤波はフードジャケットの男に重ねるように略歴書を投げ落とし

た。

「…田伏幸夫、27歳。サイバーワールド勤務。趣味はプラモ制作に…ラジコン」

読み上げる藤波に対して本庁の三人は水をうったように静まり返つた。きな臭さを嗅ぎ取つた藤波も口を噤む。

「田伏幸夫は、本庁が別件で追っている重要参考人です。…すいません。それ以上はご勘弁ください」

禿げ上がった額に右手を軽く当て馬場は申し訳なさ気に言った。それを耳にした藤波は何事もなかったかの様に続ける。

「…で、次に捉えたのが東西線・西船橋行きの中車の様子です。こ

存知の通り、地下鉄東西線は総武線に乗り入れをしております。：

吉祥寺で東西線に乗車した田伏はすぐに車両の移動を始めています」

真壁は東西線車内を移動する様子を連続で捉えられた田伏の画像を上から順に指を滑らせ、止めた。

「ここで止まっていますね。二両目：進行方向右側の扉」

「資料によると、それは西荻窪駅発車直後の画像だな。：肩掛け鞆からプロポを取り出すのが、その二枚下。：荻窪駅到着までにアンテナを伸ばし電源を入れている様子が写っている」

藤波と真壁のやり取りが繰り返される。

「そのようですね。ここで一度だけスティックを倒しているようですが、：何かの合図でしょうか？」

「それはレツがいるという事か？」

「ええ、そうなりますね。そもそも共犯者がいなければ、今回の事件は起こせません。：ラジコン飛行機、それも大型のラジコン飛行機はいつたい誰が用意していたのでしょうか？」

「：真壁、相変わらず流石だな。：荻窪四丁目：線路真横の公道で駐車中のワゴン車のルーフからラジコン飛行機が飛び立つのを見たとのマル目情報がある」

「目撃情報ですか。：で、ワゴン車の行方は？」

「それは皆目。：で、荻窪駅発車直後スティックを押し込み、操縦する様子が写っているのがその下からだ」

「で、その機影を最初に見つけたのが妙典さんだと。：」

「そして14時16分、田伏はプロポで操縦しながら降車をする。それが。：」

「：JR阿佐ヶ谷駅。大滝議員の街頭演説の真っ最中というわけですね」

真壁と藤波は防犯カメラの画像を順に追い問答を繰り返した。

「いやあ。：お二人は実に息があつてらっしゃる。いつも、そうやってこられたのですか？」

馬場の笑顔が二人に向けられた。

「ああ、すいません。つつい…。ええ…まあ、真壁とは、いつもこんな調子でしたね」

「まるで頼れる右腕を引き抜いたようで、申し訳ありませんねえ…」
「あ…いや、馬場さん。気になさらないで下さい。戦力として手痛いのは確かですが、真壁はいつまでも所轄に甘んじている男ではない。…それに自分の右腕ではないですよ。寧ろこいつは…ウチの工―スでした」

「…藤波さん、そこは“こいつは…エースだ…”と言って頂きたいものです」

はにかんだ表情で真壁は釘を刺した。

「何故だ？ 真壁？」

「…テリー・サンダースJr.の名言だからです」

舌打ちした藤波は、にやりと真壁を見やる。

「この報告…今すぐ終わらせて、真壁宅のガサ入れを優先するべきだなあ…」

「では、長引かせることにしましょう。…自分は電車に乗り込む犯行直後の田伏を目撃しています。それが14時22分発の総武線・千葉行きということですね。阿佐ヶ谷での犯行時間は六分。…その後の足取りはと言つと？」

真壁は並べられた写真の横にある資料内の時刻表から時間を拾い、藤波に問うた。

「こつちが総武線の車内画像…見ての通り二両目から九両目まで移動している。14時28分、東中野駅に着。九両目だと西口改札へ上がる階段の正面に止まる。…計算尽くということだな」

「…そして西口改札から都営大江戸線に乗り換える。…確かに計算尽くですね」

「ところがだ、真壁。都営大江戸線の防犯カメラに田伏の姿は一切写っていない！」

真壁は机に両手を押し付け、前のめる体勢で藤波を見上げる。

「…ということは、地下に下りずに山手通りから自動車等で逃走し

たということになりませんか？ 更に計算尽くだった訳ですか…」

「これは単独での実行は不可能。…真壁、お前の言う通り…この事件はレツなしには成り立たない。荻窪で目撃されたワゴン車が山手通りで田伏を拾った線も考えられる」

「そうかもしれないですね。…係長と妙典さんはいかが思われます？」

真壁の問いに馬場は答える。

「うん、確かに単独では不可能ですね、この件は…。しかし、共犯者は複数という可能性もありますよ、真壁くん」

「まだ人数特定には至りませんか…」

落胆した口調の真壁をビジネスチェアに反り座る妙典は眠気眼で見上げる。

「…変態オタク眼鏡小僧お！ ちいとばかりし癩に障る奴だが、お前がいると楽でいいなあ。…一任しますぜ！ 難しいこと担当大臣に」

「妙典さん…ありがとう、これで私を一人前にさせてくれて…」

その様に見入っていた藤波は妙典の顔を見るなり何かを思い出し、口を挟む。

「そういえば、秘書の沢木から大滝議員の言伝を預かっておりました。…今回の件で世話になったとかで、特に妙典刑事に礼を言いたいと…是非、議員会館三階にお越しく下さい…とのことです」

「そんなに礼が言いたきゃ、てめえから来いってんだよなあ！ だいたい、そんな辛気くせえとこに俺様がしゃしゃり出るわけねえだろおがよお…。襲われたんだから、警察で大人しくしてりゃいいのによお…」

悪態をつく妙典ではあるが、言っている事はもつともだと真壁は思った。

「ま、…あれが政治家でしょ」

薄暗い板張りの床の端を西に傾きはじめて陽が照らしていた。

まるでその陽を避けるかの様に、体格の良いひとりの制服警官が正座している。背筋をピンと伸ばし軽く広げた膝の袂には、つばを

正面に向けた警察帽がきちんと置かれていた。

ギシギシと床を軋ませる足音が近づいてきた。まるでその足音を待ち侘びていたかの様に、制服警官は目を瞑ったまま口を開く。

「妙典刑事でいらっしやいますか？」

「なぐんだ、バレてたか…。アヒル隊長」

悪戯をみつけられた子供のよう妙典は言った。小川は目を開けることなく問い掛ける。

「何の御用でありますか？」

妙典は黒い布に包まれた何やら固い小物を小川の胸元へゆるりと投げた。

小川は胸元で跳ね返る物体に気が付き、静かに目を開けると板張りの床に転がる黒い布包みを見やった。

反り立ちポケットに両手を突っ込む妙典は呟く。

「…スーツ、パーにしちまって悪かったなあ。…ま、俺様のほんの気持ちだ。受け取ってくれや。…アヒル隊長」

小川が黒い布包みを両手で広げ見ると“I Can”とプリントされたTシャツであった。その黒Tシャツから転がり落ちた一枚のCDに目を向ける。

「これは何でありますか？」

「刑事任用試験合格祈願グッズだ。…そのTシャツ着てCDの八曲目聴いて、頑張ってみやがれ！」

「…“I Can”でありますか？」

その意味と妙典の気持ちを感じ取った小川は右手にTシャツ、左手にCDを握ったままスクッと立ち上がる。

「妙典刑事！ そのお気持ち、ありがたく頂戴いたします！ “I

Can”…その心を胸に刑事任用試験に推薦され、必ずや合格し刑事になることをここでお約束いたします！」

「ああ、その気合だ…絶対に忘れんな！」

小川の心意気を肌で感じとった妙典は踵を返しギシギシと床を軋ませる。

「あつ！ 待つてください！ 妙典刑事！ …ひとつお手合わせ願えないでしょうか？」

妙典の足が止まり、小川に振り向いた。

「アヒル隊長：おめえ、相当強いんだつてなあ？」

「いえ、妙典刑事の足元にも及びません。…本官には、あの様な…ラジコン飛行機を身体で張って止めたりなどできないであります」

「けど…火達磨になった俺様を抱えて噴水に飛び込んだのは、てめえだ。…相手が悪いー。今度にしとくわ」

「お手合わせは叶いませんか？」

「…小川！ てめえが刑事になった時、あらためてやるつや。そんな時はガチだかな。任用試験必勝法も伝授したことだし…必ず上がって来いや！ …楽しみに待つてるぜ！」

妙典は親指を突き上げた右手を再びポケットに戻し道場の出口に歩を進めた。

小川はTシャツとCDを板張りの床に置き、足元の警察帽を慌てて拾い上げ、両手できちんと被った。両足のくるぶしの内側をピタリとつけ背筋を伸ばし敬礼で見送る。

「妙典刑事！ ありがとうございました！」

妙典は響き渡る小川の声を背中で受けとめ、道場を後にした。

The Last Enemy (8)

R35GT-Rのコクピットにはいけない。早く！

信号待ちを続ける青いGT-Rのボンネットから立ちこめる陽炎を眺めた真壁は、ふとそう思った。きつと今頃は妙典から譲り受けた初回発売版ガンプラを自宅でひとつひとつ眺め入り、ネット・オークションの状況を悠々と確認していた筈である。

急遽、馬場係長が本庁に呼び戻された。何やら重要な会議があるらしい。動かぬ国道20号線でV6ツインターボを搭載したR35GT-Rが半蔵門方面を睨み続けているのは、その為だ。日曜とはいえ、流石にこの時間帯にでもなれば行楽帰りの自家用車やタクシーが相まって交通量は格段に増える。更に、新宿四丁目の明治通りとの交差点は立体になってはいない。それ故、JR新宿駅南口を横目に眺め、渋滞の真っ只中に佇んでいるのであった。明治通りさえ抜ければ半蔵門までは片側三・四車線の広幅員道路が続き、V6ツインターボの奏でるエンジン音とともに快適な走行ができる筈である。

青いGT-Rの車内にはデス声とまではいかないが、唸り、吐き捨てるかのようなヴォーカルが響き渡っていた。GT-Rの運転責任者は真壁であり、監督責任者は馬場係長である。そしてBGMの選曲責任者は妙典であった。人間とは恐ろしいもので、つい数日前までは妙典の選曲に嫌悪感を抱いていた真壁もすっかり慣れ、今や当たり前のように聴き入っていた。かといって妙典の選曲が好みと言うわけでもない。

CDのトラックが五曲目に変わった。相変わらずザクザクとしたギター音ではあるが、どこか爽快感すら漂うリフレインが始まったかと思うと、被さるように素早いドラムとベース、リズム・ギターが鳴り響き、たちまち重くアグレッシブな雰囲気になる。やがて唸り、吐き捨て、どこか無機質さも醸し出すヴォーカルが楽曲の主

導権を握った。停滞するGT-Rのハンドルに手を掛ける真壁はシート脇のCDケースを横目に見やる。

“ I'm The Highway ”

まさに今のこの状況を的確に表す、見事な曲名だと感心せずにはいられなかった。唸り、吐き捨てるヴォーカルも今現在の真壁の心境をこの上なく捉えている。もしか妙典の選曲センスはニュータイプ特有の予知能力に匹敵するのかもしれないとさえ真壁は思った。

「…それにしても真壁くんの言っていた五人目の社員の存在…益々、現実味を帯びてきましたねえ」

相変わらず狭い後部座席にちょこんと座り笑顔を振りまく馬場は切り出した。妙典は聞こえぬフリをしているのか、曲に合わせ小刻みに頭を振っている。そんな妙典越しに新宿駅南口を眺めた真壁は顔を戻し、口を開く。

「そうですね。荻窪でラジコン飛行機を飛ばして、田伏が東中野に到着するまでの所要時間は十七分。いくらなんでも車での移動は不可能だと思います。…どう頑張っても二十五分はかかりますね」

「14時35分頃、中野新井署のパトカーも山手通りを巡回していたそうですが、田伏と思しき不審人物は発見されてません。…少なからず荻窪駅近郊と東中野駅沿いの山手通りの二箇所に共犯がほぼ同時に居ないと成立しませんね。どちらかひとりが行方をくらませた久木だとしても、残りのもうひとりは誰なのでしょうね？…とても引つ掛かります」

国道20号線・甲州街道で空ぶカシするGT-Rに揺られて馬場は疑問符を發した。そして同じ疑問符を持つ真壁は次の話題に入る。「…でも、係長。もうひとつ分からない事があります。何故、犯人達はC-4でなく火炎瓶を使用したのでしょうか？…できうる憶測はふたつ。犯人達はC-4を入手していない。そして、もうひとつは…次の機会まで温存している」

渋滞が少し流れ始め真壁は軽くアクセルを踏んだのも束の間、新宿駅東南口と新南口に挟まれた所で、またも停車を余儀なくされた。停車する青いGT-Rに合わせて馬場は小さく前に振られ、答えを述べる。

「そのどちらも…では、ないですかね？」

「…と、いいいますと？ 係長？」

真壁は聞き返した。

「本来、入手すべき数と量が揃っていない。…アカネコ・西川の持っていたC-4は少し燃やされていましたが、残りは北参道署に押収されていますよね？」

微笑んだままの馬場は、その先を真壁に任せる。

「…サイバーワールド社員の南田と池内は妙典家の仏像に隠されたC-4を狙ったものの、妙典さんと自分に取り押さえられ、こちらも千葉県警に押収されています」

「まあ、既にどちらとも引渡依頼は出ています。…近いうちに捜査本部に届く筈です」

馬場がそう言い終るや否や、GT-Rはじわりと明治通りに近づいた。

「しかし、係長。…サイバーワールド社からC-4は見つかっていません。犯人達はまだC-4を入手していないと考えるのが妥当かと思えますが…」

「…誰かが、持ち去った…のかもしれないね。…たとえば、社長の佐々岡を刺した犯人とか…」

「しかし、それはまだ憶測に過ぎません。係長」

「…確かにそうです。まだ憶測には違いありませんが、可能性は大いにあると思いませんか？ …何せ今回のC-4に絡む人物たちが、尽く繋がってゆきます。刑事ならば、この可能性を見過ごす筈はありませんよね、真壁くん」

馬場係長の言うことはもっともだと真壁は思った。刑事にとって、どんな些細な可能性でも見過ごすことは許されない。例え空振りに

終わったとしても、事の正否は追及せねばならない。刑事には、その義務がある。

GT-Rのアクセルを軽く踏み込んだ真壁はまた少し明治通りに近づき、場外馬券売り場を大きく過ぎた所で止まる。

「それとここだけの話なんですが……」

馬場が頭を掻きながら、申し訳なさ気に呟く姿を真壁はルームミラーの中に見た。

「……あくまで、私の勘というか、見立てでしかないんですが……。今日のラジコン飛行機襲撃事件には自作自演の可能性があると思っています。……とても引つ掛かる、議員と秘書のやり取りを小耳にしたものですから……」

ハンドルを握る真壁は愕然とするあまり、思わず身震いする自分を感じた。刑事といえども、そう安々と受け入れられる話ではない。しかし、刑事の勘に長けた馬場が耳にしたという事もあるが、秘書の沢木が街宣車に上がる事を執拗に拒んだことが、それを裏付けている様に思えた。警護を必要とする程の脅迫文が届いているということにも関わらず、あの行動は不審以外の何物でもない。

「……係長。……もし係長のおっしゃる通りだとしたら、この事件……相当厄介な事態になりますね？」

「ええ、そういうことですね。……かなり厄介な事件になっていると思いますよ」

馬場は普段通りの笑顔と何食わぬ口調で冷静に答えたものの、青いGT-Rの車内は重い沈黙に包まれた。

五人目の男とは誰なのか？ 本当の敵とは誰なのか？ 最後に敵として立ちはだかるのは誰なのか？ もはや真壁ですら特定出来ない状況である。動かぬ国道20号線に合わせるかの様に真壁の思考も停滞した。

沈黙と停滞が続く中、“I・m The Highway”だけが、唸り、吐き捨て続けている。曲にのる妙典は小さく頭を振り、サイド・ドアに載せた左手だけが、忙しなく動いていた。

場にそぐわぬ着信音が唐突に沈黙を打ち破った。妙典の左手は動きを止め、ポケットを弄り携帯を取り出す。「おもちゃの兵隊のマーチ」と言うよりも「3分クッキングのテーマ」として有名な着信音が鳴り続ける携帯を眺め、面倒臭さげに通話ボタンを押した。

『ひろみちいいいいーっ!! 勝ったぞおおおおー! うおおおおおおーっ!!』

携帯を耳に宛がうまでもなく、妙典の父親の雄叫びが車内をこたます。どこか疲れた様子で妙典は携帯を耳に宛がった。

「……………」

妙典の大きく開いた口から声は出なかった。不審に思った真壁が問う。

「…どうしました? 妙典さん」

妙典は少々ふて腐れた様子で左ポケットに携帯を押し込んだ。

「あの馬鹿親父…言いたい事だけ叫んだら切つちまいやがった。…馬鹿丸出したなあ…スコアも何も分からねえ。…ま、今日勝つて…ようやく連敗が止まったのだけは理解したかな…」

真壁は携帯の向こうの博信の様子を想像し、思わず笑みを浮かべ叫んだ。

「妙典さん、…阪神タイガースに栄光あれえーっ!!」

妙典はグローブボックスを漁り、別のCDを取り出した。「I'm The Highway」の終わりを見計らいイジェクトボタンを押してCDを入れ替える。馴れた手つきで「I'm The Highway」が収録されたCDをケースに戻し、グローブボックスに押しやった。

遠くに見える新宿四丁目交差点の信号が青に変わり、真壁はアクセルを踏み込む。渋滞と明治通りから、ようやく解放された青いGT-Rの車内には甲高い男声のシャウトが轟き渡った。そのシャウトに紛れるかのように、妙典は呟く。

「Screaming For Vengeance」…馬鹿親父の雄叫びが、「復讐の叫び」…と、なりやいいんだがな…」

13系の三人を乗せた青いGT-Rは半蔵門を右折し、内堀通りに入った。ここまで来れば本庁までは目と鼻の先である。だが、ひとつだけ厄介事が残っていた。本庁の駐車場の入り口である。地下駐車場の出入り口は桜田通りに面している為、国会前交差点から一旦都道412号線に入り、外務省上交差点を回って桜田通りを皇居に向かう必要があった。

「あつ…ここで、いいですよ。真壁くん」

馬場は真壁に声をかけた。

「えっ！？ 係長、消防庁前でよろしいのですか？」

真壁は消防庁の官僚を待つ黒塗りのタクシーの列をやり過ごし、赤い郵便ポストを少しばかり行き過ぎた所で左に寄せると青いGT-Rを停車させた。

「いやあ、ここのところパソコン仕事が多かったもので、せめて消防庁、警察庁を回って本庁まで歩こうかなあとか思いました…。今日の妙典さんと真壁さんの動きを見て、運動不足を痛感しました。で、今流行のウォーキングというわけです」

馬場は真壁から妙典に顔を向けた。妙典はシートベルトを少々手荒に外し、左ドアを開けると一旦外へ出る。シート肩のレバーを上げて背もたれを倒し、数歩下がって馬場を迎えた。

「馬場さん。年寄りなんすから、あんまり無理しない方がいいですよお！…それにしてもウォーキングにワーキングにご苦労様であります！」

妙典は悪戯つぼく小さめに敬礼し、馬場の登場を待った。小柄ではあるが小太りな身体の馬場は窮屈そうにすり抜け、前屈みの姿勢で車外に足を伸ばした。

「妙典くん！ 段々、私の領域に足を踏み入れつつありますね？」

外に出た馬場は怪訝そうな妙典に告げる。

「…駄洒落です。でも親父ギャグと言われるには、まだまだ努力が必要ですねえ」

妙典の表情は瞬く間に怪訝から不満に変わり、鼻を鳴らした。

「へっ！ 親父ギャグなんて言うつもりはありませんがねえ。洒落た一言でもと思っただけっすか…」

「“親父”扱いされるのが、そんなに“口惜じい”ですか？ …せめてこれくらい言ってもらわないと“親父”とは認められませんから、安心してください」

笑顔を絶やさぬ馬場は背広の上着を一度脱いだものの、すぐに袖を通した。

「笑う門には“服”着たる。…じゃあ、今日は一先ずお疲れ様」

そう言い残し、馬場は警察庁に向かって歩き始めた。開けっ放しのドアに肘を置き、馬場の後姿を眺める妙典は呟く。

「当分：“親父”には、ならず済みそうだなあ…」

妙典は倒れた背もたれを戻し、パッセンジャーシートにゆるりと身体を滑らした。

「…で、変態オタク眼鏡小僧の真壁よお。…今日、予定あるか？」
後輩という立場の人間にとって、これ以上答え難い台詞はない。

「…これと言って予定はありませんが、済ませておきたいことは山ほどあります」

「ひょっとしてガンブラか？ 早く持って帰って眺めてえってか？」

「凶星です。でも、それだけじゃありません。ネット・オークションの確認もおきたいです」

妙典はグローブボックスを漁り始める。

「今夜、ヴァンデンバーグでちよつとしたパーティーがあるんだわ。俺様らが“佐藤さんちのサウンドハウス”と呼んでる不定期で行われるメタル・パーティーなんだがよお。お気に入りのメタル・アルバムを持ち寄ってガンガンに騒ごうって感じなんだが、何なら顔ださねえかあ？」

ハンドルに手をかける真壁は溜め息をつきつつも、どこか安心して面持ちで答える。

「妙典さん…あいにく自分には、お気に入りのヘビー・メタルのCDなんてありません。参加基準を満たしていません」

グローブボックスに手を伸ばす妙典の動きが止まる。

「…そうか、そりゃ残念だなあ。…せつかくこんなCDが、あるうちゅうのになあ…」

妙典は真壁に一枚のCDを投げ渡す。真壁は太ももに落ちたCDケースを左手で拾い上げ、タイトルを読み上げた。

「リッチー・コッツェン、“Soldiers Of Sorrow
W 哀戦士 Z x R”…!？」

“哀 戦士”。真壁にとつて最上級のキラードワードが目飛び込んできた。慌ててCDを持ち替え、ジャケットに見入る。暫らく後裏返して収録曲のタイトルを凝視した。

「Take Flight Gundam (翔べ!ガンダム)

!？」 “Blue Star (水の星へ愛をこめて)”!？」

… “Soldiers Of Sorrow (哀 戦士)”!？」

… みよ… 妙典さん! このCDって… もしやガンダムのカバー・アルバムだったりしませんか？」

CDを携え固まるも武者震いをする真壁は妙典に問うた。

「大当たりー! …ガンダムの楽曲のメタル・アレンジのカバー・アルバムだ。このリッチー・コッツェンって野郎はよお! 色々ビツグなバンドを渡り歩いた苦労人なんだが、見た目もいい男だし、ギターはうめえーし、ベースも弾ければ、キーボードもドラムも出来る。おまけにヴォーカルもいけるって、一見完全無欠な奴にや見えるんだが、たったひとつだけ… 大きな弱点があるんだわ。… 曲がまったく書けねえって訳ではないんだが、ソング・ライティング能力にイマイチ欠ける。ただ、ある与えられたテーマに見事にマッチした時には恐るべき能力を発揮する。このアルバムも当初はシンデラー・ローパーで企画されたものだが、ギャラとか契約とかスケジュールの問題で暗礁に乗り上げちまった。そこでガンダム・ファンを自認するリッチー・コッツェンに白羽の矢が立ち、水を得た魚の

様にあつという間に完成させちまった。そんな凄げーアルバムだ！
「妙典の講釈など耳に入らないといった真壁は興奮気味に言う。

「妙典さん！　もしや、この“The Winner”って“0083 STANDARD MEMORY”のオープニング曲ではないでしょうか！？」

真壁の鬼気迫る食い付きに、計算通りと思つた妙典は口を緩ませ答える。

「…そうらしいが、何だ？」

真壁はCDを左手に握り締め、右の中指で眼鏡のブリッジを押し上げた。

「“哀 戦士”が表の名曲とすれば、“The Winner”は裏の名曲です。…“The Winner”を選ぶとは、このリッチー・コツェンという男：奴は只者じゃない！　そうか…。私が今この男のことを“只者じゃない”と言つた」

興奮冷めやらぬ真壁に妙典は悪戯っぽく言う。

「因みに、“哀 戦士”だったら…アンドリュー・K・ヴァージョンのもこの世には存在するぜ。…ただし音はペラッペラだがなあ…」

真壁は手にしたCDをシート脇に静かに置き、正面に向き直つた。
「妙典さん、シートベルトをして下さい。直ちにヴァンデンバーグに向かいます」

妙典は慌ててシートベルトを引き締め、待つていましたとばかりにニヤついた顔を真壁に向ける。妙典の視線を感じた真壁は霞ヶ関一丁目交差点を力強く見据え、アクセルを踏み込んだ。

「真壁、行きまーすっ！」

南桜公園を越えた一方通行道路のすぐ傍に、喫茶ヴァンデンバーグはある。ビジネス街のど真ん中という事もあり、日曜の夕方遅くともなれば人っ子一人出歩いてはいない。

パトランプがダッシュボードの上でこれ見よがしに威張る青いG

T・Rを残して、妙典と真壁は喫茶ヴァンデンバーグに歩を進める。真壁が以前訪れた時は清潔感溢れる小奇麗な喫茶店との印象であったが、今日はどうも趣が異なる。ガラス扉を開けた途端、ロック音楽が大音量で鳴り響き、屋内も幾分か薄暗かった。どうやら防音設備は相当整っているらしい。マスターの初老の紳士、佐藤さんの拘りなのであるかと真壁は思った。

「あつ！！ 妙典さん！ …と、誰だっけ？ 妙典さんとの若い衆っ！！」

モヒカン頭の石井が大音量の中、大声を張り上げた。横から石井に口添えする声が入る。

「石井さん！ エイトマンです。…彼がリアル・エイトマンですよ！」

どこかで聞き覚えのある声とフレーズに妙典は声の主を見やる。

「お…おい！ てめえっ！？ …飛田じゃねえか？」

「刑事さん、先日の永代橋では大変お世話になりました」

飛田はペコリと頭を下げ、礼を言った。

「御成門署からは、いつ出れたんだ？」

「あの日の次の日…金曜のお昼前には…」

「…で、あれからどうだ？ ちつたあ人生変わったかあ？」

「…お蔭様で、以前行っていた派遣先の人から、緊急で仕事を手伝って欲しいって連絡もらって、今はそこで働いています」

妙典は安心したように微笑んだ。

「やつぱ、飛び降りてみるもんだなあ…」

「ええ、まあ…」

飛田は照れるように答えた。そこに割って入るかの様に石井が口を挟む。

「いやあ、今日の夕方前に、ひよっこり顔を出してくれてさあ。わざわざ“お世話になりました”と突然言いに来てくれたわけ。…で、今日この後、予定はないって言うから、色々手伝ってもらってたよ。いやあ、百聞は一見にしかずだよなあ。ホント嬉しかったよ」

モヒカン頭の石井は興奮気味に話した。対して真壁は冷静な口調で問う。

「ところで“エイトマン”とは何のことでしょうか？」

左手をポケットに突っ込む妙典は真壁を制するように言う。

「まあ、俺様と飛田だけの暗号だあ…。あんまし気にすんな！ てめえは既に変態オタク眼鏡小僧だろがっ！」

「どうやら自分のことを指していると思われるのですが、是非語源を知りたいものです」

「真壁え、てめえみてえな小僧にやあ分かりやしねえって！」

少々むくれた様子の真壁に石井は告げる。

「ところで…妙典さんとこのあんちゃん！ CDは持ってきた？
メタルじゃないと土足厳禁だからな」

真壁は自慢げに“Soldiers Of Sorrow 哀戦士 Z x R”を見せ付けた。

「ほう…、あんちゃん…なかなか渋いな。リッチー・コッツェンか…、合格っ！…で妙典さんは？」

妙典も右手に提げた一枚のCDを石井に見せる。

「…相変わらずだねえ、妙典さんは…。アーク・エネミーの“Rise Of The Tyrant”。じゃあ…会費の三千円頂きます。席は空いてるとこ、適当に座ってよ」

入店を許可された妙典と真壁は会費を払い、空席はないかと店内を奥に進む。途中、テールを寄せて出来た、ちよつとした広間があり、曲に合わせて懸命にエアギターに励む初老の男の姿が目に入った。マスターの佐藤である。もはや落ち着いた初老の紳士の雰囲気はなく、ただのロック親父でしかなかった。

妙典の姿に気付いた佐藤は、かきむしるエアギターの右手を力強く掲げた。

「よっ！ 妙ちゃん！ 遅かったね！」

佐藤は汗を飛び散らせ、息も絶え絶えに叫んだ。

「佐藤さん、いい歳なんだから、ぎっくり腰には気いつけなよ！」

「ありがとう、妙ちゃん！でも明日は休みだから、ノープロブレムだね！」

妙典はCDを持った右手を軽く上げ、お大事にとばかりに店の奥に歩を進める。妙典と真壁は空いている四人掛けのテーブルを見つけ、席に着いた。

CDをテーブルに置いた後、妙典は灰皿を手繰り寄せ煙草に火を点ける。真壁は少しばかり落ち着かない様子で問うた。

「…で、妙典さん。いつになったら、このCD…聴かせて頂けるのでしょうか？」

反り座りゆつくりと煙を吐き出す妙典は落ち着いた口調で真壁に言う。

「まあ、落ち着けや…変態オタク眼鏡小僧。順番だ、順番。…ところで、サイバーワールドの五人目の社員の事なんだが…」

そこへハーフトールを掲げた石井が割り込み、空いている席に座った。

「えっ？何？何？サイバーワールド？ロブ・ハルフォードの曲の話？」

「いや、そうじゃねえんだ。…今、捜査してる会社の名前だ」
妙典は少々面倒くさげに言った。

「なーんだ。ロブ・ハルフォードじゃないんだ。…で、飲み物と食い物どうする？ピザなら沢山とつてあるよ。…普通のとかクワトロとか、いろいろご用意させて頂いておりやすぜ！」

「じゃ、俺様はビール。真壁は運転せにやらんから、ソフトドリンクだよな？」

籐椅子に反り座る妙典は真壁を促した。

「じゃあ、自分はアイスティーで…。それとピザはクワトロにして下さい！」

それを聞いた石井はモヒカン頭を見せ付けるかの様に横に向き叫んだ。

「飛田あー！ビールとアイスティー、それとクワトロ・ピザ持

つて来てくれえーいっ！」

飛田の「分かりました！」との声が聞こえ、石井は妙典と真壁に顔を戻す。

「それにしても、サイバーワールドって…いい会社名だよなあ。ウチも店名変えるかなあ。…例えば“ステーキラー石井酒店”ってのはどう？」

「なあ、石井…それじゃあ、鉄骨屋か酒屋か…さっぱり分からねえぞ！」

妙典は煙草を啜えた顔を上に向け、呆れた口調で突っ込みを入れた。

「はっはっはっは、確かに違いねえや！」

モヒカン頭は大声で笑った。そこへピザの大きな箱の上に缶ビールとアイスティーを載せた飛田がおずおずと現れる。

「はい、ご注文お待たせ致しましたー」

石井は缶ビールとアイスティーを手に取り、妙典と真壁の前に置いた。飛田はピザの箱をテーブルの真ん中に置き、問いかけた。

「クワトロに拘る理由でもあるんですか？」

真壁はアイスティーのストローを一口啜り、答える。

「ええ…もちろん。大有りです」

「あっ！？ 分かりましたよ。今このテーブルには自分を含めて四人います。…ロシアン・ピザ・ルーレットをやるつもりですね？」

飛田も着席し、ニヤリと言った。箱の中身が見えない程度に上蓋を丸め、四人の男が箱の中のピザに手を伸ばす。

「皆さん、ピザ掴みましたね？ もう変更はなしですよ。…蓋を開けたら一斉にピザを取り出してください。…いいですね？ いきますよ。せーのっ…」

飛田によつてピザの箱の上蓋が開かれ、四人の男それぞれがピザを持った手を引く。真壁はアンチョビ&オリーブ、石井はミート、飛田はガーリック&トマトであった。真壁は妙典のピザは何かと思いを顔に向けた。

「…なあ、真壁え、これって絶対…カレー・ピザだよなあ？」

引きつった表情の妙典は左手で煙草を揉み消し、ぼやいた。

「妙典さん…魔のカレー・スパイラル、ここまで続けば奇跡としか言いようがありません」

真壁は妙典のカレーに対する引きの強さは馬場係長の勘に匹敵するかもしれないと感心した。

「…ったく！…俺様、前世でカレーに恨まれるようなことでもしたかあ？」

妙典は嘆きつつも、カレー・ピザにかぶり付いた。

「飛田あ、ところでさあ。…サイバーワールドって、どう思う？」

ピザに噛み付き引つ張る石井は飛田に問いかけた。

「えっ！？ サイバーワールド？…会社ですか？」

飛田の一言に真壁は思わず目を向けた。アンチヨビ&オリブ・ピザをゆっくりと箱に戻し、手元のおしぼりで手を拭くと口を開いた。

「…飛田さん。…ひとつ伺っても、よろしいでしょうか？」

キョトンとした表情の飛田はピザを手にしたまま真壁に顔を向ける。

「な…何でしょうか？ エイトマン…いや、誰でしたっけ？」

「真壁と申します。ロックがガンガンに流れるこの会場で、サイバーワールドと聞けば、曲名か、バンド名だと思いますよね？…普通。

…飛田さんは何故、会社名だと思われたのでしょうか？」

目をパチクリさせる飛田は少々落ち着かない様子で答える。

「あ…いや、あの…、三年前の派遣先の会社なんです。…正確には、派遣先から出向で契約社員として一年ほど勤めていた会社です」

「そりゃ、二重派遣ってやつかあ…」

カレー・ピザを頬張る妙典も飛田に問う。

「…ええ、まあ…そんなとこです。…そうだった！ 名刺！ 名刺持ってますよ！…三年前のやつですけど…」

飛田はピザを箱の片隅に慌てて置き、脂ぎった手で後ポケットか

ら財布を取り出す。無造作に紙切れが沢山突っ込まれたお札入れを漁り、一枚の名刺をテーブルの上に置いた。

妙典と真壁は身を乗り出し、名刺を睨んだ。「取締役社長 佐々岡 昭二」との文字が飛び込む。間違いなくサイバーワールド社の名刺である。しかし、住所が異なる。江東区南砂町ではなく、荒川区王子本町となっていた。

「なあ、…飛田あ。…サイバーワールドって…三年前は…荒川区に…あつたのか？」

妙典は口をもごもごと動かし、脂ぎった指をジーンズで拭いていた。

「自分がいた時は…そうだけど。…今は違うの？」

飛田はどこか落ち着かない様子で答えた。

「飛田、この名刺ちよつと借りんぞっ！」

妙典はテーブルの上の名刺を剥ぎ取り、携帯を片手に閑静な店外へと向かった。すぐさま真壁も後を追う。

ヴァンデンバーグのガラス扉を閉め、妙典と真壁は表に出た。妙

典は携帯を耳に宛がう。暫く後、通話を始めた。

「おい！ 倉田あつ！ ひとつ聞きてえ事がある。…荒川区王子本町のサイバーワールドの移転前の所在地には手え入ってるかあ！？」

「ああ…ああ、…そうか。…今すぐ行ってえんだが、お前も来るよなあ？ …ああ、分かった。…じゃあ、本庁の前で待っていやがれっ！ 拾ってやる！」

妙典は携帯を切り、真壁に告げる。

「真壁っ！ 今から荒川区王子本町へ向かうぞ！ サイバーワールドの移転前のマンションには、まだ鑑識は入ってねえっ！ …途中、倉田を拾って現場に向う！」

あまりにも唐突な出来事に少々面食らった真壁は冷静さを取り戻そうと鼻から大きく息を吐いた。

「おしっ！ 行くぞ！！」

妙典は叫び、青いGT-Rに駆け出した。それを引き止めるかの様に真壁も叫ぶ。

「…妙典さん、忘れ物です!!!」

妙典は立ち止り、面倒くさげに振り返る。

「ああー？ 何だあ？ 変態オタク眼鏡小僧！ …もたもたすんなっ!!!」

「妙典さん、CDです。…とても重要な物件なんじゃないですか？ 真壁はそう言って、二枚のCDを妙典に見せた。

「おうっ！ すっかり、忘れてたぜ！ 真壁：ファインプレーだなあ」

「…妙典さんが忘れても、この真壁は忘れはしない！」

アルミ製のブラインドが締め切られた小会議室に青みを帯びた楕円形のテーブルが鎮座していた。捜査一課の雷門、大場、馬場の三人に加え、木場署の三沢も既に着席し、あとひとりを待つのみとなっていた。各々の前に置かれたフォルダー付きの紙カップから立ち込める湯気も徐々に薄まる中、誰一人として口を開こうとはしなかった。それは、この会議の緊急性と重要性を十分に理解しているからに他ならない。この会議の開催を持ちかけたのは、今ここにいる四人ではない。この四人が待ち続ける人物こそが、会合を持ちかけた張本人であった。

小会議室の扉が荒っぽく開かれ「すみません！ お待たせしました！」との声が響いた。公安部外事第二課第6係の鶴田である。鶴田は薄めの黒いフォルダーを小脇に抱え、空いている座席に回り込んだ。

「急遽、お集まり頂き感謝します」

鶴田は小脇に抱えたフォルダーを机の上に置き、頭を垂れた。他の四人も黙って相槌を打つと鶴田は椅子を引き座った。

「正直、時間は残されていません」

鶴田の一声に机上で手を組む雷門は返す。

「鶴田警部、時間がない…とはどういった意味でしょう？ …もしや、上からの圧力でもかかりましたか？」

「…雷門管理官。それについてお答えはできません。…ただ、残された時間が僅かなことだけは確かであります」

時間が残されていないとの鶴田の一点張りに雷門はある確信を持った。理由こそ定かではないが、上層部から圧力がかかりつつある。その為、鶴田は圧力がかかりきる前に緊急会議を召集し出来る限りの情報伝達を行いたいのだ。雷門は鶴田の発言に耳を傾ける。

「南砂町刺殺事件の第一発見者であり、AV会社の社長でもある久

木大輔の素性についてですが……」

鶴田はフォルダーから一枚の書類を取り出し、四人の前に差し出した。雷門は丁寧ながらも素早く書類を掴み取り、目を寄せる。

「本名、リュウ・ソンオネン劉秀年。……中国国籍」

鶴田の報告に雷門は沈黙を守り限なく書類に目を通した。腕組みをする大場は不意に天井を見上げ、三沢はハアとばかりに溜め息をつき、馬場は相も変わらず微笑んでいた。

「劉秀年、32歳。……彼は竜のうろこの構成員でありまして、ここ数年に渡り我が公安部が追っている人物のひとりです。……さらにC-4はタイ王国陸軍から横流しされたブツとの可能性が極めて高く、仏像に忍ばせ、竜のうろこの息のかかった貿易会社を通じて日本国内三箇所に分けて持ち込まれた模様です」

雷門は目通しした書類を隣の大場の前にスッと滑らせると顔の前で手を組み、鶴田の報告に対し口を開く。

「……で、その三箇所というのが、株式会社ムーヴィン・オン映像、龍勢寺、……そしてサイバーワールド株式会社ということの間違いないですね？」

「……間違いありません。管理官」

「株式会社ムーヴィン・オン映像と龍勢寺のC-4は既に押収されていますが、サイバーワールド株式会社のC-4の行方について現状分かることは？」

雷門の指摘に鶴田は一瞬下唇を噛んだものの、観念した口調で語り始める。

「……C-4の所在につきましては、現段階では全く持って不明です。……それと、これはウチの機密事項ではありますが、当件にも関連する事項と判断し、あくまで私の一存という形で二点だけお知らせすることにします」

四人の眼差しが鶴田に向けられた。鶴田は見開かれた八つの眼を一瞥する。

「……まず、一点目。……大滝代議士と竜のうろこには何らかの接点がある

あつたということですよ」

鶴田は机上のフォルダーから数枚の連続写真を抜き出した。写真はどこかの駅前と思われる喫煙所で、煙草を啜る久木大輔……いや、劉秀年と思しき男と沢木秘書が横並びで立っている姿を捉えたものであつた。

「秘書の沢木は非喫煙者ですよ。……にも関わらず、時間にして五分以上、何らかのやり取りがあつたと思われれます。……本日午後のラジコン飛行機襲撃事件には自作自演の可能性も大いにありえると我が公安部は睨んでいます」

馬場の勘に狂いはなかつた。鶴田の言葉がそれを裏付けている。静まり返る小会議室の中、鶴田は軽く咳払いした後続けた。

「そして、二点目ですが……。公安当局と検察特捜部は以前から大滝代議士の政治献金の一部について、内偵を含めた形で極秘裏に捜査を進めており、間近の立件も視野にあります」

「……なるほど、それで圧力がかつたということですか……。今、下手に出しゃばられると立件の妨げになる……と警察庁警備局はそう判断した訳ですな。……で、対外的な決着は……あくまで刺殺事件として一課に収束させると。……しかし、随分と大きなヤマですなあ……」
手に持つ書類をペロンと垂らした大場は嘆くように言った。

「残念ながら……。結果的に捜査一課に皺寄せされる形になります」
鶴田は冷静な口調こそ貫いてはいたが、どこか悔しさが滲み出ていたのも事実であつた。

「鶴田さん。大滝議員の政治資金規制法違反の立件への動き、そして竜のうろこことの接触に関しては、まだ公にはなっていないですね。当然、圧力はかけ易い上、相手は大物政治家……公安としては慎重にならざるを得ませんね。……しかし、南砂町刺殺事件は既に記者発表がなされています。少なからず、この事件には何らかのオチをつけなければ幕引きはできませんね。……公安部に代わって、捜一が引き取りますよ！」

馬場は鶴田に向かって笑顔を見せた。

「…そう言って頂けると…ありがたいです」

鶴田は声を詰まらせた。大場は鼻を鳴らし切り込む。

「…しかし、一課にも何らかの圧力がかかるのは時間の問題かと思われませんか」

「大場くん、大丈夫ですよ。…ウチには雷門管理官がおりますし、大場くんをはじめ他にもうるさいのが大勢いますからね。ねえ？

…管理官？」

馬場の笑顔が絶えることなく、大場から雷門に続けて向けられた。

「…それはまた随分な難題を振りますね。馬場さんは自分の能力を過大評価しています。…しかし、うるさく熱い連中が大勢いる事は否定しませんか」

雷門は組んだ手を解き、苦笑いを隠さなかった。

それを目にした三沢は躊躇いがちに口を挟む。

「あの…、本庁の捜一って、そんな感じなんですか？ …馬場さん」「ええ、ウチはそうなんですよ。…そこに居る雷門史彦警視からして、うるさく熱いひとりです。…特にブリティッシュ・ハードロックに関しましてはね」

笑顔の馬場にあらためて紹介された雷門は背もたれに深く寄り掛かり、苦笑いが照れ笑いに変わった。

「…ええ、まあ、それについても…否定はしません」

「うーんもおおおー　妙典さんに名前で呼ばれちゃうなんて…感激しちゃうわっ」

大きな肩掛け鞆を背中に回し、首からカメラをぶら下げる倉田勝則巡査長のテンションはこの上なく高かった。

荒川区王子本町の古びたマンションのエレベーターから倉田は足取りも軽く飛び出した。妙典と真壁はマンションの四階にゆっくりと足を踏み入れ周囲を見渡す。後に続くマンションの管理人は妙典と真壁を掻き分け、倉田の元へと駆け寄った。

「いくら警察の人とはいえ勝手な事されては困ります！」

作業着にスラックスにサンダル履きという井出達の管理人は倉田を引きとめた。

「あら？ やだ！ あたしったら…はしたない」

脇の下から伸びる鮮やかな黄色いストライプ、同じ色で「警視庁」と背中に表記された紺色の制服に身を包んだ倉田は、いや〜んとはかりに両手で顔を覆う。覆った手の指先が紺色のキャップを押し上げ、「鑑識」と入った紫色の腕章の巻かれた左腕で前にずり下がった肩掛け鞆を押しやった。

部屋番号は406号室。サンダル履きの管理人はマスターキーをスラックスのポケットから取り出した。

「管理人さん、ひとつお聞かせください」

真壁は初老の管理人を呼び止めた。

「こつちも忙しいんです。…早くしてくださいよぉー」

夜も遅いとあって、管理人は面倒くさげな表情を真壁に向けた。

「この部屋…表札が空白なのですが、借主のお名前は何というのでしょうか？」

真壁の問いに管理人は答える。

「ええ〜つと、ここ数年借主が頻繁に変わってて…半年前からは、…竜崎さんだね」

「じゃあ、その前となりますと？」

真壁は間髪入れず問いかける。

「う〜ん、その前は…狭山さん。…さらにその前になると佐々岡さんで…法人名だったかなあ…」

管理人の答えを受け真壁は妙典に顔を向ける。

「…サイバーワールドの社長と雇われ役員が連続して借りてたわけかあ」

両手にポケットを突っ込んだ妙典は素っ気無く言った。

「じゃあ、鍵…あけますよ」

初老の管理人はマスターキーを握りドアノブに向うものの動きが

止まった。

「…鍵。いや、扉…開いたままだねえ」

作業着姿の管理人を押しやった制服姿の倉田はドアに駆け寄ると電気メーターの回転盤を見上げた。

「あら？ ホント…。誰もいないみたいねえ。相当、慌てて出て行つたみたいよ」

「一応、声掛けしますか」

真壁はドアの隙間から警視庁の者であるとの旨を伝えたが、何の反応もない。

それを見据えた倉田は首から提げたカメラを手に取り、半開き状態のドアの写真を数枚撮った。フィルムを自動的に巻く音が薄暗いマンションの廊下に響き、背中に回した肩掛け鞆から指紋採取用シートを数枚取り出し、ドアノブにペタペタと貼り付ける。所謂、ゲル状樹脂組成物をシート状に形成しているゲルシートであり、薄いにも関わらず適度な張りが確保されている。かといって柔軟性もすこぶる良く、水添石油樹脂が配合されている為、高い指紋採取性能を誇る優れものであった。

倉田は丹念に指紋採取用シートを一枚一枚剥がし、慣れた手つきで検査台紙に貼り付ける。その作業を何度か繰り返し、倉田は額の汗を拭った。

「おい！ アキバ二丁目えっ！ まだ、入れねえのかあ！？ …早くしろや！」

痺れを切らした妙典は倉田の背中に向かって言い放った。

「もうっ 急かさないでくれるっ！ 今度は裏側のノブよ」

イラついた口調の倉田は半開きのドアを大きく開き、内側のドアノブにも指紋採取用シートを貼り付け始めた。更にイライラ度を増す妙典に真壁は澄ました顔で言い放つ。

「…待てよ、妙典さん。今いいところなんだから…」

真壁と出会ってまだ数日ではあるが、ガンダム台詞の何かだろうと何となく分かるようになった妙典はふて腐れた様子で倉田を待つ

ことにする。

「は〜い お二人さ〜ん! ……どうぞ 中へ〜。…でも、手袋と靴カバーはちゃ〜んと着用してね」

手袋と靴カバーを渡された妙典と真壁は倉田によって灯りの灯された406号室に足を踏み入れた。部屋の外から管理人の待ちくたびれた声が届く。

「…あのうー、私は管理人室に居ますんで、終わったら一声かけてください」

管理人を見送った妙典と真壁は手袋に続いて靴カバーを履き、八畳一間のワンルームを見渡した。閑散とした部屋ながら、くの字に置かれた合皮製のソファアの合間に木製のローテーブルが置かれ、乱暴に揉み消された吸殻の残る灰皿の脇に清涼飲料水のペットボトルが二つ並んでいた。

「かなり慌てて出て行ったようですね。…しかも…二人です」

真壁は清涼飲料水の泡立つ気泡を覗き見て呟いた。

「煙草の煙もまだ部屋に残ってやがる。一步遅かったみてえだなあ…」

妙典はチラつく蛍光灯を仰いだ。蛍光灯から顔を下ろし、ソファアの裏手の窓際に位置するワークデスクを見やる。

「あ〜あ、やれやれだなあ…」

妙典はワークデスクの椅子を引っ張り出し、膝を組み座り込んだ。妙典のその後姿を目にした倉田は大声を上げる。

「ああーっ!! 何やってんのよおっ!? そこまだ写真撮ってないのにいいい! いつも現場保存と言ってるでしょっ! ……ホント、基本のなっていない刑事さんねえ」

「ああ? 何だよお…。こちらら働きづめでへトへトなんだわ」

妙典は両手で腕枕を作りワークデスクの背もたれに仰け反った。

「もう 何言ってるのよっ! 昨日、お休みだったでしょ?」

倉田も必死に応酬するが、妙典は意に介さなかった。

「結局、…昨日も立派に働いたぜえ。…なあ? 真壁え!」

「妙典は組んだ足を駄々つ子のようにぶらつかせる。その時、爪先に硬いものがコツンと当たり何か転がり落ちるのを感じた。不審に思った妙典はゆっくりとワークデスクに屈みこみ、硬い物体を拾い上げた。もそもそと後退ってワークデスクから顔を向ける。」

「なあ？ 真壁え。…この仏像、確か：俺様ん家にあつたやつと同じだよなあ？」

手にした仏像を妙典はワークデスクの上に転がした。真壁もワークデスクに近づき、転がる仏像に手を伸ばそうとする。

「ああんつ 触っちゃ駄目えっ！ …現場保存は鉄則と言ってるでしょっ！！」

倉田の忠告に真壁は伸ばしかけた右手を引つ込め、横向きに転がる仏像はその動きを止めた。

「妙典さん、この仏像がここにあるということは…C-4もここにあつたという事になりませんか？」

「あら！？ この仏像、…引渡依頼が出たものと同じね」
倉田もワークデスクを囲む軍勢に加わる。

「でも、変ねえ。…底の蓋が既に開いているわ。…中は空っぽ。ねえ：妙典さん、机の下に何もなかつたかしら？」

仏像の底を覗き込む倉田は呟いた。

妙典は両手をポケットに突っ込んで立ち上がり、何一つ探そうとはしなかった。代わりに真壁が屈みこみ、ワークデスクの足もとに落ちている物はないかと窺った。しかし他に目ぼしい物は見当たらず、屈んだ上体を戻そうとした時、不自然な光景に目を止めた。

「妙典さん、倉田さん！ …絨毯のこの辺りだけ色が違いますよね？ 何というか日に焼けていないというか…」

妙典と倉田も床の絨毯を見下ろす。確かに床に敷き詰められた絨毯の約一畳半分だけが、他に比べ色が鮮やかであった。

「流石は真壁くん！ いいところに気がついたわ。…きつとここには敷物があつたと思うの！！」

倉田は肩掛け鞆から、ルミノール試薬の入った小さな筒状の容器

を取り出し、赤い蓋を回して外す。中の液体をスポイトで吸い上げて蓋を閉めた。しゃがみ込んだ倉田はスポイトに入った液体を色鮮やかな絨毯の一角に数箇所垂らす。やがて液体は絨毯に染み渡り、またも肩掛け鞆から円柱形の黒いブラックライトを取り出した。

「ねえ、真壁くんっ！ お願い！ 灯り消してくれるかしら」

真壁は言われたとおりには蛍光灯を消しに戻る。暗くなった部屋で倉田は円柱形のブラックライトを灯し、絨毯に染み渡ったルミノール試薬を照らし始めた。すると絨毯の色鮮やかな一角が青く大きく発光している。それも相当な広範囲に及んでいた。

「もういいわ、真壁くん。ありがとう」

蛍光灯は再び灯り、倉田はため息混じりに呟いた。

「どうやらここで殺されたみたいね。…多分、雇われ役員の狭山毅きつと敷物ごと焼かれたんでしょねえ」

倉田はブラックライトを肩掛け鞆にしまい、妙典と真壁を見渡した。ワークデスクを軽く屈んで睨み続ける妙典の姿に倉田の目が止まり、思わず声をかける。

「妙典さ〜ん どうしたのかしら？ ずっと、机なんか眺めちゃって…」

妙典はワークデスクから目を逸らすことなく呟いた。

「なあ、この黒いコードって、パソコンのやつだよなあ？」

「…そ、そうね。ノートパソコンの電源コードのようね」

「パソコンで、電源コードなしでも動くのか？」

「ノートだと電池内臓だから、暫くは動くとは思っけど…動かすっばなしだと半日と持たないわねえ…」

倉田の言葉を耳にした真壁は電気スイッチの位置から慌てて駆け出し、ユニットバスに向かった。

「何だあ！？ 変態オタク眼鏡小僧！ 駆け込み寺直行かあ！？

…ピンチだったら早く言えよなあ！」

白い手袋をしたまま妙典は鼻を摘んだ。するとユニットバスから、真壁の呼ぶ声がする。

「妙典さんっ！ 倉田さんっ！ ちょっと来ていただけますか！？」
妙典と倉田はユニットバスに向かい、真壁の様子を窺った。

「…パソコン、水没しています。…かなりの焦りが見受けられます」
倉田は真壁の傍らに寄り、半分まで水の張られたユニットバスを見下ろし嘆いた。

「あゝあゝもう、残念ねえ！ データ、完全にパーじゃない！！」
諦めきれない真壁は、もう一度ユニットバスを見やる。確かに水没こそしてはいるが湯船の縁に寄りかかったノートパソコンの右端が若干水面から顔を出している事に気がついた。更に真壁が顔を寄せるとSDカードが本体横のスロットに差さったままの状態であった。

「倉田さん！ SDカードが差さってます！ SDカードはまだ無事です！！」

真壁の叫び声を耳にした倉田は慌ててカメラを構えシャッターを切る。フラッシュが真壁を照らし、思わず目を瞑った。

「真壁くん！ SDカード…取り出してみて。…慎重にね」

倉田は真壁に囁いた。真壁は横転してパソコンが完全に水没しないよう慎重にSDカードを中指の先で一旦押し込んだ。シャッター音が鳴りフラッシュが瞬く中、ゆっくりと中指を引き、指に吸い付くかのようにSDカードは押しあがった。真壁はそろりとSDカードを親指と中指で挟み、静かに引き上げる。

「倉田さん…ルナ・ツィは落ちずに済みましたね」

「きつとサイコフレームのお陰ね。…真壁くん、それ貸してちょうだい！」

倉田はSDカードを受け取り、肩掛け鞆を弄りつつワークデスクまで戻る。真壁と妙典も後に続き倉田の背後に立った。倉田は小型のノートパソコンを取り出し、ワークデスクに置くと素早く開いた。すかさず電源を入れ、暫し起動を待つ。

「さあ、これが“星の屑作戦”に相当する重要書類ってやつかしら？」

倉田は「2GB」とプリントされたルナ・ツィを指先で摘み、裏表をくるくると見やる。

「しかし…アキバ二丁目。てめえの肩掛け鞆、まるで四次元ポケットみてえだなあ。…何でも出てきやがる」

倉田の背後から妙典なりの褒め文句が飛んだ。

「まあ、お褒めに預かりお礼を言わせて頂くわ。…妙典さん」

「…いや、顔のふちを青く塗ってヒゲでもつけりゃ、忘年会のかくし芸にもってこいだと思うがなあ！」

倉田は妙典にゆっくりと振り返り、「レディに向かって、失礼ね！」とばかりにあつかんべーをした。

「倉田さん、立ち上がりましたよ」

真壁は倉田に言った。

倉田はルナ・ツィをノートパソコンの横側のスロットに差し込み、ファイルを開く。

「こ…これ、何かしら…」

倉田は思わず言葉を失い、ディスプレイを妙典と真壁に見せつけた。

「ちょ…ちょっといいですか？」

真壁はタッチパッドに手を伸ばし、他のファイルも開いてみた。

敏捷に動く真壁の指が止まり、タッチパッドから手が離れる。

「…倉田さん、これ…フォント・ファイルです。…それも、パスワードや免許証、保険証などに使われる特殊な文字フォントです」

「えっ!? ……ということは、偽造用のフォントってことかしら？」

南砂町のPCに残っていたのと同じなのかしら!？」

倉田は聞き返した。

「…そうだと思います。…さらに、こちらのやつは、各官庁の入館証などで使用される特殊フォントです。…ここまで精巧に作られているものは見たことがありません」

「ねえ、真壁くん。…竜のうるこって、不法入国とかにも関与していたわよね？」

倉田の問いに真壁は唾をゴクリと飲み込む。

「…ええ、間違いありません」

真壁の答えに倉田は啞然とし、言葉を失った。その沈黙を破るかのように妙典は口を開く。

「これで繋がつちまったなあ。…経営難に苦しむサイバーワールドと竜のうるこの目的が。…パスポートや免許証つてえのわよー。そこいらで出回らない特殊な文字フォントを使ってるわけよ。偽造防止…ある意味、国家機密だわな。それを竜のうるこがサイバーワールドの社員に作らせた。…思いつきり精巧なやつをな。…そいつを仲介したのが、第一発見者のバイク便のあんちゃん…久木大輔つてことになるわなあ。…最初は南砂町の社内で作らせてたが、佐々岡の殺害現場になつちまったもんで、ここに移って来たんだろうよ。だいたい借主の竜崎つて誰よ？ ひよつとして久木の別名かあ？」

真壁は神妙な面持ちで妙典を見上げる。

「妙典さん…ということは…久木は竜のうるこの構成員…ということとで間違いないのでしょうか？」

ポケットに両手を突っ込んだ妙典はうつむき加減で言う。

「ああ、多分な。…そう考えると辻褃が合う。竜崎の“竜”は竜のうるこの“竜”かもしれないなあ」

妙典の言う事に真壁も納得せざるを得なかった。確かに恐ろしい程、辻褃が合う。しかし全く疑問がない訳ではない。

「でも、妙典さん。まだ、分からないことがあります。…大事なパソコンを捨ててまで逃亡した理由。パソコン内のフォント・ファイルよりも、もっと大事な物があつたと考えるのが妥当です。おそらく…それはC-4だと思います。でも、仏像の中身は空っぽでした。…C-4を持ち歩くには仏像の方が好都合ですよ。…ということは、信管を…起爆装置を取り付けた爆弾を既に完成させていると考えるべきかと思えます」

妙典はヒューと口笛を吹いた。

「…流石は優秀な準キャリアさん。飲み込みが早いねえ。…でもな

あ、もうひとつ気にならねえーか？ 変態オタク眼鏡小僧さんよお？」

「さて、それは何でしょうか？ …… 妙典さん」

妙典は一瞬顔を逸らし、あらためて真壁に向き直った。

「まるで… 俺様たちが、今すぐここに来ることを知っていたようだが、… いったい誰のチクリなんだろうなあ？」

妙典の一言に真壁は愕然とし、口をへの字に曲げた。

「なあ、アキバ二丁目え。… サイバーワールドのホームページ… 社員の人数が出てるページあったろ？ …… あのページの最終更新日、教えてくれや！」

倉田はタッチパッドを小刻みに動かして、モニターを覗き込む。

「… 2006年6月12日。… 三年前ね」

倉田の言葉を聞いた妙典は蛍光灯を見上げ呟く。

「… そんな時には契約だか正規だか知らねえが、五人いたわけだな？」

… 社員が。… いろいろ分かった。あんがとよ！ アキバ二丁目。… 俺様、腹減ったから帰るけど、どうするよ？」

「あたしは鑑識課に連絡して、ここを詳しく調べるわ」

倉田にチース！ と右手を掲げた妙典はマンションの一室を後にしようとする。後を追おうとする真壁は倉田に一言添えた。

「倉田さん、急なところ… ありがとございました」

「いいのよ 真壁くん。… こっちもいろいろと進展したわ。後は鑑識に任せてちょうだい。ちゃんど報告はするから …… 担当刑事さんですもんね、お二人さんは」

「了解です！ 倉田さん。… では、お先に失礼します」

真壁は倉田に一礼をする。

「あ！ ちよつと、待って！ お腹空いてるんでしょ？ …… だったら、これ持って行きなさい！」

倉田は真壁と妙典を呼び止め、肩掛け鞆をゴソゴソと漁り始めた。

「ねえ？ 知ってる？ 今、話題の刑事^{てかめん}類？ あたし、全五種類コンプリートしちゃったの …… もうおなか一杯だから持ってって」

肩掛け鞆から特大サイズのカップ麺を取り出した倉田は真壁に手渡す。

「刑事として、真壁くんには足りないのは：“刑事麺・骨太大走査線”、豚骨味ね」

真壁は黄色いふちに“刑事麺！！ 骨太大走査線”との文字の躍るカップ麺を受け取った。

「妙典さんは：“刑事麺！！ 華麗なる推理”がぴったりね だって妙典さんに一番欠けてることでしょ？」

妙典もカップ麺を受け取り、蓋の印刷を凝視する。

「なあ、アキバ二丁目！ …これって、カレー味だよなあ？ …きつと」

「ええ、そうだけど。何か、ご不満でも？」

妙典は“刑事麺！！ 華麗なる推理”を握り締め言った。

「…なあ？ 魔のカレー・スパイラルって知ってるかあ？ 何かの都市伝説だとは思うんだが…」

真壁は妙典の事を多少なりとも気の毒に思いはしたが、倉田に聞くべき事を優先した。

「倉田さん。刑事麺、残り三種類の名称：教えていただけませんかしょうか？」

「いいわよお …え〜と、“弾丸焦し醤油”…醤油味でしょ。

塩らしく自白”…これは塩味。“聞き込み地鶏”…は鶏がら味ね。

…どう？ なかなかイケてるネーミングでしょ？」

マホガニー製の机は今日も丹念に磨きこまれていた。脇に追いやられたデスクスタンド・ライトの折れ曲がり方、角度が数日前とまったく変わっていなかった。「鬼塚和正 警視庁刑事部部长」と表記されたネームプレートも定位置で居座っていた。

「…雷門くん、南砂町の刺殺事件も早期解決に終わりそうだなあ」
革張りの椅子にもたれ掛かった鬼塚は唐突に切り出した。マホガニー製の机の前で気を付けの姿勢で立つ雷門は困惑の表情を見せ、

静かに口を開いた。

「刑事部長、生憎早期解決とはいきません。本件は思わぬ方向に向かつており、予想以上に大きなヤマだと認識しております」

鬼塚は前のめり、顔の前で手を組んだ。

「そんなことはないだろう？ 雷門くん。：行方をくらませた中国人と殺された社長の部下がホシということを決まりではないのかね？」

鬼塚の威圧的な物言いに雷門は鶴田の言葉を重ね合わせた。圧力がかかっている。そう感じた雷門は反論する。

「刑事部長、本件はそのような安直な事件ではありません。背後に竜のうろこの影がちらつく上、中国人と部下の二人のホシでは実行不可能な関連事件が起こっております」

鬼塚はいささか落胆した様子で雷門を見上げる。

「雷門くん。君は何も分かつたらん。：刺殺事件が本丸で他の事件は、何ら関連のない些細な事件なのだよ」

「お言葉ですが：同一犯の関与が見受けられます。：さらにC・4という物騒なブツの行方は依然不明のままです」

再度、背もたれに寄り掛かった鬼塚は呆れた口調で語る。

「君も強情な男だねえ。：他の件は放っておけばよい。C・4も使われんよ。：取越し苦労に過ぎん！」

「しかし、刑事部長！ 事件が起こってからでは……」

「ら：雷門管理官！ け：刑事部長が、そうおっしゃっておられるのですよ。：の：残りの二人さえ、け：検挙さえできれば、何の問題もありません！」

鬼塚の袂に立ち、前のめりで手を組む井岡刑事部参事官が割って入る。

「：そういうことだ、雷門くん。井岡の言つとおり、：残りの二人さえ捕まえれば本件は万事解決ということだ！」

鬼塚の高圧的な言葉に納得できない雷門は一瞬俯き、再度刑事部長の目を見据える。

「刑事部長：それは、圧力というものでしょうか？」

鬼塚の顔はみるみる赤く硬直し、今にも叫ばんばかりであった。

「ら：雷門管理官！ こ：言葉が過ぎますよ！ 刑事部長に限って、そ：そんなことは、断じてありません！」

同様に顔を赤らめた井岡が鬼塚に代わって雷門に叫び声をあげた。

「参事官：その言葉、信じてもよろしいのでしょうか？」

雷門も応酬することを忘れなかった。

「あ：当たり前ではありませんか！？ ほ：本件は、刑事部長でなく、だ：代議士から…」

井岡刑事部参事官は思わず口を滑らせ、以降は噤んだ。

「：参事官、今：何とおっしゃいました？ 自分には代議士：大滝議員から圧力があつたと聞こえるのですか？」

雷門の冷静な指摘に鬼塚は眼鏡を外し、右手で目元を覆った。その様を見届けた雷門は語気を強め言う。

「刑事部長！ 参事官！ …大滝龍一郎議員からの圧力との認識で間違いはありませんか？」

鬼塚和正刑事部部长と井岡博刑事部参事官は口を噤んだ。雷門は身動きひとつ取らず、二人を見据えた。

「：分かりました。一週間：一週間だけ頂きたいです。…一週間で本件を全て解決に導く所存です！」

鬼塚は片手で再び老眼鏡をかけ、雷門に告げる。

「：三日だ。三日だけ猶予を与える。…記者発表の準備もある。今週中に全てを終わらせたい」

鬼塚の言葉を耳にした雷門は「全てを終わらせるつもりなどないだろうに…」との台詞が出かかったものの押し殺した。

「刑事部長、了解しました。…三日の猶予を頂き、感謝申し上げます。…では、失礼致します」

雷門は踵を返し、刑事部部长室の扉を目指した。雷門の背中に鬼塚は声をかける。

「雷門くん、…君は思った以上に不器用な男だねえ。…今のうちに、

議員に貸しを作っておくのも手だとは思わんかね？」

雷門は立ち止り、振り向くことなく背中から語る。

「…刑事部長：自分は警官であって、政治家ではありません」

そう言い終わるや否や扉に向かい、一礼をすることもなく刑事部部長室を後にした。

「け…刑事部長！ ど…どうなさるおつもりですか？」

鬼塚は本皮の椅子をゆるりと回転させ井岡に向き直る。

「放っておけ…どうせ、何も解決せん！」

第七方面本部・大部屋の掛け時計の針は午後十時まであと二分を示していた。総勢五十名を越えるほぼ全ての捜査員は既に着席し、誰一人口を開こうとはせず重々しい空気に包まれていた。閉め切られたブラインドの隙間から差し込む人工的な僅かな外光は屋内の灯りにかき消され、閉め切られた前後の扉の外から漏れ伝わる音も一切なく、沈黙と吐息と多少のアクビだけが存在していた。

明らかに何かが違う。先日の捜査会議とは何かが違う。腕組みをし、目を瞑る妙典は大部屋に漂う異変を感じとっていた。こんなに夜遅く、それも第七方面本部に捜査員のほぼ全員が集められるというのはかなりの異例事態である。それに反して背後の席にいる筈の公安部外事第二課第6係の三人は居ない。妙典にとつてそれこそが最も気になる事柄であった。

時計の長針が十時ちょうどを指し示し、最前列の長机に置かれたスタンドマイクに雷門は顔を寄せ、口を開いた。

「夜分遅くにお集まり頂き、大変恐縮です。：今から、お伝えすることをしかとお聞き願いたい」

雷門は大部屋に漂う沈黙を打ち破った。

「：まずは、第一発見者の久木についての報告事項があります。久木大輔。彼は指摘通り仮名を使用しておりました。：本名は、劉^{リュウ}ウ・^{ウ・}シオン^{ネン}。32歳、中国国籍。：竜のうるこの構成員であることが判明しております」

大部屋がざわめいた。予想していたこととは言え、中国人の竜のうるこ構成員という事実が明らかになり、刺殺状況の手際の良さにここに居る誰しもが納得せざるを得なかった。：それにもまして、あまりの敵の大きさと不透明さをも認識する必要が浮上したのである。

「そして、先ほど鑑識から報告があり、サイバーワールド株式会社

の移転前の住所が判明しております。住所は：荒川区王子本町。既に鑑識が入り、現在も調査中であります」

雷門は一旦区切り、間を空ける。

「：現在、報告できることは：第二の殺人、雇われ役員の狭山毅の殺害現場との線が濃厚であるということ。：さらに、偽造用のパスポート、免許証に使用されると思われる精巧な文字フォント・ファイルが多数発見されていること。：これらは竜のうろこの本体には既に渡っているものと思われれます。：これらから、分かること：それは、竜のうろことサイバーワールド社に利害的な繋がりがあったということに他なりません。：そして、これは補足ではありませんが、偽造用パスポート、免許証、保険証：以外にも、各官庁や公的施設の入館証等で使用される特殊な文字フォント・ファイルも同時に発見されております」

ざわめいていた大部屋はいつしか静けさを取り戻し、次々と報告される事実捜査員達は固唾を呑んだ。

「：あと、捜査員が踏み込んだ際、既にもぬけの殻となっておりましたが、直前まで二名の者が部屋に居たであろうとの痕跡が見つかっております。：捜査線上でサイバーワールド社の移転前の住所を入手し、直ちに踏み込んだとのことですが：直前で逃げられております。：と、なりますとガサ入れ情報を知り得た人物が別に最低もうひとり存在し、逃亡した二人に連絡をとったものと思われれます」

木場署の中堅刑事が手帳を片手に立ち上がり、雷門に問う。

「内部からの情報流出の疑いの線は考慮されていますか？」

雷門は木場署の刑事を見つめ答える。

「情報流出の可能性を完全に否定することは現段階ではできませんが、そのような事実があったとの断言もできません。：寧ろ、可能性は低いと個人的には思っています。それに自分は皆さんのことを信じております。意図的に情報を流出させた者は存在しないと確信しております。荒川区王子本町にいた二人とは別に外部の人間がひとり存在し、何らかの経路で知り得た情報を流したと考えるのが

妥当であります」

納得した木場署の刑事は着席し、雷門は続ける。

「…既に皆さんご存知だとは思いますが、本日午後二時半頃、JR阿佐ヶ谷駅前街頭演説中の元内閣総理大臣、大滝龍一郎代議士に対する火炎瓶による襲撃事件が起こっております。…その事件現場にサイバーワールド社の社員、田伏幸夫の姿があったことが現認されています。…残念ながら、逃走され…依然所在は掴めておりません」

今度は応援要請を受けている警視庁捜査一課10係の刑事が片手を挙げ起立した。

「…その所在とやらが、荒川区王子本町の移転前のサイバーワールド社ということにはなりませんかね？」

「西岡巡査部長、その可能性は大いにあるとは思いますが、現段階では断定には至りません。目下、鑑識課が調査中です」

「了解しました」

西岡巡査部長は静かに着席し、雷門は続けた。

「更に大滝代議士と竜のうろこには何らかの接触の可能性が否定できず、襲撃事件そのものが自作自演との線も成り立ちます」

「…それは、大滝議員の政治資金規制法違反から世論を逸らす工作ということでしょうか？」

着席したまま西岡巡査部長は再び声をあげた。

「現段階では推測の域を出ません。世論誘導の目的があったのか、他の隠蔽目的があったのか、あくまで可能性に過ぎないということです。…そしてサイバーワールド社に関して、もう一点報告しなければならぬ重要な事項があります」

そう言い終わるや否や雷門は長机の下を弄った。

「…引渡依頼を出しておりました証拠品がいくつか届きました。…まずは代々木界限でのC-4を使用した連続放火事件で押収された木彫りの仏像です」

雷門はビニール袋に包まれたひとつの木彫りの仏像を机上に置き

た。

「そして、こちらが千葉での窃盗事件で押収された仏像になります」
順にビニール袋に包まれた仏像を雷門は並べる。

「そして、これが：荒川区王子本町の移転前のサイバーワールド社で発見された、木彫りの仏像であります」

雷門の前にビニールに包まれた木彫りの仏像が三つ立ち並んだ。

「：ご覧の通り、この仏像：寸分違わぬ見た目にも全く同じ物です。タイの竜のうろこの関連会社から、船便で持ち揉まれた物とのことは、既に報告を受けております。：そして、この三つの仏像に共通すること：それは、中が空洞になっており、C-4が二つずつ隠されておりました」

大部屋がまたも色めき立った。

「代々木界限での連続放火事件、そして千葉での窃盗事件では既にC-4は押収されております。：しかし、サイバーワールド社でのC-4の発見には至りませんでした。：既に、信管及び起爆装置を搭載したプラスチック爆弾を犯人達は所持しているという可能性は極めて高いと考えています」

「雷門管理官！ それは、近日中に：プラスチック爆弾が使用されるということでしょうか？」

真壁は思わず立ち上がり、雷門に叫んだ。

「真壁巡査部長：自分も、それを最たる懸念としています」

雷門は真壁を見やり、冷静な口調で告げた。

雷門の口調に反して大部屋のざわめきは最高潮に達している。それを落ち着いた目で見据える雷門は、ふと妙典に目を向けた。相変わらず、妙典は目を瞑って腕を組み居眠りでもしているかの様子ではあったが、組まれた左肘の上部を右指が小刻みに叩いていた。居眠りをしているものならば、怒鳴り散らそうとさえ思っていた雷門ではあったが徒労に終わったようである。大部屋の静まりを暫く待った雷門はスタンドマイクに向かう。マイクのノイズを聞きつけた真壁は大人しく着席する。

「…それと、今夜どうしても皆さんにお伝えしておかなければならないことがあります！」

雷門の声はこれまでに増して張りがあり、何がしか怒りの様な感情が僅かではあるが感じられる。

「先ほど、捜査本部に上層部から圧力がかかりました。…そして、その上層部に働きかけを行った人物こそ、元内閣総理大臣・大滝龍一郎代議士であることも間違いない事実のようです。…現在、大滝代議士の警備体制も完全に解かれていた状態です。…正直、理由は分かりかねます。…そして、我々に与えられた猶予は三日。三日以内に劉秀年と田伏幸夫を確保すれば、この南砂町刺殺事件は収束し、大滝議員襲撃事件を含めた他の関連事件は強制的に不問とされます。…もちろん、それが本望だと自分自身も思ってはおりません。捜査員の皆さんも同じ思いだと察します」

大部屋はまたも重々しい空気に包まれた。いや、苛まれているとの表現の方が適切であろう。長い沈黙が続き、掛け時計の秒針の音だけが時を刻んでいた。

「雷門さ〜ん！…つまり、スタンド・プレイしろ！…ってことですよねえ？」

永遠に続くかと思われた沈黙を妙典が打ち破った。

少々豆鉄砲を食らったかの様な表情を見せた雷門はスタンドマイクに向かって告げる。

「妙典巡査長…管理官である自分から、そのような事は命令できません！」

「へっ！…雷門さんもすっかり、おっさんになっちゃいましたなあ…。ロック魂もどこ吹く風ってわけですかい！」

目を見開いた妙典は腕組を解き、応酬せんと挑発気味に立ち上がる。

「…雷門さん！…だったら、全員がスタンド・プレイすりゃあ、スタンド・プレイにはならんでしょ！？…それが、ロック魂！…違いますか？…雷門管理官殿！」

大場は着席したまま妙典に振り向き声を張り上げる。

「おい！ 妙典！ 言っている事は無茶苦茶だが…たまには、いい事言うなあ。ロック魂…いい響きだぞお！」

二人のやり取りを目にした雷門は背もたれに大きく寄りかかり、思わず苦笑いし俯いた。ほんのりと口元を緩め、ゆるりと立ち上がった雷門はスタンドマイクを通さず声を張り上げた。

「…妙典、相変わらず君の発言には肝を冷やさせられます」

「雷門さんなら、もう慣れっこだと思つてましたがあ？」
肩をいからせた妙典は応え、雷門も返す。

「細かい趣向の違いこそありはしますが、確かに我々は…まだロック魂を忘れ去つたわけではありません！」

妙典は呆然と座る真壁に向かって呟く。

「変態オタク眼鏡小僧の真壁え！ てめえからも何か言つてやれやっ！」

予期せぬ一言に驚いた真壁は妙典を見上げ、ゆっくりと立ち上がった。妙典から目を逸らすことなく真壁は呟く。

「…地球に住む人々は、魂を重力に引かれて飛ぶことができない…とは、自分は思っています。…ロックの魂よ、宇宙に飛んで永遠によるこびの中に漂いたまえ！」

真壁の台詞を聞いた妙典は、はにかむ様に苦笑いし真壁から顔を逸らす。ロック魂の宿つたその瞳を雷門に向け、口元を緩ませた。雷門の笑みは止み、口を開く。

「…木場署の皆さん、お恥ずかしいところをお見せして申し訳ありません。…我が捜査一課はロック度の高い、濃くうるさい連中の多い部署です。…突然ではありますが、クイーンの“ We Will Rock You ”という曲はご存知でしょうか？ …今から自分分は左肩を二度叩きます。それに合わせて足を踏み鳴らして頂きたい。…三拍子目は手拍子一回、そして四拍子目は休符。…それを繰り返して頂きたい」

雷門の言葉を受けて、おずおずと木場署の捜査員達は立ち上がる。

警視庁捜査一課の刑事たちは待つていましたとばかりに勢いよく立ち上がった。

そんな警視庁捜査一課の中にあつて、真壁だけは事態が把握できないでいた。

「みよ…妙典さん、いったい何が始まるのでしょうか？」

「ああ？ そつか…変態オタク眼鏡小僧は着任したばかりでまだ知らねえか？ …まあ、一課のお約束というか、験担ぎと言うか、雷門さんが本気になった時の儀式みたいなもんだわなあ…。“捜査一課のウツドストック”とか“レディング”とか“モンスターズ・オブ・ロック”とか言われてる音頭だ！」

「そ…そんなものがあるのですね。…ロック度の高い部署だと聞いてはいましたが…」

呆気にとられた真壁は妙典の立ち方を真似し構えた。

「…では、いかせていただきます」

雷門は右手で拳を作り、左肩の付け根の辺りを二度叩いた。それに合わせ足を踏み鳴らす音が響いたものの、あまりにもバラつき酷い有様である。おまけに三拍目の手拍子が全くと言っていいほど揃いはしなかった。

雷門は苦笑いし、思わず動きを止めた。それを目にした捜査員達も軽く笑い声を上げる。

「困りましたね。…皆さん、スタンド・プレイする気が満々のようです」

大部屋の笑い声は一段と大きくなり、張り詰めた緊張感が一気に解き放たれた。

「…では、気を取り直して…」

右拳を硬く握った雷門は左肩の付け根辺りを二度叩く。今度は踏み鳴らす音が綺麗に揃い、手拍子も決まった。一拍の休符を置いて、再度雷門は左肩を叩く。踏み鳴らす足音も乱れることなく、手拍子も揃う。

音楽に然程詳しくない真壁でさえも“ We Will Rock

“You”は知っている。二拍の踏み鳴らす足に一拍の手拍子と休憩。これ以上、簡単な四拍子のリズムはない。徐々に心地よさとロツクの力強さが伝わり、フレディ・マーキュリーのヴォーカルが聴こえてくるようであった。生まれて初めて音楽：ロツクが、かつこいいと思った。左隣の馬場は歳に似合わず、肩を揺らしてノリノリで手を叩いている。右隣の妙典は慣れた動きで足を大きく踏み鳴らす。前方の大場は手拍子の部分で両腕を大きく広げ突き上げている。木場署の三沢も慣れないながらも懸命に手拍子を続けていた。

四拍目の休憩に合わせて、雷門は右拳を大きく掲げ、動きを止めた。捜査員達の奏でる音も止み、暫くの静寂が訪れる。全捜査員の目が、拳を突き上げる雷門に注がれ事の成り行きを見守った。雷門は突き上げた右拳を勢いよく振り下ろし、長机を殴りつける。並んだ木彫りの仏像が揃って倒れ、スタンドマイクを通してハウリングが響いた。雷門の静かではあるが力強い言葉をスタンドマイクが拾う。

「ロツク魂を見せつけてやりましょう！」

真壁は鳥肌がたった。これがロツク魂というものなのか？ 呆然と雷門を見つめる中、捜査員達は物も言わず、一斉に散らばる様に大部屋を後にした。

取り残された真壁に背後から妙典の声がある。

「真壁え。…何ならアンコールでもしてみるか？」

R a t R a c e (1)

V6ツインターボの奏でるエンジン音が、闇夜の湾岸道路・国道357号線を貫いた。真夜中ともなれば交通量も限られ、走行車線で一定の間隔を空けた大型輸送車が列を成し走るばかりである。追い越し車線をひた走る青いGT-Rにとって、最も恐れるべきはスピード違反取締りの交通機動隊の存在だけではあるが、ナンバープレートとの照会はするであろうし、同業者の匂いも嗅ぎ取るに違いなし。そう自分に言い聞かせ真壁はGT-Rのアクセルペダルを踏み締めた。

青いGT-Rの車内には妙典から借り受けているCDアルバム“Soldiers Of Sorrow 哀戦士 Z x R”が1曲目から順に流れている。真壁にとつては馴染みと言うよりも魂を揺さぶられた楽曲のヘビーマタル・アレンジとあつて、懐かしくもあり新鮮でもある不思議な感覚に囚われていた。真壁にとつてはちよつとした至福のひと時である。隣に居座る黒Tシャツの男さえ居なければ…。

「なあ、変態オタク眼鏡小僧お！ 何もこんな夜中にガンプラ…家に持って帰らんでもいいだろおーがよおー？」

パッセンジャーシートに腕枕で鎮座する妙典から嫌味がすつ飛んできた。

「いや、妙典さん…どうしても、身軽になつておきたかったので。明日からの追い込み捜査に全力を挙げたいのです」

この4日間で妙典の嫌味を聞き流す術をいつの間にか会得していた真壁は流れ行くオレンジ色の外灯の灯りの中で呟く。

「…それに…何も妙典さんにお付き合い頂かなくても結構だったのですが…」

真壁の口は思わず本音をついた。

「へっ！ てめえが、変態行為に及ばねえか…俺様には、監督責任

があるからなあ……」

腕枕の上から妙典は返した。

「相変わらず、……信用ないのだな」

真壁は眉をひそめ嘆く様に小声で言った。

「それにしても、真壁よ……。てめえ、どこまでかつ飛ばすつもりだあ？ ……もう有明、越えちまったじゃねえーか！ まさか、東京港トンネル抜けて環七大井ふ頭まで行くつもりじゃねえーよなあ？」

妙典の鋭い洞察に真壁は虚を突かれた。

「……はっはっは！ 凶星じゃねーか！ 妙典さんよ！」

真壁は苦笑いを隠すかのようにおどけて見せた。それを耳にした妙典も流れ迫る路面を見据えたまま呟く。

「なあ、真壁え。それって、ガンダム台詞なんだろ？ きつと」

「……妙典さん、その前のもそうです。せっかくのV6ツインターボ……GT-Rです。少しばかり遠回りにはなりますが、試してみただったのです。……この時間と交通量です。遅れることは、まずはないかと……。寧ろ、早く着くかもしれません」

真壁は空気を変え、言い訳することなく素直に本音を吐露した。

「……真壁え。最初はただのスカしたエリートかと思ってたが、てめえも……男の子だったんだなあ。……安心したぜえ」

予期せぬ妙典の台詞に真壁は思わず頬をほころばせた。

「……キャンキャン怒鳴られているうちが花……と、ばかり思っています。……ところで妙典さん。……Tシャツ、着がえられたのですね？」

「ああ……まあな！ ……アーク・エネミーの“Blood On Your Hands”。まあ、俺様にとっちゃ、勝負Tシャツみてえなもんだな。……変態オタク眼鏡小僧と一緒にだ。……本気モード全開ってやつよ！」

「“Blood On Your Hands”……果たして誰の血になるのでしょうか？」

妙典は真壁を見やり、脅しの利いた口調で言う。

「真壁え……てめえ、シャアが……好きだったよな？」

「…ええ、まあ…間違いではありませんが…」
「シヤア専用機って何色だったっけ？ …赤じゃ、なかったっけかなあ？」

真壁は眼鏡のブリッジを押し上げ口を開く。

「妙典さん！ ひとつ申し上げておきますが、シヤア専用機は厳密にはピンク…赤ではありません」

「ちっ！ …残念。せっかく、変態オタク眼鏡小僧を血祭りにあげてやろうと思ったのによお！」

やや興ざめした妙典に真壁は警告を発する。

「…不死身の妙典さんに、そんなことされては…駄目です。残念ながら回収不可能です」

環七通りに入って久しい。湾岸道路での快走とは打って変わり、然程酷くはないものの軽い徐行運転が続いていた。どうやら深夜の道路工事が起因している様である。

“Soldiers Of Sorrow 哀戦士 Z x R”
も終盤に差し掛かり、“Encounter (めぐりあい)”

が流れ始めた。劇場版三部作の最終作のエンディングに流れる名曲である。メタル・アレンジとは言え、名セリフ満載のあの感涙のシーンの数々が真壁の頭の中を駆け巡っていた。

駒沢陸橋・駒沢通りを随分と前に越えている。高円寺陸橋下まではすぐ傍の筈であった。ひとりきりならば、涙のひとつでも見せていたに違いない真壁に反してサイドドアに肘をかける妙典は退屈そうに外を見やった。

「あ…あれ！？ あれって…由香ちゃんじゃね？」

驚嘆する妙典の声に宇宙世紀から平成に呼び戻された真壁は環七通りの左側に顔を向ける。喫茶ヴァンデンバーグで働く由香の姿がコンビニエンス・ストアの前にあった。肘からコンビニエ袋と丸みを帯びた手提げ鞆を提げ、相当狼狽している様子である。真壁はウインカーを点し、コンビニの前に佇む由香に青いGT-Rを向けた。

由香の前で止まるや否や妙典はウィンドウを下げ、声をかける。

「おい！ 由香ちゃんっ！ ……こんなトコで何してんの！？」

妙典に気付いた由香は堰を切るかの様に叫び声をあげた。

「みよ…妙典さん！？ ……大変なの！ クリステイーンちゃんが…
クリステイーンちゃんが連れ去られちゃったの！」

「…こんな所で突っ立てんのも物騒だ。…まあ、乗れや！ 由香ちゃん」

勢いよくシートベルトを外した妙典はサイドドアを開け、外へ出る。シート肩のレバーを上げて背もたれを倒し、由香を招き入れた。呆然としながらも由香はコンビ二袋と手提げ鞆を抱えてGT-Rの後部座席に乗り込む。背もたれを戻し、パッセンジャーシートに戻った妙典はドアを閉めウィンドウを上げつつ由香に振り向いた。

「大丈夫か？ 由香ちゃん！」

妙典の一言に我に返った由香はハッと妙典と真壁を続けて見渡す。

「あら？ ……真壁さんも？」

「…ご無沙汰しております。…これも何かの“めぐりあい”でしょうか？」

真壁はルームミラー越しに由香に声をかけ、続けざまに妙典の問いかける声が響く。

「…で、何があった？ 由香ちゃん！」

きよとんとした表情で妙典に顔を戻した由香は口を開く。

「クリステイーンちゃんが…連れ去られちゃった」

「…クリステイーン？ 誰だ、それ？」

「ウチのワンちゃん。…車に残して、クリステイーンちゃんのお夜食買いに行っている間に連れ去られちゃったの。…ねえ、妙典さん！ 見て！ これが我が家のクリステイーンちゃん！」

由香は手提げ鞆から携帯を取り出し、待ち受け画面を妙典に向けた。妙典は由香の携帯を手に取り、画面に見入る。そこには、「クリステイーン」とは程遠いヨダレを垂らしたブルドック犬の大アップの顔があった。

「く…クリステイーン…ちゃん…て…これかよ？」

「ね？ かわいいでしょ？」

「…ま、まあ…」

流石の妙典も困惑した表情で眉をひそめた。

「車ごと連れ去られたようですが、詳しいことをお聞かせ願えませんか」

ハンドルに手をかけた真壁はやや左に振り向き冷静な口調で由香に問うた。

「え…ええ。…いつもは母が、クリステイーンちゃんのお夜食を買いに…このコンビニまで来るんだけど。明日、お店お休みだから、代わりに私が来たの…」

由香はドッグフードの缶詰が数個ばかり入ったコンビニ袋を持ち上げ見せる。

「…で車に鍵は？ ちゃんとロックはされてましたか？」

「もちろんです！ 鍵は、ちゃんと…。でも、何かリモコンみたいな物を持っていました、あの男。…そう！…あのグリーンのフードジャケットを着た男がリモコンみたいな機械を使ってドアを開けるのを見たんです！」

「…由香さん。…それは鍵を開けるリモコン信号を受信機で拾われています。…最近、特に増えた手口ですね」

真壁は躊躇いがちに「由香さん」と呼んだ。

「真壁さん、それって…すぐ傍に犯人が居たということ？」

「…そうなりますね。…それよりもグリーンのフードジャケット以外に男は居ませんでしたか？」

啞然とする由香は口を軽く尖らせ、思いに耽った。

「…そういえば。私と入れ違いに、細い色白のひ弱そうな男の人が出て行きました。…カウンターでお金を払っている時に…ふと車を見るとその男も乗っていたんです。慌てて外に出た時には、もう…」

「ありがとうございます。…それで、結構です。あと、車種とナンバーを教えてくださいませんか？」

真壁は鼻から息を抜きつつ言った。

「…車は、モコ。…スノーパールホワイトのモコです。ナンバーは…」

由香の言葉を遮るように、妙典は嫌味つたらしく携帯の待ち受け画面を真壁に見せつける。

「ほ〜れっ！　かわいいワンちゃんだぞお〜」

真壁は目の前に突きつけられた待ち受け画面を鬱陶し気に顔から一瞬逸らし、携帯を奪い取る。そして、お世辞にも「かわいい」とは言えないブルドッグの待ち受け画面を暫し眺めた。

「ゆ…由香さん！　…この犬の首輪、GPS付きですよ？　ひよっとして、受信機をお持ちじゃないですか？」

「あっ！？　こ…このことですか？」

由香は手提げ鞆から小型の受信機を取り出し真壁に手渡した。真壁は引き換えに携帯電話を返した。

「…GPSドッグマーカー。2000m以内ならば比較的正確な位置、動き、速度がLCDスクリーンに表示されます。…ただノイズの多い街中では、いささか心配ではあります…」

嘆き口調の真壁は受信機の電源を入れた。

「…反応しました！　…場所から言って…中杉通りの様です！

…動く気配はありません。停車しているかと思われます。…まさかとは思いますが、大滝議員の事務所前ではないでしょうか？」

小さく舌打ちした妙典は顔をいからせシートベルトを引き、真壁に叫ぶ。

「グリーンフードジャケットの男っつーのも…すっげー怪しいよなあ。…田伏じゃねえかあ？　…ひよっとして」

「妙典さん、自分もそれを考えていました」

真壁は懐から赤いシヤア専用携帯を取り出し広げ、左親指を素早く動かした後、耳に宛がった。

「…藤波さん！　真壁です。…唐突ですが、ひとつお願いがあります！　…大滝議員の事務所に今すぐ署員を送って貰えませんか？」

…今すぐ確認したいことが…」

電話に向かう真壁の横で妙典はウィンドウを下げ、片手でパトランプをルーフに置いた。パタン！ という音と共に真壁は妙典に顔を向ける。

「藤波さん達が向かってくれるそうです。…阿佐ヶ谷署にも警備解除が通告されていました。…結果次第では本庁にも連絡してくれるとのことですよ」

「おしっ！ 向かうぞお！！ 真壁えっ！ …と、その前に…」

シートベルトに締め付けられた妙典は腕を伸ばし、グローブボックスを漁り始めた。例によってCDを取り出し、“Soldier
S Of Sorrow 哀戦士 Z x R”と入れ替える。

「由香ちゃん！」

「は…はい？ 妙典さん！」

「かわいい、かわいい…クリスティーンちゃんを今すぐ助けに行くぜいっ！ …曲は“Colorado Bulldog”」

真壁は「曲…そんなこと関係ないよ」と思わず口から出かったが、踏みとどまる。

犬の吼え声が続き、間髪入れずに素早いリズムのギターとベースとドラムが一斉に鳴り響くのに合わせ、派手に回るパトランプとけたたましいサイレンを轟かせた。青いGT-Rは緩やかに流れゆく環七通りに蹴散らさんばかりの勢いで割り込んだ。

何かの社名のロゴの入ったワゴン車が信号待ちの為に止まった。

すぐさま後方から黒塗りのオンロード・バイクが路肩伝いに近づき、ワゴン車の真横に停車する。待ち構えていたかの様にワゴン車のウィンドウが下がり、男のひ弱そうな肩が暗闇の中に浮かぶ。

「…仕掛けてきたか？」

黒塗りのバイクに跨る黒いヘルメットの男が、ひ弱そうな肩に声をかける。ひ弱そうな肩は黙って頷いた。

「なら問題ない。気楽にやれ。…こっちは余興だ。もう一仕事あ

るが、…そっちが本番。…分かってるな？」

黒いシルドの奥から念を押した。

「…で、例の物は？」

黒いグローブがひ弱そうな肩を指差した。ひ弱そうな肩は足元から青い厚型ファイルを左手で持ち上げ軽く左右に捻り、見せ付ける。

「…ああ、それだ。それがビジネスになる。…ちゃんと仕舞っておけ！」

黒いフルフェイスが軽く頷く。遠くからサイレン音が響き、黒いヘルメットとひ弱そうな肩は一瞬赤いパトランプに照らされ顔を向けた。対向車線に弧を描き左折進入する派手な覆面パトカーがサイレン音を残して後方に去るのを見届けると黒いライダーズジャケットは右手をアクセルに戻す。

「余興を見届けて来る。お前らは、次の現場に向かえ！…物は忘れるな」

黒いライダーブーツはミッション・ペダルを踏み込んだ。ひ弱そうな肩は下から閉まりゆくウィンドウに隠れる。

黒いグローブは左をハーフクラッチにし、右をやや回し込んだ。やがて信号が青に変わると、黒塗りのオンロード・バイクは車体を大きく寝かせて左に曲がり、社名ロゴの入ったワゴン車は何事もなかったかの様にゆっくりと直進を始めた。

パトランプを派手に回した青いGT-Rはサイレンを轟かせ高円寺陸橋下を左折し、青梅街道に弧を描いて進入した。V6ツインターボのエンジン音が流れ行く車両を蹴散らす。心なしか深夜の割には交通量が多いように感じた真壁は、緊張した面持ちながらもアクセルペダルを踏み込んだ。

「…なあ？ 中杉通りまであとどれくらいだあ？」

緊張感の乏しい妙典の台詞が青いGT-Rに充満する緊張感を一瞬掻き消した。

「…あと、5分といったところでしょうか」

言葉少なげに真壁は返した。ゆるりと右にうねる青梅街道を上りきり、中杉通りまではあと僅かである。阿佐ヶ谷署を横目に中杉通りとの合流地点、杉並区役所が目に入った。ふと交差点に目をやると深夜ではありえない数の渋滞車両で溢れかえっていた。

真壁はアクセルペダルを緩め、パトランプで牽制した。渋滞する車両を縫うように中杉通りに緩やかに右折進入する。渋滞する車両の向こうにずらりと並ぶ赤い回転灯が眩しく思えた。どうやら藤波の判断で中杉通りの封鎖措置を取っているようである。真壁は嫌な予感がした。藤波警部の迅速な判断を称えるべきか、それとも不測の事態が起こったのか、少なからずそのどちらかであることは間違いないと思った。

「真壁っ！ 車両はここで捨てる！ … 由香ちゃんは、絶対！ ここから出んじゃねえぞっ！」

「みよ… 妙典さん、クリスティーンちゃんを、お願い…」

由香の悲痛な願いを聞きいれた妙典は黙って頷いた。シートベルトを荒々しげに外し、ドアを勢いよく開ける。続いて真壁も外に出た。若干のズレが生じたドアの閉まる音と“Colorado Bulldog”だけが、青いGT-Rに響き渡る。残された由香は祈るかのように背もたれに首をもたげた。

妙典と真壁は赤いパトランプが瞬き並ぶパトカーの列を目指し、渋滞を掻い潜るかのように全力で走った。パトランプの最前列の傍らに到達した2人は、数台のパトカーと白バイ越しに大滝議員の事務所を見やる。眩い赤色灯に照らし出された数人の私服と制服の警官の影にある種の静寂を覚えた。それも束の間、血相を変えた藤波と阿佐ヶ谷署の署員達が議員事務所から一斉に飛び出す。

「回避っ！ 回避！ … 全員、回避せよっ！」

人差し指を突き出した右手を大きく前に振るう藤波の怒号に合わせ、佇んでいた私服と制服らも事務所前に停車するスノーパールホワイトのモコを迂回して大きく散開し、パトカーの裏側を目指し走

り込んだ。走り来る藤波らの背後に見え隠れする事務所から一際大きな光が放たれたかと思うと、とてつもない爆音と共にガラスや壁の破片が放物線を描くことなく激流の様に激しく飛び散る。スノーパールホワイトのモコモ横滑りして吹っ飛び、藤波をはじめとする警官達は閃光に包まれ咄嗟に地面に突っ伏して難を逃れたものの、窓ガラスと外壁の塗料素材と思われる粉に塗れた。凄まじい爆風にケヤキ並木も大きく揺さ振られ、今にも倒れんばかりの状態である。パトカーの裏で身を覆うように屈んでいた妙典と真壁は熱を帯びた爆風に逆らい藤波らの下に駆け出した。突っ伏す警官達の脇に手を押し込み、抱えあげる。幸いにして誰一人、犠牲者は出なかったようであった。妙典と真壁はガラスと粉に塗れた警官たちをパトカーの裏に引きずり込む。

左肩を押さえ、自力で戻った藤波は白黒のパトカーのドアに背中を押し付け、しゃがみ込んだ。ガラスと粉に塗れながらも消防を手配するよう部下に伝えた後、興奮冷めやらぬ鋭い眼差しを妙典と真壁に向けた。

「妙典さん…、真壁…。…C-4だ。時限式のC-4爆弾が設置されていた。…目覚まし時計を起爆装置に使った単純なものだが、…爆破能力は見ての通り…十分すぎる」

息も絶え絶えに藤波は言った。

「藤波さん…C-4はひとつでしたか？ 使用されていたC-4の大きさと数は？」

真壁もしゃがみ込み、パトカーにもたれ掛かる藤波に目を合わせ問うた。

「…ああ、標準サイズのが…ひとつだけだった。…それが？」

「ありがとうございます」

真壁は手短に礼を言い、妙典を見上げる。妙典は口を尖らせ燃え盛る大滝議員事務所とスノーパールホワイトだったモコから噴き出す炎を睨んでいた。

「あっ!？」

妙典はそう呟いたかと思うと横向きに並ぶパトカーと白バイを掻き分け走り始めた。

不審に思った真壁はゆつくりと立ち上がり、妙典の背中を目で追う。妙典の駆け出した先には窓ガラスが割れ火の手が上がる黒焦げのモコがあり、その傍らに小さなブルドッグ犬が佇んでいた。クリステインだ！

全力で走る妙典は背後から悲鳴にも似た驚嘆と横手から聞こえるメキメキという異様な音に気付き、左に見上げた。先程の爆風と燃え盛る炎の為か、議員事務所前の大きなケヤキが火の粉を散らし、今にも倒れようとしている。クリステインは呑気にも妙典の目線の先に座り込んでいたが、火柱に照らされた倒れゆくケヤキの陰に覆われドス黒さを増していた。

一・二秒後にはケヤキの下敷きになる事は間違いない。若干、出足が遅かった。ほんの僅かだが、間に合わない。

覆い被さる黒い影が次第に大きくなる中、クリステインはヨダレを垂らして妙典を眺め続ける。

「ほれ、走れ！ 馬鹿犬っ！」

そう心の中で叫びながらも妙典は足を緩めなかった。

流石の妙典も諦め掛けた時、クリステインの右横から大柄な人影が飛び出した。人影はクリステインを抱きかかえたまま転がり込む。その姿を覆い隠すかの様にケヤキが火の粉を巻き上げ妙典の目の前に大きな衝突音とともに倒れ込んだ。ハイカットスニーカー“Metallica”を数歩滑らせて立ち止まった妙典は右肩を突き出す。

横倒しになった燻ぶるケヤキの向こうから、大柄な人影がひよっこりと顔を出した。

「妙典刑事！ ブルドック犬、無事確保！ 被害者なしであります！」

クリステインを抱きかかえる小川の姿がそこにあった。しかし制服ではない。ジーンズに黒Tシャツという、嫌でも親近感のわく

井出たちである。胸に輝く“ I Can ”の文字が眩しく感じられた。

「…アヒル隊長、てめえか？」

「はっ！ 本官は非番の身ではありませんが、大滝議員事務所の警備が解除されたと聞き、極秘に張り込んでおりました！」

「ご…ご苦労。しかし、よく働くなあ。日本人の鑑だ…アヒル隊長」
「お褒めに預かり、大変光栄であります！ …っ痛て！」

胸を張ってハキハキと答える小川にクリスティーンはじゃれる様に噛み付いた。妙典は大きく息を抜き安堵の表情に変わる。

「…アヒル隊長、区役所前に青いG T - Rの覆パトが停車してる。

その中に居る女の子に、その犬…渡してやってくれや。…彼女も安心する」

「痛い！痛いつて！ あ…妙典刑事、了解であります。…直ちに犬を届けるであります！」

小川はクリスティーンに噛み付かれながらも燻ぶる倒れたケヤキを跨ぎ妙典の目の前に聳え立った。小川は妙典に一言問いかける。

「これで本官も任用試験に近づいたでありますか？」

「…いや、もう一歩だな」

「でも、本官は諦めないであります。Yes！ I Canであります！」

そう言い残し小川はクリスティーンを抱え、区役所前を目指し走り去った。大柄な小川の姿が目の前から消え、阿佐ヶ谷駅側に横向きで停車するパトカーのパトランプが一際眩しく感じられる。そんな眩い赤色の回転灯の向こうの最前列、1台の黒塗りのオンロード・バイクに妙典は目を奪われた。

黒いヘルメットの奥から、こちらの様子を凝視し殺気めいた空気が感じられる。妙典は横倒しになった燻ぶるケヤキを軽く飛び越え、路面に散布したガラスの破片を踏みしめ黒塗りのバイクに二・三歩近づいた。踏みしめるガラスの音に拒絶反応を示したのか、黒塗りのバイクはゆるゆると向きを変え始める。妙典は火柱の上がる議員

事務所前を過ぎ、一度も目を逸らすことなく列をなすパトランプまで進んだ。白バイの袂まで歩み寄る頃には4ストロークのエンジン音を残しUターンで走り去る黒塗りのバイクの後姿に変わっていた。黒いライダーズジャケットの背中を凝視する妙典は真横に立つ白バイ隊の警官に素っ気なく声をかける。

「なあ！ ちよつとメット借せや！」

妙典はおもむろに白バイ警官のヘルメットを両手で掴み、むしり取ろうとした。首を引っ張られた白バイ警官は堪らずヘルメットの顎ひもを弛める。ヘルメットを奪い取った妙典は少々乱暴に被った後、顎ひもを通し白バイに跨った。

「…バイクも借りんぞ！」

「ちよ…ちよつと待つてくださいよ！」

慌てた白バイ警官が詰め寄るも妙典は睨みを返す。

「なあ？ 白バイのあんちゃんよお！ …てめえ、まだ配属されて間もねえだろ？」

「…はあ！？ な…何故それを？」

白バイ警官は目を白黒させ問い掛けた。

「リヤブレーキの遊び。…まだ、狭めえんだよなあ」

右親指でセル・ボタンを押し、エンジンを始動させた妙典はクラッチを切ったままアクセルを軽く開き、左の爪先を一度踏み込む。するとエンジンが唸りをあげ、回転が上がるのを見計らうと二度小さく蹴り上げた。ギアの噛み合わせを確かめるかのようにクラッチを握る左手をゆっくりと緩め、噛み合う瞬間を感じとった妙典はアクセルを大きく回す。握ったクラッチペダルを素早く緩め、人差し指と中指で支えた。後輪が白煙を上げ、急速発進する。妙典は前のめりの姿勢でパトカーの合間を小刻みに縫い、闇夜の早稲田通りに向け猛スピードで白バイを走らせた。

Rat Race (2)

ホンダVFR800P。総排気量781cc、水冷4ストロークDOHC-V型4気筒。RC46をベースとした白バイモデルであり、末尾の「P」はポリスのPである。すなわち一般市販車ではなく白バイ専用モデルのバイクで、前後アンチロック・ブレーキ・システム（ABS）を装着したのも、その為であった。白バイ隊員は一般ライダーとは異なり、リヤブレーキを酷使して微妙なコントロールを強いられる。冷却効果の高いベンチレーテッドディスクが採用されているのも、それが理由であった。ハンドルもアップハンドルになり、VFR750Pに比べステップ位置が若干前に変更されている。それ故オイルタンクを内腿でグリップし易くなった反面、重心がやや高いのが珠に傷であり、妙典もそれが気に入らなかった。「どうもアップハンドルっつーのは、何だかだよなあ…。セパハンなら間違いないく俺様仕様なんだが…。しかも4ストだし…」

妙典は闇夜の中、封鎖された中杉通りを早稲田通り方面に向けてVFR800Pを疾駆させていた。お目当ての黒塗りのオンロード・バイクはまだ見えてこない。渋滞する対向車線を余所に早稲田通り方面は全くと言っていいほど車通りは皆無であった。

左爪先を蹴り上げアクセルを回す。流石は一般市販車とは異なり、加速にもたつきがない。安定感も抜群である。

中杉通りの窪みの様な緩やかな下り坂から一気に上り坂を駆け上がると奴はいた。黒塗りのバイクとの距離を次第に縮め、妙典は前方に行く黒いカウルからフレーム、マフラーに至るまで隈なく目を向けた。やたらと目立つ大きなマフラーが特徴的なマシンである。

スズキGSX-R750。総排気量749cc、水冷4ストロークDOHC並列4気筒。GSX-R600をベースにモデルチェンジされており、騒音対策でマフラーが大型化され日本での輸入販売の再開が許可されたマシンである。その為、公称出力は109.6

kW(149ps)とGSX-R600に比べ若干低下こそしてはいるが、少しばかりの知識さえあればリッタークラスに勝るとも劣らない出力を引き出すモンスターマシンに早変わりし、二十年以上前から「ジスペケ」「ガスペケ」等との愛称で親しまれてきたバイク好きには堪らない二輪車であった。

「ほう…輸入物のジスペケかよお？ …個人輸入までして相当イジリたおしとる。…かなりの好き者だなあ、あの野郎。…正直、ジスペケの方が俺様向きなんだが…」

妙典はヘルメットの中でぼやくつつもサイレンとパトランプを作動させた。

甲高いサイレン音に気付いた黒いライダーズジャケットの男は右のミラーをチラリと見やり、追い迫る白バイを目視した途端、急減速し渋滞する車を縫って右に折れ曲がる。妙典も続いて急減速し、右折するべく四輪車の合間を左右に倒しつつ切り込んだ。

阿佐ヶ谷という町は古い町である。狭い路地に、一方通行がやたらと多い。地元民でさえもかなりの苦労を要する道路状況である。しかも夜中とあって、けして視野も良好とは言えなかった。

中型車両一台分しかない道幅を時速80km以上で黒いGSX-R750と白いVFR800Pが若干の間を空けランデブー走行をする。GSX-R750の方が重心も低くバランス重視でロングストローク指向であった。緩やかに右にうねる短い直線走り抜けるにはVFR800Pよりも有利である。一度は詰めた車間もギリギリと少しずつ開いていくのが、妙典にも分かった。

「流石はバイク便野郎。…狭い路地を上手く走りやがる」

妙典は高い重心をカバーすべく、リヤブレーキを小刻みに踏みリヤタイヤを僅かに滑らせ連続する短い直線を追走した。しかし路面状況は最悪に近い。マンホールやちよつとした砂利に乗り上げるとたちまちマシンに持っていかれ転倒することは間違いなかった。真夜中とはいえ突然人が飛び出してもしたら一巻の終わりである。おまけに白バイはロールバー、正式にはバンパーと呼ばれる銀色のパ

イプが左右に大きくはみ出している。狭い路地を走り抜けるにはこれ以上厄介な物はない。

黒いGSX - R750は古い住宅街の隙間を余裕十分で駆け抜けていく。リヤを滑らす白いVFR800Pはブロック塀にバンパーを軽く擦りながらも追走を続ける。赤いパトランプを輝かせ、バンパーから白い火花を散らし、妙典は時折迫り来る電信柱を大きく車体を倒し避け進んで行った。

黒いGSX - R750とは更に差がついてしまった。このままでは路地裏で見失う可能性がある。幾何かの焦燥を感じた妙典はGSX - R750に睨みを利かせた。黒いGSX - R750越しに前方の道路状況に異変を見る。短い直線は終わりを告げ、T字路が迫っていた。これはチャンスとばかりにリヤスライドを止めアクセルを大きく回した。

T字路の手前で激しく減速し、黒いGSX - R750はリヤタイヤを軋ませた。右か？ それとも、左か？ 道路標識は右への一方通行を示している。常識的に考えれば右に曲がる筈である。しかし道路標識通りに右折をすればJR阿佐ヶ谷駅へ舞い戻ってしまう。奴ならば逆走してでも左折し早稲田通りを目指すに違いない。そう読んだ妙典は狭い路地の右側一杯まで寄り、迫り来るT字路を待つ。飲み屋であろうか、中華屋であろうか、照明の点った立て置き看板を右のバンパーで大きく跳ね上げ、背後で叩きつけられる破壊音を感じた。

黒いGSX - R750のリヤタイヤは大きく右にスライドした。左折し一方通行路を逆走することは間違いない。妙典は狭い道幅の右側一杯でリヤブレーキを小さく踏み、アクセルを一瞬緩め、左爪先で一速下に落とす。エンジンブレーキが効くのを感じた妙典は白いVFR800Pを左に大きく倒し、アクセルを回し込む。弧を描く様にリヤタイヤを長く滑らせ、左足をやや前に突き出す。バイクの中心軸より外側に大きく上体を乗り出すリーンアウトの体勢で黒いGSX - R750の右後方に一気に詰め寄った。

「ここは重心が低いのが災いしたなあ！」

T字路を二台のバイクが重なって左折し、直線に入る。一度エンジンの回転を落としたGSX-R750は立ち上がりで若干もたつき、VFR800Pの追従を許してしまった。妙典のVFR800Pは道幅一杯でカウンターをあて、狭い直線道を斜め方向に立ち上がり、黒いGSX-R750の前方を覆わんばかりの勢いで加速する。左バンパーを黒いGSX-R750の前輪に巻き込むのが狙いであつた。

しかし、ここは一方通行である。酒屋の夜間配送の三輪バイクが妙典の直前に迫つていた。妙典のVFR800Pは白煙を上げて急減速し、黒いGSX-R750の後方にやむなく下がる。三輪バイクをやり過ごした二台のオンロード・バイクは早稲田通りを目指し、一方通行の路地を逆走した。狭くとも長い直線ならば黒いGSX-R750に若干の分はあるもののほぼ互角である。白い特別仕様のVFR800Pは喰らいつき、これ以上差を空けられる事はなかつた。薄暗い路地を二台のバイクが猛烈な勢いで走り抜ける。その様はまるで鼠同士の小競り合いの様相を呈していた。

早稲田通りが目前に迫る。夜間とあつて信号は赤い点滅を繰り返していた。時折右から左へ流れ行く車影が目に入る。黒いGSX-R750に減速する気配など全く感じない。このままの速度で早稲田通りに突入するつもりであろうか？ 自殺行為ともとれる黒いGSX-R750の行動に不死身を自認する妙典でさえも少々震えを覚えた。黒いGSX-R750は交差点の手前で大きくブレーキをかけることもなくミツションを一速落とし、エンジンブレーキだけで減速する。白いVFR800Pも一速落とし、妙典はエアブレーキをも使わんと上体を大きく引き上げた。

交差点への進入と同時にアクセルを開け、早稲田通りに飛び込む二匹の鼠。幸いにも後続車両の直前に飛び出し難を逃れる。背後から大きなクラクションが鳴り響くものの意に介する余裕などなく、左爪先を蹴り上げる二匹の鼠は車体を左に傾けながら加速を続けた。

片側一車線の早稲田通りをこのまま進めば環八通りへ向かう。二匹の鼠は走行する車両を左右に縫いランデブー走行を続けた。黒鼠がセンターライン上を猛スピードで駆け抜けると白鼠も追う様にセンターライン上を猛追した。走行車線と対向車線の隙間を100km超で抜けるのは、妙典といえども度胸のいる行為である。

黒鼠は走行車線を行く一台のタクシーを抜き去った後、すぐさま左の路肩に寄る。白鼠はタクシーの真後ろから路肩に向け左に滑らす。左の路肩に寄った妙典の目前に突如広告用の黄色い幟が聳え立ち、猛スピードで突っ込んだ。幟に絡まった妙典は少しばかりの減速を許し、左手で幟を鷲掴む。引き剥がし、はたためく幟に目をやり思わず愚痴が零れ出た。

「…インド風本格カリーライス レッド・ホット・チリ・ペッパー」？ …あの店、チェーン店だったか…」

妙典はカリーの呪いを振り払うかのように、「レッド・ホット・チリ・ペッパー」の幟を人なき歩道に投げ捨てた。

黒鼠とは少しばかり差が開いてしまった。左の路肩を走る妙典の先にはやや小さくなった黒鼠の影が見える。妙典はVFR800Pのミッションを蹴り上げ速度を上げた。特別仕様車の威力を遺憾なく発揮し、徐々に黒鼠の影が大きくなる。

追いつくのは時間の問題と思われる矢先、左折する車両が黒鼠の後姿を覆い隠した。何があったのかは分からない。左に折れた中型の輸送トラックは突然停止した。白鼠はほんの目と鼻の先まで迫っている。中型の輸送トラックの後部に激突することは必至と思われた。

「うおおおおおー！ どけーっ！！ 俺様は不死身の妙典だあああああー！！」

妙典はヘルメットの奥から大声で叫び、アクセルを一切緩めようとはしなかった。

妙典の雄叫びが通じたのか、輸送トラックはゆるゆると走行を始める。しかし、まだ完全に左折しきった訳ではない。スピードをま

つたく落とす気配のない妙典は、突き出た輸送トラックの荷台を避けるべく首を少しばかり右にずらした。ヘルメットの横をかすめる様に荷台を猛スピードですり抜け黒鼠を追う。

黒いGSX-R750はもう目の前であったと同時に赤信号の点る環八通りもすぐ目前であった。黒いGSX-R750はミツシヨンを二速下げ、環八通りの交差点を直進しようとするタンクローリーの鼻先をかすめて大胆なハングオンで左折進入する。タンクローリーはエアブレーキと巨大なタイヤの軋む音を轟かせ急速停止しようとした。牽引したトレーラーだけは減速しきれず、牽引部分で左側に大きく折れ曲がり、逆L字を描く様に立ち往生する。

既にもう一速落とし、車体を左に寝かせた体勢の妙典の目の前にタンクローリーのトレーラーが大きく迫る。もはや減速することさえも不可能な状況であることは妙典にも分かっていた。

「この糞つタレがあああーっ！」

妙典は左に傾けた白いVFR800Pを更に倒し込み、左バンパーをアスファルトに擦り付けた。左前のパトランプが弾け飛び、アスファルトを削る銀色のバンパーから火花が激しく飛び散り、二本のタイヤを前方に向け大量の油を積んだトレーラーの下に飛び込む。振るい落とされまいと妙典は両腿でオイルタンクを力一杯に挟み込んだ。妙典は身動きひとつせず、息を潜めタンクローリー・トレーラーの真下を掻い潜る。滑り込んだままトレーラーから抜け出した先には牽引車の巨大なタイヤが待ち構えていた。ハンドルを握ったまま上体を素早く立ち上げ、バンパーから左足を大きく突き出し、滑り行くアスファルトを踵で蹴り上げる。勢いよく車体は起き上がったものの横滑りは一向に止みはしない。左に傾いた状態で牽引車の巨大なタイヤが目の前に迫る。妙典は膝を曲げスパンコールがさり気なく輝く黒いハイカットスニーカー“Metallica”を履いた右足を突き出し、牽引車の巨大なタイヤを力一杯に蹴り飛ばす。白いVFR800Pはよろよろと跳ね返ると両タイヤがアスファルトをグリップした。妙典はアクセルを大きく回し、若干左に倒

れた状態で牽引車の真横をかすめんばかりに走り抜ける。中央分離帯の植え込みの際でパワーのかかり過ぎた白いVFR800Pは大きくぶれたものの力で捻じ伏せた。

「マモラでも、こんな走りしねえって……」

片側二車線の環八通り。少々アップダウンこそありはするが、ほぼ直線である。走行車も極めて少なかった。妙典はミッションを蹴り上げると同時にアクセルを回し、黒いGSX-R750の影を追う。

事故に巻き込まれる事を期待していたのか、黒いライダーズジャケットの男はスピードを落とし、後ろを振り向き様子を伺っていた。トレーラーから抜け出た白バイの姿を目にした黒いGSX-R750は、白いVFR800Pから逃れようと慌てて加速を始める。

アクセル全開の白いVFR800Pは黒いGSX-R750を捕らえる。スリップストリームの状態に入ったVFR800PがGSX-R750を追い抜くのは時間の問題であった。環八通りの上り勾配に入り、黒いライダーズジャケットの男は焦りを隠しきれない上りきった頂上で白いVFR800Pはスリップストリームから大きく右に抜け出し、黒いGSX-R750の真横に付いた。下り勾配の勢いにも乗ったVFR800Pをもはや止める術はない。しかし下り勾配の先には夜間工事の車両や機材、資材等が長蛇の列を成し佇んでいた。

ワイドオープンで横に広がった妙典は慌てて工事車両の右側を突っ切った。黒いライダーズジャケットの男は左側を疾駆した。真横に並ぶ二匹の鼠は工事車両と資材に隔たれ、お互いの様を見合う。

「夜間集中工事につき通行禁止」との看板をも振り切り牽制し合った。少しばかり速度を落とした黒いライダーズジャケットの男は左手で胸元のジッパーを下ろし、懐からどす黒い拳銃を取り出す。工事車両と資材に隔たれた妙典に銃口を向け、乾いた破裂音を一発放った。

弾丸の風を切る音がヘルメットをかすめ、妙典は首を竦める。続

いて二発の銃撃音がしたものの工事車両に阻まれ難を逃れた。左パ
トランプが砕けた白いVFR800Pは速度を緩め、黒鼠から少し
ばかり距離を置く。左手に拳銃を構えた黒いライダーズジャケット
の男も速度を落とし、迫り来る白鼠に狙いを定めようと待ち構えて
いた。二匹の前方に大型の工事車両が見える。妙典は気付いたもの
の、黒いライダーズジャケットの男は狙いを定める事に集中するあ
まり目に入っていないようだ。速度を落とした黒いGSX-R75
0が大型の工事車両の左横をかすめる。それを見計らった妙典は前
のめりの姿勢で白いVFR800Pを急加速させた。

黒いライダーズジャケットの男は白いVFR800Pを待ち構え
ていた。速度を落としたとは言えメーターは80kmを若干下回る
程度である。アクセルに伸びる右腕に拳銃を握った左腕を宛がい、
手ブレを抑えた。白バイのオイルタンクの高さに狙いを定め、白鼠
が顔を出すのを今か今かと待ち受ける。しかし白鼠は一向に顔を出
しはしなかった。不審に思った黒いライダーズジャケットの男はシ
ビルを切らし不意に前を見やる。白鼠はいつの間にか黒いGSX-R
750の前で背を向け走っていた。工事車両の死角から前に飛び
出したようだが、生憎最良の策とはお世辞にも言えない。右腕に宛
がった左腕をゆっくりと引き剥がし、前方正面を走る無防備な白鼠
の背中に銃口を定め直した。アクセルを回し再び加速を始める。白
鼠との距離は徐々に狭まり、左人差し指をトリガーに固定した。

大型工事車両の死角を突き、黒いGSX-R750の正面に出た
妙典はミラーで黒鼠との距離と様子を伺う。銃口はこちらに向けら
れていた。狙いはバイクではなく自分自身だと妙典は確信する。黒
鼠は徐々に距離を縮め、あとはトリガーを引くのみであった。

「貴様には、わりぃが…俺様も丸腰で飛び出したりはしねえ！」
妙典はヘルメットの奥で一言呟くとアクセルを離し、右足のリヤ
ブレーキを踏み込んだ。同時に右手のフロントブレーキを握り締め
る。VFR800Pは白煙を上げて急停止を始めたものの、妙典は
アンチロック・ブレーキ・システムを少々鬱陶しく思う。左手でク

ラッチを目一杯握る間に左爪先でミッションを一気に2速まで落とした。ミラーに映る黒鼠が突然巨大化したかのような錯覚に陥る。

前方を走る白鼠のテールランプが突如点り、GSX-R750は白煙を上げて急停止を始めた。焦った黒いライダーズジャケットの男はフロントブレーキとリヤブレーキを一気に踏み込む。前輪と後輪はロックし、白煙を上げるも前進は止まなかった。白鼠の後姿が急速に迫り来る。

妙典は白いVFR800Pの後輪に黒いGSX-R750の前輪が接触する瞬間を感じた。途端、クラッチを繋ぎアクセルを大きく回し込む。後輪は白煙と共に高回転を始め、前輪を乗り上げた黒いGSX-R750は上方に激しく押し上げられた。バランスを失ったGSX-R750は空中で縦に回転し高速で流れるアスファルトに叩きつけられた。黒いライダーズジャケットの男はバイクから振り落とされアスファルトに転がり込む。

横回転が止みアスファルトに突っ伏した黒いライダーズジャケットの男は素早く立ち上がり、左手から離れ去った拳銃に駆け寄ると右手で拾い上げた。

その様をミラーで見届けた妙典は白いVFR800Pを一旦、停止させる。フロントホイールをロックさせアクセルを回した。左足を軸にVFR800Pを180度ターンさせ黒いライダーズジャケットの男に向いたところで回転する車輪を止める。それも束の間、前輪をロックさせると再度回転を始めた。後輪の回転が高速になるにつれ立ち込める白煙も激しくなり、暴れる車体を妙典は全身の力を使って抑えつける。今まさに限界に達しようとする直前、右手で握るフロントブレーキを弾くように離れた。踏ん張る両足をステッブ後方に戻し、黒いライダーズジャケットの男に向け白煙を残し前のめりの姿勢で急速発進する。

黒いライダーズジャケットの男は、高速で迫り来る白いVFR800Pに跨る男の頭部に再度銃口を向けグリップを絞り込んだ。

白いVFR800Pを駆る妙典はひび割れたフロントカウルのシ

ールド越しに向けられた銃口を睨みつけた。黒いライダーズジャケットの男もヘルメットのシールドの奥から、ただならぬ殺気を発散しトリガーに指をかけ距離を測る。

妙典はクラッチを切ってアクセルを大きく開いた。エンジンの回転数が上がりきったところでクラッチを繋ぎ、前輪が大きく持ち上がる。浮き上がる前輪を必死に抑え、黒いライダーズジャケットの男に目掛けてワイリー走行で突進した。

黒いライダーズジャケットの男はワイリーで迫り来る妙典に恐怖の念を抱きつつもトリガーを二度引いた。乾いた二発の破裂音が深夜の環状八号線にこだまする。一発は白いVFR800Pの右側のミラーを粉々に粉碎し、もう一発はオイルタンクを貫通した。漏れ出たガソリンは瞬く間に火を放ち、VFR800Pのオイルタンクは紅蓮の炎に包まれる。止まる気配など微塵も感じさせず、炎が舞う前輪が大きく持ち上がったVFR800Pの裏側で妙典は呟く。

「…貴様…“Fireball”つちゆう曲、知ってつか？…熱いロック・ナンバー…ガツンと喰らえや！」

ワイリー状態で炎に包まれたVFR800Pから、妙典は大の字で両手両足を離しアスファルトに尻餅をついて横向きに転がり込む。火の玉と化したVFR800Pは主を失ってもワイリー走行を続け、拳銃を撃ち続ける黒いライダーズジャケットの男をなぎ倒すように激突し、宙を舞った。

満天の星空を大の字で眺める。深夜のアスファルトの冷たさが妙に心地よく感じた。

妙典はよろよろと起き上がり、顎ひもを解く。片手で無造作に脱いだヘルメットをアスファルトに投げ捨て、VFR800Pの炎に照らされた横たわり動かぬ黒いライダーズジャケットの男に左足を引いて一歩一歩と近づいた。右の爪先にコツンと硬い物が当たる。歩みを止めた妙典は熱の残る硬い物体をゆっくりと拾い上げた。

「…92式拳銃、…中国製か」

妙典はマガジン・キャッチを右手の親指で押し、弾倉をアスファルトに落とす。左親指で分解レバーを押し上げ、銃身をフレームから引き抜いた。分解した92式拳銃を手荒に投げ捨てた後、再び歩を進める。

黒いライダースジャケットの男の袂で妙典は力なく膝をつき、男の顎ひもに手を回した。

「その顔…拝ませてもらうぞ」

妙典は黒いフルフェイス・ヘルメットを両手で引き掴み、むしり取る。黒いヘルメットは転がり、横たわる男に顔を向けた。気を失い、目を瞑る男の横顔を眺め眩く。

「…会いたかつたぜ、久木大輔。…いや、リュウ・ンオネン劉秀年よお！」

そう言い終わるや否や妙典の胸に力強く両足を絡ませた劉は両目をかっ開き、素早い右手が真横に一閃を引いた。細く熱い直線が仰け反った妙典の左頬をかすめる。不敵な笑みを浮かべ、ブーツナイフを構える劉の顔を見やった妙典の左頬から鮮血が滴り落ちた。

「…お前の血は何色だあつ!？」

「お前の血は何色だあつ!？」

流暢な日本語で劉は叫んだ。

「貴様：なかなか頑丈だな……。不死身の俺様が褒めてやる」

左頬から赤い鮮血を滴り落とし、妙典は呟いた。

胸元でブートナイフを構えた劉の顔から笑みが消え、首元を狙った刃が瞬時に突き出される。妙典の右手は咄嗟に劉の右手首を鷲掴む。両刃の鋭角な先端が僅かに妙典の首元を捕らえたものの、寸での所で皮膚を押し付けるに留まった。

両膝立ちで右手首を握った体勢の妙典は膝先を押しやり、背後に飛び退く様に勢いをつけて立ち上がる。妙典の胴回りに絡まる両足は力強さを増し、劉も同時に引き上げられた。劉は腹筋と背筋を駆使し、獲物を狙う蛇の様に首を持ち上げ妙典を睨み続ける。妙典は上半身を左右に大きく揺さ振りはしたが、劉が剥がれ落ちる様子はまるでない。左右に揺さ振られる勢いに合わせ、劉は右手を解き放った。再び胸元でブートナイフを構え、不死身と言い放つ男の隙を伺う。

劉は腰から上半身を持ち上げ、挑発するかのようにブートナイフを左右に振る。

妙典も左右に肩を揺さ振り牽制した。絡められた両足により、完全に劉の距離である。劉がブートナイフを左右に振る動作は牽制に過ぎず、傷を負わせる為のものではない。言うなれば囿である。妙典は、次の直線的な一撃こそが劉の狙いだと頭の片隅に置いた。左から右に振り戻した劉の右手首の返りが異なる。手の甲が上を向かず、外側を向いていた。来る！ そう思った妙典は、左腹部に直進する劉の右腕を左手で素早く外側に押しのける。

劉は今になって気がついた。劉の距離であると同時に不死身と言いつつ男の距離でもある。咄嗟に空いた左腕でガードを固めるもの

の、打ち下ろされた右拳が劉の顔面を捕らえた。

妙典は劉の顔面を打ち抜く。二度、三度と右拳を放ち、腰に巻きついた劉の足の力が弱まるのを感じた。首をもたげた劉に妙典は言い放つ。

「野郎と駆弁プレイする趣味なんぞ、ねえんだよー！」

妙典は劉の右腕を握り締め、抱え上げたまま駆け出した。

もたげた首を戻した劉は見上げるように、進行方向を見やる。燃え盛る白バイがすぐ傍まで迫っていた。劉は不死身と言い放つ男に顔を戻し、その眼差しを覗き込む。：奴は本気だ！ そう確信するや否や、紅蓮の炎の発する熱が劉の全身を覆った。

妙典は劉もろとも、VFR800Pから吹き上げる炎に飛び込んだ。

流石の劉も地獄の業火のような熱には耐え切れず、不死身と言い放つ男の胸から両足を解放する。その瞬間を待っていたかのように、不死身と言い放つ男は劉から瞬時に離れ炎から起き上がった。劉は素早い後ろ回りで白バイが放つ炎から抜け出し、片膝立ちでブーツナイフを構える。

「お前、名前は何という？」

劉は炎を隔て、不死身と言い放つ男に言った。

「俺様か？ 俺様は妙典だ。：不死身のな」

「妙典？ 変わった名だな。：その名前、憶えておく」

「何言つてやがる。：貴様こそ、何て名だ？ 久木か？ ；それとも、劉か？」

「好きに呼べばいい」

「ほお、実に戸籍のない国らしい答えた。：にしても、貴様。ここであらうして、見てると地獄の業火に焼かれてるみてえだなあ」

妙典はVFR800Pから吹き上げる炎越しに冗談めかして言った。

「それは、お前の方がもしれんぞ」

劉も炎越しに返した。

「おいおい！ そんなに機嫌を損ねるなよ。俺様はそんなつもりで言った訳じゃねえ。…イン・フレイムスっちゆう好きなバンドの話をしてるだけだ。…ま、意味は“業火”だがな」

半ばおどけた口調で妙典は言った。しかし片膝立ちの劉に向けられた妙典の眼差しにおどけなど皆無である。

「お前、不死身と言ったな？ …何故、そこまで言い張れる？」

低い声音で劉は問うた。

「…へっ？ 散々色んな目に会ってきたが…今もこうして、俺様はここに生きて立ってる。貴様も見たる？ …だから、不死身って訳よお！」

低い姿勢の劉は思わず口元を緩ませる。

「へっへっへ、そりゃ傑作だ。子供の口喧嘩とまるで変わらない。益々、お前の血の色を知りたくなった。…同じ赤でも人によって全く違う。佐々岡のは、鮮やかな赤だった。意外と純粹な男だったのかもな。…対して狭山はどす黒かった。…No.2って、みんな腹黒い生き物なのかもしれないな。…で、妙典！ お前のは、どんな色なのかな？」

「そんなに俺様の血の色が知りてえかあ？ …残念ながら、俺様：不死身なもんで貴様を知る事は永久にないぜ！」

「…なら、力づくで拝見させてもらいますか…」

血走った劉の目が炎を挟んで妙典を見上げた。途端、片膝立ちした劉はVFR800Pの紅蓮の炎を突き抜けて、妙典の足元を目標にして飛び出した。

妙典は横に小さく飛び退き、突っ伏した劉の右肩に踵で蹴りを入れた。妙典曰く、喧嘩キックと言うやつである。

劉は横向きに素早く回転し、妙典から距離を取る。妙典も喧嘩キックを繰り返しながら追うも、劉の回転の方が僅かに速かった。妙典が詰め寄ると劉は背筋を使って飛び起き、ブートナイフを構え対峙する。

軽く開いた左手を上に向け、柔らかい構えで前に突き出した。そ

の延長線上でブートナイフを引き構える。

どこで習得したのかは知らないが、こいつは間違いなくプロだ。とてもじゃないが、喧嘩根性だけで渡り合える相手ではない。そう感じた妙典は両手で軽くガードの体勢をとるものの、迂闊に近づくと事はできなかつた。

軽く開いた劉の左手が瞬時に握り拳に変わり、曲げた肘を伸ばすように飛び込んできた。妙典は右に身をかわし、続けざまに飛び込む刃を避ける。右利きの妙典は左肩を前に向けるオーソドックスなスタイルであった。こういうタイプは相手に対して左側に回り込まねばならない。右に回っていても相手の正面に立てないからだ。

劉は一旦前に踏み出した左足を右足の若干前に揃え、防御の姿勢に戻る。ギリギリと妙典を軸に右に回り、次の機会を窺った。先般の無茶な運転の影響で左足を引きずる妙典を見切った劉は回り込む速度を一瞬にして早める。妙典の左脇に回りこんだ劉はすかさず、ブートナイフを突き出す。

妙典は身体を素早く右に寝かせて地面を滑り、飛び込む劉の踝に左足の甲を絡める。思わずつんのめった劉に追い討ちをかけるべく、身体全体を捻り右足の甲で劉の踵の裏側を蹴り込んだ。堪らずうつ伏せで倒れた劉に絡めた足を捻じ込み、妙典は黒いライダーズジャケットの背後に飛び込む。

劉の膝は妙典の足関節で固められ、身動きひとつとれない。妙典の太い左腕が劉の首筋に回り込み、右手で左手首を絞り込み一気に締め上げる。

咳き込む余裕もなく、意識が朦朧としてきた劉は左肘を突き上げ、妙典の左脇腹を痛めつける。どんなに鍛え上げようと脇腹は打撃においては弱点のひとつであった。続けて右肘を突き上げ、妙典を苦しめる。首を締め付ける力が若干弱まり、更に左右に肘を突き上げた。足関節で固められた膝が解放されると、劉は両手でアスファルトを押し上げ立ち上がる。妙典を背負ったまま後ろ向きで駆け出し、鉄の塊の工事車両に勢いよくぶち当てた。鈍い音と重なるよう

に背面で「ぐふっ！」という小さな呻き声が聞こえ、力任せに妙典を振り切る。

妙典は工事車両を背にゆっくりと崩れ落ちようとしていた。

劉は間髪入れず、背面からの回し蹴りで妙典の顔面に左足を叩き込む。妙典の口から血の混じった唾液が大量に吐き出され、やや左に傾きつつへたり込んだ。

劉はブートナイフを持ち直し、妙典に全力で向かう。動かぬ獲物を仕留めるのは容易いことである。しかし相手が不死身と言いつつ男とあつては容赦などしない。右脇に刃を構えた劉は走り込んだ。

鉄の塊を背にした妙典は薄れゆく意識の中で、駆け寄る劉の姿を見た。ブートナイフを低く引き構え突進する様である。無意識で傾いた姿勢を立て直し、顎を前に向け、迫り来る劉を見下ろした。今更、かわす余力もなければ刻もない。

「俺様は不死身だああああーっ！ 貴様ごときに殺られるかよおおおー！」

何を思ったのか、妙典は突然大声を張り上げた。すると一瞬ではあるがアドレナリンが全身を駆け巡るのを感じ、スパンコールがさり気なく輝くハイカットスニーカー“Metallica”を履く右足の踵を力強く前に突き出した。勢いに乗った劉の腹部に喧嘩キックが炸裂する。

カウンターで腹部に入った喧嘩キックにより劉は後ろに大きく吹き飛んだ。仰向けに倒れこんだ劉はすぐさま上体を起こしたものの、思った以上にダメージは大きい。

妙典はよろよろと立ち上がり、ふらつきながらも劉に詰め寄る。間合いに入った瞬間、劉の右足が妙典の顎を蹴り上げた。もんどりうって仰向けに倒れ込んだ妙典に劉は再び襲い掛かろうと素早く立ち上がる。真上から突き下ろされたブートナイフが妙典の首元を狙う。妙典は咄嗟に劉の右手首を左手で掴み、難を逃れる。しかしそれも束の間、馬乗りになった劉は左手も添えてブートナイフに体重を押し込めた。鋭角の両刃が妙典の首元を押し付ける。血が薄っす

らと滲み出て、突き刺されるのは最早時間の問題である。

劉は不敵な笑みを浮かべ、更に体重を刃にかける。

冷えたアスファルトの上で無造作に伸びた妙典の右手の指先に何かが当たった。歯を食いしばり、突き下ろされるブートナイフを必死に抑える左腕にも限界が迫っている。妙典は右指先の何かを手繰り寄せ、引き掴んだ。途端、右手を振り上げ劉の横面を捕らえる。

妙典が手にしていた物は、赤い縞模様のロードコーンであった。劉はダメージと言うよりも驚きのあまり、身体を傾ける。弱まった劉の力を感じた妙典は再度ロードコーンで殴りかかった。効いてはいない。効いてはいないが、効果はあった。劉の押し込む力が更に弱まり、妙典は左手を力一杯に押し上げる。劉の身体も若干後方へ押しやられた。妙典はロードコーンの丸みを帯びた先端で顎の上があった劉の喉元を突き上げる。

堪らず劉は後ろに飛び退き、ブートナイフを構え直す。

起き上がった妙典は構わずロードコーンを振り下ろした。ブートナイフとロードコーン、殺傷能力が高いのは間違いなくブートナイフである。しかしリーチが長いのはロードコーンの方であった。妙典はミートする瞬間に手首のスナップを効かせ劉の横面を左右に叩きのめす。一発一発の威力は弱いものの、痛みは徐々に増してゆく。劉の顔の蚯蚓腫れの数がそれを証明していた。ロードコーンを引き戻した妙典はクルつと縦に半回転させ、丸みを帯びた先端を掴む。

「うおおおおおおおおおおおー！」

正気を失った劉は殺気に満ちた絶叫と共にブートナイフを構え突進を始めた。

迫り来る劉を待ち構えるかのように妙典はロードコーンを左脇に抱える。ブートナイフを握った劉の右腕が直線的に突き出されると妙典は前に大きく距離を詰めロードコーンの円錐の底穴で受け止めた。途端、妙典は劉の右脇の下に右肩を押し入れ、腰から持ち上げる。一本背負いの体勢から劉はアスファルトに背中から叩きつけられた。衝撃でロードコーンは転がり飛び、ブートナイフもフロントホーク

が歪んだ横倒しの黒いGSX-R750の袂へ滑り去る。

背中を強打した劉は横に反転し、うつ伏せになる。両肘を突いてゆっくりと上体を押し上げ、力弱げに妙典を見上げた。

「おら！ 立ち上がりやがれ！ …このカス野郎！ これで互角だろおが！？」

妙典も力少なげに突き出した左の人差し指を上下に動かす。

諭されるように劉は立ち上がった。胸元のジツパーを下ろし、もはや無用の長物でしかない黒いライダージャケットをかなぐり捨てる。素肌にシオルダーホルスターという井出達で、引き締まった全身から大粒の汗が流れ落ちていた。両腕を解すかのように軽く肩を揺さ振り、ファイティング・ポーズをとった途端、拳の奥から殺気めいた眼差しを妙典に向ける。

睨み合った妙典と劉の二人はお互い一気に詰め寄る。劉は不意を突いた右ストレートを放つ。しかし妙典は左下に屈み込み、左ボディー・アッパーを打ち抜いた。劉は前屈みになりながらも妙典から一旦距離を置く。

妙典が大きく息を吐き出した瞬間を見逃さすことなく劉は再び詰め寄る。左ジャブというよりも鋭い左ストレートを妙典の顔面に放った。妙典は軽く右にステップして劉の左拳を僅かにかわす。外れた左拳を引くと同時に更に一步詰め寄った劉は身体を大きく右に捻り、伸ばした右腕を素早く振り下ろした。

「しまった！ 裏拳だ！」

妙典が気付いた時には、既に劉の裏拳が右頬を捕らえていた。顔を大きく横に振り動かされた妙典に、劉は攻撃の手を弛めない。縮めた距離で右膝を突き出し、妙典のみぞおちを下から上に突き上げる。よろめく妙典の離れ際に、追い討ちの右ストレートを叩き込んだ。

妙典はふらふらと後退するものの、ファイティング・ポーズは崩さない。

劉は低く構え妙典に詰め寄る。それに合わせ妙典は右ストレート

を被せてきた。劉は慌てることなく左ジャブを妙典の右肩の内側に這わす様に打ち抜く。カウンター・パンチと呼ばれる相手の力を最大限に利用した威力のある拳が妙典の右頬をかすめる。咄嗟に拳をかわした妙典ではあったが、劉には右頬をかすめるもうひとつの狙いがあった。耳へのダメージである。耳には平衡感覚を司る三半規管があり、ダメージが溜まると人は立つ事さえまならない。顔面を捕らえれば儲けもの、外れても耳にダメージを与えられるクレバーな戦法であった。

妙典は左に大きくグラつくも右ストレートを放つ。このストレートは攻撃と言うよりも相手との距離を測る防御的な意味合いが強かった。

劉は怯むことなく右フックを腰から振りぬく。妙典は大きく仰け反り、顎が上がる。その様を見過ごさない劉は下がったガードの上から左ストレートを連続で叩き込んだ。

妙典は後に引く右足で踏ん張り一步前に詰め寄る。力なく前のめりの姿勢で踏み込んだ左足と同時にまたも右ストレートを放つ。

劉にとっては最早左ストレートの的でしかなかった。低く潜り込んで妙典の顔面に左拳を当て続ける。しかし、ここまで右ストレートを使い続ける妙典の意図が劉には理解できなかった。考えられるとすれば、既に意識を失い気力だけで打ち続けているという事である。トドメを刺すなら今だ。そう思った劉は妙典の懐に飛び込む。

案の定、右ストレートが飛んできた。劉は一瞬踏みとどまり、妙典の右ストレートをヘッド・スリップすべく首を竦める。

しかし間に合わなかった。妙典から放たれた右ストレートは予想以上に伸び、劉の左頬を見事に打ち抜く。劉は一瞬意識が飛び、つんのめった身体を妙典に傾ける。

ウィップ・パンチ。右肘を鞭ウインップのようにしならせてパンチを放ち、ミートする瞬間には拳が肩ひとつ分前になる。相手からすれば鼻先で大きく伸びる感覚に襲われ、気付いた頃にはもう遅く右拳の餌食になっている。

妙典はこの時を待っていた。人間と言うものはどんなに凄まじいパンチであつても何度も目の当たりにすれば、自然と目は慣れ軌道を予測する。凄いファイターであればあるほど、その適応能力は高く、リズムと距離感も完璧にイメージするのであつた。妙典が右ストリートを放ち続けたのはこの為である。劉の記憶に自身のパンチの距離感とリズムのイメージを焼き付けるのが狙いであつた。イメージとして焼き付いた矢先に距離感を狂わせるウィップを放つ。それが見事に決まつた。

妙典は前のめつた身体を預ける劉の両肩を両肘で押しやり、離れた瞬間に左フックを叩き込む。劉の顔面から汗と鼻水、血の混じつた唾液が飛び散つた。左に大きく揺れる劉に妙典は腰の左側を宛がうように一気に距離を詰め、左ボディー・アッパーを挟り込ませる。劉の身体は、くの字に折れ曲がつた。口から流れ落ちる鮮血を拭う余裕もなく、ただ上目で妙典を見つめる。だが、目はまだ死んでいない。お辞儀をするかの様に頭を垂れた劉の顔面にトドメの右ストリートを叩き込まんと妙典は突進する。

刹那、劉の苦し紛れのローキックが踏み込む妙典の左膝を内側から抉つた。たちまちバランスを失い身体を右に歪めた妙典に下から上へ右拳を突き上げる。劉の右拳が顎を捕らえ、妙典は膝から崩れ落ちた。

膝を立て突つ伏す妙典を見下ろした劉は二歩、三歩と大股でゆっくりと後退り、血が滲む口を開く。

「妙典。…お前、サッカーは好きか？」

劉の問いかけに、息を切らす妙典は力なく顔を上げる。

「…はあ？ …サッカーだあ？ …野球がいいなあ、俺様は…」

劉は足を止め、名残惜しげに呟く。

「そうか、それは残念だ。…サッカーはいいぞ。特にゴール前でフリーキック。直接ゴールを狙うのか、間接的にターゲットの味方に合わせて蹴りこむのか。あれ以上の興奮と緊張感はない。…あれこそ芸術だ」

「…言っておくが、…俺様は阪神ファン。…バックスクリーン三連発に比べりゃ、屁でもねえ！」

「…ならば、サッカーの素晴らしさをその身体に叩き込んでやる」
そう言い終えた劉はフリーキックを決めるサッカー選手の如く妙典に駆け出した。

アスファルトを蹴る劉の足が妙典に迫る。駆け込む右足が踏み止まり、振り被った左足で妙典の顔面を大きく蹴り上げた。爪先が妙典の左頬の切り傷を抉り、放物線を描いた妙典の上半身が黒いGSX-R750のシートに叩きつけられる。

フリーキックを決めた劉はふと足元を見やった。環状八号線の照明に照らし出された“スミス&ウェットソンHRT9B”が転がっている。どす黒く不気味な輝きを放つブートナイフを拾い上げ、疲れきった身体を引きずるかのように、黒いGSX-R750に寝そべる妙典にゆつくりと歩を向ける。息絶えた黒いGSX-R750のシート上で大の字で横たわる無防備な妙典の姿を目の当たりにした劉はブートナイフを逆手に持ち替えた。

大の字で寝そべる妙典に、もはや起き上がる体力は残っていないかった。ブートナイフを片手に携え、一步一步と迫り来る劉の感覚だけは微かにある。不意に動かした右手の先に硬く冷たい出っ張りが引っ掛かった。出っ張りを後ろ手で力なく引き抜き手に取る。GSX-R750のイグニッションキーであった。妙典は右手の人差し指と中指の間にキーを挟み握り込む。握った拳の間からは鋭く尖るイグニッションキーの先端が大きく顔を出していた。

「…妙典、確かめておく事が二つある。…ひとつは、お前の血の色。…もうひとつは、お前が不死身でないことだ」
劉は妙典を見下ろし言った。

「…ほう、貴様にそれができるってか？…ひとつ目はまだしも、ふたつ目は絶対無理だと思っぞお。…何たって俺様、マジで不死身だからなあ…」

息も絶え絶えに妙典は返した。

「その減らずロイイ！ 今すぐ塞いでやる！」

劉は逆手に構えたブートナイフを妙典の首筋目掛け、身体全体で落とし込む。

妙典は一瞬大きく短い息を吐き出した。瞬時に腹筋を膨らませ、僅かに持ち上げた上半身を右に向かつて小さく折り曲げる。

落とし込まれた、どす黒く不気味に輝くブートナイフはGSX-R750のシートに突き刺さる。

右に折り曲げられた身体から小さく放たれた右拳は劉の左脇腹を正面から貫いていた。

劉は吐き出す様に咳き込みだし、今ここで何が起こったのか理解できない面持ちである。やがて左脇腹を走る激痛と熱を感じた。

左脇腹を正面から捕らえた妙典の右拳に赤い鮮血が緩やかに垂れ込めた。

「野球にはなあ。サヨナラ・ゲームつてのがある。決まった瞬間…あれ以上のもんは、ねえわな…」

血の温もりを感じた右拳を左脇腹から引き抜くと、激痛と苦しみに耐えかねた劉は両膝立ちで反り上がった。

痛みと流れ出す血の熱の源に手を添えて見やり、事の次第を悟る。剥いた目で両手に零れた血を見やった。顔を上げ、大の字で横たわる男のTシャツの文字が目に入る。“Blood On Your

Hands”…胸に書かれたその文字を見つめ、片膝立ちで力なくへたり込んだ。劉に向けて真つ赤な血の色に塗れたイグニッションキーが放り投げられる。膝元にポトリと落ちたイグニッションキーを拾い上げる余力など最早なく、劉は崩れる様に後ろに倒れこんだ。

息絶えた黒いGSX-R750のシートを枕代わりにして横たわる妙典は呟いた。

「…“Blood On Your Hands”…まさか、貴様の血だったとはなあ」

浅い眠りを妨げるように幾重にも重なったサイレン音が彼方から聞こえる。

どうやら、少し眠ってしまったようだ。ブートナイフが突き刺さる黒いGSX-R750のシートの上で妙典は重い目を開いた。

一度捨てた筈の青いGT-Rがモトローンのパトカーと黒塗りのクラウンの覆面パトカーを大量に引きつれ、勾配の多い環状八号線を上り下りし、彼方から近づいて来る。パトランプの光とサイレン音が次第に溢れ、薄いオレンジ色の印象だった環状八号線を瞬く間に赤く染め上げた。

青いGT-Rは燃え盛る白バイを縫い妙典の傍で止まった。両方のサイドドアが開き、真壁と小川が飛び出した。

「みよ…妙典さんっ！ 大丈夫ですか!？」

真壁と小川は黒いGSX-R750に横たわる妙典のもとに駆け寄った。

「…おい! …真壁え、朝にはまだ早ええだろ? もうちつと寝かせてくれや」

妙典の声を聞き、大きく安堵の息をついた真壁は俯き加減で呟く。

「…ホウ! 無事でいてくれたか」

しゃがみ込んだ真壁と聳え立つ小川の背後で声がする。

「久木大輔…こと、リュウ・ソオネン劉秀年、身柄確保! …かなりの出血をしておりますが、命に別状なし!」

「おし! すぐ救急を手配!」

暫しの沈黙が三人を覆った。その沈黙を破るかのように妙典は口を開く。

「…しかし、真壁よあ! よく俺様がここで寝てんの、分かったもんだなあ? …まさか、てめえ…ニュータイプか?」

「ふっ…妙典さん。あれだけ深夜の街中を走り回れば、近隣住民からの苦情が相次ぎます。センターの電話はパンク寸前です。…それに、工事現場作業員からも連絡がありましたし、広い環状八号線の真ん中で火柱が上がっています。…これで突き止められねば、無能

です」

真壁は自嘲気味に答えた。

黒塗りのクラウンから馬場も駆け寄り、妙典の寝そべる姿を老眼鏡の奥から一目見る。

「妙典くん！……その様子だと、…無事のようにですね。安心しました。流石は不死身の妙典。…警視庁捜査一課の不死身刑事、妙典博道巡査長です。…またひとつ武勇伝が増えましたね」

「…煽てんで下さい、…馬場さん。後が怖い。…でも、まあ不死身なのは間違いないですがね」

妙典はようやく上半身をゆっくりと持ち上げ、しゃがみ込んだ。血と汗と油の染み。焼け焦げた跡に無数のすり傷と左頬の鮮血。燃え盛る白バイにフロントがぐしゃぐしゃになった黒塗りのバイク。そのシートに突き刺さるブーツナイフ。

妙典が語らずとも、相当な修羅場であったことは真壁にも容易に想像ができた。

「ところで妙典さん。小川巡査から、重要な目撃証言があります」
真壁は聳え立つ黒Tシャツの小川を見上げ言った。

「…目撃証言？…何だ？アヒル隊長」
妙典は疲れきった身体から顔を引き上げ小川に問うた。

「はっ！妙典刑事！本官が隠密での張り込み中、見たであります。…爆破前の中杉通りのコインパーキングからワゴン車に乗って逃走する二人組みの犯人の姿を…」

「はあっ！？ワゴン車で逃げただあ？…車種とナンバーは？…犯人の特徴は？」

妙典の目は途端に光を取り戻し、小川に喰らいついた。
「はあ…、それが暗がりでありまして…」

「ちっ！…つたく、頼りねえな！」

「でも、妙典刑事！！自分は、はっきりと見たであります。…清掃会社と思しき社名ロゴがワゴン車に入っていたであります！」

「清掃会社あ？何をしようってんだ？奴らは…」

ガクンと頂垂れる妙典に真壁は言葉を発する。

「おそらく社名ロゴは偽装だとは思いますが、彼らの次の目的地を指していると思えます。生憎、爆弾はもうひとつ存在する可能性が非常に高いです」

「…で、奴らの行き先はどこなんだあ？ 難しい事担当大臣の真壁よあ？」

「この深夜です。一般家庭という事は考えられません。…企業です。日付が変わり既に月曜です。大方の企業は月曜から営業を始めます。営業開始前に清掃を終えておくのが常識ではありませんね」

「企業… つつても、この東京にやあ… ごまんとあるぜ！ 変態オタク眼鏡小僧！」

妙典の指摘に真壁は言葉を失った。

「… 議員会館」

聳え立つ小川に隠れるかのように馬場は呟いた。

「係長！ 今、何とおっしゃいました？」

真壁は馬場に振り向き、顔を上げ問いかけた。

「まあ、あくまで私の勘でしかありませんが、議員会館の大滝議員の部屋ではないでしょうか？」

馬場は小さい声ながら、力強く言い放った。

「…犯人達は擬装用のフロントを開発していました。パスポートや免許証だけでなく、官庁の入館証の特殊フロントも多数ありました。…その線、十分に考えられます」

真壁は馬場の呟きに大きな反応を返す。

「係長！ 今すぐ爆発物処理班を送りましょう」

「…いや、そうはいきませんよ！ 真壁くん。…あくまで私の見立て、勘でしかなく、実際議員会館に爆弾があるとは限りません」

馬場の返答に暫しの沈黙が訪れる。その沈黙を掻き消すかのよう
に妙典はよろめきながらも立ち上がった。

「…だったら、今すぐ見に行きゃあいいんでしょうが？ 馬場さん
！」

「妙典さん！ 確証も時間もありませんよ！」

真壁は妙典を制止するかの様に同時に立ち上がり叫んだ。

「おい！ 変態オタク眼鏡小僧。…てめえ！ 馬場さんの刑事の勘が信用できねえってか！？」

「…いえ！ そういう訳じゃ…」

妙典の気迫に押された真壁は口ごもる。

「俺様は行くぞ！ 馬場さんとの付き合いは、なげえーからな！」

「待ってください！ 妙典さん！ …いくらなんでも、その身体では無理です！ それに…」

不死身の第四小隊、サウス・バニングは爆死した。妙典とサウス・バニング大尉を重ね合わせた真壁には、それ以上何も口にする事が出来なかった。

「真壁っ！ てめえっ！ このロボロボの俺様に運転させる気か？

…GT-Rの運転担当は、てめえだろうが！？」

妙典はそう言い残し、青いGT-Rに足を引きずり向かった。

真壁は馬場と小川に向き直り口を開く。

「係長、…小川巡査。申し訳ありません。この現場はお任せします。

…爆発物を確認し次第、本部に連絡致します」

一礼し、そう言っや否や真壁は青いGT-Rに駆け出した。

真壁はサイドドアを勢いよく閉め、シートベルトを引き込む。

「よっ！ 待ってましたぜ、相棒」

グローブボックスを漁る妙典は真壁に顔を向けることなく呟いた。

「妙典さん。本当にお身体の方は大丈夫なのですか？」

V6 ツインターボに火を点し、前方を見据えたまま真壁は問うた。
「変態オタク眼鏡小僧！ …てめえ、まだ俺様が不死身だと信じてねえな？」

「いえ、そういうつもりではありません。…ただ、妙典さんが心配なだけです」

妙典は一枚のCDをダッシュボードに突っ込む。

「ほう、涙が零れそうな話だな。…しかし流石の俺様も、ちいーとばかり疲れた。…ちよつとチャージさせてもらうぜ！」

静かなアコースティック・ギターが流れ始め、重なり合った美しいフレインが繰り返される。その哀愁的なイントロが突如エレキ・ギターの奏でる怒涛のリフに変わった。

「…俺様のエナジーチューン。メタリカの“Battery”だ」

「ところで、妙典さん。妙典さんは何故そこまでして、議員会館に向おうとされるのですか？」

「うん？ ちよつとな。…俺様じゃねえと駄目なんだ」

真壁の問いに珍しく真剣な口調で妙典は答えた。

「妙典さん…自分にも退けない理由があります！」

曲に合わせるかのように青いGT-Rはパトランプを派手に回し、サイレン音を轟かせる。真壁はアクセルを一気に踏み込み、闇夜の環状八号線にV6ツインターボのエンジン音を残し、走り去った。

隼町交差点を右折し国道246号線から抜け出すと、派手に回るパトランプとけたたましいサイレン音を消し去った。青いGT-Rは速度を緩め、参議院通用門前から国会裏交差点を通過する。名前通りに国会議事堂の真裏を横手に眺め、情性の如く緩やかにハンドルを右に切った。

通用門で衛視が立ち塞がり、青いGT-Rは停車を余儀なくされた。

格好こそ似てはいるが衛視と警官は全く別の存在である。彼らは国会職員として警務部に所属する院内警察権を保持する、言わば内部警察と言われる者たちであった。院内警察権は国会議事堂本館と衆参両議院の別館の門内に限られ、議員会館は含まれない。それを補う為、警視庁の警部以下の警察官が派出されるのが慣例となっている。

派出警察官ではなく、衛視がゆっくりと真壁の座る運転席に回り込んだ。真壁はパワーウィンドウを下げ、衛視を待ち構える。

「…ご苦労様です。どうかされましたか？」

警官の匂いを十分に嗅ぎ取らんと衛視は窓枠に顔を突っ込み言った。

「ご苦労様です。…ガセだとは思いますが、爆発物を仕掛けたとの情報があり、一応見回りに来た次第です」

警察手帳を広げる真壁は落ち着いた口調で衛視に返した。衛視も呆れたと言わんばかりに溜め息をつき、陰になった国会議事堂の裏面をチラリと見やる。

「…9・11以降、何かと物騒ですなあ…。それも、こんな深夜に…。桜田門も大変ですね。…ご苦労様です」

衛視は一步後ろに下がり、どうぞとばかりに右手を高く掲げ左手を繰り返し前に送る。

パワーウィンドウを上げようとした真壁の背後から妙典は衛視に問いかけた。

「なあ？ …俺らの前に変わった車両、入ってねえかあ？」

衛視は一瞬物思いに耽り、首を横に振る。

「…いえ。議員の送迎と夜間清掃の車だけです。…他にこれと言った車は入っておりません」

「そうか…忙しいとこ、すまねえ。…やっぱ、ガセつばいなあ。だが、一応…緊急事態ってこともある。警務部の内線だけでも教えといてくれや」

「#0223です」

妙典の問いに衛視は沈着に答え、それを聞き終えた青いGT-Rはパワーウィンドウを上げ、議員会館にゆっくりと進入した。ウィンドウが閉まると同時に妙典は呟く。

「…夜間清掃の車か…。馬場さんの勘は相変わらずスゲーなあ。…ドンピシャだ！」

「妙典さんもお人が悪い。…いいのですか？ 衛視に知らせなくて？」

真壁は鼻につく口調で呟き、ロータリーに沿ってハンドルを右に傾けた。

「言つたる？ …俺様じゃねえと、駄目なんだって」

妙典は前方を見据えたまま静かに言った。

「…意地を通せ。現にコロニーは在るのだ。…ということですね？」

真壁はロータリー脇の斜めに走る駐車線の合間に青いGT-Rを仕舞い込む。V6ツインターボの咆哮が止み、ヘッドライトも消え去り、静けさだけが青いGT-Rを包み込んだ。

二人はGT-Rのドアを開け、落ち着き払って外に出た。五月といえど深夜の夜風は骨身に染みる。ドアを閉めた真壁に妙典はルーフ越しに目配せをした。真壁は振り返り一台のワンボックスカーを目にする。

西洋風の家を思わせる簡素な絵に“Rooftops”との丸み

を帯びた文字が躍る。その文字の下には「ビルメンテナンス、ビル清掃、消防設備点検の事ならお任せ下さい」との表記があった。

「あれだろ？ …アヒル隊長が言ってたやつって？」

「…そのようですね」

応える真壁の声を掻き消すかのように、妙典は少々手荒にドアを閉めた。

胸の高鳴りをひた隠し、何食わぬ顔で二人は通用口に向かう。

「まあ、そんな緊張しなさんなって…」

ジーンズのポケットに両手をつ込み、数段ほどしかない階段を段跳ばしで上る妙典は気遣いの言葉を投げ、真壁も返す。

「…貴艦の援護を感謝する」

警察手帳を広げた二人は銀行のロビーかのような受付の前を通り過ぎ、金属探知機の傍で内線を受ける衛視の前で足を止めた。衛視は慌てた様子で受話器を置き、二人に顔を向ける。

「連絡は受けております。…失礼ですが、もう一度だけ警察手帳を確認させて下さい」

妙典と真壁は警察手帳を衛視に手渡した。衛視は手にした手帳を広げ、くまなく目を動かす。

「…問題ありません、真壁巡查部長と妙典巡查長。どうぞ、こちらから…」

階級だけで上司と部下の順を見誤った衛視は警察手帳を二人に返すと大きな横置き板のような金属探知機脇の通路を指し示した。

こちらからだと言ったと金属探知機を通らずに済む。しかし金属探知機を通ったところで警官が銃を携行しているのは当たり前前で、何の驚きもない筈である。無駄に警告音を発生させず、事後処理の負担を回避する為の措置であると真壁は理解した。

エレベーター前まで案内する衛視から数歩下がった位置で妙典は真壁に問いかけた。

「…ところで、何階だったっけ？」

「三階だと記憶しておりますが…」

「ほお… 流石は優秀な準キャリアさん」

「…おだてないでください」

ふたつ並んだエレベーター前で監視は振り返り、口を開く。

「すいませんが、一般用を使ってください。…こちらは、議員専用になっておりますので…」

了解と妙典と真壁は頷いた。

「…聞くところによりますと、爆弾騒ぎとか？」

エレベーターのボタンを押した監視は二人に問うた。

「ガセですよ、ガセ。…日本の警察もテロという言葉にすっかり脅えるようになってしまいましたが…」

茶化す様に妙典は返した。

到着を知らせるベル音が鳴り、エレベーターが静かに開いた。二人はゆつくりと乗り込み、真壁は「3」と表記されたボタンを親指で押す。二人を見据える監視の姿が両側から閉まりゆくエレベーター扉の裏に隠れた。途端、妙典は右腰から、真壁は左脇からニューナンブM60を取り出し、弾を確認する。両手で銃を携えた二人は揃って大きく息を吸い、顔の前で構えた。到着を知らせるベル音が鳴り、扉が両側に開く。

ドア袋を背に二人はゆるりと廊下に踏み込んだ。灯りは煌々と点っているものの人の気配がまるで感じられない。

「なあ？ 変態オタク眼鏡小僧、部屋知ってつか？」

「いや、そこまでは…」

「しょうがねえ。ひとつひとつ見て回るしかなさそうだ」

「その様ですね。…自分は右側を。妙典さんは左側からお願ひします」

「てめえに指図されるのは癪だが、そうするしかねえな。…言っておくが、見つけても絶対ひとりで踏み込むなよ！ 俺らのどちらかが一周して合流するまで、部屋の前で待っておけや！」

妙典の忠告に真壁はこくりと小さく頷いた。

拳銃を肩口に構えた二人の刑事は足音を抑え、議員会館三階の廊下を左右に散開した。

肩口に銃を構えた真壁は部屋の扉に貼られた表札をひとつひとつ目視して回った。キチンと扉が閉められている部屋もあれば、半開きになっている部屋もある。開いた扉の隙間から選挙用のポスターがチラリと目に入り、まるで隠す様なやましい事など一片もない懐の深い人間だと言わんばかりの議員としての虚栄心を感じた。

人の気配はまるでないにも関わらず、煌々と照らし出された長い廊下。防犯の為とは言え、一方ではエコロジーを叫んでおきながら、相反することを平気でやってのけるのも議員の習性なのである。と真壁は思った。党本部前に停車するハイヤーなど、まさにその典型であり、緊急事態を想定してという建前でエンジンを絶対に切ることはない。そんな人種に庶民感覚を持つという方が無理な話なのかもしれない。

郵便受けらしきものが部屋毎に設置されている白い壁伝いにひとつひとつ表札を見て回る。人の言い争う声が微かに響き、真壁は声のする方向へ緊張する視線を投げた。

パン！ …と爆竹にも似た乾いた音が白い廊下に鳴り響く。真壁は足音と息を押し殺し、ニューナンプの銃口を床に向け駆け出した。「327」と刻印された扉の前で真壁は足を止め、右の肩口で銃を構え直す。表札には「大滝 龍一郎」との名が記されていた。氏名を確認した途端、二発の破裂音が続けざまに響く。真壁は左肩で扉を押し開き、ニューナンプを前に突き出し踏み込んだ。

煌々と照らされ光り輝く床には、頭と胸から血を流し白目を剥き仰向けで倒れる田伏の姿があった。真壁は血に染まるグリーンボードジャケット姿の田伏からゆるりと目を上げる。その目線の先に慌てて両手で拳銃を構え直す男が興奮した口調で口を開く。

「…エ…エイトマン？ …ここまで追って来たの？」

真壁はエイトマンと呼ぶ男に焦点を合わせた。

「何故!? ……何故? ……ここにつ!?!」

真壁の口からは驚きの声しか出なかった。

「ねえ? エイトマン。…エイトマンに撃てる? ……自分は撃てるよ」

エイトマンと呼ぶ男は真壁に問いかけた。

「う、撃つなら……今だけど……!」

左の肩越しにグリップを絞る真壁の脳裏には、その台詞が焼き付いた。しかし、引き金が異常に重く感じられる。…撃てない。

「エイトマンには撃てないよ。だって、人を撃つたことないでしょ? ……でも自分は違う。……今……たった今、人を撃ち殺したから……」

経験の差だよな」

エイトマンと呼ぶ男は真壁に言い放った。

ニューナンプを絞り込む真壁の右指はピクリとも動かない。否、動かさなかった。グリップを握る真壁の右肩が心無し下がる。

両手で拳銃を握り締めたエイトマンと呼ぶ男は真壁に銃口を向けた。パン! ……乾いた破裂音が大滝議員の部屋をこだまする。

真壁は右肩を撃ち抜かれ、反動と共にニューナンプを持つ右手をだらりと下げた。ダークスーツの右肩の部分が更に濃いダークに染まってゆく。

何とか向き直った真壁に容赦ない銃口が向けられる。左の太腿に無慈悲な弾丸が撃ち込まれ、真壁はうずくまった。

真壁は力なく顔を上げ、エイトマンと呼ぶ男を見上げる。興奮気味に見下ろす銃口は確実に眉間を狙っているのが、真壁にも分かった。

「…ち、ちくしょう、こ、ここまでか……」

「ち、ちくしょう、こ、ここまでか…」

脂汗が噴き出し、そう呟く真壁にラアラの声は届かなかった。エイトマンと呼ぶ男が構え下ろす銃口を虚空な眼差しで見上げる。しかし、意外にも真壁に悲壮感はなかった。思いの他、落ち着いている。数秒後には、この世に存在していないかもしれない。死を悟った人間とは、この様な心境になるものなのであるうか？ 死に対する恐怖は微塵も感じられない。もはや不死身と言いつ張るあの男、実は既に死を受け入れているのかもしれない。だから死に対する恐怖心がなく、不死身と信じて疑わない。果たして死を悟らせる様な出来事が、過去にあったのだろうか？ いや、最早それすらも知ることはないであろう。永遠に…。

エイトマンと呼ぶ男はゆっくりと引き金に指をかける。

「…ラアラの所へ行くのか」

思わず真壁は呼びかける様に呟いた。

だらりと下がった右肩に左手を添える真壁の背後で大袈裟に踏み込む物音がした。

振り向くまでもない。妙典である。残念ながら可憐でエキセントリックな少女ではなく、むさ苦しい黒Tシャツの男が部屋に飛び込んできた。

ニューナンブM60を構えた妙典は大滝議員の部屋内を目玉だけを素早く動かし見た。

煌々と照らし出された明るい部屋。手前には右肩を押さえる真壁が片膝を立てて蹲っている。撃ち抜かれた肩と左腿からは滲み出た血がダークスーツを更にダークに染めあげていた。その奥には頭を撃ちぬかれた田伏の仰向けの死体。頭部に1発、胸部に2発。そして、その先には脅えた表情を見せる男が震える両手で拳銃を握り、

銃口を向けていた。

「…飛田あ。やっぱ、お前だったか…。ヴァンデンバーグで真壁に突っ込み入れられた時から怪しいとは思ってたが、…まさか、5人目の社員がお前だったとはなあ」

ニユーナンプを引き絞る妙典は静かと言うよりも落胆した声色で言った。

「そ、そうだよ…。刑事さん。俺だよ。俺がここに居て、…悪い？」
「ああ、悪いに決まってるんだろおがぁ。…一度は拾った命、それを無駄にしやがって！」

「刑事さんに、そんなこと言う資格なんかないね！ 刑事さんこそ、命を無駄にしてるじゃないか！？ …永代橋で大人しく降りようと思ったのに、飛び降りるハメになっちまった」

「…あれで少しは人生、変わったろ？」

妙典は銃を構えたまま部屋の中にゆっくりと踏み入った。

「ああ、変わったよ！ 思いつきりね。…刑事さんの言う通りさ。ほら、これが生まれ変わった俺だよ！」

徐々に近づく妙典に銃口を向けたまま飛田は叫んだ。

「ちよつと変わりすぎじゃね？ お前。…誰が、殺しまでやれつつた！？」

「お…俺だって、こんなことするつもりじゃなかった！ 真面目に生きようと思ったさ。…でも、でも手を染めちまったんだ。犯罪に…」

「…なあ、飛田。…何があった？ 言ってみろや！」

妙典は更に近寄る。

「…あの次の日、御成門署から出たあの日。全てが新しく見えた。頑張れる自信もあった。…でも、帰るウチも無けりや、電車賃もない。そんな俺にどうしろって言っただよ！？ …そしたら携帯に留守電が残ってた。3年前に派遣で行ってたサイバーワールドからだったよ。…特に仲の良かった田伏の声で“今すぐ仕事を手伝って欲しい”って、入ってた。嬉しかった。凄く嬉しかったよ。だから迷

わず迎えに来てもらった。サイバーワールドに行つて、一生懸命仕事したよ。…荒川区でね」

飛田の声をひとつひとつ噛み締め、無言の妙典は真壁の背後に迫ろうとしていた。

「…最初はフォント・ファイルの修正作業をしたんだ。てつきり、どこかの企業向けのものだと思つてた。…でも、気付いちまったんだ。このフォントは偽造用のものだつてね。それを言ったら、久木つて男に携帯の画像を見せられた。…佐々岡さんと狭山さんの死体の写真だつたよ。“こういう写真を撮られなくなかったら、黙つて仕事しろ”…と脅された」

「…で、どうしたんだ？ お前はよ？」

「怖かつた。怖かつたよ。…だから、従うしかなかった。…次にやったのは火炎瓶の作製とラジコン飛行機への装着。工場への派遣経験もあつたから、仕事はこなせた。割と簡単な仕事だつたよ」

薄つすらと目を潤ませ、銃を震え構える飛田に妙典は言い放つ。

「逃げるチャンスぐらいあつたる？ 何で、逃げない？」

「だ…だつて、あの久木つて男…マフィアだよ。武器も持っていたし、逃げれっこないよ！」

震える飛田に妙典は告げる。

「ああ、…えれえでつかい組織のな。…だが、さつき逮捕された」

「ふっ、いくら久木が捕まつても駄目さ。まだ生きてるんでしょ？」

「ああ、多分な…」

「例え、死んでも無駄だよ。…きつとまた他の奴が現れるだけさ。

それくらい大きな組織なんだよ。いくら逃げても逃げれっこないさ。一生追われ続けるんだ！ 俺はっ！」

妙典は鼻を鳴らし、飛田の悲痛な叫びに耳を傾けた。

「…それで、爆弾も作つたつてか？ 俺様と違って器用そうだなあ、お前。材料さえ揃えば何でも作れそうだ」

「作るだけじゃないよ！ 実行もしたよ。荻窪でラジコン飛行機飛ばしたし、阿佐ヶ谷に爆弾も仕掛けた。…それに、ほら…帳簿も盗

つてる！」

飛田は足元に転がる青い厚型ファイルに一瞬顎を杓った。

「もう…立派な犯罪者様って訳か？ …しかし何も田伏まで殺すことあねえだろ？」

飛田は一瞬口を紡ぎ、話すのを躊躇った。

「ええ！？ どうなんだよ？ 飛田あつ！！」

妙典の怒鳴り声に怯んだ飛田は仕方なさ気に口を開く。

「…ここまで、…議員会館まで来て、田伏は俺に言ってきた。…もう、やめよう。警察に行こう」…ってね。…でも！ でも、もう引き下がれないんだ！ やるしかないんだよ！ …やらなきゃ、…殺られる！」

飛田の叫び声を余所に、大きく息を吐き出した妙典はニューナンブM60をヒップホルスターに戻し、真壁を肩口に見下ろした。

「なあ、真壁え。…絶対ひとりで踏み込むな！ …つったよな？

…俺様」

「…ええ、…はい。…すいませんでした」

力の入らない真壁は謝るのが精一杯である。

「ま、銃声聞いちゃったら、仕方ねえかもな。…だが、忠告はよく聞いておくもんだ。絶対に単独で飛び込むんじゃないやねえ！ …基本中の基本だろ？ 警察学校で習ったよな？」

「は…はい、確かに…」

真壁は不思議な気持ちだった。これまで常軌を逸した行動を繰り返してきた妙典に警官としての基本、鉄則を忠告されたのである。本気で自分がガルマの様に思えてきた。しかし挫折感など全くない。2発の銃弾を被弾し、絶命すらもやむを得ない状況にも関わらず、真壁は思わず口元を緩めた。

「ねえ！？ 何故？ 何故、銃を仕舞うの？ …刑事さん。…それに、何で笑ってるの？ …エイトマン！」

驚きの表情を浮かべた飛田は2人に興奮した叫び声を上げた。

「ああん？ …戯言なら、十分聞かせてもらった。お前ごとき素人

に抜く銃などねえっ！ ……それだけだ」

妙典は両手をポケットに突っ込み顎を杓つて飛田に向き直る。

「し…素人！？ こ…この俺が？ この状況見て、本気で言ってるの？ ……刑事さん！」

「ああ、俺様はいつだって本気だ。…お前に俺様は撃てねえ。永代橋でも言ったろ、…俺様、マジで不死身なんだって」

狂乱した飛田は眼をむき、歯を食いしばり、銃を握った右手を高く掲げ、天井に向かって乱射した。直後、再び拳銃を両手で構え直し妙典に銃口を向ける。

「ほら！！ 撃てるよ！ いつだって、刑事さんを撃てるよっ！」
妙典はポケットに両手を突っ込んだまま飛田にゆっくりと歩を向ける。

「いや、絶対…お前に俺様は撃てねえ…つか、当たんねえわな」

「そ…そんなことないよっ！ ……この世に不死身の人間なんか、いるものかっ！」

飛田は引き金を強く引く。

パン！ ……乾いた銃声が部屋中を駆け巡った。

妙典は何事もなかったかの様に涼しい眼差しで飛田に歩み寄る。

真壁は飛田の握りを見やった。グリップを力強く握り締めるあまり、トリガーにかけた右指が銃身を押し上げている。銃にはブローバックという名の反動というものが常に付きまとう。薬室で爆発させて弾薬を前に飛ばすメカニズムである以上、ブローバックは避けずには通れない。その為、拳銃は下に向けて引き絞らねばならず、反動で上に持っていかれ大きくぶれていては着弾させる事など極めて難しいものだ。押し上がった銃身でいくら引き金を引いても弾は空を切るばかりである。

焦りの表情を見せる飛田は銃を連射した。銃声と弾丸の微かな風きり音だけが壁を反射し耳に伝わる。

飛田の銃身のブレに気付いているのか、いないのか、涼しい顔の妙典は歩を進めることを止めはしなかった。

妙典は飛田の目の前に立ちはだかる。両手で拳銃を構える飛田は小刻みに震えていた。

「おい、飛田。俺様の眉間に銃口を当ててみるや。…これで外す奴あ、いねえだろ?」

ゆつくりとポケットから両手を引き抜いた妙典は飛田の手を軽く握り、自分の眉間に銃口を宛がわせた。丸い銃口から発する熱がまだ熱い。まるで自らの手で烙印を押すかのような行為に思えた。

「ほら、撃てよ。…撃ってみろよ!」

妙典は飛田に挑発口調で言い放った。恐れおののく飛田は小刻みに震えるばかりである。

「なあ、飛田。…お前は既に、田伏に3発、真壁に2発、天井に4発、…そして、俺様に6発放ってる。…合計で15発。結構な数だ。素人とはいえ、その体力だけは褒めてやらなえーとなあ」

「な…何? 何が言いたいのか? 刑事さん」

妙典は眉間に突き付けられた拳銃越しに飛田に睨みを利かす。

「…お前が手にしてる92式拳銃、2種類あんの…知らねえだろ?」
全く予期せぬ問いを突きつけられた飛田は身体の震えを更に増すばかりであった。

「へっ…、その様子だと知らねえみてえだな。…ひとつ教えといてやるぜ。…コピー大国・中国で生まれた92式拳銃、こいつの弾薬はトカレフ弾じゃねえ。…NATO規格の9ミリ・パラベラムだ。そして更に貫通性の高い5.8ミリの小口径高速弾も開発されてる。9ミリ・パラなら装弾数は15発。…5.8ミリ弾なら20発。…さーて、飛田あ…お前が持つてる92式拳銃は、どっちのタイプだろううなあ?」

震えの止まらぬ飛田は妙典の眉間から銃口を離すことさえ出来なかった。

「ど…どうしろって言うのさ? …刑事さん」

「つまり、次…お前が引き金を引いて、俺様の脳天を撃ち抜いたら5.8ミリ弾モデル。空砲ならNATO規格モデルって訳だ」

飛田は愕然とし、目を大きく見開き、口を開くも言葉に詰まる。
「…け…刑事さん、いくら…いくら、刑事さんが不死身でも死んじやうよ」

「はあ？ 何、寝ぼけた事言つてやがる。俺様が死ぬわけねえだろおーがあ。…不死身を舐めんなあ！」

妙典は一瞬小さく笑った。…かと、思うと途端に獲物を狙う捕食者のような眼差しに変わった。

「おいっ！ 飛田あつ！ 俺様が不死身かどうか、試してみろや！ ほら、撃てよ…撃てつてばよおー！！ 今すぐ俺様を撃ち抜いてみやがれっ！！」

飛田は華奢な肩を震わせ続けた。

「う、うわああああああああああああああああああああああああああー！！」

目には涙をため、鼻水や唾までも撒き散らし、飛田は断末魔の様な叫び声をあげ、引き込んだ。

カチン…！

ファイアリング・ピンが空振る金属的な音が微かに響いた。

「…ざーんねん。…NATO規格だ。…やっぱ俺様、不死身つてこゝとで構わないよなあ？」

獲物を狙うかの様な眼差しを解き放ち、落ち着いた口調で妙典は呟いた。

飛田は肩を落とし、92式拳銃を握った腕をだらりと垂らす。もはや拳銃を握る気力さえ残されてはいなかった。飛田の手を離れた92式拳銃は煌々と照らされた床に落ち、小さく跳ね返る。

途端、妙典は左手で飛田の胸倉を掴み拳げ、叫ぶ。

「飛田ああー！ お前え、最高に超かっこわりいいぞおー！ 俺様はいつたい何の為に、お前を助けたと思つてやがんだああー！？」

飛田は俯き目を逸らす。

「…ご…ごめんなさい、…刑事さん。…俺…俺、…いつたい何やつ

てたんだろ？ 今度こそ…今度こそ一生懸命、生きようとしたのに………情けないよ」

妙典は飛田の顔を更に引き上げる。

「情けねえだあ？ そりゃ、こっちの台詞だつ！ この馬鹿野郎があああああーっ！！」

妙典は空いた右拳で飛田の左頬を力一杯に殴りつけた。飛田はガクリと頂垂れ、意識が遠のく。胸倉から荒っぽく引き離された飛田は力なくへたり込んだ。

「…みよ…妙典さん、…時間は？ 爆弾の残り時間は、…どうなっていますか？」

右肩を押さえる真壁は息も絶え絶えに問いかけた。

妙典は壁際に設置された豪勢な本棚に慌てて駆け寄る。扉を開け、本棚に佇むプラスチック爆弾を見やると溜め息を大きくつき、真壁に返した。

「…真壁え。…残り、一分半切つてやがる。…パンクの曲より、みじけえーなあー…こりゃあ」

落胆の表情を隠せない真壁は滴り落ちる脂汗を拭うことなく続ける。

「…形状は？ …配線の形状は、どうなっていますか？」

「…配線は2本。青色と黄色の2本がデジタル・タイマーから出る」

「そのどちらかが、起爆回路からの通電配線。その逆がブービートラップです。…極めてシンプルな起爆装置です」

「しかし…爆破力は、半端ねえんだろ？ この建物吹っ飛ばすぐれえなんだろ？ …で、ブービートラップを切った瞬間…爆発するという、お約束のアレだよなあ…」

妙典はプラスチック爆弾を見下ろしたまま呟いた。豪勢な本棚に拳を叩きつけ、飛田のもとへ駆け戻る。しゃがみ込み気を失っている飛田の頬を二度三度と叩き、揺さ振りあげた。

「おいっ！ 飛田あつ！ 起きやがれ！ 目え覚ませや！ 通電配

線は何色だあ!？」

大きく揺さ振られる飛田に目を覚ます気配は全く感じられなかった。諦めた口調で妙典は真壁に言う。

「駄目だ、真壁。完全にのびてやがる。…つい、力が入っちゃった」
「仕方ないです。しかし…爆発物処理班も…逃げるのも…間に合わないか!」

右肩を押さえ続ける真壁は思わず頂垂れた。

妙典は引き摺んだ飛田の胸倉から両手を離し、立ち上がる。飛田は再び床に崩れ落ち、目を開けることなく明るい天井に顔を向けた。

「…しゃあねえ、通電配線を切るしかねえ」

「みよ…妙典さん!？ それは…無茶です! …いくらなんでも!」
「じゃ、このまま指啜えて吹っ飛びやがれ! …つちゅうのか?」

妙典は飛田の足元に無造作に広がる緑色の片開き二段式の工具箱からペンチを取り出し、プラスチック爆弾が佇む豪勢な本棚へと歩を向けた。

「黄色と青色かあ…。黄色と言やー阪神、…俺様が黄色い配線を切る訳ねえわな!」

妙典は迷うことなく青い配線にペンチを挟み込む。

「…妙典さん! …駄目です。…青色は絶対に、駄目です!」

呆気にとられた妙典は思わずペンチを引き抜き、真壁に振り向く。

「はあ? 何で、青は駄目なんだあ? この変態オタク眼鏡小僧お!」

脂汗を光らせ肩で大きく息をする真壁は顔を上げ妙典に言う。

「…FC東京のチームカラーだからです」

完全に呆れきった妙典は天井を仰いだ。

「…つたく! ホント、ややこしい奴だな!」

「お互い様です。…妙典さん」

真壁は苦い笑顔を見せた。振り向いて、その顔を見やった妙典も苦笑いで返す。

「真壁え、ちったあー見直したぜ。…まさに、この破滅へのカウン

トダウンっちゆう状況下で、よく笑えたもんだ。∴流石は、俺様の上司……」

「いえ、∴部下です」

顔を向け合った2人は笑った。

「∴で、どうするよ？ FC東京サポの変態オタク眼鏡小僧さんよお？」

「ま∴まさか、自分に配線の色を決めるとでも？」

2人の顔から笑みが消え、神妙な顔つきに戻る。

「いや、そうじゃねえ。∴てめえは信じつか？ ∴変態オタク眼鏡小僧の真壁伸一巡查部長殿は、∴この俺様が不死身ってーことを心底信じるか？ ∴と俺様が聞いている！」

脂汗を滴らせ、右肩を押さえる真壁は妙典を見上げたまま言葉を詰まらせる。

不死身の第四小隊長、サウス・バニングは機密文書入手した直後に爆死している。

そして目の前にも、不死身と言い張る男が居る。その足元に転がる青い厚型ファイル。何かの帳簿と飛田は言っていた。竜のうろこにとっても、大滝議員にとっても、重要な文書である事は間違いない。完全ではないが、酷似する状況。∴ならば不死身の第四小隊、サウス・バニングと同じく妙典も爆死するのであるうか？

永代橋の欄干から飛び降りる妙典。

灯油を頭から被り、紙マッチに火を点そつとする妙典。

猛スピードで走る車から車へ飛び移る妙典。

加速する車のフロントグリルを両足で蹴りこむ妙典。

ラジコン飛行機を空中で受け止める妙典。

火達磨になって噴水に飛び込む妙典。

ブートナイフが突き刺さるバイクで寝そべる妙典。

銃を連射されても涼しい顔で歩み行く妙典。

突きつけさせた銃から響く金属音を額で受け止める妙典。

真壁の脳裏に、数々の妙典の姿が駆け巡った。そこから、根拠も確信もない、ある答えが導き出される。

「…ええ、信じます。…妙典さんこそ、サウス・バニング大尉以上の不死身…と自分は考えます！」

大きく息を吸い込んだ妙典は再び明るい天井を見上げる。

「その言葉、確かに聞いたぞ！ …いいか、俺様は絶対に死なんっ！…！ 何があっても死なん！！ 不死身は死なねええええーっ！」
妙典はプラスチック爆弾を睨みつけ、パンチを再度挟み込む。そして、配線を一気に切り落とした！

漂う静寂。煌々と輝く部屋の明かり。

妙典の背中を見つめ続ける真壁。

「…俺様のラッキーナンバーは…2イイイッ！」

突然、意味不明な叫び声を吼え上げる妙典。

「見ろや、真壁。…2秒前で止まってやがる」

「妙典さん、…止まった…のですか？ …爆破は回避された…のですか？」

まるで真壁の問いかけを無視するかのようになり、妙典は煌々と輝く床にパンチを叩きつけた。

「…当たり前だろおが！ …俺様は不死身だ！」

振り返り、やや顎を杓らせた妙典は真壁に言い放った。

それを耳にした真壁は全身から力が抜け出てゆく感覚に苛まれた。煌々と輝く床に突っ伏しそうになる左肩を力強く抱え上げる太い腕が目に入る。妙典の腕だ。

「帰えんぞ、…相棒」

ドスの利いた妙典の声を全身で受け止め真壁は支えられる様によるよると立ち上がった。

「…妙典さん、せつかくの勝負Tシャツが…汚れてしまいます」
弱々しくも真壁は妙典を気遣った。

「気にすんな。もう、とつくに汚れてる。…それに“Blood On Your Hands”だ。逆に箱が付くかもな」

妙典に左肩と左腕を支えられた真壁は出口となる扉にゆつくりと歩を進める。

突如扉が開き、ドストドと複数の足音が部屋の中に踏み入ってきた。銃を構えた大場と鉢合わせになり、爆発物処理班がその背後から一斉に散開する。大場はゆつくりと銃をショルダーホルスターに戻し、口を開く。

「…脅かすな、妙典。それに、真壁…くん。…馬場さんから聞いて駆けつけて来た。…で、マル爆は？」

「来るのが、おせえーですぜ！ 大場さん。…もう、とつくに爆破回避させちまいましたぜ！」

悪びれた口調で返す妙典と真壁の背後で爆発物処理班の音が響く。

「起爆装置断線処理済み。C-4、起爆に至らず。ただちに解体作業着手！」

ため息混じりに大場は呟く。

「相変わらず、無茶する奴だ。お前さんは…」

「お褒めに預かり、ありがとうございます」

妙典は軽く敬礼し、おどけて見せた。

軽い呻き声が聞こえ、大場は目を向ける。

「あれがホシか？」

妙典は軽く頷いた後、真壁を抱え大場の傍らを通り過ぎた。大場はゆつくりと振り返る。

「おい！ 妙典！ お前のホシだ。…俺がワツパを掛ける理由はない」

妙典は足を止め、背中越しに返す。

「大場さん、ウチの真壁が被弾してるんで急ぎます。…後は任せますわ」

「…そうは、いかん！」

大場は妙典の後ポケットから、旭日章が彫りだされた黒い手錠を

抜き取った。

「お前のワツパ、使わせてもらう。…それが、自分なりのロック魂よ！」

「大場さんも熱いっスねえ。しかし、スリの現行犯っスからね」

真壁を抱えた妙典は開けっ放しの扉をくぐり廊下に出る。

「妙典さん、いいのですか？ …自分のせいで手柄が…」

息も絶え絶えに真壁は言った。

「手柄だあ？ 今、俺様は鶏がらを腹いっぱい食いたい気分だがな」

「倉田さんから、刑事^{でかめん}麵の鶏がら味…もらっておけば良かったですね」

「確か、“聞き込み地鶏”だったっけか？ …なんか地味そうで俺様には向いてねえ。…それと、カレー味はもう勘弁だな」

2人はエレベーターに向かい、長い廊下をゆっくりと進む。

「ところで、妙典さん。…どうして、NATO規格だと分かったのですか？ そして、どうして…不死身だと思わるのでしょうか？」

「んん？ …そんなもん、分かる訳ねえだろお。…だって俺様、マジで不死身なんだからよお…」

「納得です…。ま、実に妙典さんらしい答えだと思います。…それと、もうひとつ。…切った配線の色は、…何色でしょうか？」

妙典は足を止め、横目に真壁の顔を見やる。

妙典の眉間に丸い烙印が薄っすらと見えた。

「…黄色だ。…これで、阪神の優勝は…なくなっちまったなあ」

救急車の後部扉が交互に閉まった。扉のマジックミラーに、妙典の不機嫌そうな顔が映りこむ。

サイレン音が鳴り響き、議員会館前のロータリーを半周し衛視の詰所の所で一旦止まる。真壁を乗せた救急車は左折し、G音とH音のナチュラル三度の音程で奏でるリフレインを残して姿を消した。

妙典は踵を返すと議員会館の入り口に歩を向ける。辺りを見回し、喫煙所を探した。

最近の役所絡みの建物は喫煙者に冷たい。高い税金を払っているにも関わらず、喫煙所の多くは外に追いやられ雨風を凌げばマシな方、中には雨ざらしの灰皿もあるくらいだ。

議員会館の出入り口が突如ざわめいた。大場らに付き添われた飛田が短い階段をゆっくりと降りてくる。その両手には、妙典の旭日章が彫りだされた黒い手錠がしっかりと掛けられていた。階段を降りた飛田は妙典に気付き顔を向け、足を止める。数歩先で異変を感じた大場も歩みを止め、飛田に振り向いた。

「どうした？ 飛田？」

虚ろな目で飛田は妙典を見やった。

「…刑事さん、…刑事さんに返す物があるんです」

両手をポケットに突っ込んだ妙典は飛田に近寄る。

「大場さん、ちょっと話させてくれや」

大場は小さく頷き、後部ドアが開けっ放しの状態で待機する黒塗りのクラウンに、見て見ぬフリをするかのように顔を向けた。

「返す物お？ …何だあ？ 飛田」

「ずっと返さなきゃ…と、思ってたんですが、返しそびれてました。…胸ポケットに…入ってます」

妙典は言われるままに、飛田の胸ポケットをゆっくりと弄る。硬くて重みのある鉄の物体が指先に当る。右手を抜き出し、掌に落ち

着く鉄の塊を見やった。

ジッポールライターだ。永代橋の欄干の上で妙典が飛田に投げ渡したジッポールライターであった。

「お前、これ…ずっと持ってたのか？」

コクリと頷いた飛田は無言で黒塗りのクラウンに歩を進めた。

飛田は黒塗りのクラウンの後部シートに押し込められ、静かにドアが閉められた。

サイレン音を切りパトランプだけを回す黒塗りのクラウンはゆっくりとロータリーを抜け、詰所を出て右に折れ曲がった。姿を消して暫らくすると存在を示すかの様にサイレン音が鳴り響いた。

妙典は手にしたジッポールライターを掌で転がし、刻印された文字を見やる。表には“Iron Maiden”のバンド・ロゴが輝き、裏面には“The Evil That Men Do”と曲名が刻印されていた。

“The Evil That Men Do”。訳せば、「人のなす悪事」。このライターを身に付けていた間、不運ではあったものの飛田には数々の悪事が重なった。そして自らも悪事に手を染めてしまった。

皮肉なものだ。と、妙典は思った。

そして、もうひとつ「地獄で眠れ」との意味もあった。

待ちきれない妙典は青い包みから煙草を啜えだし、ジッポールライターで火を点す。議員会館の短い階段の端に腰を掛け、俯き加減に煙を燻らせた。

「…地獄で眠れ…か。…いたい誰に向けられた言葉なんだろうなあ？ 劉か？ 飛田か？ …それとも、俺様にか？ ま、俺様が地獄に行ったら忙しすぎて、寝る暇なんかねえだろうけどなあ…」

煙草を啜えた妙典は、議員会館の植え込みの狭間から垣間見える夜空を眺め呟いた。

「327」と刻印された開けっ放しの扉から二人のスーツ姿の男

が慌しげに踏み込んだ。二人は忙しなく動き回る鑑識課の警官達を鬱陶しげな面持ちで見回すと傍を歩む私服警官を呼び止めた。

「捜査の方は、まだ続くのかね？」

外国製のブランドスーツに身を包んだ銀色の眼鏡の男は問いかけた。

「大方終わってはいますが、朝方まではかかるでしょう。…その後は現場封鎖の予定です」

銀色に輝く眼鏡の男は小さく舌打ちし、それは困った…と一瞬顔を逸らす。再び私服警官に顔を向け、耳元で囁く。

「…私は大滝龍一郎元内閣総理大臣・第一秘書の沢木だ。先生も同行しておられる。先生と緊急の会合を持ちたい。場所はここでなければ困る。一時間ほど、時間を工面して貰えないだろうか？」

三沢警部はギョツと沢木の顔を見やり、その隣に苦々しげな表情で佇む大滝議員にも目を向けた。

「…仕方ありません。一時間だけです。…ただし現場保存の為、物には一切触れないで頂きたい」

「それは心得ている」

三沢は数歩後退り、大きく手を叩く。

「皆さん！ お疲れ様です。…今から、一時間の休憩とします！ 仮眠をとられる方は地下一階の宿直室を利用して下さい！」

鑑識課の者達は、ばらばらと作業場所から離れ部屋を後にする。

最後に軽く会釈した三沢警部は沢木と大滝議員を見据えたまま扉を閉めた。

扉が閉まるや否や、大滝は煌々と照らし出された血痕を遠巻きに一瞬だけ眺め、足早にマホガニー製の磨きこまれた机に向かう。苛立った心境を隠すことなく黒い本皮の椅子に荒々しくもたれ掛った。沢木はすぐさま机の後の豪勢な本棚に向かい、棚を順に目で追う。

「…どうだ？ 沢木。あるか？」

大滝は仰け反った身体をゆっくりと起こし、マホガニー製の机に肘をつき結ばれた拳に額を押しやった。

「いえ、先生。…抜き取られております」

唇を噛み締めた沢木は俯き加減で答えた。

「いったい、何がどうなつとる？ まるで話が違つてはないか！」
政治家らしからぬ、感情を露にした大滝は苛立つ口調で言った。

「先生！ 申し訳ありません。…私も事態が把握できておりません」
「言い訳はいい！ 策を考えろ！」

沢木の詫びを大滝は掻き消した。

「…先生。逆に考えれば、今ここにはない事を幸いと思うべきかもしれません。警察の目に触れないことが不幸中の幸いかと…」

「何の策もなく、そんな偶然に身を任せるほど、この大滝…まだ落ちてはおらん。あれが、今どこにあつて、誰が手にしているのか？ 現存するのか、しないのか？ …それが、最も憂慮すべき事柄だ」

大滝の言葉に返す言葉を失った沢木は大きな溜め息をついた。

扉をノックする音がする。

「約束は一時間で、なかつたのかね！？」

沢木は閉め切られた扉に顔を向け当り散らした。

扉が静かに開き、グレーのツーピースに身を包んだがっしりとした体型のオールバックの男が会釈をする。

「失礼します。警視庁捜査一課の雷門史彦警視であります。…お探しのファイルはこちらではないかとお持ち致しました」

雷門の小脇には二冊の青い厚型ファイルが抱えられていた。背筋を伸ばし、まっすぐに歩み寄る姿は堂々としたもので、大物政治家の前であつても何の引けも取ることはない。磨きこまれたマホガニ製の机に厚型ファイルを重ね置き、大滝を見据える。

「おお、それだ。どこにあつたのかね？ …で、…もう見たのかね？ 中身を」

大滝はいぶかる様子で雷門を見上げた。

「はい、議員。拝見させて頂きました」

「…で、どうだね？ 雷門君。君は、どうするつもりなのかね？」

「議員。…その前に、管理官としての私の話を順に聞いて頂きたい」

「長くなるのかね？」

「手短に済ませたいものではありませんが……」

雷門の浅く日焼けした顔を見上げた大滝は軽く頷く。

「構わんよ。始めたまえ」

鼻から大きく息を吸った雷門は一瞬息を止め、静かに語り始めた。

「大滝龍一郎議員。内閣総理大臣在任期間中に雇用対策としてハートワークという名の職業訓練及び求職手続きを担う行政機関を立ち上げられておられます。ハートワークは日本国内だけに限らず、海外：特に東アジアにも門戸を開放し、多数の外国人労働者を国内企業に輩出しております」

うん、うん……と頷き、大滝は雷門の言葉に耳を傾けた。

「しかし、ある組織にとってハートワークの存在はとても邪魔なものでした。……それまで、日本に不法入国させ、関連企業で働かせ、マージンを得ていた組織があります。その最大手のひとつが“竜のうろこ”であります」

「竜のうろこ」という言葉に大滝と沢木が微妙に反応を示した事を雷門は見逃さなかった。

「竜のうろこからすれば、自らのビジネスを合法的に日本政府が行ってしまった。……つまり商売敵です。……失礼ですが、その頃から何らかの脅迫を受けておりませんか？」

雷門の鋭い眼光が大滝に向けられる。

「雷門君。……政治家というのはね、常に脅される対象ではないんだよ。……国民に代わってね」

「つまり、お認めになられるのですね。……竜のうろこに脅迫されていたということ」

「……ふん、そんな団体もあったかもしれんが、私は知らん！……秘書の沢木に聞いてくれ！」

「どうですか？ 沢木秘書」

雷門は沢木に顔を向け問うた。

「……竜のうろこ？ ……さあ、聞いたことはありませんね」

「それは、間違いありませんか？ 沢木秘書。…ひとつ見て頂きたい物があるのですが…」

雷門は内ポケットから一枚の写真を取り出し、磨きこまれた机の上に置いた。

写真を一目見た沢木の顔色がみるみる赤らむ。

「…この写真が、どうかしたと言つのかね？」

「沢木秘書、この隣に居る男。久木大輔、…本名、リュウ・ソオネン劉秀年という者です。今回の爆破事件の主犯格並びに南砂町刺殺事件の容疑者でもあり、先程緊急逮捕されております」

沢木は呆れたと言わんばかりに溜め息をつき、雷門に顔を向ける。

「雷門警視、私はただ吉祥寺駅前の喫煙場所に居ただけです。…それで偶々居合わせただけでしょう」

雷門の目つきが鋭さを増す。

「沢木さん。あなたは、非喫煙者ではありませんでしたか？ それに…この寄つた写真だけで、何故吉祥寺駅前の喫煙所と断定できるのでしょうか？」

硬直し赤面した沢木は言葉を失った。

「ここからは、あくまで私の見立て…推測に過ぎません。…竜のころは商売敵である大滝議員を何年にも渡り脅迫し続けました。時には金銭の供与も要求されたかもしれませぬ。…結果的に仕方なくではありますが、依頼を発注することにしました。手切れ金代わりに同じ金銭を支払うのなら、自らの利も取ろうとお考えになられた。実に政治家らしい思考だと思います。…それが、この爆破事件であつたと私は考えております」

「はっはっはっはっは！」

大滝の大きな笑い声が雷門の見立てを打ち消そうとする。

「雷門君。日本の警察はもつと優秀だと思つていましたよ。…警視庁改革、これも断行せねばなりませんかね？ そもそも、自分の事務所を爆破する馬鹿げた議員など居るわけがない！」

「…議員、それが居たということです。正確には、消し去りたい物

があつた…と私は考えています」

「ほう。…何かね？…それは？」

雷門は鼻から息を抜き大滝を見つめ直す。

「それが、この厚型ファイルではないでしょうか？…議員、あなたは竜のうるこのビジネスだけでなく、利益の得方も真似たのです。

…合法的に」

大滝は背もたれに寄りかかり、雷門を鋭い眼差しで見つめ返した。

「…ハートワークの登録者は一定の職業訓練を受けますが、基本的に無料であります。その代わり、就職後の賃金から一定額を一定期間ハートワークに納めねばなりません。所謂、返戻金制度というものです。…そして、ハートワークからの斡旋で労働者を雇った企業からは契約金というものも同時に徴収します。因みに契約は五人以上からと定められております」

大滝は顎をしゃくり上げ、本皮の黒椅子をゆっくりと左右に揺さ振る。

「雷門警視、…よく調べておられる。それに、その説得力のある落ち着いた口調。…警官よりも政治家に向いておられるのでは？…色気はありませんか？…政治家に」

話題を逸らしにかかる大滝の言葉を遮るかのように雷門は続ける。「…そして、この厚型ファイル…議員の政治資金に関する帳簿と断定致しました。遺憾ながら、ハートワークで得られた返戻金、契約金の一部が議員の政治資金管理団体に入金されていることを示す証拠であります。このファイルを自らの手で消し去りたかった。しかし検察特捜部にマークされている議員にはそれは出来ませんでした。検察に付け入る隙を与えたくはなかったからです。そこで竜のうるこにファイルを消させることにしました。勿論、竜のうるこにファイルの存在を明かす様な失態はなさりません。爆破という手段に出たのは、建物もろとも帳簿を消し去りたいのと違法政治献金疑惑で向けられる厳しい世論から同情を得る為。その為には自らが標的となつている様を世間に知らしめるパフォーマンスも必要とお考えに

なられた。…ですが、議員事務所と議員会館にそれぞれ存在する帳簿を消し去るにしては、そのパフォーマンスはいささか度が過ぎたように思います。何せ相手は、竜のうろこです。すんなりいうことは聞きません」

黒椅子を左右に揺さ振る動きを止めた大滝は口元を緩ませる。

「先程の発言を撤回しなければなりませんね。…日本の警察は実に優秀です。雷門警視：君は特に優秀な部類だ。…しかし、少々詰めが甘かった。その厚型ファイルは証拠品には足り得ない。…雷門警視、今：君が捜査しているのは爆破事件であつて、この大滝の政治資金の不正ではない。捜査対象外の事件の証拠品は証拠と認められない。…それは、雷門警視：君も存知あげている筈。…どうですか？」

直立不動で立ち尽くす雷門は口を噤んだ。それを見やった大滝は余裕の表情を浮かべる。

「残念ですね、雷門君。この大滝を逮捕することはできません。それが法律。これが政治です」

雷門は今一度大滝を見やり、口を開く。

「…いや、大滝議員。お言葉ですが、これは証拠品であります。…この厚型ファイルは、今件の容疑者達が所持していた物です。昨日の爆破事件及び襲撃事件、そして連続刺殺事件を紐解く上では欠かすことのできない証拠品であります」

大滝の顔色は青ざめ、背もたれに身を預けた。

「そ…それは、間違いないのかね？ 雷門君」

「間違いありません。議員は、竜のうろこを利用したおつもりでしょうが、彼らの方が一枚上手でした。彼らはこの帳簿の存在を知っており、この帳簿をもって議員を生涯脅し続けるつもりがあつたと推測されます。したがって、私はこのファイルを証拠押収品として提出するつもりであります」

暫しの間の後、首をもたげたままの大滝は口を開く。

「雷門君、…私にどうしろと？」

「あくまで私見ではありますが、一刻も早く会見を開き国民に謝罪された上で、自身の身の振り方を検討されるのが最も望ましいと考えております」

雷門は机上の重ねられた厚型ファイルを小脇に抱え、軽く会釈し踵を返す。

呼び止めるかの様に大滝は口を開いた。

「雷門君！ ……君ほどの優秀な人間だ。おそらく数年後には警視正 ……いや、警視長になっていることだろう。 ……どうだね？ 雷門君、警視總監になってみたいとは思わんかね？」

大滝の言葉に雷門は足を止める。

「議員：私は警官であり、政治家になるつもりはありません。 ……それに、私はロック・ファンであります」

「ロック・ファン？ ……私もロカビリーをこよなく愛しておる。なんだ、気が合うじゃないか！」

「私が愛するバンドは、ユーライア・ヒープ ……であります。 ……日本では然程有名ではありませんが、本国イギリスでは伝説的なバンドです。そんな彼らのアルバムの中でも“対自核”という邦題が付けられたアルバムこそが最高傑作だと思っております。そのタイトル曲であり、アルバムの一曲目でもある“Look At Yourself”は特に名曲とされており、私自身も同意であります。 ……議員、“Look At Yourself” ……ご自身をご覧になって頂きたい。 ……それが、議員の目指された政治家の姿でしょうか？」

雷門は一步踏み出したところで何かを思い出し足を止めた。

「あともう一点だけ、ご報告があります。今件の実行犯についてですが ……議員が総理在任中に心血を注がれた労働者派遣法の改正によつて職と行き場を失った若者でありました。 ……自分からは以上です」

そう言い残した雷門は歩を扉に向けた。空いた左手で扉を開き振り返る。深々と頭を下げ、扉を閉めた。

扉の閉まる微かな響きが止むと同時に沢木は大滝の許へ詰め寄った。

「せ…先生！ どうなさるおつもりですか？」

大滝は本皮の黒椅子にもたれ掛ったまま、沢木を遮る様に背もたれを向ける。大滝は全てを遮断し、窓から見える国会議事堂の背面を無言で見つめ続けた。

『：繰り返してお伝えします。元内閣総理大臣・大滝龍一郎議員が本日午前、富川幹事長との会合の席で辞意の旨を表明した模様。本日午後五時から記者会見を開くとの情報がたった今入りました。大滝龍一郎議員は第87代、88代、89代の内閣総理大臣を歴任し、雄弁さとパフォーマンスぶりが評価され、国民からも高い支持を集めておりましたが、違法政治献金疑惑を巡り現在は党三役からも退いており、議員辞職、政界引退の可能性も示唆しているとのことから、何らかの突発的なスキャンダルがあったものとの憶測を呼んでおります。しかし現時点での詳細は明らかになっておりません』

早口ながらも慎重に原稿を読み上げるアナウンサーの声に極度の緊迫感が感じられる。突然飛び込んだビッグ・ニュースにどの局も大わらわの様子であった。

「何か、大変そうですねー。：馬場さん」

両手をポケットに突っ込み壁際のビジネスチェアに踏ん反り返って足を投げ出す妙典は大型テレビの画面に向かって呟いた。

「妙典くん！ 大変なのは寧ろ君の方ではないですか？ 先ほどから、全く手が動いていませんよ」

老眼鏡をずり下げた馬場はパソコンのモニター横から顔を突き出し、覗き込むかの様に妙典を見やった。

妙典はビジネスチェアを惰性的に一回転させ机の正面に向き直る。机の上に綺麗に積み上げられた書類の束が壮観さを醸し出していた。

「馬場さん、この始末書：今日中に終わらせにやなんのですか？」

「妙典くん。その台詞、今日で三日目です。：今日こそ、終わらせて下ろさ」

妙典は壮観な書類束の横に転がるボールペンを手に取り、カチカチと数回音を鳴らす。しかし、すぐさま机に放り投げビジネスチエアーにもたれ掛かって腕枕を作った。

「…しっかし、暇ですなあー！」

「そんな訳ありません！ 妙典くん！」

戒める馬場の背後にグレーのツーピースに身を包んだ雷門が立ち尽くす。

「…劉の身柄は公安に移送されました」

やや残念そうではあるが、想定範囲内といった落ち着きのある面持ちの雷門は告げた。

「手柄、また持ってかれましたなあ」

ビジネスチエアーを回し、雷門に向き直った妙典は口を尖らせる。

「劉に関して、もうひとつ情報があります。…劉秀年、リュウ・ソネン彼は元人民解放軍の兵士でした」

「ほう、どおりで強かった訳だ…」

「…ですが、2004年の軍事演習中に爆死しています」

ビジネスチエアーをギシギシと小刻みに揺さ振る妙典の目を見つめ、雷門は言い放った。

「ふーん。あの野郎…結局、何者だったんスカねえ？」

「さあ、…分かりません。今回も“うるこ”しか残さなかった…という事です」

「…ところで、雷門さん。…俺様に何か御用ですかい？」

「いえ、…他に用はありません。ただ報告に来ただけです」

雷門の一言に妙典はガツクリと肩を落とす。

「ちっ、雷門さんのことだから、きつとまたあそこ行け！…とか、警備しろ！…とか命令されるもんだと、期待してたんですがねえ

…」

「それは、残念でした。…自分からの命令はただひとつ、“早く始末書を書きあげて下さい！”…ということですよ」

小さく舌打ちし、ビジネスチエアーを回転させた妙典は仕方なさ

気に壮観なる書類の束を見上げた。

暫らく壮観なる風景に見入っていた妙典の耳に、大部屋の片隅からざわめく声が届く。妙典は目を凝らし、壮観なる書類束越しにざわめきの源を探った。

「雷門さん、馬場さん。あの小僧、戻って来ましたぜ！」

妙典がしゃくつた顎の先に向かい、雷門と馬場も振り向いた。

右腕を包帯で吊り下げ、左脇に松葉杖を挟みこむ痛々しい真壁の姿があつた。真壁は13係の島机にたどしくも歩み寄ってくる。

「おはようございます。大変、ご心配をお掛けしました」

真壁は深々と頭を下げた。

「真壁巡查部長、もう寝ていなくて大丈夫なのですか？」

雷門は冷静な口調ながらも真壁を気遣った。

「配属早々、長々と休んではいられません。何せ、不死身の先輩がいるものですから」

「妙典を見習う必要は全くありませんよ。寧ろ、見習うべき対象とは言えませんね」

浅黒く日焼けした笑顔が向けられ、真壁も照れ笑いを隠さない。

「いや、雷門管理官。確かに自分は不死身ではありませんが、妙典さんに負けないものを持っていると自負しています」

「妙典に負けないもの？ …それは明晰な頭脳のことですか？」

「いえ、管理官。…ガンダムに対する愛情と…射撃の腕。…それとお茶くみ三年の精神です」

「はは、…言うようになりましたね、真壁巡查部長。これからも期待しています」

「ありがとうございます」

松葉杖を机に片せ、真壁は再度頭を垂れた。

「おう！ 上役出勤の真壁巡查部長殿：ずいぶん言ってくれるじゃねえか。…まあ、ゆっくり座れや」

ビジネスチェアに反り座る妙典は真壁に言った。

「まあ、真壁くん。…しばらくは、あまり無理しないで下さい。刑

事は身体が資本です。…妙典くんは、頭とペンを使って下さい」

老眼鏡の奥から馬場はピシヤリと言いつつ放った。

雷門は真壁のビジネスチェアをゆるりと引き、座るよう諭す。申し訳なさ気に真壁は自席に座る。

何もない殺風景なビジネスデスクに真壁は座った。思えば、捜査一課に配属されて初めて自分の席に座る。真壁は感慨深げに自身の机を見回した。机の横には阿佐ヶ谷署でまとめた段ボール箱が未だ手付かずできちんと置かれている。…いや、段ボール箱がひとつ増えている。何の段ボール箱であろうかと目を凝らすと、妙典から譲り受けたガンプラの入った段ボール箱が一番上の段に積み上げられていた。

「みよ…妙典さん、ガンプラ…ありがとうございます！」

「おう！ いつまでも車のトランクに入れて置く訳にも、いかんかならなあ…。だが、てめえ…その身体でどうやって帰るつもりだあ？」

「…流石に手で持って帰る訳にはいきませぬね。きっと優しい先輩刑事がGT-Rで運んでくださると思っています」

妙典は首を小さく横に振り呟く。

「変態オタク眼鏡小僧！ てめえ、俺様がそんな人間だと思ってるのか？」

「違うのですか？ …妙典さん」

「てめえ、刑事失格だなあ。…相変わらず、人を見る目がねえ！」

妙典は顎をしゃくり上げ、行くぞ…と合図を送った。

「…情報収集ですか？ 妙典さん」

「おう！ 分かってんじゃねえか。お茶くみ三年様よあ！ …行くぞ！ 変態オタク眼鏡小僧！」

ビジネスチェアから妙典は立ち上がり、松葉杖を手繰り寄せた真壁も続いて立ち上がる。

「…喫煙所ですよね？」

真壁の一言に妙典は顔を強張らせ小声で叫ぶ。

「馬鹿野郎！ …それを言うなって！」

「…妙典くん、…またですか？ 今日中に始末書、終わらせて下さいね」

老眼鏡に手を添えた馬場は妙典に苦言を呈した。

聞こえないフリを決め込んだ妙典は13系の島机を回りこみ、松葉杖をつく真壁を暫し待つ。その妙典に一步一步近づきつつ、真壁は口を開いた。

「ところで妙典さん。…約束、忘れていませんか？」

真壁が並んだところで妙典は口を開く。

「約束？ …何の約束だあ？」

真壁は小さく溜め息をつき、妙典を見上げる。

「…GT-Rの命名権です。…妙典さんは自分にこう言いました。

“イレズミでも入れてくるなら考えてやってもいいがな”。…妙典さん、…イレズミです」

真壁は包帯でぐるぐる巻きになった右腕を見せ付けるかのように顔の前で掲げた。

「…まったく、オタクっちゅうのは…ホント厄介な生き物だよなあ…」

「お互い様です」

妙典と真壁はゆっくりと出入口の扉に歩を進めた。

「…で、名前は何にするつもりなんだあ？ 真壁巡查部長殿」

「病院のベッドの上でいろいろと考えました。…何せ青いGT-Rですから、ケンプファー、ハンブラビ、ブルーディステイニー…。でも、一番しっくり来るのが、…グフです。YMS-07B…しかも、ランバ・ラル専用機です」

「悪いーが、もう何言ってるか…さっぱり、分からねえ…」

「何なら…ゆっくり、ご説明しますよ。…妙典さん」

「馬場さんの刑事の勤…今回も見事に的中しましたね」

奇妙な二人組みの背中を見つめ雷門は馬場に言った。

「え？ 何がですか？ 管理官」

「すっかり、いいコンビになったではありませんか」

「ああ、そういう事ですか…。そこまでおっしゃるなら、警視庁始まって以来の漫才コンビでも結成させますか」

「お！ それは、いいですね。いっそ、M-1でも目指させましょう。上司命令で…」

「しかし、管理官。…その前に、コンビ名が必要です」

「…コンビ名？ コンビ名なら、既に妙典の背中に書いてあるではないですか」

馬場は老眼鏡を片手で外し、妙典の背中の文字を凝視する。

「…“ Young And Useless ”？ “ 小僧とポンコ

ツ”…ですか？」

「ええ！ ぴったりではありませんか？」

「まあ、確かに…。しかし、管理官…流石にM-1は無理だと思いますよ」

「ん？ …それも、刑事の勘というやつですか？」

「まあ、そんなところです」

Days

- End Of All

(s) Water
" (I) Pink Floyd
" Another Brick In The Wall

(y) Lennon, McCartney
" Helter Skelter " The Beatles

(y) Lennon, McCartney
S Club Band " The Beatles
" Sgt. Pepper's Lonely Heart

(s) Harris
ron Maiden
" The Number Of The Beast " I

(e) Adler, Hudson, McKagan, R
s - N
" Welcome To The Jungle " Gun

(no) Halford, Tipton
est
" Before The Dawn " Judas Pri

est
rock music of all .
S Special thanks for the great

" Fight Fire With Fire " Meta
 (nildra , Stradlin , Slaus
)
 (Adler , Hudson , McKagan ,
)
 " Patience " Guns N' Roses
 (Murphy , Gilman , Dimebag Darrell ,
)
 " You Can't Bring Me Down " S
 (Adler , Hudson , McKagan ,
)
 " Heartwork " Carcass
 (Walker , Steer , Amott)
 (Townsend)
 " S.Y.L. " Strapping Young Lad
 (Andrew , Rose , Stradlin ,
)
 " Anything Goes " Guns N' Ros
 (Adler , Hudson , McKagan ,
)
 " It's So Easy " Guns N' Roses
 (Adler , Hudson , McKagan ,
)
 " This Is War " Vandenberg
 (Grun , Gershtaldt ,
)
 " Coverdale , S.Y.K. " Whitesnake
 (Coverdale , S.Y.K.)

(YcPc Harris) need
 "Run To The Hills" Iron Maiden
 (neill Clayton, Evans, Hewson, M
 2U "eMaN "Where The Streets Have
 (ttelluB, ,) "Wolter" "Movin' On
 Thunderhead
 (siddieK, h,) "Frusciante, Balzary, Smit
 Peppers "By The Way" Red Hot Chili
 (einn) "Mustard" "Hannagar 18" Megadeth
 (nayaB, ,) "Borra" "Sabbiovio" "B
 "t "The Hardest Part Is The Night
 "doo" "Tokyo" "Jovi" "Borra" "S
 (s) "Burton, Hettfield, Allan, L
 Illica

”六甲嵐 Snuff Ver” Snuff
(佐藤惣之助、小関裕而)

(Lea, Holder)
Riot

”Cum On Feel The Noize” Qui

(Mustaine)
”Wake Up Dead” Megadeth

Petrucchi, Mynn
(Rudes, Labrie, Portnoy,
am Theater
”The Spirit Carries On” Dre

(Bonniotti)
”Silent Night” Bon Jovi

Lord, Paic
(Blackmore, Gillan, Glover,
eppu
”Smoke On The Water” Deep P

(Koffler, Readman) 69
”Shame” Pink Cream

(Harris, Percy)
den
”Fear Of The Dark” Iron Mai

U , e
(Hc i r r i U
Burton , H e t t f i e l d , M u s t a i n
i c a
" R i d e T h e
M e t a l l
(e T a t , W i l t o n , G a r m o , D e
e n c ? r r s n
" O
e e Q u e e
M i n d c r i
" e
(n e p p i s
(n e p p i s
, O l b r i c h , S t a u c h ,
B l i n d G u a n a i d
" L o s t
H a l l
T h e
T w i l i g h t
H a l l
H a n s e n
(n e s e
" H e a v e n
C a n
W a i t
" G a m m a
R a y
H a n s e n
(n e s e
" I
W a n t
O u t
" H e l l o w e e n
(r e k k e s s
h e n k e r
G r o u p
" I n t o
T h e
A r e n a
" M i c h a e l
S c
o n , C . A m o t t
(G o s s o w , M . A m o t t , E r l a n d s
e m y
" I
W i l l
L i v e
A g a i n
" A r c h
E n

) Ramirez, Chlasciak, Halford
 "Cyberworld" Halford
) Water(s) Annihilator
 "No Zone"
) Gosnow, M. Amott, C. Amott
 "The Last Enemy" Arch Enemy
) Black Sabbath
 "Iron Man" Black Sabbath
) Halford, Tipton, Downington
 "Metal Gods" Judas Priest
 Pruzhanov, Theart, Totman
 (n) Macintosh,
 Force
 "Heroes Of Our Time" Dragon
) (error) Phil Lynott
 "Out In The Fields" Gary Moore
 & Philip Lynott
) Halford, Tipton, Downington
 "Jawbreaker" Judas Priest
) Halford, Tipton, Downington
 "Priest"
 "Freewheel Burning" Judas Priest

(Koffler, Deris) 69 "Sings Of Danger" Pink Cream

(Satriani) "Crushing Day" Joe Satriani

(Moorer, Labrie, Portnoy, P
etrucchi, My) "Another Day" Dream Theater

(Russell, Medley) "Twist And Shout" The Beatles

(Lennon, McCartney) "Back In The U.S.S.R." The Beatles

(Deris) "We Burn" Halloween

(Lynott) "Thin Lizzy Are Back In Town"

(Leostev) "Ride On" Gothard

(ar

" I Can't Halloween
(Weikath , Deris)

" I'm The Highway" In Flames
(Friden , Gelotte , Strombla

(d)
" Screaming For Vengeance" J
udas Priest
(Halford , Tipton , Downing)

" Take Flight Gundam (翔べ！ガンダ
△)
" Richie Kotzen
(井荻麟 , 渡辺岳夫 , 松山祐士)

" Blue Star (水の星へ愛をこめて)
" Ric
hie Kotzen
(売野雅勇 , Neil Sedaka , 馬飼野康二)

" Soldiers Of Sorrow (哀 戦士)
" Ric
hie Kotzen
(井荻麟 , 井上大輔)

" She Bop" Cyndi Lauper
(Lunt , Chertoff , Corbett ,
Lauper)
" The Winner" Richie Kotzen
(安藤芳彦 , 都志見隆 , 萩田光雄)

” 哀 戦 士 ” A n d r e w W . K .
(井 荻 麟 , 井 上 大 輔)

” R i s e O f T h e T y r a n t ” A r c h E
n e m y

(M . A m o t t , G o s s o w)

” S t e e l e r ” J u d a s P r i e s t

(H a l f o r d , T i p t o n , D o w n i n g)

” W e W i l l R o c k Y o u ” Q u e e n

(M a y)

” R a t R a c e ” I m p e l l i t t e r i

(I m p e l l i t t e r i)

” B l o o d O n Y o u r H a n d s ” A r c h

E n e m y

(G o s s o w , M . A m o t t , C . A m o t t)

” E n c o u n t e r (め ぐ り あ い) ” R i c h i e

K o t z e n

(井 荻 麟 , 売 野 雅 勇 , 井 上 大 輔)

” C h r i s t e e n ” D e v i n T o w n s e n d

(T o w n s e n d , G i n g e r)

” C o l o r a d o B u l l d o g ” M r . B i g

(S h e e h a n , M a r t i n , F a n u c c h i ,

ep

" Look At Yourself" Uriah He

(s Smith, Dickinsson, Harri

Maiden

" The Evil That Men Do" Iron

(s

Richard, Oliver, James, Watkin

) Richards, Gaze, Lewis,

adcasts" Lost prophets

" Rooftops) A Liberation Bro

Mustain(e

) Ellifson, Friedman, Menza,

edaggeth

" Countdown To Extinction" M

(h Hettfield, Ullrich

" Battery" Metallica

d (nos Svensson

) Friden, Bjorn, Stroebla

" Dead End" In Flames

L (ecc Paiord

) Blackmore, Gillan, Glover,

" Fireball" Deep Purple

Gilbert, Torrey

(Hensley)

"Young And Useless" Thunder
head

(Wolter, Bullet)

"End Of All Days" Rage

(Wagner, S. Efthimiadis)

And special thanks for MOBIL
E SUIT GUNDAM Series .

「あ！ そう言えば、妙典さん！」

「何だあ！？ 突然、大声出しやがって！」

「あ、いや…:すいません。あの…エレベーター内で、ちょっと小耳に挟んだものですから…」

「ん？ 何だあ？ もったいぶりやがって。この変態オタク眼鏡小僧があっ！」

「え、ええ…:何でも、今日から庁内のコンビニに新メニューが追加

されるそうです」

「ほう！ そりゃ、ありがてえ。…で、何てメニューだあ？」

「それが、…麻婆カレー…だ、そうです」

「…魔のカレー・スパイラル…！ て、てめえ…まだ続けさせるつもりかあ？」

「いえ！ 妙典さん！ 誤解です。けして、そういつつもりじゃ…」

「じゃあ、真壁よお！ てめえが、食えや！」

「え、ええっ！？ じ…自分がですか？」

「当たり前だろおーがよお！ てめえが仕入れた情報だ。…その真偽を確かめるのが、刑事の務め！」

「刑事の務め…ですか。…まさか、妙典さんの口から、その様な言葉が出るとは思いませんでした」

「はあ？ 何か言ったか？ …真壁巡査部長殿！」

「あ、いえ！ 何でもありません。…いただきます！ 自分がいただきますっ！！」

「ふーん、真壁え。てめえ…いい刑事になってきたなあ…」

「…妙典さん、…水臭いな、今更」

… and They eat curry today too .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5851n/>

不死身刑事 -Young And Useless-

2011年11月13日18時21分発行